

---

# 恥ずかしながら戻ってまいりました！～GS横島忠夫の再演

神代ふみあき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恥ずかしながら戻ってまいりました！〜GS横島忠夫の再演

### 【Nコード】

N1971P

### 【作者名】

神代ふみあき

### 【あらすじ】

GS美神 極楽大作戦の再構成です。>逆行モノでしたw

流れるには多分、他の方々が進めていた逆行モノのSSの流れになるでしょう。

が、更新が止まってしまったSSを発掘しているうちに、どうしても続きが読みたくて、自分で再演することにしましたw  
そう、「再演」です。

すでに手垢が付いている、やりつくされてしまった分野かも知れませんが、お楽しみいただければ幸いです。

神魔の登場により「再演」の真の意味が明らかに!?

神代ふみあきの稚作SS「よこまほら」とは繋がっていませんのであしからず。

更新周期は週一度ぐらいの予定です

## 第一話（前書き）

再構成ものを書いてみたら、ずいずい進んでしまいました。毛色が違う作品ですが、お楽しみいただければ幸いです。

## 第一話

「……………番 霊波を出したまえ！」

反射的に霊波を出して驚いた。

チャクラも回ってないし、霊核も不活性。

こんな状態で、と思ったが、唯一額のチャクラは活性化していたので、何とか霊波を出せた。

瞬間、周囲から驚きの波動を感じる。

なんだ、と疑問を持って見回してみれば、ピート・タイガー、そしてミカレイ。

……………つて、なんでGS資格試験一次！？

まあ、一次合格はした。

そりゃまあ、チャクラの一つも回して全力出せば通るわな。

少なくとも、前はその辺無自覚で通ってたから、自覚ありなら余裕だ。

昼飯に誘ってくれたミカ「レイこと美神さんは、時分の変装が一発で見破られて不満げだったけど、一次試験に通ったときの力の方が気になるようだ。

そこで、バンダナのおかげだと言った。

「そういえば、小竜姫様に……。」

そのおかげでバンダナが簡単な龍神具になつてくれて、助けられてしていると説明したところ、調べてやるから試験が終わったら預からせろといってきた。

ジャイアニズムあふれる展開になるので、時給を上げてくれないといやだと言ったところ諦めてくれた。

もちろん「丁稚のくせに生意気だ」というジャイアニズム発言を忘れないのは美神さんらしい。

ともあれ、これから二次試験もあるので、ということに分かれて、会場の外にでてみた。

「……いるんだろ、心眼？」

『……我は驚いている』

現れた心眼は、あとき助けしてくれた心眼だった。

自ら俺を助けてくれて導いてくれた、あの心眼だった。

『一応、主の魂の記憶があるからわかるが、事故、なのだろうな。』

「たぶんな。誰もわからないし、誰にも責任がないと思うが事故、なんだろうな。」



暴走する前に昏倒させることができた。

「勝者、横島忠夫!!」

わっと声が挙がった。

観客席のおキ又ちゃんがすごい勢いで手を振ってくれている。

このころはまだ幽霊だけど、はやく彼女を助けたい思いがこみ上げた。

『主、憶測だが、ずれの原因が見えたぞ』

「・・・なんだ？」

心眼の憶測は恐ろしいものだった。

それはラプラスダイスに俺が干渉しているというのだ。

「だったら速攻で勝てる奴ばかり並べるわい。」

『主よく見る。』

そういわれてトーナメントをみて気づく。

「・・・タイガー、一発で合格しそうやん」

『魂の記憶だが、三度の試験落第は、さすがに同情できるぞ』

「そうか、そうだよな、四度めの正直だったもんな」

『うむ、涙を誘う話だ。』

前の人生で、タイガーは三度ほど試験に落ちた。

二度目でエミさんのところを首になり、三度目で俺が独立していたので事務所に入って、さすがに後がないと悟ったタイガーは、妙神山にこもって修行して四度目を受けた。受けたのだが、一次試験以降はパスになった。



なんというか、かわいそうすぎて思い出せない。  
思い出したくない。

それはさておき、第三試合まで順当に勝てる内容だった。  
第三試合でピートか雪之丞に当たるまで……

「って、前の俺の位置じゃんか。」

『つまり主は、そこまでタイガーを不憫に想っておるのではないかと……』

納得してしまった。

とはいえ、アドバイスぐらいできるだろう、ということタイガーに接近した。

「……よ、よ、横島さ……ん」

「情けねー声出すな、タイガー」

握り拳で脇を殴る。

「で、で、でっすがノー、相手は魔王、カオスですけんノー」

しかたない、セコンドに立つしかないか。

「聞け、タイガー。カオスは常識がない。でも、あいつには幻覚は  
気かねえ。」

「……!!!!」

「だから、時間ぎりぎりまで逃げろ。」

「……勝ち目がないのですじゃあ」

「信じる。親友の俺が言うんだ。」

瞬間、瞳に力がこもる。

「・・・わつしは自分は信じられんが、横島さんなら、親友の横島さんが言うなら、信じられるんじゃないあ！」

瞳に靈気をともしたタイガーは、善戦し、カオスを下した。

「つつか、カオス自爆だよな？」

『言っな、主』

一回戦はみんな勝ち残った。

俺も、ピートも、タイガーも、雪之丞も。

そして、勘九朗も。

第一日目を終えて事務所に帰ったところで作戦会議になった。

参加者の書類をチェックする唐巢神父と小竜姫さま。

そして俺も形だけでもチェックしていた。

とはいえ、みんなも俺に期待しているわけではないので、形だけとなっているけど。

「で、横島君。なにがあつたのかしら？」

「は？ なにがっすか？」

不審げに眉をしかめる美神さん。

やっぱり違和感在るのだろう。

「いくら小竜姫様に神具を与えられたからって、かわりすぎよ。なにがあつたの、言いなさい！！！」

「まあまあ、美神くん。横島くんもそれなりに成長してるんだよ。

経験は成長の糧だからね。」

「それでも、おかしいんです、先生！ この横島が、一回戦突破で調子に乗って、へらへらしていないなんて、物理的にあり得ません！！」

「あー、確かになあ……」

でも、まあ、ちょっとまずかったか……」

「あー、美神さん、そのですね……実は心眼からいろいろと説教されてまして……」

「「心眼？」」

「……私のことだ。」

バンダナに現れた瞳にみんなが驚く。

ただ小竜姫様はニッコリほほえんでいた。

「よき指導者として補助しているようですね？」

『小竜姫様、あなたの見込んだこの男が、あなたの望む以上の結果をお見せすることを約束しよう。』

満足そうにうなずく小竜姫様をみて、俺は感動していた。

バカでスケベでどうしようもない俺を、この頃からみていてくれたんだと言うことを確認できてしまったから。

「……どうしたの、横島君。」

「あー、そのー、うれしくて泣けました。」

もう諦めた。

歴史がどうだって言うのだろう。

俺は期待してくれている誰かのために頑張れると確信した。

二次試験、第二試合が開始された。

俺より先に開始されるタイガーに駆け寄ると、あいつは笑顔で答えた。

「今度は普通の人ですケン、期待しててツカーサイ」

再び殴る横っ腹。

「・・・タイガー、慢心するな。おまえの自慢の頑丈な体はこの結界じゃ意味がねえ。」

「・・・そうじゃった。」

「思い出せ、タイガー。おまえは攻めるんじゃないなくて、俺と同じ守ることに長けてるんだろ？」

慢心を感じていたタイガーの気配が変わる。

びしっとな引き締まる心と体に満足した俺は、その場を離れた。

時間差の関係でみれなかったけど、タイガーは勝った。

幻覚を利用した隠密戦と相手の消耗を計算した幻覚攻撃で、見事GS免許を取得したのだった。

俺の方は語ることもない。

きわめて簡単に勝った。

蛮なんとかとかいいう肉たるまは、かなり簡単に勝てる相手だったし。

驚きました。

彼はかなりの才能があると想っていましたが、ここまでとは思いませんでした。

余裕ある体裁きもそうですが、相手の油断を誘い、心理的な優位を感じさせつつ神経を逆なでする戦法は、余裕といらだちを招き、スキを作らせます。

そんなスキを絶え間なく探り、そして的確につく手法は感心せざる得ませんでした。

ただ、本日見せたあの霊力は別物でした。

外から見ただけでもわかるほど、激しく燃えるチャクラ。

あれは今の人界では廃れている才能の一つだったから。

あれを見つけたのは自分だと、周りに宣伝したくなるほどの喜びでした。

思いかえせば彼はこの試験で大きく成長しています。

命の危険を感じるほどの試練だと、彼が感じ、そして大きく延びているでしょう。

その補助となる心眼も、また大きく有様を変えつつあります。

霊能の補助ではなく、彼のよき助言者として。

どのようなやりとりがあるかわかりませんが、昨日の晩の様子はすばらしかった。

怪しいとされる本拠地の調査よりも、試験会場の調査と警備を重視し、証拠集めをした方がよいと、彼の言葉で切々と語ってくれたのだ。

はじめは余計なことをいって方針を混乱させるなど怒った美神さんでしたが、最後には説得されてしまいました。

あの美神さんが。

そんなわけで、会場調査と警備を早朝からしたのでありますが、でるわでるわ、恐ろしいまでの罨と結界のオンパレード。

正直な話、会場を取り囲む火角結界を発見したときには、倒れるかと思いました。

見つけられるだけの罨や結界を解除した後、会場入りした横島さんに「なぜわかったのか」聞いてみましたが、曖昧な笑顔で言います。

「靈感がささやきました」と。

たぶん嘘でしょう。

そんな感じがします。

心眼は必死にブロックしていますが、私の竜気が感じています。かれは変わったと。

そう、一流GS並に靈気を發揮して、それを「1割の力」とブラフをかけて相手を混乱させようとするバカを相手にしても、なんの混乱もなく、穏やかな笑みとともに金的を蹴りあげて悶絶させるほどに。

・・・ところで、横島さんの試合を見た後で、どうも男性受験者たちが「ふあうるかつぷ」と繰り返しているのは何なんでしょう？

ミカレイの格好で激励に行くと、横島君は苦笑이었다。

それもそのはず、次の対戦相手が私なのだから。

「今から対戦相手シャッフルできませんかねえ・・・？」

「無理で無駄よ。まあ、私も鬼じゃないわ、明日の仕事に支障無いぐらいには手加減してあげる。」

「・・・またまたあ。俺が粘ったら本気で切りかかってくるくせに。」  
「そりゃそうよ。あんたは私の丁稚。忘れちゃだめよ?」

和やかに笑っているつもりだけど、私は自分の顔が笑っているかの自信がない。

なにしろこの丁稚、恐ろしいほど底が見えないのだ。

先日までのセクハラ暴走犯罪者ぶりが形を潜め、非常に優秀な面を見せ始めているのだ。

もちろん、竜神具である「心眼」のおかげなのだろうけど、それを除いても底が知れない。

そう、今までの試合で、全く特殊な霊能力を使うことなく勝ち進んでいるのだ。

見た目、全く霊波を出していないように見えるが、試験会場の結界は霊波無しではダメーじにならないようにされている。

つまり、見た目でわからないほどの霊波を衝撃にして相手を倒しているのだ。

・・・この丁稚は。

これを不審に思わなくてなんと思つのか。

思わずその点を追求したところ、ほぼ納得のいかされる答えが提示された。

『主の霊力基礎は「煩惱」だ。その溢れる煩惱をすべて霊力に消費しているのだ。表にでてくるはずも無かるう?』

納得がいかされてしまった。

セクハラしないのも、バカな行動にでないのも、そう、納得させられてしまったのだ。

しかしそうかんがえると面白いことかもしれない。

弊害で欠点であった煩惱が靈力となる。

これ以上の利点はない。

さらに、押さえつけられていた理性が目覚めたとたん、使いべりしない優秀な助手に早変わり。

・・・ここは軽く負けておいて、助手の格を上げておいた方が仕事でプラスかしら？

主席は無理でもエミの所よりは上で合格させないといけないわね・  
・・・

「(よつし、つぎのミカ・レイは辞退ね。なんとなく美神令子の力が必要そうだし)」

美神さんから「ミカ・レイ」の辞退の話を聞いて安心した。

ピートも勝ち残ったし、タイガーも念願、いやがんばってgsに届いた。

あとは・・・

視線の先で小さく手を振っている勘九郎と不機嫌そうな雪之丞をどうしたものか・・・。

雪之丞とピートの対戦は決まっている。

で、俺はすでに辞退している「ミカ・レイ」の代わりに勘九郎との対戦が決まっている。

「(どうすんべ・・・)」

『(ピート殿にがんばってもらっほかあるまい)』

確かにこの段階なら雪之丞よりもピートの方が地力で勝る。けど、横やりが必ず入るはずだ。



『(主。雪之丞裏切りにはピートの負けが必要だ。)(  
)(必ず必要じゃない気もするけどな)』

そついいながら、白竜会組に近づいた。

「あら、きてくれるとは思わなかったわ。」

「じゃあなんで手をふったんすか？」

「好みの相手にはモーションかける、ふつつでしょ？」

「わしは、ノンケじゃ。」

「あら残念。」

そんな会話に不快そうな雪之丞。

「勘九郎、敵となれあうな！」

「お、焼き餅みたいだぞ？」

「ま！ 雪之丞、やっと私の愛が通じたのね、そうなのね！！」

「ち、ち、ちがう！！ おれには心に秘めたママへの愛が燃えさか  
つてる！！ オカマなんぞ興味ねえ！！」

「・・・といいつつ、その実、ときめいていたのだった。」

「てめえ！ 余計なことというな！！ こいつはほんきでやばいんだ  
！！！！」

「わかってるわ、雪之丞、あなたの愛は私が引き受けるわあ！！」

・・・あほらしいことだが、雪之丞の逃亡は次の試合まで続き、  
試験に出なかつた雪之丞は失格になった。

雪之丞、無惨。

つつか、未だ陰も見せないメデューサ、無惨。

すでに準決勝。

ピートとタイガーは接戦し、僅差でピートが勝った。

エミさんが何の逡巡もなくピートを応援していたことも遠因だと思っ。

ともあれ、目の前の勘九郎に視線を送るが、ずいぶん余裕を感じない。

なんつうか、すでに進退窮まる？

試合開始とともに舌戦を試してみることにした。

「・・・上司に切られたか？」

「なんのことかしら？」

ノータイムの返答だが焦りを感じる。

「尻尾切りとは器用だよな、『蛇』のくせに」

瞬間、勘九郎の顔が変わる。

困惑のオカマから冷徹な戦士の顔に。

「・・・よく分からない話ね、それ」

といつても、雰囲気と顔が裏切る状況だ。

「一応さ、裏にも探りが入ってて、すでに撤退してるっ情報も入ってるぞ」

もちろんこれは嘘。

ただ、畏や仕掛けがすべて取り払われ、自分の手ゴマが大半失敗

しているという状況で、あの女がいつまでもこんな作戦にこだわるはずもない、という推測だ。

が、勘九郎の表情がそれを肯定する。

「なんだが、こつちの上司が間抜けに思えるわ。」

苦笑いとともに魔装術を開始。

仮面をかぶった鬼の姿になる。

「でもね、こつちもお仕事なのよ。勝たせてもらうわ。」

何撃かの攻撃を避ける。

拳を足を霊波砲を。

だが、向こうに焦りはない。

少なくとも見た目の霊力差は勘九郎10に対して俺は3程度。

向こうの慢心、いや勝利の確信は仕方ないだろう。

でも、そんなものはひっくり返す。

それが美神除霊事務所つてもんだ！！

「・・・横島さん、勝ってください！！ ぼくと、ぼくと、決勝で戦うと約束してください！！」

響きわたるピートの声。

『女性』視点がすべて集中する。

「すべて」が。

もちろん、ここは迷わず・・・。

なんというむごい攻撃だろう。  
さすがに私も相手に同情しなくなった。

「先生、気づいてますか？」

「なにをだね、令子君。」

「あいつ、いままで、攻撃部分に薄い霊波しかまとっていなかった  
じゃないですか？」

「・・・ああ、ただの金的だったらダメージもなかっただろうに。」

「横島君、かれ、足の先から霊波刀を出してましたよ。」

・・・!!!

なんとということだ!!

彼は何という恐ろしいことを・・・!!!

思わず身の毛がよだつ攻撃。

その攻撃を躊躇無く行えるその神経がわからなかった。

・・・もしその攻撃を我が弟子ピート君が受けたと考えるだけで、  
背筋が寒くなりっぱなしだった。

根断の剣、とでも名付ければいいのだろうか。

いや、絶望の剣、これこそがふさわしい。

「・・・対戦者の男性としての未来に祈ろうじゃないか」

十字を切る私に美神くんは首を振る。

「実際に攻撃したのは、「あの」チャクラです。」

瞬間、私も正気を取り戻した。



瞬間、なぜか写真の連謝恩が周囲から聞こえた。  
まあ、相手はピートだし。

それは信じられない光景だった。

横島君が次々と作る霊波の盾に阻まれピートが攻め入れず、そして攻撃されたたん盾がピートを襲いかかる。

霧となって避けても実体になる瞬間をねらうように霊波の剣が襲いかかり、盾が追いつめていった。

常時三枚展開する盾と、細かなタイミングで襲いかかる剣。

それはすでに素人の戦略ではなかった。

試合時間が十分を過ぎたところで、ピートの方が霊力切れを起こして倒れ、TKOとなった。

運と偶然で手に入れた霊能で、彼は、横島君は、主席合格を果たした。

辞退しておいて儲けた。

いやいや、辞退しておいて、よかった。

## 第一話（後書き）

いかがでしょうか？

ちよつと昔はやった系統のSSかなつとは思つたんですが、最強には届かないけど現行戦力を搾り出す感じが出せると嬉しいとか考えています。

次回 12 / 6 アップ予定

## 第二話

鎌田勘九郎は白井病院のベッドで目覚めた。

自分の霊力中枢が麻痺しているのを感じ、どうにもならないことを自覚して力を抜いた。

回復すれば、そう思い、そして力を蓄えて……

「……蓄えて、どうすればいいのかしら。」

すでに上司には見限られているだろう。

仲間内の大半は切り捨てられているだろうし、前途はあまりにも暗い。

「もう、寝返っちゃおうかしら?」

「俺もそっちがお勧めだな。」

気配も感じなかった壁に、人影が浮く。

いた、視覚にも入っていたのにも関わらず感じさせないほどの穏行を知り、背筋が凍った。

しかし、それを見せるわけにはいかない。

「……一応、魔族に関わった人間よ? 正義の味方が許せるはんしかしら?」

「さあ? 情報次第だろ? 地獄の沙汰すら金次第。生きるにみあう情報なら、なおのことながら、だろ?」

「言質はとらせない?」

「その責任がねーんだよ。あと権限かな?」

「あら、あなたならその責任も権限もなくとも何とかしてくれると思っけど?」





やっぱり、姿形へ制約が白蛇から掛けられたのだろう。

そのせいで、本来姿形を変えるにあたって目指すはずの方向が失われていたのだ。

そう、こいつなら絶対女になると思ってたのに。

いや、女じゃなくて、目指す方向は・・・

「母、なんだろうなあ・・・。」

「そう、そうなのよ、何でわかったのかしら、いえ、なんでわからなかったのかしらあ！！！！！！！！」

狂ったチャクラのままできる部分だけで魔を受け入れると、右腕がたおやかな女性のものになった。

「できるわ、できるじゃない、あああああああ！！！！」

女性の腕で涙を拭い、そして俺に向き直った。

「私は対価を得たわ。何でも聞いてちょうだい。」

その瞳はプロのそれではなく、ほしいプレゼントをもらった子供のそれだった。

鎌田勘九郎の尋問は、翌日に行われたそうだ。

ただ見た目が全く変わってたため、大きな混乱が起きたが、同席した小竜姫様によって本人と認定されたため、尋問は正常に行われたという。

後で聞いた話だけど、魔装術はああいう使い方はできないはずなのだそうだ。

ただ、思うままの姿になれると思いきんで成功したが故に、それが霊能になったのだらうと小竜姫様の話だった。

とはいえ、勘九郎は得られないものを得た。

雪之丞は得られたはずの縁を失った。

これがどう動くかは誰も知らない。

俺も知らない。

知ったこっちゃない。

ただ、どっかで絡んでくるんだらうなーという予感はあるけど、めんどくさくなったら勘九郎に絡ませようと心底思った。

GS見習いとなって変わったのは、一番に収入だらう。

何しろ美神さん、出費が減ったのは横島君のおかげと公言したぐらいいご機嫌だったから。

時給も250円から5000円に上昇し、一人で受ける事ができる依頼は、なんと一件当たり半分くれるのだ。

信じられなくて呆然としていたところで、素人時分でも年俸二千万といってくれたエミさんがいただらう、と心眼の忠告。

でも、まあ、あの美神さんの給料と考えると、本格的にうれしくて調子に乗ってしまっただった。

本日も三件をこなし、総額二百万円。

もちろん、一件あたりの金額が安いので、道具使いの美神さんでは赤字になる物件なんだけど、霊具を必要としない俺が吸引符をトドメに使うだけなら黒字も黒字大黒字といったところだった。

大金も大好きだけど、塗れ手に泡も大好きな美神さんはここ最近機嫌がよく、こちら仕事もがしやすくてうれしい。

そんなご機嫌状態が続かないのが俺クオリティー。

『主、えびぞりー！』

「おう！」

心眼のいうことに間違いなし、というレベルまで信頼している俺は、住宅地の満々中でエビぞった。

で、視界の端にある刃物に気づく。

その刃物は、光の線になって、今まで体のあった場所をないだ。

長さでみれば剣、反りで見れば刀。

持つ男は、浪人崩れ。

だから、避けつつあいつの頭を蹴る。

「サイキック、オーバーヘッドキック！」

直撃は避けたが、つま先が顎をこすった。

だから、浪人は倒れた。

刀を手から落として。

「サイキックグリップ、ハルバート！！！」

何重にもサイキックシールドを張り巡らせて、刀に接触した瞬間、同時爆発させる。

もちろん、自分の足を守る最後の一枚は守ったままに。

その衝撃は「護」の文殊を破る。

ゆえに、それがなにであろうとも叩き伏せる。

バキン、という金属音と共にそれはおれた。

「（あ、あれ、もしかして、八房？）」

「（ふむ、つまり、人狼犬飼ポチだな。）」

目の前で折れた刀の柄を見つめ、呆然としている浪人風の男。

前の時間では、狼王にまでなった男は、涙を流して柄と折れた剣をあわせて、くつつかなくて、泣いてを繰り返していた。

「お、お、おれた？ 八房が、おれのやつぶさが……。」

滂沱の涙を流すバカはおいておいて、その場を離れる俺に何かが飛びついてきた。

とりあえず、靈波刀を出してきた小さいのはそのまま投げ飛ばして、もう一つは突っ込んできただけなので、受け止めて頭の上に載せた。

何となく据わりがいい感触と「きゅー」という声がかわいい。

「……お見事でござる！！」

投げ飛ばされた姿勢から空を切って体をひねり、そのままこちらに飛んできた非常識物体は、俺の前で土下座をした。

銀髪で赤毛メツシュ……。

もしかして、「犬」か？

「拙者、人狼の犬飼シロと申すものです。」

俺が倒したのは犬飼ポチ、父親だという。

人狼の里の至宝を持ち出して、世界征服だとか騒いでいたところを捕縛されたが、そこから再び逃げ出して辻切りを繰り返していたという。

さすがに自分の親とはいえかばいきれないということと、子供が倒しにきたそうだ。

……シロって「犬塚」じゃなかったか？

もしかすると俺が「こつちの」時に来た影響か？

で、俺の頭の上にいるのは途中で知り合った子ぎつね。

ぷらーんと引きはがしてみると、見事なまでなニンテール。

タマモ、じゃん。

思わず頭痛を感じる。

「先生の、見事な手腕のおかげで、バカおやじを再起不能にできた  
でござる。どんな感謝の言葉も足りないでござる」

「あー、感謝、りようかい。バカおやじを連れて、早く里にかえれ  
ー。」

「いいえいいえ、このままでは帰れませぬ！！ 是非とも恩返しを  
ー！！」

取り合えず、今だ力を蓄えていない犬飼なら、里に追い返しても  
いいだろうし。

「で、拾ってきた、と。」

じとめの美神さんから視線を逸らしつつ、未だ「やつぶさ・・・」  
と呆然としたまま呪術ロープに縛られてるポチをみた。

一応、一般人も切りつけてるので、このまま警察に引き渡される  
ことになる。

で、俺の足下で土下座してるのが子犬と子ぎつね。

俺に、ひいては美神さんに恩返しをさせてほしいとってきてい

た。

まあ、タマモはしらんがシロは里の外にでたい一心なんだということとは昨晚わかった。

そんなことを事務所式ブロックサイン。

美神さんもブロックサイン。

「・・・わかったわ。一応恩返しは受けてあげるけど、里から許可を得なさい」

「・・・なあっ、このまま戻っては、二度と外に出してもらえないでござるよ」

「その程度、男の子なら乗り越えなさい」

「・・・美神さん、シロ、女ですよ？」

「・・・尚更だめじゃない」

そういえば人狼の女性は少なく、貴重だとか。

子供のうちならまだしも、成人したら絶対に里からでられないと聞いたことを思い出した。

「じゃ、今のうちに世間を味わいたいつつうわけか？」「ひとぎぎが悪いでござるよ、先生」

自分も認める理由というわけだ。

「あのねえ、シロ。あなたをこのまま泊めおくと、私たちが誘拐犯になるのよ？ それって恩を仇で返すことにならない？」

さすがの子供犬もその理屈は解ったようで、渋々、本当に渋々に認めた。

「ですが、先生。この娘は面倒見てくださいますか？」

人狼の里では面倒見てやれないが、姉妹の契りを結んだ間柄。このまま放り出せない、というのだ。

どうもこのコンビ、早々に出会ってウマがあったらしい。

姉妹の契りで、こう言ってるってことは、姉シロ妹タマモなんだろうなあ……。

「……どうするつもり、横島君？」

「どこまでOKですかね？」

「最高でどこまでするつもり？」

「……親に頼んで養女にでもしてもらって、妹として育てようかなーと」

「横島君、解ってると思うけど……」

「ええ、十分解ってますが、いまさらでしょ？」

俺と美神さんの視線は、ふりふりしているニンテールを見つめる。

「……覚悟はあるのね？」

「子育てってそういうものですよ」

わかったわ、とため息一つ。

「一週間、私で預かるわ。その間に身の回りをきれいにしなさい。さすがにあの部屋で妹と二人はきついでしょ？」

「はい！」

むー、美神さん優しいなあー。

メロメロに惚れそう。



『(主、一応解つてると思うが……。)]  
「(だから美神さんは一週間って言ってくれたんだよ)」  
『(ふむ、嫉妬にかられる主従関係だな)』  
「(だろ?)」

そんなわけで、事務所の吸引された悪霊だの雑霊だのを集めて、那須の某所で石に放り込んだり、自分オアパートを整理したり、学校で試験を受けたりしているうちに一週間が過ぎ去った。

事務所に迎えに行くと、10歳ほどのタマモが飛びついてきた。

「にーちゃー!!!」

かわいい盛り of タマモを片手に抱き、美神さんに頭を下げる。

「ありがとうございます、美神さん」

「いいのよ、こっちもかわいい女の子で着せかえ遊びしてたようなものよ」

ふふふつと笑う美神さんは、なんだか母親の優しさを感じた。

「いつでも遊びにいらっしやい、タマモちゃん。」

「いつでも遊びに来てくださいね、タマモちゃん」

小さく手を振るタマモとともに事務所をでたところで俺とタマモはため息をついた。

「……ヨロシマー、もう猫かぶんなくていいでしょー?」

「まだだ。今日、おれの両親が空港に着く。二人が帰るまで猫かぶつとけ。」

「・・・屈辱てきい・・・」

まあ、なんつつか、性格は前のままだが、人間に好意的なのはシロのおかげらしい。

転生後すぐにシロと合流したタマモは、人情厚い生活にもまれてきたらしく、それなりに浮き世の流れを知っていた。

俺が妹として引き取るリスクとそれ見合う得がないことで随分と不信感を持っていたらしいが、そのへんはもう解消されたらしい。

電車を乗り継いで空港まで行くと、ナルニアからの直行便が遅れているとアナウンスが流れた。

「どうする、ヨコシマ?」

「んー、まあ飯でも食うか。」

「狐うどんね。」

「あげはやるよ」

「やった〜」

小躍りするタマモを抱き上げて、近くのうどん屋にはいると、なぜか両親がうどんをすすった。

「な、なんでいるんだよ。」

「・・・そりゃ、飛行機で来たからよ」

「いや、ほら、直行便が遅くなるって・・・」

「・・・ん?ああ。パリ経由便の方が一時間早くなるって言うから乗り継いできたんだ。」

「・・・いくら金かけたんだよ」

「はっはっは、かわいい娘を一目見るためだ。やすいやすい」

「そうねえ、こんなにかわいい娘だもの。大したことないわ」

わっはっはっは、と笑う両親を前にして、タマモはお澄まし

モードにはいった。

「あ、あの、初めまして。タマモです。」

小さく挨拶するタマモに手を伸ばしなでる親父。

「堅くならなくていい。さっき、店の前ではしゃいでいた、スのまの娘でいてくれればいい。」

みられていたことに赤くなるタマモの頬をなでるお袋。

「いいのよ。おてんばでも何でも。幸せになればいいの。」

言われてたまもの瞳に涙が浮かぶ。

「うんうん、ありがとう、おとうさん、おかあさん。」

小さな手で二人の手をつかみ直すと、二人も一気に抱きしめた。

「あああああ、なんてかわいいんだ、かわいすぎる、ナルニアを持ち帰りたい!!！」

「ええ、そうよ、そうだわ!!！ かわいい娘ですもの、一から育てたいわ、ええ、育てるわよ!!！」

「そうだ、おまえ、学校の準備だ、部屋も作るう、フェミニンでフワフワでキラキラな!!！」

「そうだわ、ええそうねあなた。ドレスでフリルでリリカルよ!!！」

真っ赤になって照れるタマモだったが、一応反論。

「あ、あの、お父さん、お母さん、わたしは、ヨコシマと、おにい

ちゃんと、その、暮らしたい。」

瞬時に殺人的な視線を送る両親。

もちろん俺はホールドアップ。

両手には白旗装備済み。

「・・・タマモちゃん、いいえ、娘なんだからタマモでいいわよね？」

「うん。」

「タマモは、助けてくれたからお兄ちゃんといたいの？」

「違うよ、お母さん。私は、お兄ちゃんと暮らしたいから、お母さんの娘になっただよ。」

苦笑いのお袋と親父。

「それだつたらお嫁さんでもいいんじゃないのか？」

「・・・私は、生まれて一年もたつてない子供だもの。ロリじゃないって嫌がられちゃう」

「「ぶっ・・・」」

両親同時に吹きやがった。

「わかったわかった、忠夫と住むのはいいけど、学校はいくべきだな」

「そうね、一応、いろいろとできるんでしょ、タマモ？」

コクリと頷いて針ほどの狐火を見せるタマモ。

「そう、だったらこっちのコネで学校へ押し込むから、忠夫は勉強を見てあげなさい」

「了解。」

一通りの近況をうどんを食べつつ話終わると、お袋はタマモを連れて飛び出した。

「さあ、かわいい服を買いに行くわよ！」

「えええ〜〜〜、また〜〜〜!?!?」

さんざん美神さんたちにおもちやにされたことを思い出したタマモは顔をしかめたが、お袋は知らんぷりでダツシユした。

見送った親父と俺は、そのまま展望デッキまできた。

何か話がある気配だったのでついてゆくと、すごく真剣な顔でこちらをみていた。

「忠夫、なにがあつた？」

どきつとして言葉がでなかった。

「ヘタレで逃げ腰で女好きで度胸がなくて、それでも俺の息子だ。

何かあつたのは解る。」

やべー、親父かつこよすぎる。

「はなせないことなら聞かん。だが、話さなくちゃならないことがあるならはなせ。」

深呼吸する。

ここが分かれ目だ。

今まで通りの人生と決まった未来を目指すなら、ここで話せることはない。

しかし、何かを成すためには避けてと折れない存在が、俺の両親だ。

味方にすればこれ以上の存在はない。

『（主、話すべきだ。すでに賽は振られている）』  
「（そうだな、そうだった。）」

すでに引く道はない。

ならば行く道を最後まで行くしかないじゃないか。

俺は再び深呼吸して親父に向き直った。

急に男の顔をするようになった忠夫の話は、まさに驚愕以上のなものでもないモノだった。

今の忠夫は、未来の忠夫自身であり、精神や経験が逆行してきた存在だというのだ。

実際何年後かについての記憶はないので細かいことは解らないそうだが、ここ二年ほどの事件は次系列に沿わない形で予言できるといふ。

なぜ時系列に沿わないのかと言えば、すでに色々と変えてしまっているのです、誰かが強い思いで進めていること以外はブレてしまうそう。

そういう意味ではタマモの覚醒は二年ほど早いそう。

九尾の狐とされる妖狐タマモは忠夫の記憶では転生を察知された時点で政府に追われ、人間不信になっていたそう。

そこを助けた縁で、結構仲良くなったと言うが、根底にある人間不信を払拭できなかったと後悔していたそう。

事件か事故か、様々な事が考えられるが、実際に歴史の逆行に入ってしまった時点で、未来に帰ることはできないと言う。ならば、自分お周りだけでも幸せに満たしたい、そう思って行動しているそうだ。

「そうか、がんばってるな。」

私が肩をたたくと、ぼろぼろと涙を流し始める忠夫。

「おかんにもタマモにもないしょや、男が泣いたらあかんのや、まもるもんに涙見せたらあかんのや。おやじだまっててくれ、な？」

一応頷くが、すまん、息子。

俺のカフスに付いているマイクで、全部聞かれてるわ。

あー、うー、こんどなんかかってやるからな？

ボロアパートで家族四人がきついで、ホテルをとった。

息子は気を使ってタマモと三人で楽しんでくれ、と去っていったが、先ほどの話を知っているので、夫と顔を合わせているのが恥ずかしいのだと理解できる。

しかし、息子を急成長させてくれた未来のファクターとは何だろうか？

あれほどの成長だ、生半可な事ではないだろう。

男親には解らないだろうが、あの子の心はひび割れて、今にも崩れそうになっているのを無理矢理支えているような状態に感じる。

タマモも同じように感じていて、何とか守らなくては、と思っているらしいことについてコンセンサスがとれた。

「ヨコシマは、お兄ちゃんは、守りたいっていつもいつてるの。・  
・だから、傷の原因は『守れなかった』だと思っ。」

なるほど、それはきわめて論理的で正しい話だ。

では、なにを守れなかったのか？

近くの間人だろっか？

近親者だろっか？

同僚だろっか？

恋人だろっか？

直接聞きたい思いがあふれたが、ぐつとかみしめる。

さすがに盗聴して聞いていたから詳しく聞きたくなった、教える  
とはいえない。

そんなやりとりの中で、タマモは、表情を変えた。

ちよつと小生意気な少女の顔から、あどけない少女の顔へ。

「お父さん、お母さん、これから話すことを冷静に受け止めて、冷  
静に処理してください。」

タマモが語った内容は、息子の話を詳細にしたモノだった。

そんな話をタマモにしたのかと聞いたところ、幼い、判断力の薄  
い子ぎつねの状態で、意識せずに読んでしまったそうだ。

そんな彼女が語る内容は、寒気のするモノだった。

後に魔神戦争と言われるであろう、魔界の王による三界征服計画、  
それに巻き込まれ人類の敵として標榜された息子、捕虜としてスパ  
イとして強要される活動の中で、敵集団ごと殺されかけ、そして敵  
と深まる関係、蚩魔との恋。 魔神をも倒すと決意し、そして成し



遂げた息子。

その代償は恋人、蚩魔の命と自らの恋心。

成し遂げた事の大きさに比べ報われぬ息子。

## 第二話（後書き）

次は12/6中にアップします

12/10 ちよつと書き直しました。

### 第三話（前書き）

このタイトル、どうよ？ と聞いてみたところ、センスねーwと笑われる夢を見ました。切ないかぎりっすねw

### 第三話

それもこれも自分がぶがいないせいだと責め続ける息子だが、彼が生きてゆけたのも恋人のおかげだった。

「ヨコシマはヨコシマらしく。」

それは約束。

それは契約。

それは、世界で一番優しいく残酷な呪い。

すべてを話してくれたタマモにありがとうといいつつ、私は部屋を出た。

どこか、どこかにフィットネスジムはないか、何かを殴らずにはいられない!!

お母さんは声もなく泣いていた。

私は、私が見つた、お兄ちゃんが知ってるタマモを演じることで、お兄ちゃんに為になれることを知った。

だから。

だからお母さんも協力してね。

「私は、なにも知らない、知らなかった。それでええんやな?」

「うん、お母さんもお父さんも、この件に関わったらだめ。絶対に  
お兄ちゃんが可哀想なことになるから」

きゅっと私を抱きしめるお母さん。

「タマモ、お兄ちゃんを、忠夫をまもっておくれ。」  
「うん。」

二晩ほどタマモを拘束した両親は、晴れやかな笑顔でナルニアに戻っていった。

空港で見送ったとき、二人からハグされて戸惑ったけど、それでも両親からの思いを受け取れた気がする。

両手を降って見送るタマモを、小脇に抱えて持ち出そうとする親父を叩き伏せながら、見送りを完了した。

「ほんじゃ、飯でも食って帰るか？」

「狐うどんね？」

「はいはい、おあげはもってけ。」

「ひゃっほ〜」

小躍りするタマモを抱えながら俺は暖簾をくぐったのだった。

両親がナルニアに帰って一週間ほどで、タマモの入学準備が終わった。

あわせて、両親からの仕送りも増えたので、今までのポロアパー  
トから引越して、4LDKのマンションに移った。

そんなに部屋はいらなかったんだけど、タマモの部屋は大きくしたかったし、お風呂もバストイレ別となると、このレベルになってしまう。

「ヨロシマ、無理しなくてもいいんだよ？」  
「いいや、おまえにはこのぐらい必要だ。」

なにしろ両親からベツトだの洋服ダンスだのが送られてきたり、服だのアクセサリーが山のように送られてきているのだ。

正直、俺の部屋はいらなからタマモの衣装部屋が必要になりそうな勢いだ。

学校は公立でいいんじゃないかと思っただけど、お袋が手回しして六道女学院に入学することになった。

さすがに小学生のみためでは、と思っただけれど、中等部へ編入が決まったそうだ。

その報告に美神さんのところにいくと、非常に不機嫌そうな顔で出迎えてくれた。

「えっと、どうしました？」

「・・・あなたの弟子が、あなたを慕ってきたわよ。」

みれば、人型のタマモと同じぐらいに成長したシロ。銀髪赤メツシユの髪の毛を腰まで伸ばしていた。

「先生！ 長老の許可が下りたでござる！！」

これからの里を考えると、社会融和は必須だ、だから勉強してこい、となったわけらしい。

で、色々もあり、美神さんが引きとるのかなあ、と思っていると、シロは感激状態でしっぽを振ってる。

「タマモ、立派になったでござるなあ！！」

「シロねえ！ わたし、今度学校に勉強しに行くの！！」

そんなことを言われれば、がきんちよの反応なんて決まっている。

「せっしやも勉強しにいきたいでござるうー！ー！！」

あんたの責任よ！と美神さんににらまれて、仕方なく母に電話。  
二つ返事で許可がでて、タマモとともに転入することになった。  
とはいえ、小学校的な学校に行ったことのない二人だったので、俺が勉強を少しだけ教えることになった。

「感激でござる、先生に先生に教えていただけるといふ事は、弟子入り許可、内弟子でござるねえ！？」

もちろんチョップで黙らせて、とりあえずの平穏を確保することにした。

一応、シロの保護者は美神さん、タマモの保護者はうちの両親で代理が俺なので、ふたりして出向くことになった。

スーツにバンダナはないだろうと言うことで、腕に巻いているんだけど、心眼はちゃんと腕にいた。

「横島君、結構着慣れてるみたいね、スーツ」

「……ぜんぜんですよ。俺はずっとガ克蘭だったから、このネクタイってんがどうも……。」

「ほらほら、ネクタイが曲がってるわよ。」

「あ、すみません」

「……ん、これでよし。」

ぼんつと肩を叩かれ再び歩き出すと、なぜか周囲から暗い声。

「……なんであんなにいい女が、小僧相手に……」

「絶対俺の方がうえだ、なのに……」

「畜生、畜生、なんであんなクソ男に、あんないい女が」

あー、なんつつか、親近感わく話だなあ。

正直な話、心情的にはあっちがわたものなあ、俺。

「ほら、いくわよ、横島君。」

「は、はい。」

組まれた腕から伝わる胸の感触、よりも、美神さんの頭の位置がいつもより近い気がしたのがうれしかった。

前の「時」を思わせる距離だと思う。

そんな事をいつてるうちに、いつの間にか学院に着いていた。

授業中らしく街路樹道は無人だったが、門には警備員が立っている。

「犬飼シロ、横島タマモの保護者です。」

美神さんと同時に頭を下げると、警備員さんにはっこりほほえんで通してくれた。

聞けば、美神さんが在学中から立っている人だそうで、在学中や卒業後でも多くのOGに愛されている人だという。

「頼りになりそうですものね。」

「ええ、合気道、柔術、剣道、様々な武術の達人で、女子校の守護神よ。」





パンパンと手を打つと、どこからともなく現れたメイドがお茶を入れてく。

軽く会釈するメイドさんに俺も会釈を返すと、なぜか目を丸くする六道親子。

「横島君が〴〵女の子に〴〵飛びかからないわ〴〵。」

「物理的に〴〵あり得ないわ〴〵」

まあ、今までの素行は悪かったしね。

「おばさま、冥子。GS試験に受かってから横島君は色々と心を入れ替えてがんばってるんですよ？ タマモを妹にしてからなんて、品行方正の立て看板を堅持してるぐらいですもの」

「美神さん、言い過ぎです。俺は今まで通り、きれいなお姉ちゃんが好きだしエロエロですけど、それでもタマモの兄として恥ずかしくないように、そんな風に生きたいと思ってるだけです。」

心の底を口にしてみれば、なんとタマモに依存していることが発覚してしまい、思わず恥ずかしくなってしまうた。

「心の支えっていうなら、心の底から大切になさい、横島君。」

「はい、美神さん」

何というのかしら、ぜんぜん別人みたいだけど、全く変わらない人、それが横島君。

初めてあったとき、「生まれる前から好きでした」なんて言ってくれるほど軽い感じだったけど、今はスゴく大人っぽい感じ。

見上げるような大木、そんなイメージ。

「・・・横島君は、どうしてそんなに強くなれたの？」

わかってる。

強くなったのは、強くならなくちゃいけなかったんだと言うことを。

努力もせずに生きている人なんてないことも。

「いろんな人に出会って、諭されて、導かれ、今の自分になりました。」

強い衝撃を感じた。

彼の言葉に嘘はないだろうけど、彼が伝えたい言葉を私が受けられていないことを確信したから。

彼の言葉がどれだけ重かるうとも、私の経験ではそれを想像することも出来ないのだ。

辛く、そして悲しい。

彼は今年受かったばかりのGS見習いなのに、私の何歩も先を歩んでいる。

令子ちゃんもエミちゃんも、みんなみんな、先に行ってしまう。

私はいつも同じところをぐるぐるぐるぐる・・・。

「冥子さん、冥子さん？」

目の前で横島君が困った顔をしていた。

だめだめ、私はどんなに遅れていてもお姉さんなんだから。につこりほほえんで、いつもどおり、いつもどおり・・・。

ゆっくりと横島君が冥子を抱きしめた。

以前のセクハラではなく、優しい暖かい包容。小さく頭をなでつつ、何かをささやくと、冥子は小さく頷いていた。

外には見せないけど、冥子だって悩んでいたし、その悩みを私たちは知っていた。

だけど、冥子はすでにプロ。

自分で乗り越えなければならぬ事なのだ。

いや、プロになる前に乗り越えなければならぬ壁だったのかもしれない。

そういう意味では六道夫人の教育方針に大きな問題があるわけだけど、この辺に関わるのは鬼門。

とっとと帰るのが吉だ。

「冥子、落ち着いた？」

「・・・うん、横島君、令子ちゃん、ありがとうね」

涙を拭いた冥子は、弱々しくほほえむ。

それを正面から見た横島君は、なにかに耐えるように顔をゆがめる。

何か言おうとして、いえなくて、どうしたものかと悩んでいる顔はちょっと可愛い。

しばらく観察してたかったけど、面白すぎる状況はもうタイムアップ。

だから六道夫人が何か言い出す前に私から提案した。

「冥子、少しの間、横島君を助手にしてみる？」

瞬間、横島君の顔は苦笑い。

「(ばれました?)」

「（あたりまえでしょ？）」

こんな会話には既にサインなんかいらぬ私たち。

まったく、こんな近くまで入り込まれるだなんて思わなかったわよ、もう。

六道除霊事務所への出向は翌日すぐに始まった。

所長は六道夫人、所員は冥子さんだけだけど、事務はメイドさん達がフル活動、所内は六道邸だというのだから、まあ、なんというか。

助手の初仕事はお茶くみからと思っていただけに拍子抜けだった。

では助手の初仕事は、というと、書類を見せられることからだった。

内容は除霊実績と評価で、スゴいモノだった。

仕事の完遂率は43%。

無破壊完遂率は12%。

今年度の赤字が22億円。

思わず視線をあげて所長事、六道夫人を見ると、目をうるうるさせていた。

夫人曰く、赤字はどうでもいいそうだ。

グループの税金対策になるから。

ただ無破壊完遂率を上げないことには、来年度免許停止も視野に入っているとか。

次期党首が免停では話にならない、とさすがにあせていたところでこの話は渡りに船だとか。

「どんな手段でも、無破壊成功率を上げてくれれば、おばさんなんでもしてあげちゃう」

ということなので、二つの事をしようと思った。

一つは、引き受ける格付けの引き下げ。

今までA級GS一人だったので、いろいろと無茶をしていたが、E級の助手を入れたので、研修を込めてといういいわけで、がんばり簡単な仕事をこなす。

計算では二月もすれば80%台にいく計算だ。

加えて、冥子さんの意識革命を考えている。

以前の時間でよくあったのが、式神に加えられた衝撃で気絶すると言ったもので、気が弱いとかがそういうものではなく、外的な衝撃情報に弱いのだと俺は感じた。

そこで、式神を徐々に強い力で攻撃し、衝撃に耐えてもらう訓練を提案した。

簡単な仕事をするについては賛成してもらえたけれど、式神への攻撃は始め難色を示された。

ただ、俺が「何の痛みもなく成長することはない」といったところ、積極的に受け入れてくれるようになった。

お兄ちゃんは大ぶん、強欲なんだと思う。

私も、シロねえも、美神さんも、おキ又ちゃんも、みんなみんな守りたくて、最近では冥子も守りたくなってしまった。

霊力だけで、甘えん坊な冥子を、自分が恨まれてもいいからと厳しく対応しているお兄ちゃんだけど、会う度に冥子からお兄ちゃんと訓練しているときの話をうれしそうにされている。

「タマモちゃんはうらやましいわ。私もあんなお兄ちゃんがかっこよかったわ。」

この台詞で締めくくられる冥子会話が、本日は違っていた。

「タマモちゃん、横島君って、令子ちゃんとおつきあいしてるのかしら？」

頬を染めて、ちょっと潤んだ目で聞いてきてる。

まずい、まずいよお兄ちゃん。

訓練じゃなくて調教になってるよお！？

とはいえ、まずは鎮火、鎮火。

「えーっと、誰とつきあってるかは知らないけど、美神さんとは結構深い関係って感じはするわね。」

最近、まじで目と目で通じあう感じだし。

もしかすると、体も通事あってる可能性があるかも。

「そっか………」

んーと考え込んだ冥子が、すがすがしい笑顔でこっちをみた。

「タマモちゃん、略奪愛ってどうおもう？」

やば！おもしろパターンで切り替えしてきた！！

これはもう、面白すぎて鎮火とか言ってるのがもったいなさすぎる！！

……はっ、もしかこれは……。

周囲の気配を探ると、六道メイド隊と六道夫人の気配。

やっぱあ、ここで面白がったら、略奪愛肯定派に組み込まれると

ころだった。

「・・・私は、みんなが幸せになれる方法を探すのが一番だと思うよ？」

よっし、切り抜けた！！

「そっか、タマモちゃんはハーレム肯定派なんだ」

・・・え？

「スゴいな、タマモちゃんはアダルトなセンスの人だったのね」

・・・ちょ、ちょっと・・・

「うん、冥子ががんばってみるわ」

じゃーねーと去る冥子を呆然と見送る私だった。

タマモの報告を受けて笑ってしまった。

何しろ当人の冥子から「横島君を好きになっちゃったの」。どうしよう」という相談を受けていたから。

しっかし、ハーレムって、どうなのよ？

まあ、当の本人は今、事務所のソファで固まってるけど。

「おかしーなー、むちゃくちゃ嫌われることしてんですけどねえ？」

まあ、今まで誰もしてくれなかったことを、一からつきあってく



れて、さらには事務所の成績も急上昇、受けていなかったBクラスやAクラスの仕事まで無破壊でこなせるようになっていたのだから、誰だって心動かされるだろう。

そう、あれ。

スポコンのコーチ。

まさにそういう状態なのだろう。

六道夫人からは「何億で横島君を移籍できるかしら〜」とかいう電話が毎日かかってくるぐらいだし。

「まあ、横島君の計画通りになってるわけだし、そろそろ次の段階なんですよ?」

「はい。やっぱり冥子さんは一人で除霊は無理なタイプじゃないですか? だったらエミさんみたいな肉の壁でもいいので前衛が必要です。」

「つまり、ポスト横島を引っ張ってきて、前衛+冥子の形を固定化する、というわけね?」

「はい。美神さんとやっていて思いますけど、前衛と後衛の分業は、GSに必須だとおもっすよ。」

まあウチみたいないケイケな事務所なら当然その構成になる。

加えて後衛にヒーラーが入れば完璧だ。

そのへんは考える必要があると思う。

それはさておき。

冥子が横島君に惚れるのは仕方ないだろうなあとは思ってた。

もちろん、くれてやるつもりはないけど、あの子には私たち以外の誰かの存在があることを知ってほしかった。

もちろん、横島君ばかりじゃないし、周りのメイドさんたちにも個々で気を使うぐらいに。

母親がいて、父親がいて、寝食を忘れるほど気を使ってくれる人たちがいる。

そのことをもっと解ってほしいと思ったけど、まあ、その辺は言っても仕方がない。

理解できるかどうかは本人の資質次第だし、逆に横島君への恋心がひと段落つかないと進めないだろうし。

今まで私やエミしか友達というモノがいなかった冥子に、初めて親友以上に近づいてきてくれる異性が現れたとなってはとうとう転ぶかなんて解りきったことだ。

たぶん、初恋なんだろう。

それも色々と未来の構想につながってもおかしくないほどの年になつてから初めての。

厄介だとは思うけど、私と横島君なら何とかなる気がしている。全く証拠はないけど、予感だけは感じていた。

前衛の代役としてスカウトできた男、その名もダテ・ザ・キラ。

「あーもー、悪かった、もう言わないでくれ!!」

前衛の代役としてスカウトできた男、その名も伊達雪乃丞。

後衛に蒲田勘九朗改め、春日久美。魔装術で全身全霊女体化を果たした完全無欠の「女形」である。

協会預かりだった身分を、こここのところ評判急上昇の六道事務所で預かることとなり、ここ2週間ほどフォーメーションをくんでいた。

女体化に伴いヒールや結界に特化した勘九郎・・・ではなく久美はともかく、完全に手綱をかけられた雪乃丞はきわめて優秀な前衛だった。

俺の穴を埋めるに十分なものといえる。

冥子さんは「横島君はやめちゃうの？」と不満そうだったけど、こっちはレンタル状態だったわけで。

替わりの人員やフォーメーションの引継までしてるんだから勘弁してほしい。

一応六道夫人からも、十二分な成果を示してもらったとお褒めの言葉をいただいているので、報酬をいただいてオシマイに出来る状態になったと思う。

そんなわけで、かなり不満げな冥子さんとともに統合理事長室まで出向くと、そこには美神さんと六道夫人が待っていた。

「ご苦労様、横島君」

「ご苦労様、横島君、冥子。」

正直に言おう。

この時間では珍しくなくなったけど、前の時間ではこんな風に劳つてもらったことがなかったの、条件反射的にうれしくなってしまう。

やっぱり俺って根っからの丁稚体質なんだなあ。

そんな風に思ってる俺の横に立ち、美神さんは軽く俺と腕を組んだ。

「じゃ、そろそろウチの横島君を返してもらおうかね？」

「・・・うん、残念だけど、かなしいけど、寂しいけど・・・」

うじうじとしていた冥子さんだったけど、美神さんを見つめて笑った。

「これ以上わがままは言えないもの〜」

だから美神さんは言ってしまった。

「横島君は貸せないけど、遊びに来るぐらいはいつでもいいから……」

それを聞いて冥子さんが、信じられないほど輝いた笑顔をしていたのを見て、美神さん俺を見る。

「……まずい？」

「(きまっています)」

翌日から六道除霊事務所のメンバーが毎日のように美神除霊事務所に遊びに来るといのが恒例行事になった。

口は災いの元とはよく言ったものです、ええ。

### 第三話（後書き）

第三話は、第二話と対みたいなものなので、早々に投稿しました。  
どんなものでしょう？

というか、横島夫妻を出すときって、色々と悩みますよね。  
愛溢れる母親のレベルをどこに持ってゆくかって言うのは、たぶん  
「横島」系SS最大の悩みではないかと考えたりします

次回アップは12/13ごろです

## 第四話（前書き）

第四話です。

ちよつとモメマス。

## 第四話

タマモと共に学ぶのは、一般教育と霊能だった。

拙者は人狼、タマモは先祖帰りで妖狐の力を発現しているということになっているので、いささか浮いている。

中等部で霊力を霊能にまでしている生徒は少なく、逆に霊能に至っているのは名家名門の流れを汲むものばかりなので、派閥が出来るのだけれども、拙者とタマモは全く汲みする相手がいないもので、完全に浮いている状態だった。

まあ、浮いている理由に「美神令子」の世話になっているという事もあるし、今年のGS試験主席の横島忠夫を師事していることもあるだろうし。

タマモの方はもっと簡単で、仲間以外には愛想を持たないので浮いている。

むろん、美神殿や先生と親交が深いことを見せているので、それなりに風当たりが強い。

虐めがあるわけではないけど、仲良く出来かねる、というのが彼女らの話だろう。

しかたあるまい。

そういう人間関係も学ぶものの一つなのだから。

時間をおかず呼び出された。

六道女学院の校門で警備員さんに頭を下げると、事務所に引き込まれた。

ああ、やっぱりまずいだらうなあ、と思ったところ話があるそう

だ。

警備員さんの話では、今回の呼び出しは学年主任からのもので、素行不良・態度不良で停学まで視野に入れていると吹聴しているそうだ。

だが、その事実はないと警備員さんは言う。  
だから自分の妹を信じてほしい、と。

「当たり前です。悪いことをしたらしかられる。悪いことをしていなければしかられない、それだけですよ。」

百万の味方を得た気持ちになって生徒指導室に飛び込んだ瞬間、二十三通りの殺し方を頭に浮かべた。

頬を赤く腫らしているタマモ。

口元から血を流すシロ。

拳を振りあげるジャージ。

きめた、殺す。

そう思っで一歩踏み出したところで、俺の腕が引かれた。  
引いたのは六道夫人。

俺が腕を切る前に一歩前にでた。

「これはなにが起きているの？ 説明なさい」

間延びのない声に、周囲が凍る。

「これはなにが起きているの？ 説明なさい」

全く同じ調子。

だが周囲は背筋を伸ばした。

口々に説明する内容は自己弁護と責任逃れ。



教員が、生徒が、自分は悪くないと言い逃れていた。

「夫人、これ以上臭いところに置いておけません。」

体から漏れそうになる殺気を押しとどめているのに、ジャージが臭い息を吐いた。

「……ガキ、てめえのところのクソ妖怪が……」

素手でアイアンクロー。

こんなバカのために霊能なんか使えるものか。

「……て、てめえ、くちで言われたのに暴力を……」

「言霊つてのをしらねーみたいだな、ジャージ。」

俺はアイアンクローをちぎりはずし、言葉をたたきつけた。

『我は命ず。過去の誇らしき思い出を、笑顔で朗々と自慢げに語れ』

目つぶし寸前で構えられた指から放射された霊力で、ジャージは完全に瞬間催眠に入った。

そこから先はジャージのオンステージ。

生徒を脅して淫行を働いていることや、同僚女性の弱みをネタに金を脅し取っていること、さらには父母に娘の弱みをネタにして金をせびることまでしているというのだ。

これがジャージの「誇らしい」こと。

心底反吐がでる。

「六道夫人、このご縁はこれっきりとなりそうですか？」

「横島君、ぜつたいに何とかするから。お願い、信頼と時間をちよ  
うだい」

シロとタマモを治療符で癒しながら、二人をのぞき込む。  
二人とも苦いながら笑顔。

「学ぶことは苦しいことでござるよ」

「苦しいことこそ学ぶこととおおき、だよね。」

くそ、何もいえない。

「訴訟があつてもかまわない、六道を訴えてくれてもいい。でも、  
お願い、二人をこのまま引き込ませて困い込まないでほしいの」

真剣な目を見た。

たぶん色々と打算はあると思う。

でも、俺は、信じてみることにした。

「タマモ、シロ。おまえ達は、最高の生徒だと思つぞ」

「うん。」

心配性のお兄ちゃんが符を一晩中書いてわたしとシロねえに持た  
せてくれた。

あんなバカは一人しかいないと言つても信じてくれず、念には念  
を入れるのかなんだとか。

お兄ちゃん銘々「ジャージ」は即日懲戒解雇になり、警察に引ッ  
張られていった。

朗々と語った内容は催眠術のせいだ、俺は何もしていないと言いつ張ったそうだが、ジャージが警察に引つ張られたと聞いたとたん、我も我もと被害届けが集まり、余罪は語った内容を越えているらしい。

で、私たちはというと、一転して時の人。

暴力にあつたという事で同情され、親族が一步も引かずに対決した姿で感動されて。

「横島さん、お話よろしくて？」

「犬飼さん、おはなししませんこと？」

もう大人気。

そんな中でもお兄ちゃんの話は盛り上がってしまう。

たとえば、お兄ちゃんの治療符はかなり珍しいらしい。

すでに制作方法すら失伝している古来の呪符らしいのだけれども・  
・  
・

「お兄ちゃん、一晩で作ってたよ？」

「……え？」

呪符を作るのってそう言うものではないらしい。

もつと時間をかけて、時期を選んで、力を込めて、とかなんとか。

「あの言霊も素晴らしかったですわ。」

言霊というよりも「暗示」だってお兄ちゃんは言ってたっけ。

お酒のませて煽っていていい気分させて、秘密をゲロさせたようなものとか言ってた。

「……へえ……。」

ずいぶんと周りの反応がいい感じになってる。

うんうん、これが正しいお兄ちゃんへの反応だよな。

「でもさ、横島さんのお兄さんって、金的だけで勝ち残ったって噂だけど？」

あ、それ私も聞いたけど、美神さんの話だともっとえげつないらしいよ？

「えげつないって？」

「金的をねらっても、実際は霊的な攻撃をしてる、これわかるよね？」

うんうんと頷く周囲。

「で、蹴つてるところって、実は金的以上のまずいところがあるのしってる？」

えーっと首を傾げる周囲の中で、シロだけが真っ白になった。いや、二人ほど思い当たったらしい。

「横島さん、それってまさか・・・」

「うそ、それって反則じゃないの？」

え、なになに、と声を合わせる周囲に私は言う。

「チャクラ」

まあいろいろと説明しなくてもこれだけで全員解るのは助かる。

賛否両論あるけれど、見た目では理解されていた以上に霊的な攻撃と恐ろしいまでの戦略があったことに気づいた周囲はざわついていった。

「つ、つまり、チャクラに霊力を意図的に流して、相手の行動を奪う?」

「そう。お兄ちゃん曰く、殺さないで動けなくする一番楽な方法、っていったわ。」

言うほど簡単ではないし、瞬間的にそんなことが出来るようになるまでどれだけの修練が必要なのか、と喧々囂々。

符術やほかにも霊能があるのに、なんで試験では使わなかったのか、と誰かが聞く。

「そんなの、当たり前でござるよ?」

「・・・なんでよ?」

「自分の手の内を、これからライバルになる相手にすべて晒すわけがないのでござる」

「・・・」

誰もが絶句する。

そして彼女たちが知るお兄ちゃんは、彼女たちが知る以上の力を未だ隠していると言うことなのだから。

瞬間感じた感覚は何だろうか?

疑心暗鬼?

いいや、ちがう。

納得だった。

「・・・」 やつぱり、美神事務所にいる人ですものねえ。「・・・」

やっぱり、こういう評価になるんだなあ、と笑ってしまった。

「そういえば、犬飼さんも美神事務所に……」

「美神殿のお世話になっているでござるよ」

最近では折刀の「八房」を元にした霊刀「房姫」を使って除霊助手をしている。

いわゆる前衛のさらに助手だ。

お兄ちゃんの剣として敵を切りさき、一撃を受けて次につながる。私やシロが前に出ることをひどく嫌うお兄ちゃんだけど、美神さんの言うことも解るので、積極的な反対もしない。

そんな細々とした話の中で、違う気配が現れたことに気づいた。

「ねえ、その治療符見せてくれない？」

「いいですけど、返してくださいね？ 六道夫人」

「……はあ？」「」「」

気づけば女子中学生に埋もれるようにいる六道夫人。  
周囲が驚いた。

「……ほんとうに、すごい出来ねえ。」

横島君が六道との縁を切るなんて言い出せば、冥子だって黙っていない。

令子ちゃんも離れていくだろうし、閥としての格がただ下がりになってしまう。

たかがGS見習いだなんていう声もあるけど、それだけの価値を私はあの少年に感じていた。

ただのGS助手ではすまない価値が、彼にはある。

この治療符一つにとってもそうだ。

たぶんこれは、すでに陰陽寮でも形しか残っていないタイプのものだろう。

これが現役で活動していた時代など、千年の昔どころでは無い筈だ。

が、彼は一晩のウチに書き上げた。

どこからそんな知識が……。

そういえば、彼は令子ちゃんと共に妙神山へ上っていたはず。

もしや……。

「六道夫人、一応、これが見つかったらお兄ちゃんから言われている伝言を伝えることになってるんですが。」

……まずいかしら？

「『製法を教えてもいいですが、絶対に量産できませんよ』とのことですよ。」

くやしいわ、バレバレなのね。

そんな私にそつとささやくタマモちゃん。

「お兄ちゃんは、霊能開花で前世の知識が一部つながったそうです。平安京の陰陽師、魔物と通じて処刑された高嶋、これで通じるなら情報交換しましょう、とのことですよ。」

思わずため息をついてしまった。

六道が陰陽寮の下部組織から独立し、いまでは傘下扱いしている

せいで反りが悪いことを知っていたの言葉なんでしょうね。

「タマモちゃん、わたし、横島君に嫌われてるのかしら？」

「意地悪じゃないと思いますよ？ またとない関係修復の機会ですよ、それ？」

「・・・いいのかしら？」

「私はかまいませんよ。」

「はあ、冥子の件といい、この前の件といい、令子ちゃんの所への負債が大きくなるいっぽうだわあ。」

「紹介してもらった、雪ちゃんと久美ちゃんは優秀だし、成績も回復しまくりだし、事務所の経理までそろそろ黒字転換しそうだし。」

「このうえ、陰陽寮との関係改善の材料までもらっちゃうなんて、どうすれば返せるのかしら。」

「ああ、頭が痛いわ。」

事務所に行くと、なぜかオメカシした美神さん。

「おキヌちゃんもそわそわしてる。」

「なんかあるのかな？」と聞いてみると、なんとタレントがGSの除霊現場を取材にくるとい話らしい。

『（主、それは・・・）』

『（ああ、あれだな）』

もうちょっとと未来の話だと思ってたけど、この時間ではこんな前倒しでくるんだなあ、と感慨深い。

そんなこんなで現れたのは、ご存じ堂本銀一、芸名近畿剛一くん



であった。

わりとミーハーな美神さんとおキ又ちゃんがひとしきり騒いだ後で、俺は苦笑いで銀チャンをみえた。

「あ、あのお、自分になにか・・・？」

「なんだよ、つめてえな。俺らのペガサスは無事か？ 銀チャン」

「・・・！！ よこつち、よこつちかあ！！」

「おいおい、俺は一発でわかったぞ？」

「やかましーわあ！ こんだけ変わってりゃ、わかるもんかあ！！」

軽く殴りあう俺たちに、美神さんたちは呆然。

軽く大阪で同級生だったことを明かす。

「せやけど、びつくりや。よこつちがGSだなんて！」

「こつちもびつくりや、銀チャンが役者でGS役やて？」

「事務所がな、一流の現場みて一流の演技にせなあかん、って無茶いうんや。」

「へたくそに習つと下手になるちゅうやん？ その点うちの美神所長は超一流や！ 直接除霊でいえば、世界有数やで。」

ほー、といたく感心する銀チャン。

「その『直接』ちゅうと？」

「間接、ちゅうのが、いわば呪いとか式神やな。」

「ほうほう、せやったら美神所長はんは？」

「直接悪霊をばしつと倒すんや。ゴーストスイーパーの真骨頂、除霊の花道や」

ほほーと感心したふうに美神さんを見る銀チャン。

かなり照れてるらしく、顔が真っ赤だ。

「超美人で超一流、おいしいなあ、よこっちは」

「まあ、その分命が紙風船やな」

「ははは、芸能界やてそんなもんや。」

「お互い、泥臭い業界やなあ。」

久しぶりの親友との再会に、思わず盛り上がってしまったけど、これから短い時間でGS業を実感してもらわんといかん。そんなわけで、AとEの現場をいろいろとみてもらう話になるらしい。

「さあ、横島君、おキ又ちゃん。しっかりやるわよ!!」

「はい!!」

近畿君が関西圏の出身だとは聞いていたけど、まさか横島君の幼なじみだとは思わなかった。

さらにさりげない宣伝のおかげで、業界関係の依頼も増えそうな予感。

やるわね、横島君！

とっかかりのこの仕事は六道関係だったけど、ここから先は横島君の人脈をフルに使わせてもらうから

てな皮残余はそこそこに。

依頼人の許可が取れた現場では撮影しているけれど、どうにも迫力がないと言うことを言っていた。

さすがにカメラに写るほどの怪異を除霊する現場につれていけないし、と首をひねったところで横島君が再びナイスアシスト。

最近買ったという携帯電話で呼び出したのはタイガー虎吉だった。タイガーの精神波を使って、視覚的な強化を行い、撮影できるようにしよう、というのだ。

さすが我が弟子！

まあ、エミのところにもコネができるのは悔しいけど、このアイディアはこれから使えるネタだ。覚えておこう。

C級の除霊で迫力有る映像となったおかげか、とんとん拍子で仕事が進み、予定よりずいぶん早く仕事を終了した。

最後に除霊担当の私が近畿君にインタビューを受けるというカットが入る。

「GSゆうたら、命がけ仕事やと思うんですが、なんで所長さんみたいな弱い女性が最前線にいるんですか？」

打ち合わせ通りの質問に、私はにっこりほえんだ。

「GSの命は短くはかないものです。一番延びのある、一番力強い時間をすべて使っても届かない高みに有るともいえます。私はそんな高みに届きたい、そう思っています。」

ずっと視線を動かして近畿君をみる。

「あなたも、そうですね？」

「はい！」

特番としてくまれた番組の締めとしては最高だったと思う。

ただ、この後に流れた近畿君の新番組「踊るGS」の番組宣伝の

方が印象に残ったのが悔しい。

「なーなー、よこっち。ドラマのとり、どうやった？」

「せやなあ、GSの考証もええかんじやし女優もきれいやし、ええかんじやん」

「演技みるや、演技！」

「ああ、せやせや、長さんかつこええなあ、演技と練習の鬼や。霊能と芸能、おなじ「能」の職分としちゃあ、みならわんといかんなあ。」

「ちやうちやう、俺や俺の演技みるや！」

「あー、せやかで、近畿君は私生活でも演技してるやろ？ ドラマゆうたかて特別にはなあ？」

「あほいうな！ アイドルゆうんはイメージ勝負やど、私生活演技とか言われたらあがつたりや！」

「ならきくなや！ おまえのアイドル演技にげっぷうでとるんや！」

「いうたな、このヘタレGS！」

「なんやと、いかれアイドル！」

そのままボコボコと殴りあう二人からパンしたカメラの外で俳優碓 長雅さんが渋い顔で番組宣伝をして終わる。

一部近畿ファンには絶大な不評を受けた宣伝だったけど、アイドルドラマには異例の広範囲視聴年齢層を獲得したとして、局長賞を得た番組宣伝になったとか。

このままスカウトとかされるかもしれないわね、横島君。

最近、学校に登校すると、女子から三つの対応をされる。

一つは悪意有る嫌がらせ。近畿ファンだ。

一つはサインなどをねだられる。ミーハーだ。

最後は、除霊現場への興味。まあ、みーはーその2。

机妖怪の愛子はどれでもない。

事務所経営への興味、だった。

その点、あのドラマは結構リアルで、書類をまとめるシーンとか協会と折衝するシーンが結構ある。

さすが綿密に取材しているだけのことはある。

「でも、関西の子って、みんなあんな即興漫才みたいなことができ  
るの？」

「大概、だな。おじいもおばあも皆ノリがいいぜ。」

試しに、カメラ取材でアナウンサーが、大阪市民に向かって「ば  
さー」ってやってみせれば9割が「うわー」とか「やられたー」つ  
て演技する。これマジ。

「すごい土地ね。」

「まあ、テレビもラジオもそういう環境だってだけやな」

けたけたと笑う俺たちだったが、愛子の表情がちょっとだけゆが  
む。

「で、さ。近畿君と幼なじみってほんと？」

たぶん、愛子は誰かに聞いてほしいと願われたんだろう。

まあ、愛子を選んだのは正解だ。

少なくとも、見知らぬ女子に聞かれても答える気はなかったし。

「ああ、大阪で小学校の頃ずっと一緒だった。」

「へ〜。」

あれやこれや、芸能人として問題ない範囲でバクロすると、周囲の女子が聞き耳を立てているのが解る。

えげつない手段やなあ、とはおもつけど、愛子のことを考えると、意地悪もできない。

俺と銀チャンが組んで成し遂げた、タミヤカップ三連覇の話の時点で男子が乱入、大いに盛り上がる。

「じゃあ、おまえが浪速のペガサス!？」

「すげえ!! 近畿つてあのペガサスの孔明つてあの!？」

「やつべ、見る目変わるわ!!」

「おおおおお、燃えてきた! おめーらヒーローじゃねえか!!」

同じ時代に生きてれば、それなりに名前が通ってたけど、あの時代の俺たちは確かに男子のヒーローだった。

「ダテ・ザ・キラートも未だつきあいあるぜ？」

「「「東京代表!!」」「「「「プテラノドンX!」」「「」

大いに盛り上がる男子を、冷やかな目で見る女子だった。

「なんだか可愛いわね、男の子って」

「まあ、いつまでもガキ、が売り文句だよ。」

でもまあ、そのへんを許容してくれる女に男は弱いんだけどねえ。やつぱ、雪乃丞じゃないけど、男って基本的にマザコンなんだからなあ。

「横島さん、おはようございます。」

「横島さん、臨時収入、ありがたかった、肉うまかったんじゃあ・・

「。。。」

「あら、二人とも遅かったわね。横島君より遅いなんて珍しい」

「いえいえ、最近の横島さんの勤勉さをみれば、珍しくないですよ。」

「横島さん、やっぱり横島さんは親友じゃア。」

最近、心霊特集やら靈感もので、霊を撮影可能にできるタイガーは引つ張りだこで、GS協会でも特別免許の発行を検討しているとか。

加えて、銀チャンに「間接GS」の綺麗所を紹介してほしいと言われたので、エミさんを紹介したところ、「横島よくやったワケ！」と大絶賛され、こちらからも感謝・タイガー業界進出許可を得て、三方一両得じょうたいだったりする。

「横島さんが言った売り文句が、かなり気に入ってるらしくて、エミさんもお機嫌だったのじゃ」

「おべんちゃら抜きで真実だろ？」

「ねえ、どんな風に言ったの？」

「ああ、ええつと、『エミさんはランクこそAだけど、呪術に対する正しい評価基準さえあれば「SS」ランクなんて評価をされてもおかしくないぐらいの人』だったかな？」

「。。。うわ、べた褒めですね。」

「そんなにスゴいんだ、エミさん」

#### 第四話（後書き）

やっぱ、コロコロとかで写真つきで乗ったら、時の英雄だよね？>  
よこつち

作中の人物にモデルはいませんが、イメージしている実在の人物はいます。発言も行動も本人を意識できない感じですが、私がそう感じていると言っ流れです。



第五話（前書き）

五話です。

## 第五話

「そうですね、彼女に比肩する呪術師はこれから未来何年生まれな  
いか予想もできません。」

「ちなみに、ピート君の感覚で何年ぶりなの？」

「300年ぶりぐらいでしょうか。」

「さっすがエミさんじゃあ……。」

というわけで、銀チャンの要望するプロで一番あってるのがエミ  
さんでした、と言うわけだ。

で、エミさんを紹介したところ、最近なびきの悪いピートをほお  
っておいて、銀チャンだのキミタクなんかを狙っているとか。

あの視線が怖い、というのは銀チャンの台詞。

「まあ、エミさんも美神さんも超一流だしな。」

苦笑いの俺をみて、三人が同時に肩をすくめた。

「なんだよ、まるでアメリカのスクールドラマみたいなリアクシ  
ョンは？」

「ま、横島君だしね。」「横島さんですしね」「横島さんですから  
ノー」

わかんねーよ……!

「ただいまー。」

「おう、おかえりー」

最近おれのマンション常駐の居候、銀ちゃんがにこやかに手を振っている。

うちに空き部屋があると知った銀ちゃんは、東京の仕事の時に泊まらせてほしいと言ってきた翌日から、空き部屋に「銀ちゃんの部屋」というプレートまでぶら下げている。

まあいいけどな。

タマモも嫌ってないし、というか兄扱いなので我慢することにしてる。

とはいえ、タマモに「ギンにい」と呼ばれて鼻を伸ばしてる写真をネットに流せば、ドンだけの金になるんだらう？ 鼻を伸ばした銀ちゃんアイコラ素材でも売ったるか？

「しっかし、東京に寮はナインか？」

「いやなあ、アイドルの寮って気がぬけんのや。」

やれ先輩には二礼確定とか、大先輩の帰りには列を成して出迎えるとか、靴を磨けとかなんだとか・・・。

「どこの応援団だ？ 地獄のようじゃな。」

「せやろ？ せやから、ここに置いてくれ〜」

「まあええけど、予定ぐらい聞かせろや？ 夕飯の準備かてあるし」

「ええ！？ よこつちがつくるんか？」

「これでも栄養バランス抜群なんやで。」

と言うわけで、早々に晩飯を作るとそれに合わせるようにタマモ帰宅、シロも随行。

「うまうま、うまいやないかー!!」

「うんうん、おにいちゃん言くなったよね。」  
「はぐはぐはぐはぐ、おかわりでござるー！」

まあ、食っててくれや。

じゃ、俺は俺でアルバイトでござい。

今日はシロタマの出番はないので、うちでゆっくりしてゆくはずだ。

「じゃ、いつてくるぞお。」

「・・・おおお、きばりやあ〜」

「「「いつてらっしゃーい」「」」

と言う毎日だとはなしたら、美神さんに笑われた。

横島君らしい、と。

話のはじめはシロが最近うちで夕飯を食べてくるけど、何かあるか、と言う話だった。

まあ美神さんらしい問いかけで、食費が危ないなら出すわよ、と言うことだった。

最近は十二分に仕送りもあるし、バイト代も十分なので結構大丈夫だと笑うと、こつんとはたかれた。

「横島君、あんたのことだから収支内容は食費と家賃タマモのおこずかい程度しか考えてないでしょ？」

「え、あとなにか必要なものってありましたっけ？」

「あなたのおこずかいは？」

「・・・家計費と一緒にですよ？ 無駄遣いできませんって。」

「あー、もう、・・・心眼ー！」

『美神殿、あなたの不満は解るが、無駄ですぞ？』

「もうちょっと教育しなさいってばー！」

『この件については何度もはなしているが、全く理解できない、する様子もない状態では、あきらめるほかない。』

「・・・くう、セクハラ煩惱小僧だったときより数段ましかけど、今の方がムカつくう！！！！！！」

その日の除霊は、珍しく美神さんが大暴走したのだった。

まあ、なんつうか、一皮むけたって感じなわけ。

正直に言つと非常に助かってるし、安心できている。

もちろん、横島君のこと。

GS試験の前後で無茶苦茶変わりすぎだけど、心眼の説明を聞く理解できるし、小竜姫様の説明にも裏付けられている。

最近では背中を預けて戦えていることに気づき、罪悪感にさいなまれている。

処理類もできている、仕事の判断も問題ない。

不足人員の割り切りは見事だし、冥子を教育したその手腕は見事の一言につきる。

・・・これを時給5000円で使い続けることは不可能だ。

いや、どこに引き抜かれてもおかしくない。

正直、六道のおばさまからのラブコールは、日に日に無視できないレベルまで高まっている。

そろそろ、何らかの手段にでないと引っ込みがつかないところまでできている気がする。

「・・・まずは時給を上げること・・・いやいや・・・」

そういえば、横島君の単独仕事の件数が500を越えていることに気づいた。

そうだ、GS免許発給と同時に給与見直し、これだわ。

私は自分の思いつきに満足していた。

でも、ふと気づく。

もし正式免許を発給なんかしたら、私の元からいなくなってしまうのではないかと。

沸き上がる不安は、私の足下から徐々に広がってきていた。

最近、美神さんの落ち着きがない。

仕事は集中しているんだけど、どこことなく意識がそれてる。

事務所にいると顕著で、視線が泳ぎまくってる。

なにがそんなに気になるんだろう、と言つことでおきぬちゃんと共に調べてみると、どうやら俺の出勤中に発生することが解つた。

「（どうしてだと思つ？ 心眼。）」

『（解らぬのか、解らぬのだなあ、お主には）』

「（え、え、え、なんか一目瞭然な話があるとか？）」

『（主よ、それは自分で気づかねばならぬことだ。）』

そうなのか、と腕組みをした。

まず考えよう。

昔の俺とは違い、給料を上げてもらったからといって暗殺を疑うほどバカじゃない。

計算間違いの可能性も考えるけど、あの美神さんがそんな計算ミスをするわけがない。

何かの理由であげたのだろうと解る。

危険なことをさせていたが本人が気づかなかつたのでよし、と思

つたけどさすがに良心がとがめる、とか。

次月の仕事で本当に命の危険があるけど、今のうちにお金を渡しておいて断る道をたつ、とか。

むー、さすが俺、年齢を重ねて推理力の厚みが増したなあ。

『(主、本格的に死んでみるか?)』

「(なつ、なんで心眼!? 俺の推理に穴でもあるのか?)」

『(穴あきまくりだ。よく考えろ、主。おまえの前で落ち着きがなく、何気ない姿を目で追って、声をかけようとしてドモリ、わざわざスキップをとってみたり離れたり。』

「(うん。まさに最近の美神さんだな。)」

『(・・・で、だ。一人の時に謔言のように主の名前をつぶやいたり照れたりしている。どうおもう?)』

「(・・・解析不能)」

『(では、主の名前を呼んでいるところを西条殿で考えろ)』

「(くおおおおおおお!! ゆるせん、西条おおおお!!)」

そうか、そうか、西条めえ・・・

『(では、西条から自分に変えてみる)』

「(・・・理解不能)」

『(だめだな、主、だめだめだ。』

豪雨の中、町中の公園の除霊仕事に来ている。

白いワニの幽霊だとか。

契約納期も近いのでとつとこなそうと思ったのだけど、美神さんが「靈感にさわる」といいたして延期を宣言した。

とはいえ、無駄なお金を払うこともないので、俺とシロでこなす

ことを提案したところ、苦笑で了解してくれた。

仕事自体はかなり簡単にいった。

シロが挑発して池から引きずり出し、そして霊波刀で滅多切りという大人げないやり方だけど、早いに越したことはない。

「先生、やったでござるな！」

「そうだな、よくやったぞ、シロ」

なでてやると気持ちよさそうに目を閉じるシロ。

本当にこいつは犬だなあ。

で、タマモはツンデレ猫。

「・・・さ、そろそろ事務所に戻るぞ。」

「ハイでござる。」

意気揚々と帰ってみると、そこはお祭りでした。

「あああああーーーーーもういやーーーーー!」

絶叫の美神さん。

「おにいちゃんたすけてえーーーー!」

泣き叫ぶタマモ。

「ふぎゃーーーー!」

で、元凶、れいこちゃん。



『(主、これは……)』

「(うわー、そうだった。れいこちゃん到来だ)」

これを機会に美神さんは魔族との戦いの渦の中心であることを自覚させられる。

「あ、横島さはぁー……ん！」

涙目のおキ又ちゃんを撫でつつ、俺はれいこちゃんを片手で抱いた。

「ほらほら、どうしたんだ？ なにが悲しいんだ？ お兄ちゃんに話してみ？」

「ふぎゃー……！！ ママ……！！！」

「そっかそっか、ママがいないのが悲しいのか。」

悲しいよな、寂しいよな、と撫でているうちに泣きやんでゆくれいこちゃん。

「あのね、ママがいなくなっちゃったの。でも、いい子にしてなさっていったの。でもさみしいの。」

「うんうん、さみしいよな。でもいい子なんだよな、れいこちゃん」  
「……うん、れいこは良いこなの」

にこやかにほほえむれいこちゃんを、優しく抱きしめる。

「じゃ、れいこちゃんはママが帰ってくるまで、いい子でいよう。  
……なに、すぐ帰ってくるよ」

「……ほんと？」

「だって、れいこちゃんママは嘘いわないだろ？」



の。」

美神さんとタマモの話聞きつつも、れいこちゃんを撫でる手を止めない。

気持ちよさそうだった表情は、徐々に虚ろになっていつている。

「先生、引き受けるでござる」

「お、頼む」

ゆつくりと優しく受け取ったシロは、ソファーに寝かせて毛布を掛けた。

「・・・なんか、シロねえとお兄ちゃん、息が合ってる」

「まあ、普段から一緒に訓練してるからじゃないか？」

「そうでござるな、共に前衛をしてる故、さほど特別な意味はござらんよ?」

「シロねえ、顔を赤くして言うせりふじゃないと思う。」

「そ、そ、そんなことはないでござるよ?」

まあまあ、と二人を止めてれいこちゃんをゆびさす。

「まあ、助かったわ。できればこっちに泊まってもらえないかしら? さすがにいやな予感しかしないのよ」

・・・さすが美神さんだなあ。

まあ、子供の面倒がつかいから、ということもあるんでしょうけどね。

とはいえ、魔族の襲撃がいつになるかわからないんだから、そのへんは警戒しなけりゃ鳴らないんだけど、美神さん自身はそのことを知らない。

しかし警戒している。

これが一流なんだと感心した。

「わかりました。タマモも良いだろ？」

「うん、いいよ。」

眠っているれいこちゃんの頬をつつきながら微笑むタマモ。

やっぱ、女の子って子供が好きだよな。

絵本にマンガ、テレビゲームにお人形。

さすがに飽きたらしくお外に出たいといい始めた。

「ママ」と「いいこ」を引き合いに出すのはイヤだったので、いろいろと説得していたけど、そろそろ限界っぽい。

「よこちま、よこちまは、れいこのこときらい？」

「そんなことないって。大好き」

「だったら、れいここと〜としてくれゆ？」

「あー、お外にでるのは、お姉ちゃんからだめだっていわれてるんだなー。」

「れいこより、おねえちゃんのことをきくのね？」

うるうる瞳で見上げる姿は、天使のような小悪魔だった。

くっそー、むちゃくちゃ手慣れてやがる。

「れいこちゃんが大好きなことと、お姉ちゃんが外のでないように行ったことは同じなんだよ」

「・・・なんで？」

「俺もお姉ちゃんもれいこちゃんが大好き。だから傷ついてほしく

ないし、怪我してほしくない。だからお外に出ないでほしい。」

「………」

「いっしょだろ？」

「……うん」

幼児とは思えない頭の良さ。

さすが美神さん。

とはいえ、その理論も、退屈という現実には勝てず、十分後に崩壊した。

「ああああー……、やっぱりたいくつー……！」

「だー、早く帰ってきてクレー、美神さはあーん」

俺馬、れいこちゃん騎手のG1レース開催中だった。

ハーピーを封印しどうにか未来に戻った私だったが、そこに広がってる風景を見て脱力した。

幼い令子をあやす少年、幽霊の少女、人狼の少女、妖狐の少女、そして成人した令子。

みんなが笑ってる。

メイド服に着替えさせられて給仕しているハーピーをみながら。

「あら、ママ。遅かったわね」

につこり余裕で微笑む令子。

「まー！ れいこおりこつにしてたのよ？ いーいこ。」

愛らしいままの令子。

少年お膝から降りて、令子は私に抱きついた。

「・・・ねえ、どういうことか教えてもらえる？」

まあ簡単にいえば、小さな令子を誘い出そうとしたところでハーピーは捕縛され、さらには契約書で縛られ、下僕として美神令子除霊事務所に括られてしまったという。

「・・・助けてほしいジャーン」

本気で泣いてるハーピーをみて、笑うしかなかった。

これが美神令子とその仲間の実力。

これならば、来るべき未来にも対抗しうるものだとは確信したのだ。  
った。

「あ、そうそう、落雷がないと移動できないから、ちょっとのあいだお邪魔するわね？」

ハーピーは二度と美神一族及びその一党に関わらないことを契約させるときはなった。

二度と人界なんかこないジャンと大泣きで帰っていったのは印象的だった。

まあ、魔物としては小物なので、いいかなーということだったが、労働賃金ゼロの労働力は結構魅力的だったらしく、美神さんは最後まで反対していた。

まあ、美神さんのお母さん、美智恵さんの説得もあつてときはなつただけど。

そんな大騒ぎもあつて、美智恵さんと小さなれいちゃんを見送つた後、なんとなく虚脱状態になつた俺たち。

そんな俺たちの元へ、助けを求める人が現れた。

その名も六道冥子。

オカルト業界に響きわたる六道の次期党首だつた。

「れーこちゃん、たすけて〜」

また魔物の襲来かと思いきや、なんとお見合い・・・ではなく、決闘だつた。

相手は鬼道という元分家で、事業失敗の責任ではずされたとか。

「・・・わかつた？ 横島君。六道に入るっていうのはこういうことなのよ。」

「・・・ええ、なんつうか、切ない話つすね」

ともあれ、逃げてばかりじゃ意味がないと説得し、決闘会場につれてゆくことになった。

「ま〜、令子ちゃんに忠夫君〜、わざわざありがと〜」

「おお、横島、助かつた。」

六道夫人と雪乃丞が手を振っている。

「所長が負けるわけがねえつてのに、なんで逃げるかねえ？」

「その訳をちゃんと聞いたか？ 冥子ちゃんは、勝つてしまつと、

ま〜くんの夜叉丸を奪うことになる、それがイヤだつていつてたぞ。

」

そう、それが六道冥子の逃げた理由。  
美神令子除霊事務所一同は、その意志を汲みとったうえでここま  
で連れてきたのだ。

「そうだったのか、迂闊だったな。」

普段からその優しさを知っている雪乃丞は、そのことに気づけな  
かった自分を責めているようだった。

しかし、その決闘自体は行われることになったのだが、模擬戦と  
いう形で行うことを提案した。

双方ともに自分の持ち式神の数だけ式神ケント紙を準備して決界  
内で戦わせるといふもの。

ふつつなら一二対一なんて対戦なんか受けない所なんだろうけど、  
よほど自分の自信があるのか、鬼道は受けた。

もちろん結果は鬼道のぼろ負け。

本人は「冥子ちゃんの千倍は努力しているのになぜ」といいてい  
たけど、冥子ちゃんだって努力しているのだ。

だったらその倍率は縮まるし、地力の差が更にでる。  
つまり、自覚と力量差が見極められなかっただけなのだ。

「まあ、所長も横島の特訓を受ける前だったら負けてたかもしれん  
な？」

「そうね、横島君のおかげかしら？」

そんなことないんだけどねえ。

所で……

「久美は？」



雪乃丞が指さす先で、久美に世話されて顔を赤くしている鬼道息子がいた。

「あー、教えないんでいいんですか？」

「ええ〜、恋愛は自由だわ〜」

「……………」

みんなが視線を逸らした。

その後がどうなったかは知らないし知りたくもない。

で、しばらくすぎた後、深夜の電話。

びっくりしてとると、それは冥子さんだった。

またかいな、と呆れたけれど、こんどはマジだった。

内容は原始風水盤のことだった。

雪乃丞が先行し調べていたのだが、さすがに六道事務所単体での活動では扱いきれないと判断し、協力依頼をそこいらじゅうにしているという。

現在の所、ピート・エミさん・タイガーあたりの協力を得られているそうだが、神父は現在海外での仕事で連絡が取れないらしい。電話を切った後、即時に美神さんから電話があり、香港行きが決定したと連絡があった。

「冥子さんから直接電話がありました。」

「……………わかったわ。パスポートはあるわね？」

「はい、タマモの分もあります。」

「そうね、シロはないから動物検疫コースで・・・」

「ひどいぞござる!!」

「しかたないでしょ!?!」

とはいえ一人でも戦力がほしい今、構ってられない。

「カオスのじいさんにも声をかけましょう」

「・・・そうね、ああいう異常人は異常事態に強いわ。」

「報酬はどうしましょう?」

「とりあえず、横島君、家賃を一部立て替えてあげて。お金は絶対六道から引き出すから」

「了解す」

そんなこんなで極楽部隊は一路香港へ向かった。

「小僧、本当に助かった・・・。」

「横島・さん、感謝します。」

何度目かになる感謝を遮って、作戦会議開始だった。

合流した六道事務所所員は、所長冥子さん、雪乃丞、久美、そして鬼道息子だった。

どうも、久美が籠絡中らしい。

聞こえない聞こえない・・・。

まあ、それはさておき、原始風水盤の場所、ルートまで確定しているのだが、兵力不足ということらしい。

「助かったぜ、横島。カオスジーさんレベルの頭脳がいると話が早いぜ」

デジタルカメラで撮影した原始風随盤の構成をみてカオスは「ふむ、香港中心に半径二千キロが魔界になるのお。」とかのたまわる。

## 第五話（後書き）

実のところ、銀ちゃんは結構好きです。

そんなわけで、通い妻生活をしてもらおうと思っ  
ていますがBL要素はありませんw

とりあえず、うちの美神はかわいい女にする予定です。

次回更新は12/27です

## 第六話（前書き）

第六話です

カオスが頼りになります W

## 第六話

あまりの事態に息をのむ俺たちだったけど、カオスの爺さんは不敵に微笑んだ。

「ふむ、ここ百年ぶりに血肉がわき踊るわ」

なんつうか、ここまで頼りに感じるカオスの爺さんを始めてみた俺たちだった。

雪乃丞と冥子ちゃんなどの六道事務所が本命ルート。

美神さんとシロタマモが陽道ルート。

で、残りが更に遊兵として大暴れ。

ということ、風水盤の地上部分の屋敷をなぎ払っているんだけど、これが結構簡単。

ばらばらにして火を放つただけだし。

どんなに結界で強化しても、両手の手の内で構える「破・壊」の文珠の前には塵に等しいのです。

ピートも随分と感心していたが、突如飛んできた攻撃に当たるほど柔ではなかった。

「……やってくれたじゃないか、虫ども!!」

現れたのはメドーサ。

雨のように降り注ぐ霊波砲の中を、サイキックシールドで逃げ延びる俺、霧になって逃げるピート、夜叉丸とともに引く鬼道、がんが当たっているが耐えるタイガー。



「な、なにが起きたんですか？」

「ああ、なんか集中する技を使いそうだったんで、ちょっと罫を仕掛けてみた」

「やるわね、さすが令子の弟子なワケ！」

鬼気迫る形相のメドーサだったが、さすがにプロ。

現状を素早く計算し、何もいわずにその場を去った。

「やったな、タイガー！」

「おいしいところは横島さんにもっていかれたのですジャー」

「馬鹿いうなって、おまえの幻覚があつてこそその不意打ちだ。」

「そうですね、そうじゃなくちゃ、あの魔族に打ち勝てるはずがありません。」

「・・・ありがとうございますジャ」

「さて、青春ごっこはいいから、そろそろ応援に行くワケ」

エミさんの言葉に頷いた俺たちは、凧払った洋館の基礎から地下への道を見つけた。

地下は大詰め、俺達の応援は千両役者到来という状況だった。

原始風水盤が起動され、魔界化が始まった瞬間に、俺たちが制御端末の背後から現れて、見た目小僧を蹴りとばしたから。

「・・・くはあ！！！！」

「いいぞ、小僧！！！！」





つつか、妙神山のあれか！？  
なら……

俺は手元へ文珠を呼び出し、「解・析」をした。

「美神さん！！ そいつの本体は、ケツのポケットに入ってる筒の中です！！」

「な、なぜ！？」

驚きのデミアンをよそに、全員の攻撃が集中した。

光が収まると、そこには砕け散った肉の破片が散らばり、透明な筒も割れて残骸があるだけだった。

とりあえず、事件解決かな？

久しぶりに横島君の「靈感がささやく」に助けられた。

地力を延ばし、危なげがなくなったが故に出番が少なくなった「心眼」だが、普段から細かに会話しているらしい。

そんな横島君だから、地上でメドーサを追い返したと聞いても嘘だとは思わなかった。

「とはいえ、あの術はなんだたんでしょうねえ？」

六道の好意で、二日ほど香港観光をしている中で、ピートが横島君に聞いてみた。

なんでも、直接撤退まで導いた一手前に、イヤな予感がしたのでメドーサ周辺にサイキックソーサーを配置したそうさ。

イヤな予感あたり、何か術をしたらしいのだが、ソーサーの爆発で負傷したメドーサは撤退を決めたらしい。

「もしかして、超加速じゃないの？」  
「・・・あ。」

横島君も目の当たりにしているし、韋駄天を身に宿したときに実感している超高速戦闘術だ。

それを出だして撃退するのだから、たいしたものだ。  
あれは発動した瞬間に負けが決まってしまう、そういうものだったから。

「うっわ、あぶねー。心眼のおかげだぜ」

『主、それは自分をほめているのと同じだぞ？』

「いいや、おまえのおかげだし、みんなのおかげだ」

最近では常態化している謙虚モード。

「でも、横島。おまえはかなりがんばったワケ。」

「ありがとうございます。」

にこやかな笑みに、エミですら見とれた。  
つつか、ピート、なぜ赤くなる!?

急遽訪れた香港の休日。

私たちは十分に羽を伸ばした。

・・・はずだった。

「令子ちゃん、エミちゃん、仕事てつだってえ」

残りの時間が映画撮影の特撮スタッフになってしまったのは泣ける話だった。

正確に言つと「踊るGS香港スペシャル」。

「いやー助かったで、よこっち！ おまえらが香港にいてくれてて  
！」

だれか、六道夫人を何とかして。

残りの時間とかいつてたけど、滞在は二日延長の上、スタントは  
やらされるわ、着ぐるみは着せられるわ、最後にゃ顔出しまでさせ  
られた。

ほんとうにテレビってひどい。

まあ、番組宣伝で顔出ししてるからいいんだけどね。  
で、で。

前回の味を占めたプロデューサーとかいう名の中間管理職が「  
また」お願いします、とかいつてきた。

もちろん、美神さんは「GO」。  
ギヤラにつられたんだろっちなあ。

まあ、カメラの前で銀ちゃんと遊んでりゃいいだけなので、諦め  
ただ。

とはいえ、今度もまた女子から総スカンをくらんやらなあ。  
ああ、気が重い。

なんとというか、息子はなにをしているんだろっか？  
本人曰く「GS」になったといっていたし、免許も見せられた。  
しかし、だ。

手元にくる情報は怪しい事この上ないものばかりだった。

たとえば、オカルトの総元締め六道家のオカルトコンサルタントをしているとか、古代陰陽道の呪符開発をしているとか、美神令子事務所の切り札とか、最近では幼なじみに銀ちゃんと東京で芸能活動をしているという話まである。

銀ちゃんは今をときめくアイドルとして売り出し中で、「踊るGS」は国外放映されるほどの人気だった。

ナルニアにもその波がきて、先日第一回が放映されたのだが、その番組宣伝に息子が写っていたのだ。

それもまるで吉本のコンビのように。

またそれが、泣けるほど似合っていた。

本業はそつちやる、と旦那と一緒に突っ込みを入れてしまったほどだった。

いや、わかってる。

細かな報告は本人から聞いていないが、引越した後に銀ちゃんと再会しか事や、アパートの一室に間借りしてることもつかんでいるから。

ただ、芸能活動はないだろお？ 忠夫。

「百合子、百合子、これみてみて」

久しく早く帰ってきた旦那が見せたのは、日本の週刊誌のページ。そこには香港ロケ特集という内容で、取材されている息子の姿があった。

『近畿君の親友：Y君

大阪在住時の親友で、初恋の人が近畿君と同じ。さすがに近畿君相手じゃかてんわ、と明るく笑う好青年。GSの研修でたまたま香港にきていたところで再会し、撮影協力を申し出てくれた』

何か引つかかるところがあつたので、調べさせると、恐ろしいことがわかつた。

この研修というのは表向きで、実際は中国政府が絶対に漏らさないという機密レベルのオカルト事件が発せしていたのだ。

詳細は不明だが、国家警察や人民解放軍が師団単位で投入されるほどの事件だつたことが伺いしれる。

が、投入されたのはわずか十名弱。

どんな狂気かと思つたが、黒崎君はこう纏めていた。

『最高にして最良の最少人数』と。

資格試験に受かつたばかりの息子のどこをつつけばそんな話になるのかと、不満を持って別の報告書を読むと、その事実がしれた。

現在日本に登録されているGSでもっとも多いのはDとEクラスだつた。

そして次に多いのは「B」クラス。

で、Aクラスは三十人を下回り、Sクラスに至っては現役が二人しかない。

つまり、事件投入できるだけのレベルに達した人間が少ないのだ。息子は前に「事件が大きくなると知り合いばかり集まる」と笑っていたが、逆に言えば知り合いになつてしまふほど選択肢がないともいえるのだ。

そこで注目されるのが息子だつた。

現在は見習いのEクラスだが、開業許可を出されれば確実に「Bクラス」への昇格が約束されているという。

すでに六道家からは推薦があり、京都陰陽寮からも推薦＋ラボコイルがきているとか。

確かに育てた。

手塩にかけて、全力を込めた。

一時期は随分と圧力をかけすぎて、自分というものに全く自信のない子供に育ったことを後悔したこともあるけれど、成人するまでに矯正できればよいとまで思っていた。

が、息子は変わった。

GSという危険な職場で生き抜き、人間関係にもまれ、人と出会いは分かれ、そして涙に泣きぬれて。

そんな息子だから幸せになってくれればいいとだけ思っているのに、なんだろう、この迷走ぶりは。

ちよつと一括した方がいいのだろうか？

今回は好評だったらしい。

「近畿君、台本忘れちゃってかわいいー」  
だそうだ。

まあ、凶信者はどこにでもいるので、それなりに毎日呪われてるけど。

半ば実体化したのろい、すげえ、とか感心したら実は銀チャンのストーリーだったのは笑える。

「わらえんわ！！ 見たことも聞いたこともない女が、寝室におるんやど！！」

どうもこれが寮に行きたくない理由の真実らしい。

じゃあ、とお手製の護符を持たせた。

「これなんや？」

「ん？ これは、俺の自作の護符じゃ。ストーリー怨霊を使役できんかなーと」

「使役つてなんや？」

「まあ、いうことを聞くペットやな」

「よこつち、そりゃ不気味やで。」  
「まあまあ、成功すればおもしろいやろ？」  
「おもしろいことあるかあ！！！！！」

とか何とかいつていた銀ちゃんだったけど、式神化に成功した。  
括って出来たのは白猫。

括った対象はストークレベルのファン怨念。  
形になるとは思ってたけど、結構きれいになったものだと感心してしまった。

本当は霊力が必要なんだけど、力の源はファンの「気持ち」なので、白猫が可愛ければファンの気持ちが離れていないという証拠になるわけだ。

かなり解りやすい人気のバロメーターだと思う。

最初は不気味がつていた銀ちゃんだったけど、白猫を通してファンを慰撫するという技が使えると知ると無茶苦茶嬉しがった。

「とはいえ、元はストーカーラブなのできーつけやあ。」

「いやなことを思い出させるなや・・・」

結構うまくできたのもう一つ作って六道婦人に見せに行ったら、これ以上作らないでほしいと懇願された。

これほどうまくいつてるので不満を込めた疑問と返すと悲しそうに顔をされた。

よくよく聞いてみると、妖怪や怪異を呪符で括る手法は何百年単位で失われているため、未だ違法研究がされている分野なのだそう  
だ。

で、なぜ違法かといえば、この呪法が完成安定してしまうと妖怪怪異の違法売買がまかり通ってしまうからだ。

思わずぞつとした。



なにも考えずなんてものをひっぱりだしてきたんだろう、と。

六道婦人は、目の前でその呪符を燃やした。

それほど有ってはいけないものなのだという。

「横島君、あなたの知識は恐ろしいほど深いわ。それは混沌とした過去ではふつつでも、今の世にはあわないものもあるの。もっと勉強して、よく考えてちょうだい」

いつもの間延びした口調だったが、そう聞こえなかった。

この日初めて俺は六道夫人と正面から向き直ったのかもしれない。

「それより、これのことがききたいの」

それは簡易式神「ファンネルA」と「ファンネルB」のプランだった。

ファンネルAは半自立式で、指定座標範囲を自動移動しつつ目標攻撃するもの。

ファンネルBは全手動式で、範囲指定も攻撃指定もないけど、自由度が格段だ。

これを混在させて運用するのがファンネルABの最終目標とした企画だ。

「えーっと、初見だったら「A」だけで十分ですけど、量産するとなるといろんなひとが使いますよね？ そうなると半自立だけでは対抗策が生まれてしますので、その対策が「B」です。」

「あら〜？ じゃあ、一般販売は「A」だけにして、身内販売は「B」を混ぜるでもいいのかしら〜？」

「そうっすね、犯罪者や犯罪者予備軍に「B」を使われると結構つらいっすけど、でも、どういじっても「簡易式神」っすから、きよ

うどもそこそこつすよ?。」

「そうだったわねえ。でも、少し強力すぎるから、弱くしてから使ってみるわあ。」

うんうんと頷く六道夫人。

はじめ、というか、最近まで陰謀や政治闘争の人だと思っていたんだけど、実際につきあってみると「面倒見」のよい人だと感じる。もちろん、そう思わせているという面もあるけど、それ以上に、身内を守ることに神経をとがらせている人なんだと思った。

その身内が、「自分の娘」「自分の役に立つ人間」という今一なカテゴリーがあるのだろうけど。

「・・・ありがとうね、忠夫君。忠夫君にはいろいろな迷惑をかけてるのに、こんなに良くしてもらって。おばさん、どうやって恩を返していいか解らないくらいだわ。」

気持ちしょんぼりとした六道夫人。

「なに言ってるんですか。符や術のことを教えてくれているじゃないですか。俺なんか、なにも解らないんですから、そのへんの常識を教えてくれるだけで助かってますよ?。」

「それは、令子ちゃんのお仕事よ?。」

「はっはっは。」

現世利益な美神さんに、現場以外のなにを教えろと?

まあ、そんなことを言葉には出しませんが。

『(あんまり優しくするとつけあがるぞ、こつこつタイプは)』  
「(有る程度、恩を売っておきたい相手だろ?)」

ともあれ、制作監修に名前を乗せないことで話を通して、利益配分なんかは全部任せることにした。

非常に困った顔をしていたけど、その辺は大人として理性的に振る舞ってもらうほかない。

実に平和に六道邸を辞した俺だったけど、そこまで平和で終わる話ではなかった。

「あ~~~~、忠夫くん~~~~、うちまで来たのに、なんで冥子に声をかけてくれないのかなあ」

ちよっとお怒り気味の冥子さん登場。

その背後にはニヤリと笑う雪乃丞とニッコリ顔の久美さん。

六道夫人は「あちゃ」と言う顔。

「あー、ごめんなさい。この後の仕事があるので、時間がとれないんです。だから声をかけると逆に迷惑かと・・・」

「そ〜れ〜でも、声をかけてほしかった」

ぶんぶんと怒る冥子さんに平謝りして、今度除霊におつきあいするという約束をさせられてしまった。

「最近は何失敗無いつて聞いてますけど？」

「・・・忠夫君はわかってないわ」

「忠夫くん、鈍い」

まあ、それはさておき、試作品の「A B」を試してみようと言っ話になった。

もちろん相手は雪乃丞。

「A」は最初手こずったけど、「みえる」「そこだ!!」「とかいって、のりのりで反撃を始めた。

やっぱなー、と思いつつ「B」を投入した瞬間余裕がなくなった。最後にはスタボロになる雪乃丞。が、目は爛々としていた。

「所長、これは最高の訓練になる！！」

さすが戦闘民族、バトルモンガーの感覚は違う。

「そうねー、久美ちゃんに使ってもらえば、いろいろと使い分けが出来るんわねえ」

よしよし、そこに目を付けてくれるとありがたい。

「お母様、試作品の試験運用、うちでやっちゃだめ？」

「そうね、お願いしようかしら？」

「じゃ、こっちは「B」だけ借りてっていいですか？ いろいろと訓練になりますんで」

「そうね、」「B」は精密な意識の訓練になりそうね」

そんなわけで、試作品を各持ったの解散になった。

事務所に帰って「B」の話になった。

そりゃ面白そうだと美神さんが操ると、そりゃーもう、精密に華麗に動くものだから、おキヌちゃんと二人で感心してしまった。

「ん、これ、三つぐらいを意識外で制御するのが効率的ね。ふつうなら攻撃補助で一つ、攻防一体で二つ、いろいろ考えて三つってところね。」

さすが超一流。

一応、ほぼ自立している「A」が有ると聞いてなるほど笑った。

「じゃあ、「A」の群の中に「B」を混ぜるのね？」

「うわ、さすが美神さん、即答ですね」

「そりゃ、解るわよ。そうされれば、私だっていやな相手なもの」

美神さんの評価は結構高いものだった。

少なくとも「A」なら自動防御に使えるし、「B」だけでも学生の訓練につかえるというものだった。

## 第六話（後書き）

取り合えず、オリジナルアイテムの出現です。

実際は、戻ってくる前によこつちがカオスと共に作ったけど、イマイチ上手くいかなかったものがアイデアの元になっているという設定です。

次回更新は12/31です。

第七話（前書き）

連日アップデート、第一日目です！

## 第七話

「ある程度靈力に余力がある人だったら、「A」を前衛替わりにすればいいし、エミなんかスゴくほしがるんじゃないかしら？」

俺曰くの「間接」の人ならほしいだろうという美神さん。  
なるほどなあ、と頷いた。

「でも、横島君も「こんな」ものを良く思いつくわね」

「あははは、昔から小細工は大好きなんですよ。」

『主、これは小細工と言うよりも罠のたぐいだな』

「あら、いいじゃない。実力が足りなかったり相手が強大だったりしたときは、その差を何かで埋めないといけないものよ。卑怯だったり罠だたりするのは仕方ないでしょ？」

『それは理解している、美神殿。正面からとか正々堂々とか、こだわっているのは軀に変わるだけだからな』

元は小竜姫さまの竜気だったのに、ずいぶんと事務所のやり方に染まってきたなあ。

むろん、正攻法は大切だけど、それ以上に安全な裏技があるならそっちの方がいい。

身内を危険にさらす必要なんか無いのだから。

「じゃあ、横島君。ファンネルを装備しつつ前衛で、私が中衛ってことでいいわね？」

「そうっすね、ソーサーだすより靈力少ないっすから、最善だと思いますよ。」

そんなわけで、俺たちの新フォーメーションが決まった。



「こんなもの」よばわりした「ファンネル」だったけど、これが程良く使える。

浮遊霊が集団化する寸前なんかには非常に使い勝手が良く、雑魚の迎撃を任せて切り込むことが可能だった。

「A」を借りて二つほど浮かせていたところ、簡単な結界替わりにもなることがわかり、小細工にも向いている。

なんともウチ向きのアイテムだ。

「ファンネル、簡易結界」

『らーさー』

本当に、小細工好きよねえ、横島君。

迎撃機能を術の展開に変えたり、術の展開と迎撃の切り替え機能を付けたり、「サナダ」君って呼ぼうかしら。

「美神さん、準備OKです。」

ファンネルBを装備した横島君と、ファンネルCを装備したおキ又ちゃんもやってきた。

ファンネルCは、横島君の霊力をあらかじめチャージした結界専用ファンネルで、迎撃機能はないけど、私の神通棍を耐える力を持つてる。

現場での警戒を強めるためのものとして、普段はおキ又ちゃん専用、依頼人が立ち会うときにはそのときにも、とかなり便利。

Bランクまでの仕事なら十分に使える。

「じゃ、いくわよ!?!」

「「はい!!」」

やべえ、使える。

つつか、つええ。

つつか、燃える!!

横島が持ってきた「ファンネル」は、久美専用装備かと思いきや、  
霊力の訓練にも戦闘訓練にも使える万能ナイフのような道具だった。  
防御力や現場の危険さなんかは体感できないが、それ以外の早さ・  
機敏さ・予想外の事態への対処を考えれば、これはすごい訓練にな  
る。

所長と組んで、力強さばかりが「力」じゃないことを学んだ俺は、  
術の制度や密度、技術の向上を念頭に置くように訓練してきたが、  
この「ファンネル」はその指針と補助にもってこいだった。

「ゆつきーが、自分だけで訓練してくれて助かるわあ」

「そうね、あれね、ネズミの運動器具」

「あ、解りますわ、所長」

やかましい!!

「でも、令子ちゃんも使ってるって言うってたわ。」

「あら？ 美神さんには必要ないでしょ？」

「乱戦に『A』が便利って言うってたわ。」

「つまり、雪乃丞とは逆ね。」

自分を攻撃させるのではなく、敵を攻撃させる、というわけか。

雑魚を任せるといふのは良いかもしれない。  
本命前に消耗しても意味はない。  
うーん流石美神の旦那だな。

「でも、もうちょっと靈力消費を落とさないと、使いものにならないって言うてたわ。」

「あら？ 美神さんでも辛いのかしら？」

「いいえ、落とさないと、売れないって。」

「ああ、常人に扱えないって事かしら？」

つつことは、常にこれを装備して、靈力を使っていれば、底上げになるな……。

「はあ、本当に訓練バカね」

「やかましい!!」

よし、これで靈力の底上げをして、横島に勝つ!!

美神さんの機嫌がいいのは良いことだ。

事務仕事をしているときの美神さんは、たいがい機嫌が悪かったけど、最近は非常に機嫌がいい。

主力消耗品だった「神通棍」の消費が少ないことが上機嫌の近因だろうと思う。

遠因はやっぱり冥子さんが遊びに来てても被害がなくなっただこと、かな？

毎日のように遊びに来ていた冥子さんも、自分の事務所が忙しくなってタマにしか遊びに来なくなり、遊びに来ててもぶつつんしないともなれば、ぶつつの友人関係に出来るわけで。

仕事が順調なエミさんともギスギスしていないし、良いことずくめだった。

そんな話を学校でしていると、教師登場。

「おおおい、除霊委員、ちょっときてくれ」

「……ばったり」

なんじゃそりゃ、と言うと、俺の机である「愛子」が苦笑い。

机妖怪愛子は俺たちがGS免許取得と同時に観念して正体を現しつつも、学校に受け入れられた。

一応俺が保護している形にしている保護妖怪でもある。

「まあ、いいじゃない？ 部活や委員会活動って青春ってかんじだし」

この青春を体感したかった愛子は、いろんな時代の生徒を取り込んでいたのだが、その不毛さを感じて各時代へ返したそう。

それってスゴいよな。

と思うけど、その辺はまあおいておこう。

学校内の除霊って結構多いそう。

予算がなくて放置されたり市販の除霊グッズに頼っているとか。

ただ、この学校にはGS免許を持った人間が三人もいるともなれば話は変わる。

委員会活動とか言うことにしてやすく使ってやろうということらしい。

まったく、セコイ。

ちよつとム力ついたので、いちおう規定やら規約やらを盾に断ろうかと思っただけ、一応美神さんに一報入れてみた。

「・・・引き受けときなさい。」

え、金になりませんよ？

「でもね、一般学校に、ピートやタイガーの様な存在の受け皿になる土壌になるわ」

ガツンと殴られたかのような衝撃を覚えた。  
そして俺は受け入れるこそにした。

学校霊との仕事は、主に共存を目的とした説得だった。  
基本的に昼間に出てなければ無視、という方向性だから。

それでも昼間に出てくる奴らにいたい目を合わせる、というのが  
除霊委員の役目といえた。

「つつことは、愛子は学校霊の生徒会長か？」

「・・・それよ!!!」

愛子は早速「学校霊生徒会長」の腕章を作り、活発な活動を開始した。

もちろん、俺たちも引きづられて。

その活動のおかげか、構内で騒ぎを起こす学校霊が減ったのだが、  
変な話まで舞い込むようになった。

ウチの学校に学校霊が集まってきたというのだ。

その話を持ってきたのは、踊り場の鏡の鏡子ちゃん。

調べてみると、すでに全校生徒数より多い数の学校霊が住み着いていることが解った。

相手もわかることなので、一つ一つ聞いてみると・・・。

「学校霊が治めているきいて」

「生徒会長が学校霊だと聞いて」

「きわめてすみよい地場なので」

とかなんとか……。

「ああ、たしかに居心地いいですね。」

というのはピートの話。

つつか、おまえ学校霊かよ。

無限美形とかそんな名前なら呪えるなあ。

思わず自分のせいだと自責にかられる愛子だったけど、逆転ホームランをかましとく。

「だったらさ、夜登校、朝下校、学校霊用学校ってのはどうだ？」

「……それだ!!!!!!」

というわけで、学校霊を学校生徒霊として管理するという世にも珍しい学校が現れた。

これにより、学校霊風紀委員、学校霊生徒会などが発足し、学校霊による「学校」の霊的保全が強固になったのだった。

「（まえにこんな事無かったよな？）」

「（仕方あるまい。主がここまで学校に来ていること事態無かったのだから）」

「（なるほどなあ……）」

最近休まずに学校に来ていたのだけれども、ちょっと休まなければならなくなった。

ICPO国際オカルトGメンからの捜査協力依頼が美神さんの所にきたからだ。

正確に言うと、美神さんの所に来て、そのまま俺の所にスルーパスしたからだ。

「UKなんて遠いところ、いやよ。」

という女王様発言の元、俺の派遣が決まったわけだ。

しても、Eランク派遣なんて事務所の恥でしょ、といったところ、ニッコリほほえんで書類を渡した。

そこには正式なGS免許の交付許可証が記載されていて、ランクはBとなっていた。

「・・・え？」

「もっと早くに渡してもよかったんだけど、あまり早すぎると協会もうるさいのよ」

苦笑いの美神さん。

「所属所員としての契約とか給料とかのはなしは、今回の派遣実績をみてはなしましょう。いいかしら？」

「はい!!」

俺は無茶苦茶感動していた。

前の時間では、成人しても丁稚扱いだったけど、今は違う、と。

で、UKヒースロー空港。

なぜか俺の両脇にはシロタマ。

「うっ、緊張するでござるなあ〜」

「・・・シロねえ、へんなにおいがする・・・。」

シロの直接的な保護者は美神さんだけど、連携は俺のほうだとれているし、タマモを動かせるのは俺だけ。このへんも捜査協力人員としてピックアップされた部分らしい。

で、この二人が必要な事というところ・・・。

「日本の式神使いだね？」

「違います」

「では、犬神使いかな？」

「もっとちがいます」

「でも、お兄ちゃんはお兄ちゃん、私たちのテイマーって感じだし」

「先生のお使いなら喜んでやるでござるよ?。」

「・・・うんうん、このとおり、大人気」

ニッコリほほえむロンゲ青年こそ、今回の依頼元、ICPOU  
Kの西条さん。

「だー、かんべんしてくださいよ」

「はっはっは、すまんね。令子ちゃんからいじりがあるときいていたものでね」

「だあ、あのひとはもう、たまんねえなあ・・・。」

前の時は寄ると触ると喧嘩していた気がするけど、悪感情がない



と、まるで友人のように感じる空気だった。  
たぶん、前世での付き合いが関係しているんだろう。

軽い会話とともに、本部ビルへと案内される途中のことだった。

ーゾクッ

「(心眼……!!)」

『(主……!!)』

「おにいちゃん!」「先生!」

車を止めて外に駆け出す。

「横島君!」

「西条さん、出ましたよ!」

今回の捜査対象は現代によみがえった連続殺人犯、「ジャック・ザ・リパー」。

手口とやり口が全く一緒な事から、オカルト犯罪と分類されたものの、かなり強固な幻術と穩行をしているという情報から、捜査と言うよりも「狩り」に向いている二人とその保護者が呼ばれたのだ。

この感覚が犯人かは分からない。

でも、このいやな感じは覚えがある!!

目の前の二人を先行させて、おれも全力で追ったが、追いついたのは二分後だった。

すでに女性をかばうタマモと靈波刀を打ち合うシロがいた。

「ファンネル、迎撃モード!」

『らーさー』

「タマモ後退、シロあわせる!!」

「了解!!」

俺たち二人の霊波刀を前にしても怯まず、ぶんぶんとナイフを振り回す犯人。

打ち合いながら壁際に包囲する。

『・・・主、霊視だ』

反射的に視覚を霊視に切り替えると、おかしな事に気づく。  
犯人の体があんなに動いているのに、霊核よりもナイフの方が活性化しているのだ。

・・・あれ、どこかでみたことある、ぞ？

あときは霊視してなかったけど・・・。

「あ、シメサバ丸か!!」

『なんだ、それは?』

俺は切りあいながら、心眼へ妖刀シメサバ丸の事を語る。

『ならば、叩き折るなり滅するなりすれば・・・。』

「んー、でも、もう少しいやな感じがするんだ。」

『ならば「解・析」すればよからう』

「・・・そうすつか。」

いまだ西条さんは追いついてきていないので、俺はストックから二つの文殊を呼び出して文字を込める。

汗だくになって追いつきつつ、周囲封鎖を開始する。

犬神二人の活躍もさることながら、彼、横島忠夫の動きは一線を越えていた。

数ヶ月前までただの荷物運びだったというが、神族にその才能を見いだされ、直弟子状態で教えを受けたという。

剣技は我流ながら無理が無く、霊能は冴え渡っている。

霊力自体は多分僕より少しうえ程度だろう。

いや、彼の年齢を考えれば、数段上に成長する。

この才能を民間GSに委ねていていいのだろうか？

制度的な立ち後れでオカルトGメンが存在しない日本では、どうしても能力の高に人間ほど民間GSになる流れだが、能力が高く意識が高い人間ほど、公にその能力を使いべきではないだろうか？

そういう意味では、この犬神チームは公に属すべきチームといえる。

「西条さんっ、包囲を広げて!!」

意図は分からない。

しかし僕は指示した。

「包囲広げる!!」「はっ!!」

縮めていた包囲を広げると、目に見えて犯人の動きが悪くなる。  
そんな僕の所に被害差の女性を連れたタマモくんが現れた。

「西条さん、あれは切りつけたものから霊気や生命力を吸って活動している妖刀の一種よ」

「・・・そうだったのか！！ だからあれだけ犯人を攻撃しても逃げていたのか・・・」

何という迂闊。

やはり、捜査対面マニュアルに霊視は必須だった。

「周りからくる霊能を切りつけて補給していたみたい」

「それで包囲を広げたとたん、いきだえてるんだね」

すばらしい状況判断だ。

さすが令子ちゃんのお墨付きだ。

「つまり、西条先輩が包囲したせいで、あいてに息をつかせたということですか？」

被害者女性をよくみれば、見知った女性だった。

「・・・魔鈴くん。」

僕が声をかけたけど、彼女の視線は現場に向いていた。

「それにしても、彼、スゴいですね・・・。」

その一言とともに、彼の霊刀が犯人の手を切り飛ばし、ナイフを

壁に貼り付けた。

「シロ、封印符！」

「はい、先生！！」

二枚の封印符で包み込まれたそれを、彼は小さな吸引符で吸う。

「先生、次が準備できたでござる！」

「よし、大で吸え」

「はい！！」

なるほど多重吸引か。

それほどに危険だという事だろう。

うん、彼はやはりできる。

うん。

犯人の体は既に死体だった。

心眼もそれは解っていたという。

来英一日目で目的を果たしてしまった俺たちは、妙に西条さんに気に入られてしまい、あつちこつちにつれ回されてしまった。

西条さんが夜のデートをしないで俺たちを案内するというのだからよっぽどの事だ。

その間、なぜか被害者女性、いや魔鈴さんがいっしょに観光してくれたのはうれしかった。

やっぱり射程内の女性がいた方がうれしいに決まっているから。

そんなこんなでUK観光も終わり、日本へ帰る日となった。

「また何かあったら、ぜひとも協力してくれたまえ、横島君」

「はい、西条さん。雇い主を是非説得して呼んでください」

がっしりと握手をする俺たち。

「近々日本に帰りますので、そのときにまたあいましょう、横島君」

「はい、魔鈴さん。是非とも力を使わせてください」

ぎゅっと握手する二人。

まるで嘘のような人間関係に思わず苦笑いの俺だった。

「西条先輩、日本への勤務のことはいわなくていいんですか？」

私の言葉に彼は苦笑い。

「それは彼から聞かれたよ。『いつ日本に勤務するんですか？』ってね。」

「……？ 私はいつてませんよ？」

「かなり論理立てて理由を考えた上での質問だったよ。」

「本当に、優秀なんですな、彼。」

「なんとも怖いぐらいだけどね。」

その言葉を聞いて私は笑った。

彼自身はそんなふうに微塵にも感じていないはずだから。

ここ何日か話していて気づくのは、彼自身は自分のことを全く評価しておらず、自分のことを無価値だとすら思っているのだ。

だからUK観光中に何度も西条先輩がICPOへの勧誘をしていたのだが、すべて冗談だと本気で思っているのだ。それとなく理由を聞いてみると苦笑いしてしまった。

「高校生の自分に今すぐ、なんていうなんて、冗談でしかないですよ？」

だそうだ。

そのことを今伝えると、西条先輩は非常に焦っていた。

「しまった！ そうだ、そうだった！！ 彼は高校生じゃないか！  
！ かぁ・・・それならそうと言ってくれれば・・・」

本気で気づいていなかったみたいです。

「・・・彼って結構おもしろそうですよね？」

あの簡易式神とか符とか。

基本的な技術は太古、平安の昔の呪術の復活だとか。  
まるで私の魔法みたい。

「そうだね、そういう点では君と話と合うかもしれないね」

うん、やっぱりおもしろい。

年下は趣味じゃないけど、なかったけど、彼だったらいいかな？

なんだか久しぶりに感じる日本に帰ると、美神さんやおキ又ちゃん、ピートやタイガーまで出迎えてくれた。

いろいろとおみあげがあったので丁度よかったけど。

「聞いたわよ、横島君、シロ、タマモ。大活躍だったそうじゃない。」

まっすぐに照れるシロは予想道理だが、タマモもうれしそうにしていたのが意外だった。

「ありがとうございます。報告書はおみあげといっしょにはいって  
ますんで、後で読んでください。」

「うんうん、優秀優秀」

頭をなでてくれるのはうれしいけど、なんだか俺の扱いが出来の  
良い弟扱いになっているのが違和感ある。

「おばさんも鼻が高いわ」

「え？」

突如現れたのは六道婦人。

聞けば、俺の帰国を聞いてで迎えにきてくれたそうだ。

「わざわざ有り難うございます。お忙しいでしょ？」

「いえいえ、うちの生徒の、それも中等部の生徒が海外研修に  
行って帰ってきたのよ？ 出迎えぐらい当たり前よ」

ああ、そうか、と苦笑い。

二人とも学院に期間中の欠席届けをだしていたのだ。

で、明日から登校するとなれば、それなりに調べはつくか。



「それと、送ってくれた「A」データは、すごく役立つ  
るわ」

ファンネルAに関する実用実験データは、かなりの量になるの  
で、吸引符で収納してDHLで送っておいたのだ。

「うれしい限りです。向こうでも無茶苦茶な質問責めにあっただ  
すけど、六道の試作品だと言うことであきらめてもらいました。」  
「そのおかげで、ICPOからの問い合わせが、ひっきりなし  
で、うれしい悲鳴よ」

それでのお出迎えらしい。

「そのへんは、後日伺いますので、今日はそのままタマシ口を持っ  
てってください」

「え、そんな!」

「六道理事長は、おまえたちをつれてそのまま学院に帰って、凱旋  
式典をする、ってことですよね?」

「さすが解ってるのね」

というわけで、いろんな感謝は二人に引き受けてもらおうと言うつ  
とで、俺たちは事務所に帰った。

## 第七話（後書き）

悪役を減らそう運動の一環で、ロンゲをいい人＋だめな人に見せました。

次回更新は1/1で、1/2まで連続投稿予定です。  
おたのしみに。

## 第八話

事務所に帰ると、ピートやタイガーは向こうの話を書ききたがった。というか、最初はそうだったけど、そのうち興味は「ファンネル」に集中している。

二人とも「コレ」を初めて知ったとのこと、いろいろと見せて説明している。

タイガーも「A」がエミさんの為にほしいと言っていたし、ピートも「AB」で運用できれば隙が減るとつぶやく。

とはいえ、対人戦闘や対魔戦闘で考えてしまうのが最近の悪い癖ではないだろうか？

「A」で常時結界を張れば、霊力が続く限り効力が続くわけだし、霊視や探索にカスタマイズしてもいいわけだ。

使ってみて思うけど、これって中級レベルの霊能をいくつも持つという可能性の固まりなのだ。

それを戦闘だけに絞るのはもったいない。

そう語ると、美神さんが大きくうなずいた。

「よくわかってるわね、横島君。さすが開発者、ってと頃かしら？」

「そんな、俺は案を六道婦人に預けただけですよ。」

「え、じゃあ、この「ファンネル」って横島さんの発明なんですか？」

「おおお、ライト イバーにファンネル、男の夢じゃのお。」

そんなこんなもあり、ファンネルAの結界型を二人に貸すことになった。

六道婦人もそろそろ国内宣伝を始めるところなので、唐巢神父やエミさんの所で使ってもらえれば、よい宣伝になるということになった。

簡易式神「ファンネル」。

正直に言うと恐ろしいまでに便利だった。

最初は結界の補助だけでも使えればいいと思っていたけど、霊力供給を一定量続けていれば普通に結界として機能した。

普段は肉の壁としか使いものにならないタイガーが、霊力供給をするだけで結界の維持もできるというのは素晴らしくありがたかった。

これにより、仕事始めの準備時間を1時間は短縮できると言うものだ。

さらに、ファンネルの数を増やせば増やすほど高度な結界が構築できるというのだから、その利便性は高すぎる。

あのセクハラ煩惱魔神が考えたとは思えない汎用性であった。

後日、バージョンダウンされたものが六道から発売されると言うが、どうにかオリジナルバージョンを確保したいものだ。

というか、この試作品、このままガメられないかしら？

いやいやいや、さすがに令子じゃあるまいし。

「タイガー、結界変換。」

「解りましたのジャー！」

防御結界が、瞬間的に増幅結界に変わる。

「霊体撃滅波！！！」

はじける私の攻撃が、増幅結界を通して悪霊たちをなぎ払う。

少なくとも威力はそのまま有効範囲が三倍というのが美味しすぎる。

くそー、やっぱり欲しいわね、ファンネルオリジナル。

やっぱり、またヘッドハンティングしようかしら？

学校に行くと、クラスは大騒ぎ。

やれ「やめたと思ってた」とか、「死んだと思ってた」とかなんだとか。

一応ピートたちが説明してくれたけど、あんまり信じてもらえていない。

まあいいけどね。

とりわけ不快じゃないし。

本当は帰国翌日から登校しようと思っていたんだけど、事後報告や内容報告を協会にしていたもので、三日ほど登校できなかった。

まあ、そんなこんなで学校に来れたわけだ。

「お帰りなさい、横島君」

「お、愛子。ひさしぶり〜、つうことで、みあげ」

ちょっとしたアクセサリーだったけど、なんとなく似合ってるかと思って買ってきたものだ。銀細工に文殊を隠しているのは内緒だ。

「うわ、いいの?」

「いいのいいの。薄情なクラスメイトとは違うんだしな。」

ざわつく教室は無視して、いない間の話や夜の学校の話をしていくうちにHRの時間になった。

「お、横島、生きてたか」

「あー、はいはい、死んでませんよ」

べーっと舌を出す俺に苦笑いの担任だったが、あとで校長室に来いよと言いつつ残してその場を去った。

また呼び出しかよ、とはおもったけど、いたしかたなく校長室まで行ったところ、説教ではなかった。

校長曰く、

「ICPOから感謝状がきていてね、学校生活を無駄にさせて申し訳ないが、靈的に優秀な人材をわざわざ国外にまで派遣してくれることに協力してくれた貴校の英断に感謝する、とね。」

さすがにこんな正式文章を渡されては、欠席扱いにできない、と苦笑い。

内心感謝しましたよ、ええ、西条さんサクスス!!

「まあ、除霊委員の件もあるしな。校外除霊活動についても除霊員としての研修扱いになるようにした。だからといって調子に乗って休むなよ?」

なんつつか、恐ろしいまでに環境が整ってくなあ。

この話をピートとタイガーにしたところ、主に感謝をした後に抱きつくピート、そのまま泣き崩れるタイガー等々、歓喜にあふれていましたとさ。

ファンネルAの発売日が決まった。

やはり六道系列である美神さんや唐巢神父、そしてエミさんが表だって使っているのがきいたらしく、かなりの問い合わせが集中していたそうだ。

で、マイナーダウンもかなり上手いきき、発売にこぎ着けたとか。製品版では祝式の切り替えはできず、購入時に刻まれた祝式のみ の使用道になる。

だから、それなりに運用するためには、それなりの数をそろえな いといけないわけだ。

さらに言えば、簡易式神の性格上、運用できる期間も一年未満で あるため、売りっぱなしにならず再販売も可能というあたりが商売 のうまさを感じる。

大量制作に当たり、関係修復のなった陰陽寮と共同製作に乗り出 しており、国内オカルト業界地図は大きく塗りかえられることにな った。

で、ここで大きく問題が発生した。

それだけ素晴らしいものに、なぜウチが絡んでいないのか、とい う実にややこしい問題が。

ウチ、と言い出したのは「ザンス」。

精霊石輸出における世界トップシェアの有名どころ。

素晴らしい霊具には素晴らしい精霊石が必要だ、それなのにファンネルの仕様書には「ザンス」のザの字も書いていない。コレは何かの間違いだ、もしくはミスプリントかな？という実に達の悪い話だった。

確かに精霊石を使った霊子振動水晶はきわめて汎用性が高くて性

能に寄与するけど、何にでも使われているわけではない。  
符には使われていないし、簡易結界にも呪術ロープにも使われていない。

日本で霊具を作る装具師の大半は精霊石なんか使っていないのだが、シエアでいえば、ほとんどのものに使われているので、それなりに勘違いが進んでいるともいえる。

で、この勘違いの質の悪いところは、自分達中心にしか見えていないので、自分達の主張が正しくしか感じていないのだ。  
どんなにそれが歪んでいても。

少なくとも六道は動けない。

日本財界にも関わる問題だから。

で、美神さんたちトップGSも動けない。

年に何回か、向こうからの招待で精霊石の買い付けに行ってるくらいだから。

もちろん政治家も。

と、なると……

「丁稚出陣ですかね？」

「ごめんね〜横島君〜」

六道婦人の口まねで手を合わせる美神さん。

美神さん自身も政府と協会からの依頼状を受けている。

報酬の大半は六道からであるので確実だが、ことはこれからの政情に関わるので自分が処理したい、しかし自分が行けば外交的に荒れる。

まずは、ジャブとして情勢を整えたい、ということ、技術面で  
のスリ合わせを、と言うことになったわけだ。

で、六道開発陣と俺がザンスに行くことになった。

先日はUK、こんどはザンスかぁ……



「ついでに両親にあってきていいっすかね？」

「・・・ああ、ご両親が近くに海外転勤してるだっけ？」

まあ、いいわよ。タマモちゃんをさみしがらせんじやないわよ？

つつか、あんたが留守の間はうちに預ければ？

と、とんとんびょうしで話が進んだ。

「はい。つつわけで、準備して行ってきます」

「とりあえず、今回は海外派遣と言うことで、給料に入れとくわ」

「ありがとうございます。」

一礼とともに俺は出国準備を始めた。

ザンスはUKより遠いと思っていたんだけど、時間は1/3だった。

馴染みの六道技術員の話だと、霊子力を使ったエンジンで加速しているそうだ。

さすが金のあるところは違うなあ、とおもって税関を通り空港ロビーまで出ると驚くべき人がいた。

「おやじ、お袋、なんで?!」

「はっはっは、恰好の儲け話を見逃す商社マンだと思うなよ？」

「せっかく息子が使えるようになったんだから、ちよっとぐらいは協力してあげるわよ？」

今回のことを、どこからか聞いた両親が、六道に協力を申し入れたとか。

俺と六道スタッフはそのまま村枝ザンス支局へつれてゆかれ、現状と今後について話し合った。

「まあ、しらべたかぎりじゃあ、今回の件に国王はかんじゃいねえ。」

ざっとホワイトボードにかかれた関係図には、今回の脅迫者が王位継承者順位NO.3の王子派官僚であることが示されている。

で、細かな関係を書くとその周辺に軍人がいて、さらにその軍人が原理派の母胎となっていて、革命まで視野に入れていることが記載されている。

「つまり、だ。今回の騒ぎで「ファンネル」をコピーして、テロを起こして日本との関係を悪化させ、革命反乱の嵐の中で国家乗っ取りつてのがシナリオだな。・・・ザルもいいとこだけだな。」

おやじのせりふに誰もがうなずいた。

「つつわけで、バカと話しても意味はねえ。商売つてのは正しい相手と交渉しないとダメだ。」

「・・・だから、今回の会談に意味はないってことか？」

「ちがう、相手が違うって言ってるんだ。」

翌日、おやじの先導でやってきた先は、王宮だった。

衛士にも片手で挨拶するおやじを呆然とみながら行き着く先で待っていたのは、なんと国王陛下。

思わず、練習したとおりに膝を突いて礼をとると、おやじと国王が笑い始めた。

「大樹。ほんとうに貴様の子供か？ 礼儀正しすぎるぞ？」  
「間違いねえよ、国王。最近やっと教育の成果が出てきたところだよ」

視線をあげてみれば、握手にハグと、ずいぶんと仲が良さそうだった。

「紹介しよう、忠夫。こちらがザンス国王陛下だ」

しつとるがな！！と思わずつつこむと、国王陛下も大爆笑。さすが「カンサイジン」と大いに気に入られてしまった。

和やかな雰囲気の中で、いろいろと話しているところで突然切り出された。

「君のファンネルにはザンスが介在する隙間はないのかね？」と。

ここで誤解があるのは、ファンネルがすごい霊具のように思われていることだ。

ファンネルは本当に「簡易式神」、いわば式神ケント紙みたいなものなのだ。

意味を持たせればその力を発するけど、その上限は低いし、汎用性も低い上限の範囲で活躍するものなのだ。

日本のシェアで言えば「安い霊符」や「簡易結界」に相当する力の上限しかないのだ。

それ故に、ザンス製の除霊具に関わるシェアの範囲ではないことを説明した。

「しかし、それならばなおさら我らと組んで性能を上昇させるべき

ではないかね？」

「・・・万能の霊具は、霊格の上昇の敵です」  
「なるほど。」

あとは、そこまで強力な霊具を戦略に組み込むと、それ無しでは動けなくなる。

で、供給元に頭が上がらなくなってしまふ。

「まるで、今回のように、ですね」

「はっはっは、これはずいぶんとタフに育ってるじゃないか、大樹」  
「だろ？ いい男に育ってるんだ、こいつは」

はっはっは、と笑う二人が同時に顔を引き締める。

「今回の件、国王として手を引かせてもらおう。」

「了解した。ならば村枝が必ず火を消そう」

ぐっと握手する二人を呆然とみていたんだけど、その握手に俺を混ぜてくれた。

「タダオ、だったな？ これからも活躍を期待する。」

「・・・はい、ありがとうございます、国王」

王宮から支局に戻ると、お袋がピースサインを出していた。

「鉱山三つほど押さえたわよ」

「よっし、これで利益も確保だな！」

はいタッチ夫婦に聞いてみると、なんでも、お袋達がねらっている鉱山がザンス側まで広がっていたので、交渉に苦慮していたのだ

が、今回の外交失点を回復する取引として押さえたそうだが。

「それって、火事場泥棒みたいなもんだろ？」

「バカいうんじゃないよ。これは正しい取引なんだから」

押さえた鋳床の上がり利益を六道とシェアすることにより村枝も六道とラインができると大喜びであるとか。

一番わりをくったのは誰なんだろうなあ……。

「忠夫、おまえもちゃんと「横島」しはじめたな？」

「忠夫、「横島」らしいじゃないか？」

ばんばんと肩をたたく両親をみて、思わず笑う俺だった。

予想外の早さで事務所に戻ることができたので、事務所まで出向いて報告すると、美神さんは小躍りして喜んだ。

なにしろ、今回の個人的なお詫びということで、事務所に届く招待券に「割引券」が同封されることになったからだ。

加えて、精製された精霊石もいくつももらったので、美神さんに渡すと、さすがに二歩ほど引いた。

「よ、横島君。さすがにそれを問答無用に取り上げるほど恥知らずじゃないわ。」

むー、守銭奴の神様みただった美神さんが変わったものだ。

とはいえ、「おれは」精霊石なんていらないので、美神さんに預ける言い張るとさすがに負けてくれた。

「いいわ、一応預かっておくわ。」

必要になつたらいいなさいよ、と言つてくれたのがうれしい。

「ああ、そういえば……」

美神さんの話では、ウチの居候銀チャンから、帰ってきたら連絡が欲しいと伝言があつたという。

何事かと電話をしてみると、かなり慌てていた。

美神さんに一度帰る旨を報告して、俺は家に帰った。

「……あなたが、大阪幻の黄金三期を築いたペガサス!!」

一人の少年が俺にすがりついてきた。

彼は昴テツオ。

現在のタミヤカップチャンピオン、だそうだ。

詳しい話をタマモの茶をすすりながら聞くと、どうやら彼の仲間が次々と妖怪に勝負を挑まれて、魂を抜かれているというのだ。

今まで何人かの過去の英雄に助力依頼したが、全員が現役引退を理由に断れていたという。

で、最後に行き着いたのが「俺達」というわけらしい。

いちおう、彼らの中でも伝説らしい。

『(主、けっこうスゴいではないか)』

「(過去の恥だよ。)」

とはいえ、まあ、なんつつか、学校の後輩が頼りにしてきてくれたかのような喜びがある。

「お願いします、お願いします、俺達を救えるのは、大阪の伝悦、ペガサスチームしかいません、おねがいします!!」

滂沱少年の肩をたたく俺。

「・・・男が泣いていいときは、親が死んだときと女に振られたときと、過去の黒歴史が知られたときだけでいい。」

「黒歴史いらんやろ?」

「あほか、黒歴史ほどいたいもんはないんやで!?!」

思わず始まった俺達のセッションに、少年は泣き笑いで答えていた。

事務所に戻って美神さんにことの顛末を報告すると、じつは除霊で昴親から話を受けていた。

ということ、再び華麗なるスループスが俺に決まる。

勝負内容で大切なのはレギュレーションだった。

相手が妖怪であることや、こっちがGSであることも加味して、動力源を霊力とすること、異界を経由するロングコースであることが決められた。

が、シャーシは今年度のタミヤカップレギュレーションとなっており、ペガサスをそのまま使用することはできなかった。

どうすればいい、新規シャーシをそのままチューンしている時間はもうない。

しかし手を入れなれているペガサスは使えない、と進退にきわまる状態の中、彼は現れた。

「シャーシが必要なんだろ?」

現れた男をみて、俺達が声を上げる前に少年が叫ぶ。

「……無敵の東京代表にして、黄金二強時代を築いた、『ダテ・ザ・キラー』!!!!!!」

その場で転倒した雪乃丞が差し出したシャーシをみて声を上げる俺達。

「……だれもがそのチューンをあきらめ、制御不能とまで言われた幻のシャーシ……プテラノドンX!!!」

「俺だけじゃ無理だ。だが、おまえ等がいてくれれば、俺達ならできる!!!」

俺達は手を合わせる。

一つの勝利に向かって。

勝負は山場を越えた。

俺達の霊力を、俺達の想いを乗せたプテラノドンXが最終コーナ―を抜ける。

敵のシャーシと車体三つほど引き離して、俺達のプテラノドンXはゴールを突き抜けた。

抱き合う俺達、勝利を喜び合う。

いつの間にか集められた少年達が、その身に魂を宿し復活する。

仕事は完了した。

熱い戦いもおしまいだ。



だから……。

「このコースでちょっとあそばね？ 自分のマシンでさ」  
「……さんせー！……！！」「……」

敵扱いだった妖怪、「鬼」と共に、俺達はしばらくその場で遊んで、そして再び「遊ぶ」ことを約束した。

必要だったのは「仲間」、必要だったのは「遊び場」。  
俺達にはあったものが彼らになかった、それだけだった。

追記：

横で見えていただけだったタマモも、ちょっとこっちに興味がでてきたのはうれしかった。

最近、大きなお仕事が多くなってきました。

それも横島さんを囿に使う形ではなくて、横島さんと美神さんが「つーとつぶ」で仕事をする形の。

さすがにフォローが必要なときは他のGSを応援に呼んだりしますけど、その人脈がいつの間にか横島さんの知り合いが多くなっています。

たとえば伊達さんや久美さん、ピートさんやタイガーさん。

最近では美神さんも、誰を呼ぶと説明しないで、仕事の内容で横島さんに判断させています。

もちろん、横島さんもその信頼に応え、的確な判断をしているんじゃないかと感じます。

美神さん曰く「予算配分がまだまだよ」と言っていますが、呼ぶ助っ人がおおよそ霊具を使用しない人が多いので笑いが止まらないのは知っているんですよ？

ただ、すこし不安に感じます。

霊を、地縛霊を、悪霊を退治しているみなさんの背後にいる私もまた霊なのだ、と。

みんなの温情にすがって意識を残していますが、いずれあの世に旅立つ定め身のなのに、と。

なのに、こんなに楽しい毎日を送ってていいのでしょうか？

美神さん、横島さん、私はご迷惑じゃありませんか？

最近ちよつと海外に出がちだった横島さんが落ち着いた頃、事務所の隣のビルに新しい人が入ったみたいです。

その事を美神さんに報告すると、ちよつと不機嫌そうに眉をしかめました。

「あたしの縄張りに、いい根性ね……。ちよつと常識ってものを教育してやるわ、ついてきなさい!!」

慌てて私と横島さんがついてゆくと、隣のビルの前で美神さんが立ち止まりました。

「……おにいちゃん!!」

「やあ、令子ちゃん久しぶりだね。」

横島さんがイギリスに行ったときにお世話になったという方、西条さんとおっしゃる方でした。

聞けばICPOという組織のオカルト専門部署「オカルトGメン」の日本支部開設にいらっしゃったそうです。

「できれば有能なGSに参加してほしいんだよ。」

そういいながら美神さんの肩に手をかける西条さん。

「でも、わたしは……」

もじもじと体をくねらせる美神さんだったが、次のせりふで固まった。

## 第九話

「だから、令子ちゃん。君のところの横島君をうちに出向させてほしいんだ!」

「……へ?」

乙女状態の美神さんが、急にいつもの美神さんに戻ってしまいました。

「……えーっと、一応聞きますけど、おにいちゃ……いいえ西条さん。それは出向に対する依頼ですか?」

「一時的には依頼したいけど、できれば彼には正式な隊員として活躍してほしいと思ってる。」

「……西条さん、あなたはもう少し乙女心というものを考えてほしいのですが、贅沢でしょうか?」

灼熱の怒りを抱えつつも「絶対にお断り」と拒絶した美神さんは、横島さんの首根っこを掴んで事務所に戻ってしまいました。

お騒がせしましたーと小さく手を振りつつ、私も事務所に戻りましたが、西条さんの顔は「なんで怒ってるんだろ?」という疑問に溢れているのです。

「……顔はいいんですが、顔だけはいいいんですが、かなり残念な人みたいですねえ。」

それからしばらく、仕事先に現れた西条さんは、かなり美神さんに邪険にされて哀れを誘いました。

横島さんから聞いた話では、美神さんのあこがれのお兄ちゃんだったはずなんですけどねえ?

おもわず可哀想すぎて、横島さんと一緒にお茶につきあったぐら  
いです。

「なにが悪かったのかなぁ・・・」

と本気で言っている時点で救いようがないんじゃないでしょうか？

横島さんは「ちょっと時間をおくべきです。絶えず怒りの燃料を  
くべている状態ですよ」と、きわめて理性的な忠告をいれたりして  
ます。

さすが横島さん。

「・・・そうだね、うん、ちょっと時間をおいてみるよ。・・・で  
も横島君に来てほしい気持ちは変わってないからね？」

まるで女性を口説くがごとくです。

それを聞いた横島さんは苦笑いです。

「美神さんは自分の丁稚が奪われるのをいやがってるんですよ？  
だったらアプローチも違うんじゃないですか？」

「うーん、でもいまさら令子ちゃんに来てくれとはいえないんだよ  
ねえ。」

「だったら、いい人材がいますよ？ 研修目的で引つ張れる、かな  
り有能どころです」

「・・・誰だね？」

「ピエトロ・ド・ブラドー。今年度のGS試験次席合格者です」

というわけで・・・。



「青春ねえ。」

「せいしゅんじゃねー！！！！！！」

若手GSの研修という名目で、合格三年以内の若手および五年以内C級以下のGSが協会召集で集められた。

参加は任意だが、C級以下のGSは挙って参加している。

いわばコレがオカルトGメンの発足時局員集めだと業界中の噂だからだ。

で、一応、俺達除霊委員組も参加させられた。

つうか、ピートが一人では心許ないのでついてきてほしい、というわけだ。

コレに大いに喜んだのは西条さんで、君たちがチームになつてくれればうれしいなあ、とか騒いでいた。

まあ、相手にしなければ行けない人はもつと居るので、早々に公人へ戻ったわけだけど。

集まった人間同士、いろいろと名刺なんかを交換したわけだけど、急遽俺達も必要だからということでも刺を作った。

もちろん、その内容は師匠の趣味がでてる。

たとえばピート。アルファベット表記とカタカナ表記の名前と所属事務所が記載されているだけの簡素なもので、連絡先は協会になつている。まあ、教会の電話が時々止まるからなんだろうなあ。

で、タイガー。こっちはタイガーの名前よりも所属事務所と連絡先のほうがデカイ。つうか、これで事務所の宣伝カードだよな。

それで、俺はというと、所属事務所、連絡先その他がすべて裏面に書いてあつて、正面には俺の名前とランクが書かれてあつた。「Bクラス」と。

GS試験後のこの時期ですでに「B」というのは異例で、よほどの実績か推薦がなければ不可能だ。

その推薦は協会に問い合わせると何の障害もなくわかる仕掛けになっている。

そう、おばさんがでてくると、それなりにこの名刺の意味がでてくるらしい。

だから、怪しげな奴らに配らないように美神さんからいわれていた。

というわけで、いろんな人と名刺を交換すると、確かにいろんな人が居ることがわかった。

40でGSを志しつつも師匠と決別、免許をそのままにサラリーマント続けていた人とか、霊能をレスキューに役立てたくて修行している人とか、GS試験合格後、修行先が見つからず困っている人とか。

何とか流除霊術師範とか何とか教司教なんてひとは、早々に別れたし。ピートやタイガーにも接触させなかった。

「なんでですか？」ってなんの疑問もない表情で聞きやがったので、おもわず耳を引っ張る。

「あのな、師範だの司教だのって偉い人が、五年間も「C」以下なわけねえだろ？ かたりだよかたり。相手にすんな」

なるほど、と感心する二人。

いかん、脳味噌がガキだこいつら。

ちくしょう、思いのほか気を使うぞ、こいつらの面倒。

スリーマンセルのチーム分けだと言っていたので、俺達三人で固まった。

が、西条さんからの提案で、他の人間と組んでみないか、と言う話だった。



そういうこともあるかな、と思って他の人と組んでみることにした。

ピートはいつの間にか女性陣に固められていて、タイガーは陸上自衛隊ってかんじの猛者に囲まれていた。

タイガー哀れ。

で、俺はというと、ちょっとやつれた感じの鉄仮面男性とプロテクターに身を固めたちよつと年かさのある女性……。

「……って、ダウトダウトダウト!!」

「あら、どうしたの？ おばさんじゃいや？」

「なにやつてるんですか、美神夫妻!!」

「あら、一発で見破るなんて、さすが西条君のおすすめね」

「死んでるはずですよ、葬式したんですよ？ 美神さんに言いつけますよ!？」

「うふふふ、それも面白いかもしれないわ。歴史の振れ幅をみる良い機会かも」

「だあ……」

しゃがみ込んだ俺の肩をたたく美神夫人。

「男の子が細かいこと気にしちゃだめよ？」

「あんたら一族の決め台詞だなあ、おい!!!!」

脱力状態の俺は、いま、なぜ美神夫婦がここにいるかの話を聞いた。

で、耳が痛い話なんだけど、過去、美神夫人が時をさかのぼった際に得た情報と今の状態が余りに食い違うために調査にきたのだと

いう。

主な差異は「横島忠夫」。

俺の霊能も、美神さんとの関係も、すべて違うというか違いすぎる、というのが美神夫人の言。

なにがあつたのか、と直接聞きに来たという。

ともあれ、正直に未来のことがわかりますとか言つつもりはないので、ここはいつも通りに行きます。

「靈感がささやくんです」と。

もちろんコレでごまかすことはできなかった。

なぜ俺が人目で美神夫妻がわかつたかの説明にならないからだ。

これについちゃあ、一応言い訳がある。

まず、美神さんの家族構成はウチの両親が調べていて、探偵並の身上書が作られている。

その内容を俺にも見せた上で、こういう上司だけど、ここに勤め続けるのか、と聞かれたからだ。

その際、昔の美神夫人の写真や旦那さんの写真を見せられているので、すぐにわかつたというわけだ。

加えて、最近は霊視を反射的にする癖もついているので、霊波からも美神さんの親族だとわかつた。

そんな言い訳をしたら、さすがに納得された。

「そう、なのね。あの「横島」だったのね。」

変な納得の仕方だな、と思いつつ、視線を美神夫人に視線を戻すにつっこりほえまれた。

故あって、今も故人であることを続けるという美神夫人は生きていることを娘に内緒にしているという。ほしいという。

本気ですか？ と眉をしかめたところ、彼女は深々と頭を下げて俺に願った。

もう、そこまでされては頷くしかない。

「あ、そうだ、これどうぞ」

特殊結界特化型ファンネルAを渡す。

疑問顔の夫人の耳元にささやく。

「コレを起動すれば、旦那さんのテレパスが防げます。久しぶりの日本でデートでも楽しんでください」

「……………!!!」

ほんとうはタイガー暴走防止用だったけど、かなり良いことができたと思う。

『（主、フラグだ）』

「（え？ なんの？）」

『（ひのめ誕生フラグだ）』

「（……………!!!）」

そうか、この時間では、この東京デートでハッスルして……………。  
うっわー、まじかよ。

思わず頭を抱える俺だった。

研修初日につまずいた俺だったけど、後追いで二日目から参加したチームと合流した。

学校教師をしているという「Dクラス」の湯上桜さんと、ブティック店員をしているという「Dクラス」の笹倉明野さんだった。

二人とも六道女子の出身で、それなりの事務所で修行したが向いていないと感じ、正式免許にしてもらってしばらくで一般職へ移ったそうだ。

ただ、生活の中で、もっと自分に力があれば、経験があれば思うことも多く、今回の研修に申し込んだという。

で、湯上さんはうちの高校のことを知っていて、「学校霊生徒会長」とその自治組織という取り組みがきわめて素晴らしいと絶賛してくれた。

でもそれもこれも、机妖怪の愛子が頑張ってくれているからで、学校が何かをしたわけでも、俺が何かをできたわけでも……。

「ちがうわ、横島君。学校が、生徒が、教室が、教員が、そのすべてが学校霊を許容する環境にあるからこそ、あなたたちが居てくれているからこそ、愛子ちゃんが頑張れるのよ？」

ちょっと感動してしまった。

「感動したのはこっちだって。私らなんか、幽霊妖怪なんつうのは排除対象ってただけだけど、君たちは仲良くなったり一緒に生活したり、すごいことなんだよ？」

笹倉さんはあまりの感動が、俺の手を握る。

「でも、俺の妹の話だと、霊との対話とか除霊とか、色んなことを教われるってききますけど？」

「え、なになに、横島君の妹って、もしかして六女？」

「はい、現在中等部の一年です。」

「うっわー、なんか親近感わいちゃった。」

「そうねえ、身内意識が高まるわね」

というのが先ほどの合流時ミーティングの話。  
チームの一体感が増したという事で合格だろう。  
で、その先に待っていたのが、低級霊をつかった除霊訓練。  
湯上さんも笹倉さんも実践を遠のいて久しいので、俺にリーダー  
をしてほしいと言ってきた。  
それでは、ということ、実践開始と言うことにした。

「まず、除霊依頼書と現状を比較します」  
「・・・え？ 低級霊の訓練だよな？」  
「まず、除霊依頼書と現状を比較します」  
「・・・はい。」

頭の固い子供、というリアクションなのはわかってるけど、背後  
にはあの美神夫人が居るのだ。  
手抜きなどできるかいな。

「依頼書にある霊の位置と霊圧を霊視します」  
「はい」「はい」

しばらくして呻くような声。

「・・・う、これのどこが低級霊よ・・・。」  
「・・・うそ、ぜんぜん低くないわよ・・・。」

とはいえ、実は低級霊なのだろう。  
ただ、足下の魔法陣がくせ者。

俺たちの霊力を低くして、相対的に低級霊の強さをあげる仕掛け  
だろう。

「横島君、これって、依頼書に無い事象でしょ？」

「そうよ、これって依頼内容差異で差し戻せるものよ」

さすがにちょっとビビってるみたい。

「これが事前調査段階なら合格ですけど、今の段階は「派遣」されていますので、契約金の引き上げにしか使えない状態ですね」

すこしして今が訓練だと言うことを思いだした二人がため息をはく。

「装備を確認しましょう」

そういつて二人は霊符と神通棍を出す。  
神通棍に霊気を流してみても驚いている。

「な、よ、よわい……。」

「な、なんで、こんなに力がないなんて……。」

そんな二人に足下を霊視させるとさらに驚く。

「これは、魔法陣の真上にいる人間の霊気を吸い取る魔法陣です。  
だから逆説的に相手が強くなります」

「ふう……。つまり、調子に乗ってつつこむと、痛い目を見るってことね。」

「さすが現役、見る目が違うわ。」

さんきゅつと三人ではいタッチ。

「では、作戦時間に指定はないので、周辺を浄化してからかかりましょつ」

「・・・浄化用の符なんて無いけど？」

「もちろん人力、歩法でがっちりいきます」

「ええ~~~~~!!」

「もちろん、反対意見は聞きません」

「横暴~~~~~!!」

実習最後の横島君たちは、除霊時間にして二時間で終了した。

その行為は綿密で、こちらが準備した罫をすべて見抜いた上でその上をゆく安全策を施して除霊を実施した。

さすがに歩法で物件自体を浄化してから除霊なんていうことまでしているとは思わなかったので、こっちも地処できずに驚くしかなかった。

除霊完了できたチームは、参加チーム中三組だけで、予想に違わず「ピート」「タイガー」「横島」の三名が参加しているチームだけだった。

少なくとも、あの三人が1チームになっていれば、除霊成功したチームは一つになっていたに違いない。

綿密で、濃密な経験をしている三人だからこそその結果だろう。

もちろん、こんなことを全員に求められるわけではない。

しかし、彼らの除霊準備は綿密で詳細で精密だった。

それは彼らの師匠たちが如何に彼らを大切に指導しているかを示すものであり、一流と呼ばれるGSの真骨頂が伺いしれることだった。

彼らのように指導されて、彼らのようになれるかは不明だ。

しかし、ともに切磋琢磨する中で、周囲に与えることはできるはずだ。

ピート君はこちらに好意的で、さらには卒業後の進路として正面から考えてくれている。

タイガー君もこちらに興味がありそうだ。

が、横島君はこちらに興味はないようだ。

もちろん、捜査協力や除霊協力には快く応じてくれるほどの関係だと言うことを感じている。

何というか、年齢の隔たりなど関係ないほど気安いのだ。

彼ほどの人間が同世代で居てくれれば、僕の苦労も少なかっただろうに、と思うほどに。

しかし、そんな彼の評価は意外に低い。

あれだけ時間をかけてれば畏ぐらい見抜ける、女をチャラチャラさせている、自分ではなにもしないで女にすべてやらせている、あれで本当に「B」なのか、コネはありがたいものだ、等々。

正直に言えば、あれだけの力と実績を持つ人間を、よくぞ嫉妬だけで悪くいえるものだと感じた。

感心した上で、ICPO局員候補からはずした。

力があるうと無かろうと関係ない。

相手の力が見抜けなければ生き残れない、そういう世界なのだから。

三日目は、チーム合同の対抗戦だそうだ。

つつか、除霊の研修で対人戦闘ってモロねらい過ぎじゃありませんか？

武道館のような体育館の中心に、GS試験の試合会場があり結果が張られている。

「六女のクラス対抗みたいな感じね」「ああ、なつかしいわ。」

湯上さんや笹倉さんの話では、三人タッグ交代制のプロれるもどきの対抗戦がソレらしい。

一度勝ちあがると直ぐにタイガーチームとの対戦となった。



靈的格闘技がメインらしく、靈気を体にまとわせるのが基本らしい。

女性では相性が悪いな、ということであれが先方にできるとマイクから西条さんの声。

『剣禁止』

げ、と思わずみると、にこやかにほほえむ西条さんと六道夫人。みれば、その周辺に関係者一同様がいる。

美神除霊事務所、小笠原除霊事務所、六道除霊事務所、つて冥子ちゃん、つつか雪乃丞……。

目が語ってるぞ、最後は俺と勝負だ、て。おもわず、いやじゃ、とは語っておいたけど。

畜生、どうしろつうじゃ、と思ったけど、そういえば最初のGS試験の時は盾だけだったっけ。

『(そうだ主。攻防自在のそれがあれば、お主はまけん)』

そうだったな。うん。

俺は自分の正面に八枚の盾、サイキックソーサーを出した。

そして九枚目を結界沿いに小さく投げて、相手の背後まで回す。

「試合開始!!」

その声とともに背後から直撃。

タッチもできず、そのまま気絶と相成りました。

「卑怯だ!!」「姑息な!!」という罵声を背に、美神さんの方を

みると「グッジョブ！」とばかりにOKサイン。

「さすがに卑怯じゃないかなあ……。」

「笹倉さん、ここは靈気吸引魔法陣や怪しげな罫を研修で仕掛ける魔境ですよ？ 罫を仕掛けるぐらい許容範囲です」

さらに俺には靈能の制約までつけおって。

「うーん、さすが美神令子の弟子ってところ？」

「そういつことです。」

いやはや、恐ろしいわ、横島君。

彼の作戦もそうだけど、その際の靈気のコントロールは恐れ入った。

敵の正面に一杯の盾を並べて、力勝負化のように見せかけて、背後から強襲。

その背後だって、完全にコントロールした盾を、圧縮度の低い状態で潜ませて、遠隔で圧縮するという離れ業をかます。

術よりも作戦よりも、ソレを成功させたこと自体を異常と感じない時点で、周囲の研修生の質は低いといえる。

さすがにピートは感じているらしく、ぶつぶつと対策に追われている。

が、問題はある。

今の段階での戦略は次に通じないのだ。

なにしろ、この試合は「剣」、靈波刀を封じられた状態なのだ。

今この段階でも横島君は、なにが封じられてもうまくいくよう戦略を立てているはずだ。

たとえば、女性を全面に出しておびえさせて、気がそれたところ

を叩くとか。

いや、横島君の性格からすると、「人質に取る」が一番かしら？  
まあ、正攻法一本槍のピートでは勝てないわよ？

今後の人生を変えるであろう二日間でした。

最初の一日目に来れなかったことが、心底残念に思える二日間でした。

同世代の笹倉さんと在学中に出会えなかったことを残念に思えるし、これからの生きる道としてGS事務所ではなく教員でありGSであるという生き方にも視線を向けることができた。

それもこれも彼、横島君のおかげだろう。

某高校のそれも「除霊委員」というおかしな組織の一員で、机妖怪の愛子ちゃんの保護者。

免許取得から格段の早さで「B」にまで上り詰めつつも、偉ぶらず、常に初心でいられる謙虚な少年。

## 第九話（後書き）

次回更新は1/7です

1/7 修正しました。「さーん」は仕様ですw

## 第十話

笹倉さんとともに、本気で彼を師事したいとすらおもってしまったことは彼にないしよだ。

さすがにあのレベルについて行けないもの。

そのレベルは対抗戦終了後に見せつけられた。

彼のライバルを自称する六道除霊事務所の伊達雪乃丞君。

彼と雪乃丞君の模擬戦は、もうこつちで対人戦闘とか考えるのがばからしくなるほどのもので、視覚が追いつかないことおびただしいものだった。

雨嵐のような霊波砲、それを小さな盾でよける横島君。

接近戦になったとたん、目の前で拍手をした横島君の両手から激しく光る霊光。

視覚を失った雪乃丞君の首筋に突きつける、エメラルドグリーンに光る霊気の剣。

もう、どこをどうつつこめばいいやら。

「・・・へへへ、いろいろと小技持つてるじゃねーか」

「おまえも、なんか地力あがってね？」

「まいにちファンネルとばしてっからな。あれで霊力の底上げしてんだよ」

「どこの星飛雄馬だ？」

「あの、オモイコンダラ、いいかんじだぜ」

「おめー何個壊した？」

「・・・十個」

「しねーーーー！！！！」

仲良くなす二人は、私たちには遠い世界で、全く届かない地平

だと感じさせられました。

それはそれとして、横島君とは電話番号を交換した私たちだった。

タマモちゃんのお兄ちゃんになってから、横島さんはいろいろと頑張っています。

私からお料理を習ったり、洗濯や掃除を頑張っていたり、勉強も頑張っているそうです。

だらしなお兄ちゃんでも嫌われないのに、とタマモちゃんは笑っていますけど、自分を気にしてくれているのはうれしいらしいです。

で、横島さんの部屋には、居候さんが一人います。

近畿剛一くんこと横島さんの幼なじみの「銀ちゃん」です。

トップアイドルともいえるひとが、なんで幼なじみの部屋に居候しているかというと、アイドルの寮が厳しすぎるからだそうです。

門限や先輩後輩の関係が厳しすぎて、もう信じられないほどだとか。

ソレを聞いた横島さんが「応援団だってもっと潤いがある」と言っていました。

比較はわかりませんが、厳しいんでしょうねえ。

「そんなわけで、今日はタマモちゃんのリクエスト、おあげフルコースです」

「……わーーーーーい（びいきる）……」「」「」

いつのまにかシロちゃんがちゃっかりいるのは内緒です。

「そついえば、銀ちゃん、あの写真つかうって？」

先日の子二四駆の試合の時、横島さんや雪乃丞さんと撮影した写真が雑誌に使うそうです。

「ああ、一応許可はとつとるで。当時の写真も一緒にな」

「・・・いまだタミヤ博物館に写真があるとはおもわなかったわ」

横島さんと堂本銀一さんが小学生の時に、前人未踏の記録を立てたということで、今でも一部で有名なんだそうです。

「まあ、歌でトップとつても業界の力が裏にあるけど、あれだけは俺らの力やったしな。」

「せやな、うん、せやったな。」

なんだか男の世界って感じですね。

「まあ、何かをした証ってのが、誰かに認められるって言うのはどんな場所でも立場でも一緒やろ？ おキ又ちゃんがおいしい料理を作れたり、みんなに教えたり、そんなつながりだって同じぐらい大切なんやで？」

「せやな、よこつち、ええこというわ。」

「うん、さすがお兄ちゃん！」

「うんうん、先生の言葉は含蓄深いでござる。」

にこやかな食卓、和やかな会話。

もう死んでしまった私には、もったいない時間。

いいのかな、私はこんなに幸せで。

「おキ又ちゃん、おかわり！！」

「お、おれもおれも！」

「わたしも」

「拙者も!」

「は〜い」

幸せだなあ、うれしいな。

こんな風に暮らせるのは、美神さんや横島さんのおかげなんだなあ。

うれしいなあ……。

その日の地震で俺たちは理解した。

あの植物妖怪の復活と、避けることのできない対戦を。

『(主、来たぞ。)(』

「(くそ、忘れちゃいなかったが、さすがに準備はできてねえ……

」。

『(主、ストックは?)(』

「(……52。)(」

普段からどんなにピンチでも使わずにいられるように戦略を立ててきたおかげだ。

悪霊ごときにはモッタイナイ。

「とりあえずは美神さんに電話だ!」

深夜、横島君からの電話で目覚めた。

確かに腹が立ったけど、この電話にでなければ破滅だと靈感が感



じる。いや、「靈感がささやく」。

電話を受けて、間違いなかったと思った。

事務所から消えたおキ又ちゃん、深夜テレビで報じられる宗教施設の全壊、そして震源地の「人骨温泉」。

奇妙な符号の先に合致する「おキ又ちゃん」。

だめだ、どう考えても彼女に関わることでしかイメージできない。私たちは急遽、人骨温泉に急いだ。

もちろんタマモとシロは動物になってもらっている。

まずった、と心底思った。

おキ又ちゃんという存在が何故300年も失われていなかったかをもっと真剣に調べるべきだったのだ。

地脈にくくられた幽霊が、三百年も霊格をあげずにそのままいるはずがないのだ。

そのことを温泉近くの神社、氷室神社で思い知った。

火山や天候まで左右する大妖怪と、ソレを押さえるために行われた人柱の儀式。

そして氷柱の中のおキ又ちゃんの遺体。

つまり、おキ又ちゃんの霊体を元にした封印が行われていたのだが、おキ又ちゃんを欠いた状態では封印が機能せず、大妖怪の復活と相成ったわけだ。

次々とおそつてくる妖怪の端末「花」を、霊波刀で切り伏せる横島君とシロ。

そして次々と狐火で燃やし尽くすタマモ。

正直に言えばこの布陣でなければ、早々に撤退させられていただろう。

とはいえ、じり貧だ。

あいては地脈ダマリからのエネルギーを受けているけど、こちらは霊力が有限だ。

どこかで休まなければならない。  
いや、そろそろ限界が近いはずだ。

シロの霊波刀も揺らめいているし、横島君も疲労の色が濃い。

「横島君、撤退準備！！」

「はい！！」

サイキックシールドと名付けられた淡い緑の盾を、一直線に展開した横島君は、「花」の到達とともに爆発させる。

が、これにひるまず前進してきた「花」を私が攻撃する。

「（人工幽霊、聞こえる？）」

「（はい、オーナー。感度良好です）」

「（私の位置に、ミサイルコンテナ発射！）」

「（了解！！）」

瞬時に降り注ぐマイクロミサイルの爆音と炎。

あわせるようにタマモとシロを抱えた横島君が、私にも手を伸ばして走る。

「戦術的撤退~~~~！！」

はあ、やっぱりこいつは手放せないわ、ほんと。

いくら切り裂いても本体は地中の向こう。

となると、やっぱり反則した方がいいかな、と悩む。

ことはおキ又ちゃんの生死に関わる話だ。

どうにかして、どうやってでも巧く行かせる。

氷室さなえちゃんの案内で、氷室神社のご本尊、というか結界装置まで来た。

再び出会ったおキヌちゃんは、今までのここ、これまでのことを感謝してほえんだ。

でも俺にはわかる。彼女は泣いている、と。  
だから声を上げた。

「ぜったいだ、絶対に助ける!!」

俺はその場で霊力を集中する。

ストックではない、今この場で作り上げることを見せることで、  
たった今から使えるようになった能力として見せつけるために!!

霊波刀が収束して手に収まる。

手に収まったそれが、すべてを巻き込むように収束する。

風も空も空気も霊気もなにもかも巻き込むような渦の中でソレは  
できた。

輝くその珠。

奇跡の珠。

伝説とまで言われたその霊具。

それが、5つ。

「……横島君、これがなんだかわかるのね？」

「……はい。」

「そう……。」

浅いため息とともに美神さんはこちらをみた。

「この存在を他に漏らすことを禁じるわ」

「わかりました」

「万能の霊具か、ほんとうに助けられることができるかもね」  
「・・・助けます」  
「わかったわ。」

ぱん、と自分の頬を叩いた美神さんは手を突きだした。

「私は二つ、横島君は三つ。いいわね？」  
「俺は一つ、美神さんは四つ。」  
「あのね、あなたが助けるんでしょ？」  
「俺のほうは、後もう少しで次のロットがきそつです。」  
「・・・そつ、なら四つもらうわ。」

きらきらと光るそれは宝石と言ふには邪気がなさすぎた。

「美神さん、その珠はなんだべか？」  
「・・・ごめんなさい、さなえちゃん。その質問は答えられないし、このことは忘れてほしいの」  
「・・・んだか。」

真剣な口調にうなずくさなえちゃん。

土壇場で恐ろしい能力を引き出した横島君。

その名も「文珠」。

そこに込められた霊力を、100%の方向で発揮するという世界中の霊能者が聞いた途端に発狂するような能力だ。

込める文字で力を発揮し、「爆」といれれば爆発し、「水」といれれば水流となり、「凍」といれれば極低温の空間を作る。

過去、文珠が市場にでたことがあるが、その際、ある国が崩壊した。

十二の国が入り乱れ、数千万単位の人間が死んだ後、文珠の制御に失敗して何もなくなつたという。

そんな状態の世界に文珠使いが現れたのだ。

どんな扱いになるかなどしれたものだ。

だから秘密は漏れないようにしなければならぬ。

それがたとえ神魔であっても、いや神魔であるからこそ。

だが、今はそのことを考える時間ではない。

まずは、あの植物との戦争に勝つてから。

花と言うからには本体は根だろう。

しかし、こちらの武器が届く範囲とは思えない。

そこで使うのが「文珠」だ。

再び「花」がやってきたところで、「枯・死」もしくは「病・死」という文珠を発動させることにより、かなりの力を殺ぐという作戦だ。

横島君の電話から第二ロットを生成できたという連絡が入り、早々に作戦が開始される。

二方向からの「枯・死」\*2「病」\*4の攻撃は花全体を一気に枯らした。

美神さんは流石に二文字を入れることはできないらしいので「病」を入れてもらった。

タマモとシロは美神さん側でさなえちゃんの護衛をしてもらっている。俺は今、心眼と集中していた。

経過を心眼と共に霊視して、本体を見ているが、株分けは……

『・・・ちつ、やはり株分けしておったぞ、主』  
「でも、上がってきたな!!」

花全部を切り捨てた本体は、俺たちの方を目指して上がってきている。

「ファンネル、防御結界!!」  
『らーさー』

「引きつけるぞ、心眼!!」  
『おお!!』

急速に迫る本体が、ファンネルの防御結界にふれた瞬間に心眼が叫ぶ。

『いまだ、主!!』  
「超・加・速!!」

サイキックソーサーの多重展開。  
両手から文珠をたたきつける。

土から出始めた部分に文珠が届いた時点で霊波刀へ切り替え。  
わずか10秒ほどの超加速だが、勝利のための布陣は完成した。

『主、切れるぞ!』  
「よし、いける!!」

超加速が切れたと同時に文字に力を入れた。

「粉・砕」

株分けの時間もなく、文珠の力に粉碎されていった本体は塵と消え、押し上がってきた勢いの土石もシールドに阻まれて俺までは届かなかった。

『主、ちよつと甘かったようだ』  
「これか？」

塵となった筈の本体のそばに、胡桃の実ぐらいの珠があった。心眼の霊視では「本体」と同質の妖怪だそうだ。

ただ、記憶や意志はなく、人への恨みだけを込めただけの状態らしい。

「つまり、タマモみたいんもんか？」

『ソレよりたちが悪いな。生まれる前から恨みだけだからな』

「・・・うーん、じゃあ・・・。」

取り出した文珠に「浄」の文字をいれ、珠にかざす。

「まあ、恨み辛みは勝手にさせてもらうさ。」

『主の気持ちは分かるがな、いわば来世に恨みを持ち越すのは不幸だからな。』

「・・・うん。」

浄化を終えた「珠」をポケットに入れて、俺は美神さんたちに合流を急いだ。

地脈の乱れから復活した山の神「ワンダーフォーゲル」の指示の

元、おキ又ちゃんの復活がいま行われようとしていた。

霊波刀を構える横島君へ、おキ又ちゃんが「もう少しこのままで生活ができないか、思い出を失いたくない」と泣きすがる。

しかし、すでに地脈にくくられていないおキ又ちゃんはいつまでも真つ白な幽霊ではいられない。

だから横島君はほほえむ。

「一応、反則技」

おキ又ちゃんに何かを握らせると、彼女はすごくうれしそうな顔をした。

「直ぐに思い出せる、直ぐにわかる。だから待ってるよ！」

「はい!!」

淡い緑色の光を発する霊波刀が氷の壁に封じられたおキ又ちゃんに突き立てられた。

瞬間、おキ又ちゃんの体が、霊体のおキ又ちゃんに重なった。

『忘れません、思い出します、また……!!』

人骨温泉から帰ると、東京では中規模の騒ぎになっていた。

なにしろ都下の宗教施設の大半がはじめの地震で倒壊したそうだと認められたものだと力無く笑っていた。

自称教会の唐巢先生の教会も全壊し、これにより宗教施設だった余りに哀れを誘われて、教会再建費用を融資する事を決めた私だ



った。

「すまんね、美神君。」

「だから、自転車操業じゃなくて、ちゃんと依頼料をとってくださ  
いって何度も言ってますよね?」

「うーん、流石に今回は事故みたいなものじゃないかね?」

「車だつて保険ぐらい入りますよ?」

「……あはははは、そうだねえ……。」

そんな会話の中、眉をひそめていた横島君が口を開く。

「神父、もしかして、料金が安すぎるって協会から文句言われてま  
せんか?」

「……ぎくつ、横島君、なんでそのことを?」

あまりのことに私は言葉を失った。

「……神父、弱者救済もいいですけど、企業にその調子じゃあ、  
ほかのGSの迷惑つすよ?」

「いやあ、しかしだねえ……。」

「S級の唐巢神父がタダでやってくれるんだから、C級やD級に頼  
むことはないよな、って思われてるでしょ、ってことです」

「ん……うん……」

「この前、協会の研修であった「D級」の人たちも、上を目指して  
いるって言うのに、その芽を「S級」の神父がつぶしているんすか  
?」

思うところがあつてか、ピートもうなだれていた。

「横島君の言うとおりですよ、先生。先生の信条もわかりますし救

済の意志も分かります。でも、身内に弱者を抱えてるんですから、もう少し考えてもらえませんか？」

横島君に正論を突きつけられ、私に責め立てられ、唐巢先生も多少堪えたようだ。

本当はここで許してあげるところなんだけど、もう一押しが必要だ。

「そんなわけで、これから一週間ほど、横島&シロチームを先生につけますので、正しい経営というものがどういうものかを学んでください！」

「「「ええー！ー！ー！」」」

先生とピート、横島君まで驚いていたけど無視。

さあ、横島君、一週間で教会再建費用を叩き出すのよ！！

そして融資分を利しつけて私に戻しなさい！！

いやはや、神父のところの経営はひどいものでした。

本来使っていないくちやいけない制度を全く使っていないのだから。たとえば、GS協会の依頼料保護保険制度。

月々の支払い額のレベルにあわせて、一件あたりの最低支払い額を協会が保護する制度で、契約者が支払いを拒否したり逃げたりした際の保険だ。

支払い能力が無い際も使われるので、神父のところなら絶対に掛け金以上のバックがある制度なのだ。

あと、税制優遇策やらGS協会の霊具補助制度なんかも知らないし、もう、本当にこの人ってば「S級」なの？ って聞きたくなっ

てしまう。

本来事務所で入っていないければならない制度の大半を、六道のおばさん経由で数ヶ月前から入っていたことにしてもらって、まずはオカルト災害保険補助を請求しとく。

これで、再建費用の半分は確保できる。

あとは薄利多売で十件もすれば、再建費用の1.5倍は堅い。

で、ちよつとがんばれば、来月以降の恒常出費分だって稼げる。

そんなプランを見せたところ、ピートはまだしも神父まで感心していた。

つて、本当にホントうに「S級」なんですか、神父！

一週間ほどで予定の倍は稼いだ。

神父もピートも疲労は濃いけど、やり遂げた風の顔だ。

すでに収入は決定していたので、週はじめには工事は着工していて、来週には住める勢いだ。

内装とかをしばらくやるけど、流石妙神山を再建しただけのことはある。

早さと見た目の良さにかけては定評のある建設業者だったりする。

「いやー、美神さんの紹介だと金払いがいいのがうれしいね、現金だし」

こういう業者を動かすとき、現金で渡すと、同じ金額で三倍やる気が違う。

仕事の後、三ヶ月後にももらえる一千万より、その日にももらえる一千万の方が大きいのだ。

当たり前だけど。

そんなわけで、追加資材はあつたけど追加要求なしで建設は終わろうとしている。

とつぱらいの威力は絶大だ。

神父も現金の偉大さを実感してほしいものだ。

もしくは、経理担当の事務員の導入だね。

嫁さんでも可。

というわけで、約束の一週間で融資分+アルファを回収して悠々と事務所に戻る俺だった。

もちろん美神さんからは絶賛をもらった。

「よしよし、私の勲等が生きてるわね！」

ええ、もう、未来の俺が受けた教育です。

氷室家から連絡があった。

順調に記憶が戻ったそうで、東京に来たいとおキ又ちゃんが言い出したそう。

もちろん、一時的に引き受けてくれた氷室家にも感謝はしているけど、自分が居るところは「事務所」なのだとおキ又ちゃんは主張しているそう。

「うれしい話ね、横島君」

「・・・はい」

このときのために美神さんは4シーターのポルシェを買っており、おキ又ちゃんを迎えに行った。

「うれしいでござるな」

「うん、うれしいねシロねえ。」

やっぱり美神令子除霊事務所には、おキ又ちゃんがいないと、と  
誰もが思っていた。

その霊団と正面向き合うまで。

「……だぁー……！！」「……」

ボンネットに乗ったシロが霊刀「房姫」で切り裂き、俺が背後を  
シールドで守る。

「ファンネル、多重結界！！」

『『『らーさー』』』

三重の防御結界を展開したままでアクセルを踏み込む美神さん。

「こりゃ、また、ヒト騒動ね。」

「まあ、ウチのデフォルトではないかと？」

「いやなオプシオンだわ」

気軽に笑ってはいるが、視線は抜け目無く。  
手も抜かず、気も抜かず、全力で大笑い。

「おにいちゃん、私は？」

「流石に森が深いからな、狐火の延焼が怖い」

「じゃ、迎撃Aを張るね」

「おう、頼んだ！」

「うん、頼まれた！！」

そう微笑むタマモはファンネルAを迎撃で展開。  
みるみるその数を減らす、あとからあとから付いてくる。

完全に消耗戦だ。

敵の補給は無限、こちらの戦力は有限。

「どこかでこのシュツエーション無かったか？」

『・・・この土地であっただろ？ 主』

なるほど、植物代妖怪か、うん、納得。

「でも、今度は核も本体もない霊団、一気に除霊しないと無理があるわー!!」

視線で分かる。

(こんな公の場所じゃ、文珠に頼れないわよ！)

(うっす、)

## 第十話（後書き）

次回更新予定は1/14です。

（書き忘れていましたw）

## 第十一話（前書き）

基本、横島の評価が高い為、色々な展開の幅が来ています。  
逆行モノでは定番ですが、それはそれということw



## 第十一話

(こんな公の場所じゃ、文珠に頼れないわよ！)  
(うつす、とりあえず、逃げるっす)

なんとというか、巧妙なアイコンタクトでタイミングをとってポルシエダツシユ！！

「さあ、いくわよ！！」

「『イエス、ママ！』」

サイキックソーサーに「浄」の文珠を埋め込んで、正面横行へ投げ俺。

タイミングを合わせるように美神さんはハンドルを切る。  
向かう先は氷室神社！！

毎日夢のようでした。

美神さんがいて、横島さんがいて、シロチャンがいて、タマモちやんがいて。

除霊したり、お出かけしたり、ご飯を作ったり、お掃除したり。笑って怒って泣いて、悲しくてつらくて、うれしくて。

毎日が、自分が幽霊だったなんて嘘みたいな毎日。

思い出す前は信じられなかったけど、思い出してみれば当たり前の幸せの毎日。

私は思いだした後、それを取り戻せることが信じられなかった。だって、私のせいで一杯みんなに迷惑をかけているから。

今も、いっぱい霊団に追われている私をみんなが見てる。

早苗お姉ちゃんには霊符で身を守ってもらっているけど、そろそろ逃げ道が塞がれてきた。

やっぱり私では無理だったかな？

巨人の腕のような霊団が目の前に迫っています。

・・・ああ、やっぱり死んじゃうのかな、私。

「・・・あーあ、だめかな？」

「あきらめるなあ！！！！！」

突然現れた光の腕。

ああ、私は知ってる。この暖かな光を。

「もうだめだって思っても、それを口にしちゃだめだ！！！」

光の腕は剣に変わり、見る見る間に周囲の霊を散らしてゆく。

「俺たちがあきらめれば、守るべき人を守れなくなる、だから絶対あきらめるな、おキヌちゃん！！！！！」

ああ、やっぱりこの人だ。

ああ、この人が、この人達は絶対に来てくれる。

「・・・はい、横島さん！！！」

きゅっと抱きしめてくれて、そして私を見て微笑んだ。

「とじろでおキヌちゃん。」

「はい、なんですか？」

「万感の思いを込めて、これ吹いてみない？」

渡してくれたのは横笛。

「えーっと、楽器はちよつと苦手ですけど・・・。」

「いやいや、幽霊やっただときに想いとかが、そういうのをぐっと思つて吹くだけでOKだから。」

「・・・えー、っと、はい、やってみます」

いわれるままに服と、ちよつと高い音が響きわたります。

「なに、まじ？ 本当に音がでた！ 音が霊波に変換されてるわ！

！ やったわおキ又ちゃん！！」

すごく美神さんが喜んでくれているので、私もうれしくなって、それでいて、目の前の幽霊さんたち申し訳なくて、そういう思いを込めて吹きました。

荷物の中でそれを見たとき、使えれば確かに有効だと思った。

とはいえ、そんな適正が自分にはないことは昔っからわかっていたので、ナニを無駄なものを、と横島君を怒ったのだが、逆に言われた。

「重さとしちや大したことはないっす。だったら、仲間みんなで、それどころかその場にいる誰かが確認して、使えればラッキーっすことぞ。」

・・・言い分は理解したわ。  
そして、それに今回助けられたと言ってもいい。

300年の幽霊経験は伊達じゃない。

誰よりも幽霊を、死者を、死を、その無念を知っているおキヌちゃんに適正があることはわかりきっていた。

その笛、「ネクロマンサーの笛」の。

億に達する雑霊達がちりじりとなって黄泉路へ旅立つ。

中には無念を忘れられずにさまよっているものもいたが、シロや横島君が散らしていた。

タマモによる狐火の結界がおキヌちゃんを守り、私が霊団の中心に神通棍をたたき込んだ。

かくして、美神令子除霊事務所に新たなる戦力が加わった。

ネクロマンサー氷室キヌ。

かつてから天才とうたわれた美神令子とその弟子である横島忠夫に加えて、適正から実績まで一流と認められた、日本唯一のネクロマンサー。

GS協会は彼女のGS免許受験合格を合法的に認めるための制度整備に追われることになった。

なにしろ今の受験は、非攻撃能力者に厳しすぎる制度だから。

そしてそんな制度の偏りで、世界でもまれな一流のネクロマンサーを失うことができないから。

力が才能が一流でもその知識と知恵が一流でなければ三流以下だ。そんな意味では彼女がどのような教育を受けるかは重要で、これは美神令子除霊事務所だけの問題ではないといえた。

ただでさえ素行や仕事内容で問題の多い美神令子の元で保護されているのだ。

一般常識や感覚の問題で毒されては業界自体の不利益に通じる。どこかで、そう、本当にどこかで正しい教育を受けられないか？協会幹部は損得抜きで会議を重ね、唯一の答えを得る。

「六道女子でいいじゃないか」

気力と判断力を失った上で、何となくこの方針になったとき、なぜか会議室には六道のメイド達が給仕していたという。

かくして、協会から氷室キヌへ六道女子への入学手引きと各種資金補助の話が持ち込まれたのだった。

「へー、おキヌちゃん六女にはいるんすか」

「結構優秀で、私も驚いたわ。」

聞けば、氷室家にいた頃から勉強は結構がんばっていたそうで、外国語以外はかなりのレベルらしい。

「じゃあ、うちにくるかもな〜と思ってたのは間抜けでしたね」

「ふふふ、実は横島君のところの学校って話もあったのよ。ほら、オカルトに寛容で有名になってるしね。」

「あはははは、まあ、その、寛容というかタガが緩いつつか・・・」

「うちの教師どもは、言うことを聞かない生徒より、素直な学校靈のほうに癒されてるしなあ・・・」

学校霊用の修学旅行の予算がとれないかとか真剣に話し合ってるし。

「とはいえ、さすがに霊能課はないじゃない？ だから六女につて。」

「うわー、そりゃすごいっすね。」

『ふむ、さすがに主の学校では、悪影響がありすぎるだろう？』

「・・・ま、そういう話もあったわね」

小さく笑つ心眼と美神さん。

まあ、もう一つの事実としては、いまだおキ又ちゃんの魂と体が同期しきっていないことがあるだろう。

そういう意味では六女に通うのは良いことだ。

六道女学院に通うようになって、横島さんとよくあうようになりました。

それは、

「おきぬちゃん、いっしょにいっしょ」

タマモちゃんと一緒に学校に行くようになったからです。

私は高等部でタマモちゃんは中等部ですが、校門までは一緒に行き帰りしています。

横島さんとも途中まで一緒に、よくお話するようになりました。

それがすごく新鮮でうれしくて。

毎日がうれしくて楽しくて。

そんななか、学校で冥子さんと会いました。







とはいえ、さすがに家につれていけないっしょ？

普段から銀にいがいるのに。

あのアイドル様は、何かというとうちを休憩宿泊所代わりに使うものだから、いつのまにかうちのおいに銀にいの匂いが染み着いてしまった。

酒は飲むしグチに潰れることもあるけど、あのアイドル様はやっぱりお兄ちゃんの親友で、迷惑をかけたくない相手の一人でもある。だから立ち位置を歪めたくないなあ……。

つつか、何となくだけど厄介な流れだよなあ……。  
いやな予感がするなあ……。

「タマモちゃん、シロちゃん。いつしよにおべんとうたべましょー！」

ああああ、おキヌちゃん、天然だわ……。

「……というわけで、もう、大騒ぎよ」

「あはははは、美神さんの人気は相変わらずやなあ。」

思わずその大騒ぎが想像できて笑ってしまった。

「おにいちゃん、人事じゃないんだけど。」

「ん？ なんだ、タマモも美神さんの知り合いだって言われてるのか？」

「ちがうわよ、横島忠夫GSの妹だっということ注目されてるの！」

「……なんで？ ワイはただの丁稚やぞ？」

思わずため息をついたタマモと銀ちゃん。

「だめやだめや、タマモちゃん。よこっちは昔っからこっや」「・・・私絶望しそう」

ふたりしてなぜか俺を暗い視線でみる。  
なにか気に障っただろうか？

「まあいいわ。お兄ちゃんがこっなのは、たぶん永遠に変わらないだろうし。」

「永遠はないやろ？ たぶん」

「銀にい、保証できる？ かける？ 私はこれからの人生のオアゲをかけてもいいわよ？」

「うわ、なんつう強力な自信や！」

「ふふふ、銀には何かかけられる？」

「・・・あかん、自信あらへん」

うーん、楽しそうだな・・・。

「あ、そういえば、よこっち。六女のクラス対抗ってなにやるん？」

「え？ ああ、たしか霊能で対人戦をクラスの代表三人を出して競いあう、だっ たっ け？」

「そうよ。・・・なーに？ 銀にい。女子高生がくんずほぐれつしてるのが見たいって？」

「あほいうな、踊るGSのロケで六女にいくから、そのときにあわせてクラス対抗やるっ ちゅうねん。そのゲストに参加してほしい言われたんや。」

わちゃー、という顔のタマモ。

「銀にい、頼むから私やシロねえに愛想良くしないでね」  
「なんでや。かわいい妹分やろ？」

「あのねえ！ 今をときめくアイドル様が仲良くしている女子中学生、十分スキャンダルでしょうが！！」

「せやかて親友の妹やぞ？ そんなんでスキャンダルいうんやつたら、今の事務所やめたる」

「私が学校で迷惑なのよ！」

「があーりん、よこつち、よこつち、タマモがくれたあ。」

「あほか、今のは銀ちゃんの配慮がたりんやろ？」

「があーりん、よこつちまで。」

「あんなあ、今の事務所パワーのおかげで、ウチに出入りしても写真撮られとらんやろ？ じむしよさまにかんしゃやないか？」

「・・・うー、でもなあ、かわいい妹分といちやつきたいのは兄貴分の夢やぞ？」

「はいはい、踊るGSのヒロインとなかよくしててね」

「・・・ああ、タマモまであんな二世ダイコンとくつつけるんかあ。」

「顔はいいじゃない、歌は下手だけど」

「顔はいいやろ？ スタイルは壊滅しとるけど」

「顔だけやぞ！ 声も、歌も、演技も、性格も最悪や！！」

ああ、銀ちゃんの泣きモード。

最近これが出るの早いな！。

聞けば今のヒロイン役は、某大物演歌歌手の娘だそうで、むちゃくちゃスポイルされて育てられたものだから、手が着けられないとか。

とはいえ、その娘を外すと業界的にひどい陰湿な目に遭わされることも有名で、採用し続けないといけなそうだ。

出せば人気の足を引っ張るし、出さなければ仕事の足を引っ張る。

なんというか、貧乏神そのもの。  
いや、本物の貧乏神をしってるけど、あいつに悪意はない。  
そのあり方自体、存在自体が貧乏神だけなのだ。

「なー銀ちゃん。がんばりや？」

「ああ、やっぱよこっちは心の友や」

涙目で見上げた銀ちゃんは、なぜかがっちりと肩を組む。

「つつわけで、今度の六女ロケは一緒にきてや？」

「なんでやねん!!」

クラス対抗戦のゲストとして私、美神令子が呼ばれたのはいいでしょう。

なにしろ業界の先輩だし、ね。

併せて近畿剛一君がきているのもいいでしょう。

踊るGSは協会一押しドラマだし、GS協会自身のイメージアップがねらわれているので、いろいろと協会関係とのみっせうなつながりをほしがっているから。

で、一応、うちの横島君が呼ばれていることも目をつぶる。

なにしろウチのホープだし、海外派遣までされた実績を持つ最若手なわけだし。

ただ、なんで私の隣じゃなくて近畿くんの隣で座ってるかな？

美神令子除霊事務所の横島忠夫君？

「!!」

私の殺気を感じて、ひきつった笑顔の横島君は、こちらに小さく

手を振ってみせる。

私も作り笑顔で手を振ると、私の表情からいろいろと読みとって近畿君に何かをささやく。

彼も苦笑いで彼を送り出した。

「み、美神さん、お待たせしました」

「あら？ 待つてなんかいないわよ？ 関西系アイドルユニットの横島さん？」

「もう、勘弁してくださいよ、美神さん。最近銀ちゃん、泥臭い業界の柵で結構ダメージ受けてて、可哀想なんすよ」

「・・・そうなの？」

「ええ。ほら、踊るGSといい、歌手としてもいい、ついでに中堅以下の女優やら歌手やらに絡まれて大変らしんすよ」

あー、確かにおキ又ちゃんがよく買ってくる週刊誌じゃ、いろいろと叩かれてるけど、みんな売名だったことはわかるし。

そりゃストレスよね。

だから親友を隣に置いて息を抜きたい、か。

かなしいかな、私自身にも覚えがある感情だけに否定しきれない。

「あ、おキ又ちゃんっすね」

「あら、ほんと。」

私たちが手を振ると、うれしそうにこちらを見て手を振るおキ又ちゃん。

わりと「シロ」っぽいわよね、あの子。

「ところで、ちゃんと奥の手を持たせてるわよね？」

「もちろんです。ルールにも抵触してませんって。」

「「ふふふふふふ」」

ああ、もうダメね、何のかんのいって、私たちっておキ又ちゃんに甘いのなんのって。

「うわ、本当に、横島GSと近畿くんって親友なんだな。」

学院で初めてのお友達、一文字さんは近畿君のファンなのだそうです。

踊るGSのファンでもあって、番組宣伝の時の横島さんの自然な絡みがかかり気に入ってるとか。

あの一件は近畿剛一ファンでも賛否に分かれることだったそうですが、今では自然に受け入れられているそうです。

横島さんの前で「親友」でいるときは、飾らない魅力がある、って。

近畿君、というか銀一さんの顔で楽しそうに笑ってる顔を見た回りの人たちも、ずいぶんと歓声を上げています。

でも、私は横島さんの笑顔の方が素敵だと思っただけどなあ。

そんな中、横島さんは美神さんの隣に座ります。

なんとというかあの二人が並ぶと、うれしい気持ちになります。

だから二人がこちらに手を振ってくれたので、私も全力で手を振りました。

「うっわー、おキ又ちゃん、ほんとうに美神さんと横島さんの知り合いなんだ。」

「はい、とっても大切な人達です。」

おキ又ちゃん、氷室キヌはマンガのような人だった。  
生まれは300年前。

江戸時代真つ盛りの世に生まれ、そして故郷のために人柱になった。

が、その三百年後、現代で運命の出会いをした。

美神令子GSと当時見習い助手だった横島忠夫さん。

この二人と出会い、そして300年の人柱の運身から解放たれる。

死者蘇生に近い復活からしばらくして幽霊をしていた頃の記憶とともにネクロマンサーとしての才能に目覚め、そして六女に入学してきた。

最初は色々と手こずっていたけど、今ではクラス代表戦に選ばれるほどの優秀さ。

はつきり言えば勝てねえ。

そう思っつつぶやくと、氷室キヌ、おキ又ちゃんは言う。

「一文字さんはたぶん、学ぶこと、知ること、そういうことが当たり前になってしまっ忘れてるんですよ。」

「・・・なにをだい？」

「生きて前に進むよころびを、です」

正直に言おう、ぼけぼけとした天然なだけな子だと思っていた。  
でも違っていた。

しゃべることも歩くことも、すべてを喜びで感じている、そんな子だったんだ。

それ以来、私もがんばった。

そして、私もクラス代表に選ばれた。

・・・全部おキ又ちゃんのおかげだよ。

「さあ、いきますわよー!!」

クラス代表筆頭がいやな笑いをしている。  
名家とか名門とか、そういうことで胸を張る気に入らない奴。

「はい、じゃあいきましょう」

にこやかな笑みのおキ又ちゃん。

・・やっぱ、おキ又ちゃん最強じゃね？

開会式で、六道夫人によって美神さんが紹介されると、「おねえさま」コールがすごいことになった。

さすが霊能女子あこがれの的っつか？  
で、続いて銀ちゃんが「近畿剛一」として紹介されると会場が割れんばかりに沸き立ち。

さすが現役アイドル。異性熱気がすごいわ。  
すげーなー、と笑っていると、すすすつと近づいてきた冥子ちゃんと夫人よって演台に引つ張り出された。

「はい、最後に、今年のGS試験主席合格の横島GSです」

まあおまけみたいなものさ。

声援なんかなくても泣かないからな。

そう思ってたのに、なぜか声援がきた。

なんか、「リアル横島」とかいう声も聞こえた。

とりあえず平均的な挨拶をして元の場所に戻ると、美神さんと銀ちゃんに挟まれた。



「さすがよこつち、おいしいなあ。」

なにがだよ、もう。

「横島君。一応審査員なんだから、しっかりと見てあげなさいね。」

うっす、仕事に精励します。

試合を見つつしばらくして、六道夫人がやってきた。

「どうかしら、みなさん？」

「こついう場でリアクションを間違えないのは芸能人。」

「いやあ、迫力がありつつ真剣身が薄れない、いい芸の肥やしにさせてもらいます」

「そう？ だったらうれしいわ。おばさんもドラマのファンなのよ？」

## 第十一話（後書き）

わりと銀ちゃんが壊れてますが、イメージは損なっていないと思います。

ええ、もちろん妄想ですw

次回1/21アップ予定

## 第十二話（前書き）

えー、いろいろとございますが一言。  
頑張ってます、公私共にw

## 第十二話

うふふ〜と笑う六道夫人は、こっちに視線を動かした。

「横島君はどうかしら?」

「いやー、こついう場は素人なんで……。」

「いいのよ〜、そついう意見も聞きたいからよんだのよ〜?」

まあ、いろんな理由があるんだろうけど。

とはいえ耳にいたい意見は聞かないと言つことではないらしいので、言つてみることにした。

「なんだか、GS試験を意識しすぎてて、GS実践とはかけ離れすぎてますよね、これ」

となりで美神さんが「わちゃー」という顔をしている。

「やっぱり〜現役の人には〜そう見えるわよねえ〜。」

なぜか六道夫人は「にんまり」。

え、え、なにになに?」

そんな俺の耳へ小声でささやく。

「……あんたも夫人の罠にかかったのよ」

え、と美神さんの顔を見ると、美神さんは苦い笑顔。

「……じゃあ、横島君は、どついたらいいと思つ?」

振り向いた先の夫人は、先ほどとはちよつと違う笑顔。

「素人考えでいいですか？」

「いいわ、だって横島君は、冥子を一人前にしてくれた人よ  
？」

では忌憚無く。

「まず、プロGSによって吸引された低級霊をオカルト廃棄物処理業者じゃなくて学院で引き受けて、実際に霊と対面すべきです」

「危険じゃないかしら？」

「危険は承知でしょう？ 命のかからない霊能に成長はないっす」

「たしかにそうだけど、よそ様の娘さんにむちゃはいえないわ」

「校内で安全に育てて卒業させ、実践に放り出して死ぬ目に遭わせるのと、校内で管理された危険で慣れさせるのと、どっちが生徒のためになるでしょうか？」

「・・・ちよつと、みみがいたいわ」

「あと、悪霊ではない幽霊や妖怪などの人外と対話させ、交渉実習を行うべきです。」

「それはどういふことかしら？」

「なにも破魔札や神通棍でしばかりが除霊じゃありません。自意識や記憶を持つ霊なら交渉可能ですし、そういう経験をしたことがない人間には選択肢にもなりません。」

「・・・さすが、最年少Bクラスかしら？」

「すみません、子供の意見をベラベラと。」

「いいえ、おばさんはそう言う真っ直ぐな意見を聞きたくても聞けない立場になってしまったの。だからすごくうれしいわ。」

にっこりほえんでその場を去った六道夫人。

深いため息をついた俺の頭を、美神がなでつけた。

「ちやんと考えられるようになってるみたいね？」

「ありがとうございます、美神さん」

「さ、そろそろおキ又ちゃんのチームの試合よ。応援しましょう」

「あー、おれら審査員つすよね？」

「審査は公平よ？ でも応援ぐらいいいじゃない。大切な仲間なんですから」

「・・・そうっすね。」

やっぱり横島君は美味しいわ。

彼の意見は、大ざっぱながら的を射ていた。

GS合格者の三割は六道といわれているけど、五年後定着率はきわめて低い。

いや、最低ともいえる。

やはり実際の除霊作業に従事していないせいで、除霊自体に違和感を感じて辞めていってしまうのだ。

続ける辞めるは本人の判断次第だけれども、それでも定着率が低いのは考えものだ。

まさにその部分を直撃され、さらには改善案についてまで提示されては引つ込みがつかない。

人外との対話というのは些か突飛だが、それでもGSとしての肥やしになることは間違いない。

先ほどの近畿剛一もいつていたではないか。

どんな些細なことでも「芸の肥やしにさせてもらおう」と。

酷い罵声も叱責も力に変えてきた私が、実に有効な提案を受けたのだ。力にしないのはおかしいじゃないか。

ふふふ、やっぱりあの感性、ほしいわ。

冥子も気に入ってるみたいだし、なんとかして取り込めないかしら？

「……もちろん、タマモちゃんやシロちゃんは使えないわ。さすがに私も遠慮しちゃうもの。」

でも、おキ又ちゃんや令子ちゃんはいいわよね？

おキ又ちゃん達のチームは、一人一人が突出しているけど、連携はバラバラだった。

気合いの入ってる子とおキ又ちゃんは連携する気満々なんだけど、黒髪優等生がバラバラにしていた。

たぶん、色々なことを誤解しているんだと思う。

そのことを美神さんにささやくと、美神さんも苦笑いでうなづいた。

「……あの子ぐらいの頃が一番危ないのよ」

修行していた事が身になり力となり、自分では万全に発揮できていると盲信している頃、だそうだ。

が、もちろんそれは井の中の蛙、であることを実感する前のことなので、早々に鼻を折られなければならない、そうだ。

「だから、彼女たちの鼻を折ってあげなさい」

「え？」

「あら、聞いてない？ 現役GSとの模擬戦。」

「……きいてませんよ？」

「私と横島君が組んで、あとは霊能科ん十人体制」

「……のっぴよっぴよ」

そりゃもう、すごいの一語で。

美神さんとよこつちが二人なのに対して、霊能科女子二十人で挑んでいながら、まったく寄せ付けない強さ。

いや、上手さ、だった。

お互いの視覚を予め熟知しているかのような連携は、前衛も中衛も寄せ付けず、十秒単位で前線を崩壊させていった。

全学年最優秀チームになったおキ又ちゃんのチームも全く歯が立たず、一合もしない間に吹っ飛ばされていた。

全く次元の違う強さに誰もが心を折られてゆくのがわかる。

「おキ又ちゃん、いくわよ!」「おキ又殿、いくでござる!」

突如観客席から飛び込んだ二人の陰を得て、おキ又ちゃんは息を吹き返す。

「シロちゃん、前衛。タマモちゃん幻覚と狐火!」

「わかったわ(でござる!)」「」

二人の乱入に驚く周囲だったが、織りなされる乱戦に心奪われる。

「あめーぞ、シロ。簡単に師匠を超えられると思うなよ?」「大丈夫

夫でござる! 先生の視線を釘付けでござる!」「がぁー!」

おれはロリじゃねえ!」

「横島君、集中して!」「うつつす!」

なんとこのだろう、その恐ろしいまでに緊張感のない会話でありながら、緊迫感のある対戦。



相手の弱点や癖を知りつくしている同士の足の引つ張り合い。それでいながら高度な乱戦。

あまりに高度すぎて吸収できず、ただ呆然と魅せられたそれは、突如終わる。

おキ又ちゃんが霊力切れで倒れたのだ。

「ああああ、おキ又どの〜〜〜!!」

駆け寄るシロちゃんだったが、それを合図に終わりが告げられた。

「は〜い、おわり〜、勝負がどちらの勝ちかはわかるわね〜?」

まあ、そんなもの素人でもわかる。

未だ息切れしている生徒達に比べ、よこっちは余裕の表情。

「みなさ〜ん、これが超一流とみなさんとの力の差で〜す。」

追い打ちをかけるような学園長の声に落ち込む学生達。

「では〜総評してもらいましょう〜」

理事長の横に立つ美神さんが苦笑いで言葉を放つ。

「えー、良いところ無しのみなさんに聞きます。なんで一斉にかかってこなかったの?」

「……………は?」「……………」

「さすがの私と横島君でも、二十本からの腕が全方位からきたらビビるわよ?」

「……………は?」「……………」

「ねえ、横島君。あなただったらどうにかなった?」

「そうっすね、一撃までは耐えますけど、それ以降はたこなぐりっすね」

「「「「「は?」「」「」」」」」

思わず目が点になる生徒達にほほえみかける美神さん。

「卑怯とかそういうのは、生き残ってから考えるの。それが美神流よ?」

そのほほえみに頬を赤くする生徒多数。

ただ、おキ又ちゃん達は冷や汗をかいているようだった。

「かの新撰組副長は、つねに三対一でかかれと教えていたわ。もちろん、武士道ってやつからみれば外道も外道だけど、生き残ることに関しては天才的だといえるわ。」

美神さんが視線を周囲に送ると、生徒達はちよつと暗い顔になる。やはり生々堂々っていうのが気持ちいいらしい。

「・・・あまり納得してないみたいね? じゃあもう一つ。なんでシロとタマモが参加して、試合が続いたと思う?」

あ、という顔になる生徒達。

でも、氷室キ又の特異性がそれを忘れさせていたのだ。

「簡単よ。おキ又ちゃんは、シロとタマモを自分の道具として登録していたのよ。」

「え?」

「だって、今回の試合は『学院内のモノなら持ち込み自由』でしょ?」

だから自分の「犬神」として今回だけ登録したのだ。  
そう、シロもタマモも「犬神」としてUKに派遣された実績のある優秀な存在だ。

ゆえに、なんらルールにふれない。

学院外から一切持ち込んでいないから。

あまりの事に言葉をなくす生徒達だったが、一人が爆笑した。

「……くくく、あははははは！ やられた、やられたよ、おキ又ちゃん！」

それはおキ又ちゃんのチームの、一文字さん。

「ふふふ、そうですね、ほんとうにやられましたわ」

もう一人は委員長タイプの子。

その笑いの輪は、会場全体に広がった。

「あ、そうそう、もう一つ。」

美神さんは数枚の紙を出して笑った。

「敵を知り己をしらば、百戦あやうからずっていつけど、私たちの登録装備ぐらいは調べておくべくだったわね」

受け取った一人の顔がゆがむ。

「あのお、この『近畿剛一』ってなんですか？」

「ああ、こっちがたこなぐりになったら、身代わりにするための盾よっ」

ぎゃー、人事ややなかつたんかー！！！！！！

美神さんの非道は学院内に響きわたったけど、それで人気は落ちるわけではなかった。

加えてギャグった銀ちゃんを見て、新規のファンが増えたぐらいだ。

その辺のバロメーターは「猫」を見ているとわかる。

真っ白だった猫が、いろんな斑模様になってるから。

この斑模様が色々と安定すると、再び白くなるんだけど、今のところは斑のままらしい。

そんな話を理事長室でしていると、ノックが響く。

理事長が「どうぞ」と声をかけると、重厚なドアがゆっくりと開く。

そこに立っているのは、おキ又ちゃんと一文字さんと弓さんだった。

おキ又ちゃんはハニカんだ様子だったけど、後の二人は美神さんに緊張してかガチガチだった。

いや、銀ちゃんに緊張してるのかな？

「美神さん、紹介しますね。お友達の一文字さんと弓さんです」

真っ赤になった二人が自己紹介すると、晴れやかな笑顔で一人一人に握手する美神さん。

気合いはいつてるわね、私も昔はそんな感じだったわよ？ と一文字さんの肩をたたく。

あなたは優秀だけど頑迷だわ、その殻を破れた瞬間にあなたは生まれ変わるわ、がんばって、と弓さんの手を取る。

ふたりともポーズとなつていているのを見れば、美神さんファンであることは間違いないんだろうなあ。

なんともほほえましい限りだ。

しばらくポーズとしていた二人だったが、瞬間的に我に返る。

「ご指導ご鞭撻ありがとうございます！と二人で頭を下げた。

「よこつち、女子校つて体育会系なんやな？」

「まあ、みたまんまやろ？」

そんな姿を突如写メするおキ又ちゃん。

「え、え、なにになにおキ又ちゃん？」

「あ、えつと、そのー、おーだーがありましてえ」

「お、おキ又ちゃん、だめだめ！！」「ひ、ひむろさん、だめですわ！！！」

急いでおキ又ちゃんの口を押さえる二人。

なんとなーく解ってしまった。

「なあ、銀ちゃん。とりあえず、しらんかったことにしてやれんか？」

「まあ、しゃあないやろ。ただし、学外には絶対ださんでや？」

「は、はい！！」「」

後日、タマモからおキ又ちゃんが「勇者」と呼ばれていることを聞いた。

学校でタイガーから詰られた。

俺が六女に行ったのがばれたからだ。

友達がいがないと詰るタイガーだけど、最近モデルのお姉ちゃんたちとご飯を食べに行っているとおもえんな。

「な、なんでそのことを・・・」

はじめは銀ちゃん狙いだっただモデルのお姉ちゃんが、最近はタイガーと暮らしたらしいじゃないか？ GSなんて仕事辞めてくなんて・・・。

「そ、そんなことはないですジャ！ 秀美さんも祐子さんも、仕事は解ってくれてるんですジャー！！」

ふうん、秀美さんとか祐子さんっていつのか。

・・・だそうですよ、みなさん？

「・・・は、はかられたのですジャー！！！！」

男子有志に引きずられてゆくタイガーを後目に、机に向きなおる俺。

「タイガー君にも春がきてるのねえー。」

「銀ちゃんの話だと、業界でもめてるときって、業界外の異性に引かれるんだってよ。」

瞬間に出来た女の壁。

「よ、よ、横島君、それホント?!」

「そ、そ、それって、フナツプの亜鳥君もかな!?!」

「ぎよ、ぎよ、業界外つてどの範囲!？」

「…………おしえて!」「…………」

こえーよ、必死すぎだつてばよ、おめーら!!

所詮引かれるつてだけで、交際とかはべつだよ、おまえ等だつて学校がつかいと、町に流れてだべつてナンパされてつてかんじだろ? 見た目だけの軽い男をからかつて、気力充実つて流れだろ?

「……………」「…………」

なにも芸能人が遊んでるつて訳じゃねえとおもつぞ?

ただ、芸能人とほかの人間だと本気度が食い違うから、軋轢がうまれんだろつな。

もちろん、ほかのプロだつて同じ事だぜ。

前に「金成」つていう金持ちが美神さんにプロポーズしたときなんか、「GSなんていうインチキ商売は辞めたまえ。そんなことをしなくても金ならいくらでもあるから」つていったんだよなあ……。

「で、美神さんはなんていったの?」

「たしか、GSつて仕事に私は誇りを持つてる。その誇りをけがされて黙つていられるわけがないわ、だつたかな?」

「……………へえ」「…………」

近畿くん熱の高かつた女子が、感心したように声を漏らした。

うーん、さすが恋バナは利くなあ。

「ね、ねね、横島君。美神さんつてすごくきれいじゃない?」「恋人とかいないの?」「やっぱりかっこいいひととか知り合い多いわよね?」

まあ、確かに美形率は高いわな。

俺がその率を下げてるけど、知り合う男の大半が美形だつづうのは恐ろしい話だわな。

「そっかー、じゃあよりどりみどり？」

「つつか、美神さん。男より仕事をとるタイプだぞ、今のところ」

「えええ、あれだけ美形でスタイルよくて、それで仕事？」「信じられない。私だったら・・・」「そうよねえ、ほんとうにもったいない」

とはいえ、美神さんの「あれ」は、いわば戦闘服。

部屋の中とかでは、結構ゆったりした服とかきてるんだけどね。

そのへんはまあいいとして、やっぱ、恋バナかあ。

そろそろ苦痛になってきた。

「さつとと、そろそろタイガー救出にいくかあ。」

「あら、もう助けに行くの？」

「もうちよつと放置してもいいんじゃない？」

「今日のリーダーはタイガーまで当たるんだけど、欠けると俺にお鉢がくるじゃん」

「横島君、ひど〜」「結構ひどすぎねえ〜」

きやらきやらと笑う女子を背中に屋上へ走る。

やべー、そろそろ死んでるかな？

無事なにもなく授業を終えて帰ろうとしたところで、校門に長い黒塗りの車が止まっているのが見えた。



「よ、横島さん、もしかして……」

ひきつったピートの声に、俺も冷や汗を流す。

「あー、愛子。おれら裏門から逃げるから……。」

「……ピート君、タイガー君、横島君。無事でね」

「うわー、なんだか死亡フラグっぽいからやめてくれえ……。」

「狙いは横島さんだけだといいですけどねえ。」

「裏切るのか、ピート」

「わっしらを狙う意味がないですけんのおー」

「くそ、余裕かタイガー」

そんなバカをしているうちにタイムアップになってしまった。

「「よ……し……ま……く……ん」

でたな六道親子!!

隣でピートとタイガーは露骨に安心してる。

「あ、どうも、本日はどうしました？」

「やだわ、横島君と私たちの間で、そんな他人行儀なことを言  
つたら」

「そうよ、忠夫君。そんな冷たいこというと、悲しくなるわ」

ふわっ、まずいまずいまずい！

「いやいやいや、一応、世間一般の常識の範囲ですから、冷たくな  
いですから、仲良しですから！」

「あら、うれしいわ。だったら、この後つきあってもらえるわ  
よね？」

「えーっと、一応、本日は仕事の予定が入っております……。」  
「ああ、それなら大丈夫よ。雪ちゃんが代わりに行ってから  
」

「……えっと、それは美神さん経由の仕事の依頼ですか？」

「一応令子ちゃんはOKしてくれたわ」

最低レベルで命の保証がある、ということか。

「で、中身は？」

「ナルニアの心霊兵器の売り込みを、正面からたたき壊してほし  
いの」

で、俺がなぜ呼ばれたかと言えば……

「ファンネルで真つ向からたたき伏せろ、と？」

「さすが横島君、話が早いわ」

だったら……。

「ピートとタイガーも入れましょう。もちろん、依頼料も上乘せで」

「……いいわ、ピート君もタイガー君も結構使ってくれてるか  
ら、安心できるわ」

「よ、横島さん、ヒドー！」「ひどいのじゃあ！」

「あー、今回の仕事がつまく行けば、報酬プラス、オリジナルファ  
ンネルをつけよう」

キラリとひかる二人の目。

「や、約束ですよ！ 聖魔増幅のAで……！」

「げ、迎撃、迎撃強化のBで、Bで頼むのですジャ！」

うーん、さすがにカスタムしまくってるだけあって、注文が細かいな。

「じゃあ、みんなでたたきふせましょ」

「「「おおおお！」」」

ロハで帰国出来るというので、怪しげな心霊兵器の売り込みに便乗して帰ってきた。

で、仕事と言うことで富士演習場まできたのだが、なぜか試験対象に息子が現れた。

「ご紹介しますわ。最近売り出し中の新人GSにして、ファンネルシリーズの基礎理論提唱者の横島GSです」

六道婦人の紹介に、忠夫は「あちゃー」という顔。

「夫人、そのへんは伏せてもらう約束でしょあ？」

「あらあら、ついうっかり」

まあ、腹グロ六道夫人のことだ、何かと噂の混迷していたファンネルシリーズの開発の一部開示の代わりに開発者を引っ張りだしたと言うところだろう。

「あとは、実地使用研修をしてくれる若い二人もご紹介します」

一人はハーフバンパイアで忠夫のクラスメイト、ピエトロ・ド・

ブラドー。

もう一人は、精神干渉のスペシャリストにして忠夫のクラスメイ  
ト、タイガー「虎吉」。

次世代GSと言われる彼らこそ、現在のGS業界を引っ張ってい  
るといつてもいい、らしい。

ひととおり紹介をし終えた六道夫人は、にこやかな笑みのまま、  
心霊兵器を持ち込んだバロックグループを見つめる。

彼らが持ち込んだ心霊兵器は、予め霊力を注入された武器で、神  
通棍や呪符マシンの廉価版だ。

予め霊力を込められているので、素人でも使えるというのが売り  
らしいが、素人が心霊兵器を必要とするのかというのが大きな疑問  
だ。

が、霊力を込められた兵器は、威力が大きいと誤解されているせ  
いで、ICPOを中心に引く手あまた、の予定だった。

## 第十二話（後書き）

ちよつと、強すぎですかねえ？

とはいえ、YOKOSHIMAなのであきらめてくださいw

次回は1/28アップ予定です

## 第十三話（前書き）

当然ですが、それなりに頼れるようになった横島君は、それなりに人気がありますが過去の影もあり爆発はしませんw

## 第十三話

が、当ては大きく外れた。

このほど六道から販売された簡易式神「ファンネル」は、その性能と汎用性、そして破壊的な価格の安さで世界的なヒットを約束されている。

ICPOオカルトGメン各支部はほぼ全域で導入を決めているし、民間GSの多くも導入を検討している。

そう、全世界規模で販売が決定しているのだ。

そんな折りに、改良版心霊兵器など売れるわけがない。

時期もタイミングも悪かったが、なによる運が悪かった。

なにしろファンネルの基礎開発を忠夫がしているというのだから。

そりゃ、一癖もふた癖もあるに違いないだろう。

「局長、正面から戦っても勝てそうもありませんぜ？」

「だまれ、商社。おまえは我々が勝利した後の販路でも考えている」

まあ、考えるだけならいいけどな。

そんなわけで、早々にその場を離れ、いとらしい娘へ電話をする俺だった。

なんとというか、かわいそうになってきた。

ナルニア製の心霊兵器という奴は、そこそこ出来がよかったはずなのに、ファンネルCの防御結界を越えることが出来なかった。

呪符マシンガンの収束率もよかったけど、ファンネルAの自動迎撃の前では紙だった。

そして神通棍を構えた兵たちは、ファンネルBの特攻に全滅していった。

その間、俺たちは茶を飲みながら談笑。  
ナルニア兵たちは、悔しさで血の涙を流していた。

「んじゃ、カスタムファンネルも導入するか」  
「待ってましたのじゃ！」

タイガー用に調整中のファンネルBを起動。

「準備OKです。」

ピート用のファンネルAを起動。  
そして自分専用の「AB」を起動。

「さあ、全滅だ」

ちよっとやりすぎかしら〜？

そんな風に思える。

正直に言うと、ケチヨンケチヨンにするのはOK何だけど、さすがに向こうが隠していた霊能者まで引っ張りだしてしまったのは、ちよっと行き過ぎだったわ。

でも、霊能がなくても使える心霊兵器の売り込みで、最大戦力の人  
が霊能者じゃ意味がないのよね。

そのへんがあるので、外交問題にはならないと思うけど、しばらくは微妙な関係になりそうだわ。



国どおしの関係はさておいて、ファンネルのプロモーションとしては最高だった。

攻守に優れ、結界を張り、霊は増幅だつてこなしてしまう。まさに万能。

これぞ、伝説の霊具ともいえる。

伝え聞く菅原道真公の権能を人工的に再現したようなもの。

ここまでされちゃうと、ほんとうに娘の一人や二人を差し出さないといけない気がするわ。

冥子だけじゃあ、満足してもらえないわよねえ？

うーん、フミさんもつけようかしら？

まいった、むちゃくちゃな臨時収入だ。

実働五時間で三千万ずつもらってしまった。

このままにも言わないとまずいと思ったので、正直に美神さんに申告すると、

「ふーん、だったらその分収入に入れとくから、税金はうち経由で払うときなさい」

って、全額くれた。

確定申告とか色々なことがあるので、無駄使いはしないように言い含められたけど。

・・・なんか、この時間って色々と変わってるけど、一番変わったのって美神さんだよなあ・・・。  
がめつくないし。

『（一番変わったのは主だぞ）』  
「（え？そうか？）」  
『（少なくともセクハラ活動しておらんだろ？）』  
「（あー、そういえば、そうかな？）」  
『（それが現在の高評価の原因だ）』  
「（え？ それだけで？）」  
『（十分だ！）』

・・・もしかして、美神さんにいつまでも丁稚扱いされてたのって、自分のせいだったのか？  
考えたくないなあ・・・。

### 閑話休題

全額教会の補修費にしようとしていたピートと、無茶苦茶な使い方しようとしていたタイガーを止めて、とりあえず六ヶ月債の短期に預けることにした。

なにも管理しなくても利子だけは増えるので安心だし、ある程度、税金で目減りする分を回収したいし。

預金をしていると融資も受けやすいと言うことで、教会の補修は銀行から融資を受けて実施された。

で、借金だからと考えると神父もわりとがんばるし、ピートもずいぶんと経済感覚が磨かれつつあった。

タイガーも全額風俗に突っ込もうとしていたので、強制的に止めた。

バカな使い方はよせ、ということ、最近通っているリーズナブルな飲み屋につれていった。

きれいな女性が隣に座るだけの店だけど、みんな気が良い女の子

なので、暴走気味のタイガーでも相手にしてくれる店だった。  
存外気持ちよくなったタイガーは、貯金を始めた。  
今度は自分のお金である店に行く、と気を張っている。

貧乏だからわかるけど、金なんかあればあるだけなくなってしまうものだ。

だったら、イヤでも使えないところに入れて利殖してしまった方がいい。

そのあいだ必死に働けば、働いた以上の収入になって帰ってくるんだから。

「うーん、横島さんってしつかりしてきましたよね。」

「そうじゃなあ〜、いろいろ世話になつとるしなあ〜」

「ん〜、そうか？」

昼休み、弁当を食べながらそんな話をする。

タマモの分もあるので、出来るだけ作ることにしているんだけど、最近結構楽しくなってきた。最近結構楽しくなってきた。

「ねね、横島君、そのオアゲもらってもいい？」

「うわ、卵焼き絶妙」

「冷凍食品使ってないんだねえ・・・」

というように、除霊委員以外の人間も机をつなげることが多い。

「持ってくるのは良いけど、バターよろしく。」

「うーん、横島君レベルのモノを作ってくるのって無理かも」

「お母さんよりおいしいしね」

「そりゃ無理もないだろ？ おまえら母親に「おいしかった」って言ったことあるか？」

タマモは毎日おいしかったとかまずかったとか好みとかはなすぞ？  
そういう情報が無いと、なにに向かって作って良いか解らなくなるんだよ。

「へえ……」

思わず感心する愛子や女子。

もちろんそれが全てとは言わないけど、自分が彼氏の弁当を作った時を考えれば解るだろ？

「……うわぁ……」

思わず顔をゆがめる女子多数。

「一つ一つを丹誠込めるつつつのは基本だろ？ よく聞く一個作るも二個作るも一緒なんて、俺には信じられないよ。やっぱ、相手が見えないと作れないしな」

やっぱ、母親に感謝だろ？

そんな話で締めくくったところで、廊下がざわついていることに気づいた。

みれば制服を着ていない女子が立ってる。

「なんだ、またピートファンか？」

「・・・いえ、もしかすると横島さんじゃあ？」  
「バカ言っつなって・・・避ける、ピート!!」  
「!!」

女が連射する弾丸をソーサーで天井に弾く。

「死ね、この邪悪なる吸血鬼め!!」

ピンを抜き投げる手榴弾を足の甲で受けて外に蹴り出す。

「みんな、ふせろ!!」

愛子を抱え込み俺が伏せると、会わせるようにみんな伏せ、次の瞬間に爆発が響いた。

「「「「「きゃー！！！！！！」」」」」

悲鳴が渦巻く中、俺は女に向き合った。  
そして相手がアンヘルシングだと気づく。

「あなたは、なぜその男をかばうのですか!!」

「うるせえ！ この大量殺人未遂が!!」

「些末なことです！ この吸血鬼を放置すれば、何十倍もの・・・」

なにいつてるんだ、こいつ、というのが正直なはなし。

というか、こういうやつに正面から四つに組むようなバカはしな  
いのが美神事務所クオリティー。

<タイガー、幻覚>



「僕が牽制しますので、後詰めはタイガーさん、お願いします」

「わかったのジャア。」

「じゃ、おれは足止めだな」

「はい。」

「「「じゃ、いこうぜ。(のですじゃ)」「」」

なんというか、すごくカッコいい。

それが最後までみていた私たちの感想だった。

踊るGSみたいなドラマとは全く違うリアル除霊は、私たちの想像の斜め上に行くもので、ずっと目を奪われていた。

幻覚を見せて、私たちを攻撃対象から外したタイガー君。横島君の横で携帯電話を後ろ手で操作するピート君。

そしてそれを感じつつ、言葉による除霊を進める横島君。

私たちには解らないレベルで話が進み、そして最後には女性が倒れた。

これでおしまいか、と思ったところからが本番だった。

霊的な攻撃をする横島君とピート君はもちろんのこと、私たちを守る盾となつて、一步も動かないタイガー君も格好よかった。

そう、彼らはかこうよかったのだ。

「吸引！」

懐からだしたお札で、横島君が何かを吸い取ったとたん、周囲の雰囲気が変わった。

「お騒がせしましたのですジャ。現状完了でしジャ」

その声に教室中が沸いた。

三人の学生GSにみんなが群がりそして感謝を告げる。

そう、私たちは生き残ったのだから。

「あー、そろそろ事情を聞かせてもらえるかな？」

教室の入り口に現れた、長髪の美形青年が苦笑いでこちらをみている。

「あ、西条さん、ご苦労様です。」

「わざわざすみません」

「ご苦労ですジャー」

彼らの話だと、どうやらオカルトGメンの超エリートらしい。

クラス女子が色めくかと思っただけ、やっぱり自分のクラスの若手GSの方が気になるらしい。

「被疑者は、アンヘルシング。大量殺人未遂です。あと、とりあえず取り付いてた妄執はこの中です。」

さつきのお札を渡す横島君。

「・・・君たちの活躍には申し訳ないが、最悪政治的な取引が行われるおそれがある」

「それでも、このバカ娘には薬の一つやふっつはキメるんですよね？」

「・・・それも難しい」

「だったら、向こうさんに言うてください。ダチに手を出されて黙



っているほど「横島」は優しくないぞ、って。「わかった、とりあえず通しておくよ」

本気で怒っている横島君を、私たちは呆然とみていた。

後日、送検されたアン・ヘルシングだったけど、案の定というか何というか、悪霊に取り付かれていた状態だったということで、責任能力なしと言うことに収まった。

あらかじめ西条さんから言われていたことだけど、納得しがたい話だったので、俺はぶーたれていた。

当時回収された武器の中には、任意の人間を無理矢理外から操る道具なども発見されていて、そのまま使われたらどうなっていたかを考えると、ふつふつと怒りが盛り上がってくる。

「・・・もういいじゃないですか。」

ピートが笑っているんだし、と愛子も言うのだが、ああいうでかい家というのに気を許すと、後々痛い目に遭うものなんだ、解ってるだろ？ 六道とかで、と俺が言うと、ピートもタイガーも青い顔になった。

それに、向こうはピートの優しさに付け入っている面がある。子供の頃から知っているピートなら、穏便に済ませてくれるんじゃないか、という甘えだ。

だから「横島」が許さない、と言っただけれども、さすがにペーパーGSの名前じゃ意味がなかったようだ。

調子に乗りやがって、とムカついている。

「僕は、横島さんが自分のことのように怒ってくれている方がうれしいんですけどね？」

「あたりめーだろ、ダチの命をつけねらってたんだぞ？ それも実家は黙認してた。年単位でだ。退治できたらそれでもOKとか考  
えてるのが許せねえ。」

「横島君には、そういう顔は似合わないんだけどなあ……。」  
「……あ、すまん、ちょっと黒くなってた」

たしかに俺らしくない。

基本、美人とは仲良く、という方針なんだけどなあ。

とはいえ、あのアン＝ヘルシングには前の「時」に痛い目に遭わされた後でも詫びもなしという事で、いい印象がなかったのも確か  
ま、気にする必要もないし、関わるつもりもないけど。

でも、思いのほか実家力が強いのを目の当たりにすると、警戒心  
もあがってしまう。

そのへんは、ほら、美神家とか六道家を目の当たりにしているか  
らなんだけど。

数日後、タマモからお袋へ電話するように言われた。  
伝言がある、というか話し合う必要があるそうだ。

コレクトでも良いというので、ナルニアに電話するとお袋の第一  
声。

「おまえ、ヘルシングをへこませたんだって？」

「大量殺人未遂と当主の妄執を浄化しただけだぞ」

「……その件で丁重な詫びと調停の願いがきてるよ」  
「娘から？」

「じじいからだよ」

「じゃあ、蹴ってくれねえか？俺が怖いから親に頼んで許させよ  
うつつ」力「目当てのやり方がきたねえだろ？」

「まあ、あんたならそう言うと思って、蹴った上で本人とやってく

れって言ったけどね。」

「・・・本件に「横島」は関わりませんって?」

「いいや、「次期」の判断を全面的に肯定するってね。」

そりゃ、無茶苦茶うれしい限りだ。

「ケツはもってやる。やるなら全面的に、だ。糞るならケツの毛までだよ、忠夫。」

とりあえず、このコレクトの料金ぐらいは糞らないとな、と笑って見せた俺だった。

三日ほど休んでいた横島さんが登校してくると、クラスは沸いた。なにしろ、最近話題騒然の校内ヒーローだから。

突然おそってきたアンちゃんを正面から押さえつけた上で除霊するという行為は、学生という立場から見れば非日常の象徴であり、その話をするだけで、自分もその世界に入ったかのような錯覚を覚えるものだったから。

そのときに僕らが交わした指信号は流行り、校内中に広まってしまったぐらいだ。

横島さんが教室には行った瞬間にみんなで指信号で

<良好 合流>

とサインした瞬間、彼は大笑になった。

<最高 全員>

横島さんの指信号に、クラスが沸いた。

「で、なにしてたの、この三日間？」

「ん？ 喧嘩」

横島さん曰く、正々堂々正面から喧嘩していたそうだ。ヘルシング家と。

思わず声を上げそうになった僕たちを手で制して横島さんは言う。正々堂々と戦うことに家の上下なんかないし、政治的に手が長いことなんか関係ないんだ、と。

実際、いろいろな手段でもみ消しているんですが、というと、横島さんは笑う。

「もみ消さなくちゃいけないことってのは、無茶なことなんだよ。金と圧力なんてものはいつまでも続かないしな」

世界の各方面からジャブのように嫌がらせを続け、最終的に向こうから直接「終息」のための条件交渉がきたそうだ。

それも、アンちゃんが。

釈放されたときは意気揚々としていた彼女だったが、自分が鈍なことをしてきたかを克明に思い起こさせられ続けて真っ青になっていたという。

あの、横島さんがよくぞここまでというはなしだったけど、教室に現れたアンちゃんがみんなの前で全身をおるような礼をしてお詫びを朗々と言う姿は別人のようだった。

しっかりと謝り、そしてクラス中から許された彼女は、最後に僕らの方へやってきた。

「ピエトロッド＝ブラドーさま。幼い頃からの失礼の数々、今更お詫びしようがございません。ですが、ですが、以降何かのご縁がご

ございましたら、全霊をもってお返しさせていただきますので、今はお目汚しをお許しください。」

自信満々だった彼女は、ベコベコにへこまされていた。

彼女の人格すらへし折るかのような行為が、なぜ横島さんにできたのか、心底恐ろしく思ったのですが、その疑問が瞬時に解消されました。

「どうだ、謝ったらすつきりしただろ？」

「……はい。」

頬を赤らめ、目を潤ませたアンちゃん。

なでる横島さんの手をうれしそうに受け入れる彼女をみて、おもわずため息のでる僕ら。

「おまえさんは、妄執に初恋を利用されただけだ。それを利用したヘルシング本体は浄化される。安心して帰れ。」

「……あの……。」

ため息混じりのアンちゃんの声は、切なさもある種の予感を感じさせるものだった。

あーあ、美神さんたちがまた機嫌悪くなりますねえ。

アン「ヘルシングが日本で留学したいといってきたそうだ。

忠夫の話じゃ、妄執が解消されて素直な性格になったと言っているが、真実は別だろう。」

ボコボコに精神を折られた後に優しくする。

これは新興宗教なんかでよくやる手段だ。

教祖や教団への絶対服従が刷り込まれる、嫌悪すべき手法なんだけど、忠夫は明らかに意識しないでやってしまった。

もう、アンニヘルシングは忠夫から離れられないだろう。ちょっと向こうの親御さんに悪い気もする。

だが、ヘルシング家本体も旦那やクロサキ君の手によって解体が進んでいるので、感謝されても恨まれることはないだろうと思いきす。

そうね、学校卒業したらクロサキ君に教育させようかしら？

美神さんから仕事の話があったのは昼休みのことだった。

仕事用の携帯がなかったので電話番号をみると美神さんの携帯だったのだ。

出てみれば、できるだけ早めにオカルトGメンに来てほしいと言うことだった。

急場の仕事は多いのですぐにいくと答えると、ピートと愛子もつれてきてほしいと言うことだった。

タイガーは？と聞くと・・・

「タイガーは仕事より勉強よ。」

タイガーは涙を流してパンの耳をかじっていた。

「わりーけど、手伝ってくれないか？ 愛子」

「いいわよ。なんといつても横島君の保護妖怪ですもの、わたし」

「そういう割り切りはすんなって。おまえにはおまえが自由に居られるように手助けした言っただけなんだから」

「いやね、わかってるわよ。ジョークよじょーく」

そんな愛子を担いで、職員室に一報入れてからオカルトGメンにいくと、美神さんと西条さんが待っていた。

「わるいね、授業中に。」

「いいえ、わざわざ俺たちを呼ぶって事は、俺たちにしかできないんでしょう?」

「もしくは、僕らがもっとも向いている、のかな?」

「・・・でも、私が居るって事は除霊じゃない?」

そんな俺たちの台詞を聞いて、美神さんは苦笑い。

西条さんも笑っていた。

「やはり、君たちは思った以上に優秀だが、すこし経験が不足しているね」

### 第十三話（後書き）

んー、やっぱりロンゲはムカつく発言がデフォルト仕様ですよねー  
アンも実は結構迷惑なやつなので、こんな扱いになってしまいました  
た。  
うちのよこっちとて人間。それなりにムカつく相手には厳しいので  
す。

とはいえ、恐ろしい家名と成りつつあります「横島」。

次回2/4アップ予定



## 第十四話（前書き）

今回も内容盛りだくさん？

## 第十四話

昔はこの上から目線が気に入らなかつたけど、今の西条さんの「実際」を感じると、かわいそうになると言っか滑稽というか、なんというか。

最近ではおキ又ちゃんまで可哀想なモノを見るような目つきで見ているし。

美神さんも前の「時」とは違って、昔からの知人としか感じているそぶりがない。

もしかするとプライベートでは違つかもしれないと思ったときもあるけど、常にボディコン系の服をしているところを見ると違つかだろうなあ。

前の「時」、飲みにつれていかれたときに聞きだした話だけど、あのボディコン系って戦闘服であり鎧なのだと言っこと。

だから、飲みにつれていってくれたとき、ゆったりとした服を着てくれていたのがすごくうれしかった。

つまり俺には鎧が必要ないんだって事だつて。

で、今の西条さん相手をしているときは常にボディコン系、戦闘状態というわけだ。

西条さんは誘惑されていると感じているみたいだけど、毎回ガードが高いと泣きを入れてた。

まあ、真実がそつちだとしれる話。

で、

見せられたのは数枚の依頼状。

何枚かは協会経由、そして残りはオカルトGメン。

俺たちは中身の近似性を見いだした。

「廃校」「学校」「妖怪」「占拠」……

多くは廃校になった学校に何かが居るので調査してほしいと言っているもの。

そして退治ではないこと。

加えるなら、なにが起きているかが知りたいだけという事。

「君たちが学校霊のエキスパートだと聞いてね。その調査にうつってつけだと推薦があったんだよ」

と視線が美神さんに向く西条さん。

美神さんはにこやかに手を振ってる。

いや、「仲介料は半分よこしなさいよ」というサインだ。

俺はピースサイン。

むっとした美神さんは再び手をふる、五本指。

ピースサインを曲げず。

ぐぐつと顔を寄せる俺たち。

「横島君、元金が十分なんだから半分ぐらいよこしなさいよ!」

「……愛子の修学旅行積み立てをしたいんです。5愛子、2ピー

ト1俺2美神さん」

「……ぐ、それって保護妖怪だから横島君の懐と同じじゃない」

「そんな公私混同はしてません。」

「……わかつたわ、2でいいわ」

前の「時」を考えると嘘みただけど、こっちの美神さんは嬉しくなるほど誠実だ。

金銭欲を理屈が上回るのだ。

こっちの美神さんならオカルトGメンでもノイローゼにならないんだらうなあ。

まあ、それはさておき。

「というわけで、いってきます」

「うん、たのんだよ。一応、君たちの行動についてはGS協会とオカルトGメンがバックアップする。随時連絡を入れてくれたまえ」

意気揚々とビルを出たところで、ため息をつく横島さん。

愛子さんも苦笑이었다。

どうしてかと聞くと、横島さんがあきれ顔。

「あのなあ、今回の件、どうみても六道の手がみえんだろ？」

「へ？」

依頼書のどこにも六道の名前は見えませんが。

「こんな一件あたりが些末な依頼書のとりまとめなんて、ふつうの窓口じゃしてくれないの。」

「民間依頼とオカルトGメンの取りまとめも無理かしらね。」

「・・・え、じゃあ、なんで？」

「俺らが色々と六道のためになることをしてくれたから、っていうんで、叔母さんの方からのお返しだろ？」

「・・・うわあ・・・」

「ピートにはオカルトGメンでの実績のプレゼント」

「私には、学校霊関係での実績をプレゼント」

「じゃ、じゃあ横島さんには？」

「・・・聞きたいか？」

「とりあえず聞かせてください」

「六道と直結した縁故のある「横島」のネームバリューをプレゼント、かな？」

「そんなところじゃないかしら？」

心底驚いた。

そして、何の疑問も感じず「任務」に心を踊らせていたことを恥ずかしく思った。

「ま、そこまで読ませて、さらに関係を深めさせようという冥那さんには勝てませんって。」

「あら、でも、本人の前で、そこまで言う方も、手強いわ。」

誰もいないかと思っていたそこに、和服姿の婦人がたっていた。

その名は六道冥那。六道家党首。

「プレゼントする前から中身を言い当てられちゃうと、おばさんはずかしいわ。」

「いや、あたりだったなんて、こりゃ、気合いはいりますね。」

「そうね、うれしいな。」

なんだか黒い靈気を渦巻かせた三人です。

なぜだろう、半魔の僕でもかなわないほどの魔力に思えるのは。

速攻で終わった仕事の帰り道、いろいろな手応えを感じていた。

ピートは善良な妖怪や靈との交渉の実績を。

愛子は自分が学校靈の纏めをしてきたことへの自信を。

俺は変わってしまった歴史自体が良い方向へ向かっているという感覚を。

そのせいかちょっとハイになっていたが、心地よい疲れを感じるつつそれぞれ帰ろうとしていた、が。

「あ、愛子。うちに泊まってくか？」

「え？」

「ほれ、今から守衛さん起こして入れてもらっくんじゃあめんどつだる？」

「……いいの？」

「いいのいいの、タマモだつて喜ぶつて」

「……じゃあ、おねがいしようかな……。」

お友達の家にお泊まりつて青春よね、とか呟く愛子に聞こえないように囁くピート。

「……まさか、下心はありませんよね？」

「ありや、こんな誘いじゃなくてホテルにとまತ್ತるわい」

「それもそうですね……。」

ある意味信用してますよ、とその場で分かれた。

部屋に帰ると、久しぶりのオールスター状態だった。

妹タマモに、銀チャン、そして遊びに来ていた雪乃丞。

「おかえりー、……つて、お兄ちゃんが女連れだ!!」

「なんやて!？」

「なんだと!？」

驚きすぎや、とつつこみを入れつつ、お互いに自己紹介。

一応、愛子のこととはみんな知っていたので「ああ、あの」で話はずんだが、俺の部屋に銀ちゃんがいたのをみて大興奮の愛子。

「まあ、よくうちに遊びに来るけど、クラスの女子には内緒な？」

「・・・うん！」

嬉しくてたまりません、という感じの愛子をみて「やっぱアイドルは人気あるなあ」と呟くと、タマモに「お兄ちゃんの鈍感な罪だよね」とか言われてしまった。

夜遅くまでみんなで騒ぎ、かわりばんこでお風呂をすませ就寝しただけだったが、愛子はこの世の春とばかりに喜んでくれた。

うん、なんかがんばって、愛子も修学旅行に行かせたいな、そう思った。

魔鈴さん、ついに来口。

西条さんと共に出迎えにいくと、嬉しそうに手を振る魔鈴さんが現れた。

荷物は俺が受け持って、西条さんとはなしてくれーとしようかとおもいきや、いろいろと話しかけてくる魔鈴さん。

で、西条さんもあんまり嫌そうじゃなかった。

やっぱ美神さん一本なんですかねえ？

「それで、お店を開こうと思って探しているんですけど、どこか良いところ無いですかねえ？」

西条さんは首をひねるだけだった。

視線はこちらにきたので、俺もちょっと心当たりがあったってみる。

「お仕事申し訳ありません、忠夫です」

「これはこれは、お久しぶりです、忠夫さん。」

「お時間があったときでいいんですが、知り合いの女性の料理店開店の知恵をお借りしたいんですが、よろしいですか？」

「・・・そうですね、どのような人物が、どのような規模で、資金がどのぐらいかをご呈示いただければ・・・。」

「では、そちらの方は直ぐにメールしますので、お時間があるときにお願ひします」

「わかりました。」

ということで、クロサキさんにメールすると、三つほどの物件を返送してくれた。

たぶん、俺がメールする前に、俺の友好関係から推察したデータがそろっていたみたいだ。

「すげーなー。」

「というわけで、この三つのうちのどれかがおすすりめです。」

そういつてメールの内容を見せると、魔鈴さんは目をまん丸にしていた。

「まるで、魔法みたい」

「それはあなたの特技です」

「でも、ちよつと電話しただけで・・・」

「それは周りに優秀な人がいるからですよ」

そんな会話を聞いていた西条さんが、ちよつとのを鳴らすように笑う。

「・・・オカルト的に見れば、そんなに異常でもないんだろっけどね」



自分より格上の存在から力を借りて不可能を可能とする。その相手が神様だったり精霊だったり魔族だったり。

そつえばそつだった。

もちろん、クロサキさんには損がない様に取りも持ちかけるし、出来ないことは出来ないと教えてももらえる。

でも視点がおもしろくて、俺たちは思わず笑ってしまった。

「そついう点では、科学も霊能も、多くそついう点がありますよね。」

道具を発明する人開発する人販売する人使う人。いろいろな人の力が絡み合っている。

GS業界も同じだし、オカルトって絡みでも同じだ。

そんな話をしているうちに、一番のおすすめの店舗に移動した。勤務中ですよ、西条さん。

「横島君だって、授業中だよな？」

「あははははは」

まあ、お互い美人と仲良くという方針なので、そのへんは突っ込まないことにした。

お互いに。

三店舗目で魔鈴さんも気に入り、そこと契約することになった。

クロサキさんが手を回してくれていたらしく、かなり優位な契約をむすばさせてもらった。

霊的不良物件だったんだけど、その場で俺が除霊してしまったので、不良もくそもなくなっただけ。

そんなこんなで、除霊のお礼ということで、いつでも夕飯をおこ

ってもらえることになったのだった。  
ありがたやありがたや。

おキ又ちゃん曰く、最近おいしいレストランが出来たという。  
それも不思議でスゴいそうだ。

横島君も誘おうかと思いきや、今日はバイトにこない日だったので、まあいいか、とおキ又ちゃんで行って見た。

「魔法料理店 魔鈴、ね。」

店先にはGSとしての認可章もあることから、除霊レベルの作業可能な店舗なんだろうけど、料理が専門らしい。  
入ってみるとわりと盛況で、ほとんどの席が埋まっていたが、ちよつと離れた席が空いていた。

「いらっしやいませなのニヤー」

黒猫が人語をはなしながら現れる。

「あの席でお待ちくださいなのニヤー」

するりとその場から去り、空いてる席で手を振る黒猫。

「スゴいわね、あのこ使い魔よ。」

「使い魔って何ですか？」

「手誰の魔法使いが使役できる、式みたいなものよ」

メニューを持つてくる黒猫。  
オーダーを取りにくる筈。  
突然現れる料理。

正直に言えば、現在知られている魔法のレベルを超えていた。

「・・・で、料理もおいしい、と。」

「本当ですよー、これでやすいんですもの」

おキ又ちゃんと二人分でも1500円いかない。

かなり凝ったことをしているのに、だ。

信じられないけど信じざる得ない。

正面から感心して会計をしたところで、なぜかレジに見知った顔がいた。

「はい、1480円です」

「・・・・・・・・」

「どうしました、美神さん？」

「あなたなにやってるのよ!？」

「え?」

店のはけた後で聞いてみると、ことはUK派遣にさかのぼるとい  
う。

あの事件での最後の被害者が「魔鈴めぐみ」であり、その救出を  
したのが横島忠夫だった。

そしてその恩義を感じた魔鈴めぐみは日本での活動の際に横島と  
連絡を取り合い、そして今度は店舗探しやら開店準備やらを手伝っ  
ているうちに、そのお礼に夕飯を、じゃあ忙しいみたいなのでお手  
伝いを・・・みたいな感じで手伝うようになったとか。

なんとというお人好し通しの相乗効果。

「本当に、申し訳ありません」

ぺこぺこ頭を下げる魔鈴めぐみに何かいうことがあるわけではない。

横島君が自分の時間でやっていることだから。

「こつちもビックリしただけだし、謝ってもらうことじゃないわよ」「そうですね、横島さんが優しいのは知ってますし、困ってる人をほっとけないのも。」

おキ又ちゃんの言葉を聞いて、横島君はバツが悪そうな顔をしている。

「そうなんですよ、ええ。横島さんつては本当に優しくして」

きゃいきゃいとはなすおキ又ちゃんと魔鈴めぐみ。  
なんだか似ている二人に思える。

「じゃ、横島君は、うちと二足の草鞋？」

「いやいや、さすがに体が保ちませんから」

そろそろ客層が固定されてきたので、お手伝いも終わりだという。

「美神さんのところを首になったら、いつでももきてくださいね」

こんなことを言い出す「魔鈴めぐみ」は、やはり敵ではないだろうか？

「俺もレパートリーが増えてうれしいっすよ。」

なるほど、そういう目的もあったのか。  
こんどうちの事務所で作ってみてもらおう、うん。

魔鈴さんのところのお手伝いも終わりごろ、料理と簡単な魔法を教わった。

本当に簡単なものだったけど、自分がオカルトのことをなにも理解していなかったことを実感させられた。

黒猫にも笑われたけど、笑われるに十分だったと想う。

「でも、その常識に縛られない自由なたち位置が横島さんの力の源なんですよ。」

と魔鈴さんはお世辞をいってくれた。

フォローしてくれるのは嬉しいけど、あからさまなお世辞は恥ずかしい。

そんな話を学校ですると、なぜか除霊委員三人組に呆れられた。

まあ、俺がオカシい人間扱いされるのはいつものことなので、いいんだけど。

「一応いいですけど、魔鈴さんの言っていることは、僕らもそう感じてますからね?」

「そうですね、横島さんの良い面を的確にとらえていますよー」

「私もそう思ってるわ。」

うーん、友情って良いなー。

こうやって寄りかかせてもらっている事実には感謝しないと。

「あれ、たぶん、私たちも追従してお世辞を言ってると思ってるわ

「よ」

「はい、間違いありませんね」

「なんで横島さんは、あそこまで自己評価が低いんですかノー？」

「ま、そのへんが横島君らしいと言っかなんというか。」

「そうですね・・・。」

「なんだよ、その明らかにどうしようもないものを見るような目は・・・。」

「まったく、とまっているところで、何かが近づく気配。」

「それも窓の外・・・。」

「まるで美神さんの拳のような切迫感。」

「みんな伏せるー!!」

「俺の言葉を受けて、反射的に伏せるクラスメイト。」

「もちろん俺も伏せたが、間に合わなかった。」

「まるで弾丸のように飛び込んできたそれは、まるで俺を抱えるようにしてその場から去った。」

『（主、これは？）』

「（あー、そうか、そうだったのか。）」

「思わずニヤリと笑ってしまった。」

「（イタリアの国宝、魔女狩り時代の遺産、ファイヤーフォックス。空飛ぶ筈だよ）」

『ほお・・・。』

すでに高高度まで上がってきているので、心眼も表にでてきた。

『して、これの操縦は？』

「じつはこの前魔鈴さんから教わった魔法ってのが、箒の操縦法だったんだよ」

『実際に、タイムリーだな、主』

「ご都合主義のにおいを感じるがな」

そんなこんなで箒と対話すると、ずっと暗い封印の奥で死ぬほど退屈で、無理矢理飛んできたらしい。

ただ、一人で飛ぶのも嫌だったので、良さそうな人を捜していたら俺を見つけたとか。

まあ、見込んでもらえるのは嬉しいものだ。

・・・そうだ。

「なー、ファイヤーフォックス。俺とは別に2人ぐらい乗せられな  
いか？」

俺の思いに、是の回答。

「ほんじゃ、おまえの友達になれる奴を迎えに行こうぜ」

意識の先は六道女子中等部。

我が家の炎の狐と白狼とご対面。

学校が歓声に沸いた。

校庭の運動中の生徒が騒いでいるのに気づき、校舎から視線が集まったせいだ。

私が覗いてみると、なぜかそこにはお兄ちゃんが箒を担いでいた。急いで鬼道先生が駆け寄ったが、色々と話したところでこっちを手招きしている。

ちよつと大きめのブロックサインで、シロねえと私にきてほしい、と言っている。

シロねえと顔を見合わせて、とりあえず行ってみると、どうやらやっかいごとに巻き込まれたが、できれば穏便に済ませたいらしい。で、それが、思う存分に飛びたい箒の思いを遂げさせたい、という。

「ほお、自意識を持った箒かやゆうと、青き稲妻か炎の狐ぐらいなもんやで?」

「ああ、よくしってるな。その炎の狐だよ」

「横島君、そりゃ、イタリアの国宝や。」

「まあ、国宝つうたって、じいしきがあるんだぜ? ストレスも貯まるし不満もたまる。ちよつとは解消してやらんと」

「・・・かなわんああ、横島君には」

そんなわけで、シロねえと私で、乗ってあげてほしいそうだ。

ちなみに私たち二人に文殊が渡され、落ちたら使えと言われた。結構、妹使いの激しいお兄ちゃんだった。

すごいすごい、すごいでござる!!!

先生が連れてきた魔法の箒のおかげで、信じられない速度で飛んでいるでござる。

タマモは体が弱いので、拙者の背後に乗せているでござるが、結構冷えてきたようでござる。



『ちよつとスピードを落としてほしいでござる』  
『是』

漂うように高い空を舞うと、まるで先生と散歩にきた時みたいな爽快感があるのでござる。

「シロねえ、ちよつと高くない？」

「・・・むー、確かに高すぎるかもしれないでござるな」

なにしろ航空機に手が届く範囲でござるから。

「では、ちと降りるでござるか？」

「そうね、今度はちゃんと防寒着を準備しましょうよ」

「いいでござるな。」

高すぎるのを別にすれば、タマモも拙者もずいぶんと楽しませてもらった。

『炎の狐殿、また乗せてもらえるでござるか？』

『是』

嬉しそうな返事に、拙者たちも喜んでござる。

「じゃ、ゆつくり降りましょ。」

「了解でござる」

手にした筭と共に地上を目指す。

山手線よりも大きな円を描きながら。

横島君と私達は、冷えきつた体をふるわせつつ喜びに顔を輝かせている二人を迎えた。

毛布で包んでやり、暖かなスープを飲ませたところ、横島君へどれだけ楽しかったか、どれだけ嬉しかったかを語る二人。

もちろん、国際問題一步寸前だったのだけれども、箒管理をしていた財団担当者へ横島君が掛け合い、どれだけ箒の自意識を傷つけていたかを切々と説いて説得してしまった。

たまたま現れた現代の魔女「魔鈴めぐみ」もそれに同調し、自意識を持った箒を封印保管すること自体、人間を生き埋めする事と等しいと嚴重な抗議。

囂々とした意見が集まって、時々憂さ晴らしをさせることや、定期的に飛行させることを約束させてしまった。

その事を知った同列の魔法箒「青い稲妻」も同等の扱いを熱望し勝ち得たのは余談だろう。

ともあれ、遠くイタリアから遊びに来るといふ魔法箒という友達を得たシロとタマモは、極めて嬉しそうにほほえんだのだった。

## 第十四話（後書き）

この作品において、人間関係が険悪な人は少ないのですがそれでも居ないわけではありません。ではどこにいるかといえば、大人の手の向こうにいます。  
ちよつと過保護な世界ですよね。

次回 2 / 14 アップ予定

## 第十五話（前書き）

ちよつとネタバレ。

今回で、横島がどんな未来から帰ってきたのかが少しだけわかります。

## 第十五話

ファイヤーフォックスとブルーサンダーが生き残ったのは、たぶん魔鈴さんに初歩の魔法を教えてもらったおかげだと思う。

だから正面からお礼を言つと笑われてしまった。

魔鈴さん曰く、「お礼で魔法を教えたのにそれにお礼をされたらいつまでも終わりませんよ?」とのこと。

でも、そんなすてきな縁だったら終わらない方が嬉しい。

美人と仲良く、これが人生の方針だから。

「もう、そうやってナチュラルに女性を口説くんですね」「え?」

おもわず惚けると、魔鈴さん再び大爆笑。

まあいいんですがね。

美神さんも実は「魔法簿」回収の依頼を受けていたので、労せず依頼完遂となつてご機嫌だったし、良いことばかりだなあ、と思わず笑っていた。

久しぶりの除霊の仕事。

というか、スライムだよスライム。

あの、一粒でも残っていると痛い目に遭うあいつ。

それを俺が退治できれば全額依頼料をくれるという美神さんだったけど、俺はジト目。

「なによ、依頼料全部あげるつて言つの本当よ?」

「・・・スライムがどんなものかぐらい知ってるっすよ」



あの「時」と同じホテルの同じ現場での作業。

今度はおびき出した後逃げられないように、自分制作の霊符で結界を張った。

入れるところは一点。

出られるところはない。

そんな結界に俺は追い込んだ。

待ちかまえているのは湯上さんと笹倉さん。

結界の維持と恒常的な連続攻撃をファンネルをお願いしている。

俺は俺で結界を維持しないといけないので、結構面倒なのだ。

「これがCクラス依頼？ うそでしょ？」

「削っても削っても減らない・・・」

「えーっと計算上、あと30分ほどで一気に消せる大きさになります」

「「やーーーーん」」

本当はタマモと二人でやろうかと思ったんだけど、火力が強すぎるので不許可。

シロも同じ理由なのでだめ。

というわけで、先日知り合った湯上さんと笹倉さんに声をかけたところ、二つ返事でOKがでた。

とても有り難い話だった。

「横島君との仕事が、楽にすむはずがないとは思ってたけど・・・」

。「さすがにきついわ。」

まあ、それでも都合二時間ほどファンネルを維持できたのは、さすが六女OGと言ったところかな？

そんなこんなでスライムを見事駆逐完了。

一応、見鬼君で精密捜査して、雑霊以外いないことが判明した。

「というわけで、お二人ともご苦労様でした」  
「おつかれ……」

倒れそうな二人のためにそのホテルの一室を借りて放り込んでおいた。

もちろん一緒に泊まったりしてませんよ？

湯上さんと私が助手扱いで呼ばれたのは、某ホテルの除霊だった。依頼主はホテルでメインは美神令子除霊事務所の横島君。

若手一番の彼がなぜ私達を呼んでくれたんだろう、と思ったけれど、直ぐにわかった。

いわゆる対象がスライムのせいだった。

あれは強い力で攻撃すればするほど飛び散って、後々増えるという厄介な性質がある。

ゆえに飛び散らない空間で、チクチクチクチク攻撃しないといけないのだ。

霊力制御に自信がある人間でも結構つらい作業だ。

ではどうすればいいかというと、比較的攻撃力が少ない人間で連続攻撃すれば、飛び散ることなく消滅までいける。

つまり、攻撃力が少ないからと言う理由だったわけだ。

本当だったら屈辱的だったんだけど、逆に私達の強みともいえる「霊力の維持」という能力が、新霊具「ファンネル」との相性と相まって、すばらしい効果を発揮した。

文句を言いつつも維持し続けた二時間ほどで、あの面倒で厄介で嫌われ者の「スライム」を退治しきったのだ。

もちろん、追い込みつつ結界で封鎖しきった横島君の手腕あって



の事なんだけど、それでも私達自身の霊能の有効範囲を新たに知ることが出来たことだった。

だから今回の助っ人代全てを使って奢りたかったのに、横島君がつれてきてくれた店は横島君の昵懇らしく、逆に歓迎されてしまいサービスですってタダにされてしまった。

今回の仕事の収支と報告内容をみんなで検討して夕飯を食べて、なんというか、こう、一つのチームみたいに思えてしまったのはノボセすぎだろうか？

「じゃあ、今回はオリジナル横島チームなんですか？」

「あははは、こんなガキがパーテイリーリーダーじゃ、湯上さんも笹倉さんも迷惑ですよ」

魔鈴めぐみさんの質問に、軽く答える横島君だったが、その辺には異論がある。

ガキとかそういう問題じゃなくて、横島君が独立するなら、絶対に事務所に参加させてほしいと思うし、正社員がだめなら登録所員でも良いから参加させてほしいぐらいだ。

そんなことを私達は熱く語ってしまった。

ビックリした目の横島君と魔鈴さんだったが、横島君は真っ赤になって視線を逸らし、魔鈴さんはうんうんと頷いて「私も参加したいですねえ」と笑っていた。

「横島君の裁量なら、私達レベルのGSを5人ぐらい使っていてもおかしくないわよ？」

「そうねえ、現場もみれるし交渉もできる。人脈も上々、って本当に優良株じゃない」

「事務所資金は六女基金でいけるし……。」

「そうね、私達が事務所参加するならOKね。」

「……本当に具体化するなら、店のあるビルのテナントが開いて

ますよ？ 一応横島さんなら安くなりますし」「……ほんとうですかあ！？」

着々と具体化する流れを横島君は止めた。とにかく、最悪でも高校卒業しないと、事務所に専従できません、と。

私達三人は「ああ、そういえば……」と思いつ出す。そういえば、彼ってまだ高校生だったんだ、と。思わず三人とも吹き出して笑い出す。

「でもさ、本当に事務所独立するなら声かけてね。」「そうそう。それにさ、正直に言うと、これだけ気持ちよく仕事できたのはじめてなのよ。」「あ、わたしも！」

そう、彼の指揮下は気持ちよかった。疑問も不安もなく、心のままに動いた結果が彼の指示通りなのだ。曖昧な言葉はなく、明確な指針が常に示される。迷わず、たゆまなく戦えたのだ。こんな気持ちは六女を卒業して以来のことかもしれない。彼とともにあれば、そんな風を感じてしまった。

気になっていたけど、杞憂だった。協会の調査員の話を全面的に信じれば、クラスB+の仕事を、Dクラス助手二人と共に片づけたという。投入された道具も、自分のファンネルと自作霊符だけというもので、出費も最小だった。

私の手元にきた内容と寸分の狂いもない調査報告書だった。ふむ、とため息が漏れてしまう。

これじゃあ、彼が独立を口にしたら反対できない。

ちよつと前までのセクハラ煩惱状態を懐かしく感じるほどの変わりようだった。

外部ながら格下のGSを積極的に使う姿勢も協会から評価されていて、美神事務所自体がこの方針で行かないかという誘いすら書いてある。

そりゃそうだ。

格安の物件を、一流の事務所が請け負って、さらには格下のGSを教育してくれる。

協会にしてみればこんなにおいしい話があるわけがないけど、そんなボランティアをうちがするはずないのだ。

たまたま横島君の成長具合を試すのに丁度良いものだったので受けたけど、私がメインでする仕事ではあり得ないたくいものだ。

霊能の違いで私は「道具使い」。

高価な霊具を最大効率で使用するのがスタイルだ。

霊具分の依頼料すら下回るような依頼を受けるわけにはいかないのだ。

逆に横島君は霊具を購入する必要のない霊能者なので、きわめて効率がいいが、自己の霊力頼りなので、危険も多い。

それを補助できる「ファンネル」で、結界や攻撃の一反を維持させているのだから、あれは良い発明だ。

しかし、そのファンネルも実践使用しなければ、その効果と意味はつかめないだろう。

そういう意味では、横島君のような霊能で、人を使うことができるGSが事務所を開くと、C～DのGS就職が行われ、極めて効率的に仕事が行われることは間違いない。

この話を帰ってきた横島君にいうといやな顔をされた。

どうやら今回一緒に仕事をした人たちにも言われたそうだ。

「あら、独立の足がかりよ？ うれしくないの？」

「・・・美神さんは俺を追い出したいんっすか？」

「まさか。ここまで使えるようになったんだから、これを機に稼がせてほしいけどね・・・。」

「ほしいけど？」

「・・・協会の方がどうもきな臭いのよ。」

優秀有能なGSとして協会がバックアップする代わりに、協会の汚れ仕事を回してしまおうとしているようなのだ。

そんな風に言うと、横島君は苦笑い。

「俺も男ですから、いつまでも美神さんの傘に隠れているわけにはいかないっすけど・・・。」

「けど？」

「せめて高校卒業まで時間をください。さすがに学生のまま独立は無謀っす」

「・・・ふふふ、そうね。」

つまり私にも一年ちよつとのモラトリアムが与えられたようなものだ。

いや、横島君の優秀さは既に業界に広がっている。

美神令子の弟子というばかりではなく、六道の秘密兵器としてもあの新興氏族「横島」の次期当主としても、そして妙神山の直弟子としても。

そんな彼を一年ちよつとの間簡単に確保できるとは思っていない。私自身を使つても鎖をつきたい気持ちすらあるぐらいだった。

「ま、その気があるなら、「私」に永久就職って手もあるわよ？」  
ウインク一つの私に、真っ赤になって笑う横島君。  
まんざら脈がないわけでもないみたいね？

美神さんの胸の内は半分ぐらいは理解しているつもりだ。  
まえの「時」でもちゃんとそのへんを告白されているから。  
加えて、いまの「時」は前以上に好感度が高い。  
慰留以上の感情があることは理解できる。  
そうLikeを超えている、そんな感情。

でもなあ、なんつうか、前のと違ってテンパッテ暴走してその上で聞いた本音だったから、本気でめり込んだんだけど、今回、そう、今だ抜けないとげが復活した所為で身動きがとりにくい。

タマモは「自分のしたいようにすれあいんじゃない？」なんて気楽に言ってくれるけど、俺にとって見れば美神さんは「あの末に」たどり着いたという印象がある。

まあ、感覚的な話で「至高の先にある女」、そんな感じ。  
もちろん、美神さんが唯の普通の女であることは否定しない。  
抱きしめた腕の中の感触も、はにかんだ朝の笑顔も忘れていないから。

でも、逆に、俺が思っている、想っていた、そんな姿をいまだ幻視してしまう。

あからさまに酷い話だということにはわかってる。  
後々の禍根になることもわかっている。  
でも、いまはその夢を見続けたいと想うのは子供過ぎるだろうか

？

いや、まるで老人のような感傷なのかもしれない。

これから行く「彼女」の救済を考えれば、今の段階で心を許してしまえば、後がつかずすぎるから。

歯を食いしばろう、そう心に決めた。

## 第十六話（前書き）

そうだ、中世にいろいろW

久しぶりの逆行成分が強くなっています。歴史改変に強い拒否感がある方はご注意くださいW

## 第十六話

「おはよーございまーす」「こんにちわー」

ふらりと、タマモとともに事務所に出てゆくと、マリアが椅子に座って目を閉じていた。

瞬間、背筋が寒くなる。

『(主!)』

「(うつわー、これか。でも行かないと歴史が変わるよな?)」

『(断定は出来ない。しかし、歴史は修正力がある。別の形で履行されるぞ。)』

「(だったら、わかる範囲で手を打ったほうがましか)」

とりあえず、前と違うのは……。

おキ又ちゃん復活済み、文珠出せます、バンダナ生きてます、冥子ちゃんまとも、ユツキー達まとも、オカG開設済み、隊長からの接触あり……。

「(わりとグチャグチャだな。)」

『(混沌としているな、主)』

そりゃ美智恵さんも焦って接触してくるわな。

とはいえ、自重は辞めたので、バンバン介入しますよって事で。

「あれ、お兄ちゃん。マリアどうしたの?」

「ん? ああ、ケーブル延びてるし、プラグインチャージ中だろ?」

「ふーん」



「そついつつ手を伸ばそうとするタマモを止めた。

「え？ さわつたらまずい？」

「ドクターカオスの作ったものだぞ？ 普段が安全でも別の時は警戒した方がいいんじゃないか？」

「・・・うん、すんごく理解できた」

「こんな悪あがきでも少しは修正できたかな。  
と、思っていた私がありました、ええ。」

「・・・この匂いは、先生でござるな！」

「ま、まずい・・・！！」

「し、シロ、まて！！」

「待てないでござるー！！」

瞬間、飛びつくシロ。

押し出される俺とタマモ。

マリアに接触する三人。

瞬間的に感電！！

そんなフラグが立った瞬間に、美神さんが現れた。

「（そ、そんな・・・！！）」

「み、みかみどの・・・！！」

手を伸ばしたシロが、美神さんに接触した瞬間、それは発生した。

「さーって、シロ。反省した？」

「・・・ごめんなさいでござる・・・。」

美神さんにボコボコにされたシロは放置して、俺はマリアを文珠でチャージした。

瞬間的にシステム再起動したマリアは、今が西暦1242年のスイタリア国境付近と教えてくれた。

「タイムスリップ？」

「時間移動って、・・・やっぱ美神さんっすかね？」

「信じたくないけど、それしかないわ。」

げんなりとした俺と美神さん。

かの美神親、美神美知恵さんの時間移動能力を思い出している俺達だった。

事情がわからないシロとタマモに説明すると、すごい能力だと大絶賛。

「京都、京都に行きたいわ！ 昔のオアゲを味わうのよ!!」

「お、いいでござるな！ 古きを知る、味を知る、旅の醍醐味でござるよ」

「おめーは少し反省してろ。」

「きゃうん・・・。」

とはいえ、ドクターヌルは関わらないと帰れないっばいしなあ・・・。

「さて、とりあえず……。」

「とりあえず？」

「上着かして！ 横島君。寒すぎなのよ。」

まあ、ボディコン薄着で11月はさむいわな。

そんなわけで、俺の上着を貸して、人里を目指すことにした。

目の前の村が炎に包まれていた。

恐竜っぽい怪物と鎧騎馬が村をおそっていた。

迎え討つのは機械犬、ただ一匹のみ。

「ミス美神、横島、さん。出来れば、援護を、お願い、します。」

武装の確認をするマリアを見て、俺はうなずいた。

「美神さん、とりあえず村人に恩を売る、これって中世の基本すよね？」

「ゲームの基本でしょ、それ」

そついいながら、俺の上着の内側に仕込んであった神通棍を構える。

「で、お札は？」

「さすがに歩きながら書いたんで、破魔札三枚っす」

「文珠は？」

「一人三つつすね」

「わかったわ。」

そういつて文珠を配ったが、タマモとシロはいらないと苦笑い。二人にはアクセサリーに隠した文珠を結構渡していたから。

「んじゃ、山分けね。」

「つつか、終わったら返してくださいよ?」

「・・・ちい」

ねこばばするつもりだったんすね?

油断ならないな、美神さん。

それは、カオス様の不在を狙った強襲だった。

かの有名な吸血鬼の復活を聞きつけたカオス様は、我らの村の守りをバロンに任せ、一時的に村を離れた。

カオス様は、この村に何かあればわかるようにしたと言っておられたが、さすがにこれだけ時期を合わされてはどうにもなるまい。

「ぎゃうん!」

いま、バロンが敵兵にやられた。

その騎馬の槍は、まさに私に向いている。

「お覚悟を、姫!!」

「無抵抗にやられたりせぬわ!」

取り出した剣を構えたところで、彼女たちが現れた。奇異な服装をした彼女たちが。

「横島君、シロ、前衛！！」

「了解！」「わかったでござる！」

黒き頭髪の少年と白き長髪の少女が、輝く剣を持ってヌルの兵士たちに切りかかる。

「タマモ、火の壁の設営。マリアはコボレた敵を！」

「わかったわ！」「了解です」

金色の髪の少女と黒い衣の少女が兵たちに向かい合う。

そして輝く笑顔で青い衣をまとった女性が微笑みながら言う。

「とりあえず、この状況をひっくり返すから、話を聞かせてもらえるかしら？」

それはこちらも希望している。

「そうかそうか、ワシ以上の天才が城を占拠している上に貴様等は未来からやってきたというか。」

にこにことした若いカオスは、人造人間マリアをみて頷いている。

「さらに試作人造人間M-666が、700年以上動いているとは今からやる気が起きるな。」

「ドクターカオス、あなたは700年を越えても、なお、お元気で

す」

「そうかそうかと微笑みながらマリアを撫でると、マリアも無表情ながら嬉しそうに見える。」

「何というか、能の面のように固定された表情だけど、その陰影が彼女の感情を感じさせる。」

「いや、人間の感覚はそれを感じさせているだけかもしれないけど、それでも俺には彼女が嬉しそうに微笑んでいるようにしか感じられない。」

「というわけで、状況の整理は終わったけど。マリア、これからどうなるの?」

「イエス、ミス美神。現状、の解決協力の依頼をします」

「ふむ、M666。この者達は、そこまで優秀なのか?」

「イエス、ドクターカオス。700年を越えて、英知を極めた、ドクターカオスを上回る、退魔の術師、です」

「そうか……。」

カオスは感心したように美神さんをみた後、ニヤリと笑う。

「ならばワシから正式に依頼しよう。ワシらの戦いに助力してくれ。報酬は、そうだな……。」

「オカルト知識。さすがに700年以上も経つと、知識も劣化するのよ。だから、研究中のものや、常識的なものでかまわないから、ざっくりわかる奴をくれない?」

「あ、美神さん、追加っす。白魔法に関する知識を。あと、700年後の自分に伝えたいことなんかも」

俺がそういうと、ニヤリと笑った美神さん。

〈作戦開始〉

.....

〈あっさり終了w

実のところ、特筆すべき事がない。

美神さんと文珠の使える俺。

加えて万全のマリアにタマモ、加えてシロ。

はつきり言えばオーバースペースだ。

というか、オーバーキル。

作戦開始二時間で、地獄炉を停止されたヌルは泣いて土下座をした。

基本タコなので土下座もくそもないのだが。

報酬の件でカオスの研究所に缶詰になった美神さんとその関係を邪推する領主の娘マリアはおいといて、俺は結界牢獄の中で蠢くヌルのところにやってきた。

「よお、プロフェッサーヌル。元気か？」

「・・・人間。そろそろ殺す気になったか？」

「バカ言え。おまえほどの才能が消えるのはしのびねえ。それでも自由にさせるにや恐ろしい。」

「ふふふ、ならばどうする？ ワシを手下にもするきか？」

「それほど長生きでもねえからな。あと2・30年生きててもお前の生き方を変えられる自身はねえよ。」

どうやらそんな会話が気に入ったのか、ヌルは人の姿になった。

「ではどうしたい？」

「実はな、お前に研究してほしい題材がある」

「・・・ほほお？」

「魔族の魂の、欠落した魂の補完と構築、だ。」

「・・・！」

目を見開くヌル。

そう、俺の真の目的はこれだ。

あの流れを完全に变えてしまえば歴史や時間の修復力にじゃまされる。

しかし、魔界に引き戻された、人類の歴史の向こうに隠れたヌルならば、そのきっかけになる、そう思ったのだ。

「人間、お前はおもしろいことを考えるな。」

「まあな。知り合いの魔族が魂の欠落で再生不能になるらしくてな。今から研究すれば、間に合うかもしれない、と思ってる。つまり、俺は俺の利益で人間を裏切ってお前を牢からだそうとしている」

契約に裏表は必要ない。

全部さらす必要がある。

悪魔との契約はそういうものだ。

「で、ワシの報酬は？」

「この場からの逃亡と、未来の知識の一端」

「・・・よかろう。」

俺はこの一手が逆転の一手になるとは思っていない。しかし、必ず、必ず、きっかけになると信じていた。



過去の時とは違う一手が、どんな未来を作るのか、俺は理解できないまでも期待していた。

たらふく魔法技術とオカルト知識を持ち帰った美神さんは満足げに微笑んでいたし、シロモタマモも自然にあふれた環境で遊び回って嬉しそうであった。

マリア姫から預かったメッセージを聞いて、カオスも嬉しそうだし、そんなカオスをみてマリアも嬉しそう。みんなに利益のあった時間旅行であった。

あ、そうそう。

「美神さん、あの能力、封印した方がよくないっすか？」

「・・・そうね。さすがに自分でも巧く使う自信がないし、ね」

練習中に失敗でもすれば、よくて時空の迷子。悪ければ宇宙に放り出されて即死。

さすがに怖すぎて使えない。

「ほれ、妙神山ならその辺の相談に乗ってくれるじゃろ」

「・・・そうね、小竜姫様にでも相談してみようかしら」

不意に気づく。

もしかして、平安移動の布石か、と。  
となると、いろいろと準備したいな。

まじ、準備大切です、ええ。

「まあ、その辺は持ち帰ったオミヤゲを整理してから・・・。」  
「そうよそうよ、ちょっとカオス、頭を貸しなさい!!」

いろいろな装置や書き移された書類、さらには書籍などを引っ張り出すと、カオスも非常に嬉しそうに読んだりし始めた。

「じゃ、俺の方は魔鈴さんにでも恩を売りに行きますんで」  
「箒の一つでも作ってもらってくるのよ〜!」  
「ういっす!」

荷物もちも含めて大量の書籍をもってシロとタマモをつれて行ったところ、持ち込んだ書籍量と質が余りにも貴重すぎて、その場で  
卒倒。

魔法料理魔鈴が臨時休憩になると言う事態になってしまった。

とはいえ、俺も店を手伝ったことがあるので、簡単な処理とオーダーを受けつつ何とかシロタマで休憩時間までごまかしていると、  
突如魔鈴さん再起動。

奇声を上げて書籍に飛びつき、鼻息も荒く読みふけり始めた。  
さすがに本日は臨時休業決定。

落ち着くのを待っていると、時間はすでに夜。

美神さんにシロとおキヌちゃんはこのまま魔鈴さんのところに泊める方向で話を付けると、美神さんの方もパニックらしく「今電話

しないで！ 最高潮なのよ！」と切られる。

さーてこちらはどうしよう、と思っていたら、どうにか現世復帰した魔鈴さんが、うつろな瞳でこちらを見ている。

「・・・よこ、横島さん。こ、こ、これは、どこで手に入れましたか？」

うつろな瞳の中に胡乱な輝きがちらほらと・・・。

仕方なく、事故で中世に飛んでしまい、その際に仕事をした事を話し、さらに魔鈴さんの研究を覚えていたので報酬の一部に盛り込んでもらったことを話すと、魔鈴さんは飛びついてきて、キッスの嵐を俺に投下した。

「ああ、よこしまさん、ああ、なんて、なんて素敵でありがたくて嬉しくて!！」

謔言のように感謝を口にする魔鈴さん曰く、今までミッシングリングになっていた知識の大半が記載された書籍だったそうだ。

これがあれば、研究は一足飛びに進み、今までおこがましくて名乗れなかった「白魔術体系」としての名乗りを上げられるほどだという。

「ここまでされて、私は横島さんになにを差し出せばいいんですか？ お金じゃ足りないし、店でもだめ、ああ、体を差し出しても足りない、足りないわあー!！」

絶叫しつつキャラ崩壊の危機に面した魔鈴さんへ、うちの事務所用の飛行書を数本作ってほしい旨伝えると、魔鈴さんは「商業ベースに乗せて全世界に標準配布するぐらい作ってもまだ足りないのよ、そのぐらいの価値があるの!！」と再び絶叫。

「魔鈴さん、あなたにとってどれだけ価値のある物でも、俺らにはわからないんすよ。だから、借りだと思ってる差分は、いつか返してくれればいいって感じで」

ああやっぱり体で返さないと！ とか叫んでいる魔鈴さんを鎮静化させ、事務所用のカスタム箒と召還用のアイテムを作ってくれる約束になった。

今回手に入れた書籍の研究実証にもなり、ずいぶんと魔鈴さんも助かるらしい。

そんなわけで、うちの事務所には、人数分のパイロットスーツと長距離飛行計画所の書類が準備されることになったのであった。

さらに、カオスのところに帰ってきたオカルト書類にも興味があるらしく、半ば事務所に居着いたカオスのところに魔鈴さんが通ってくる、そんな事が日常になりつつあるのであった。

始まりはカオスの絶叫だった。

「くそー！ 記憶力が、記憶力がこぼれ落ちるー！」

どうも、カオスの脳記憶力は限界にきているようで、新しい記憶を入れると、古い記憶が押し出されてしまうらしい。

判断力や解析力は高いのだけれども、それ以上に記憶に関わる部分が問題で困っているようだ。

でも、記憶なら書類とかに残るし……。

「総合的な判断に困るのじゃ。全部の記憶と経験とリンクせねば意味がない！」

「だったら、外部に記憶層でも作るか？」

「んあ？」

「パソコンの外付けHDDみたいにさ、カオスの脳味噌を機械的に複写して外部記憶層にして、人工衛星かなんかの中継で世界規模のフローをして、世界のどこにいてもアクセスできるようにすれば・・・」

「小僧、それじゃ、それがあれば・・・。」

そういいながら頭を抱えるカオス。

「それを作る脳味噌の余裕がないのじゃ」

「じゃ、ちと若返るか？」

「な？」

両手に出した文珠で「若・返」。

すると、先日中世で見たときのカオスが復活した。

「お、おおおお！ この漲る力と発想力！ すばらしい、すばらしいぞ！！」

「感触からすると一週間はそのままだから、その間に作れるだろ？」

「衛星回線は無理だが、日本国内フローぐらいは三日で作ってみせるわ！」

かかと笑うカオスであったが、二日後に「金がない」と泣きついてきた。

仕方ないので貯金から一千万程貸すと、その後、本当に三日ほど作ってしまった。

カオス式地脈伝導記憶集積装置。

とりあえず、カオス自身が実験し、その結果ができればオカルトパテントをとるそうだ。

その際にでた利益は7：3の7ほどこっちにくれると言っけど、カオスが生み出す利益はそんなものじゃないはずなので、研究資金に「7」もってけ、と言つと、感動で涙を流す爺カオス。得難いパトロンだと感動したらしい。

まあ、俺の方も俺で目的があるので、カオスは存分に活躍してほしいだけなんだけどな。

記憶障害に悩まされたカオスの記憶能力に問題がなくなった途端、一つの研究成果を発表したいと言いつ出した。

ドクターカオス最盛期の発明にして、世界的にも二つしかない成功例。

メタルソウル、人工靈魂の生成。

試作型人造人間マリア、洪鯖人工靈一号。

この二体しか存在しない人工靈魂に、新たな一名を、いや一命を追加したいというのだ。

「金たんねーし」

「そこはほれ、美神に借金してでも……。」

「逆によお、ボディースペックが高すぎだろ？ 靈的素材の排除と力を人並みに落とせば、必要資金が十分に一以下だぞ？」

「それでは意味がなかるう！ 最高の素材と最高の先頭力がなければ……。」

「それを誇るマリアは、普段なにしてるよ？ 戦争か？暗殺か？」

家事じゃねえのか？」

「・・・そうか、つまり家事能力に絞って作れば・・・」

「一般企業として、家電として、爆発的に売れるぞ、メイドロボ」

「それじゃー！ー！！！！！！」

試作型人造人間テレサは、そうして生まれた。

とりあえず、研修先としてナルニアの横島（うし島の）夫妻のところへ送ったところ・・・。

「男の夢をありがとう、愛しき息子よ」という父のメールと「忠夫とは正面から話し合う必要があるのだ、近日中に帰国します」という母のメールが来た。

スケベ男のあしらい方と、お袋のスーパー主婦能力を学んでほしかったんだけど失敗したかなーと返信したら、とりあえず母からは「時間いっぱい仕込んでみせるわよ」という力あるメールが帰ってきた。

この経験をベースにすれば、どこの家庭でも大丈夫だろうとカオスに話すと、カオスから「村枝商事の家電販売部門からオファーがきとる」とかいよいよ始めた。

つまり。

「あの金儲けが大好きな両親が、爆発的に儲かるとふんだって事だよ、カオス」

「ふ、そうか・・・ならば自信を持って売り込みに行くか」

ニヤリと笑ったカオスが、老人の顔だったけど、あの中世のカオスと同じ顔をしていた。

村枝の販売網、六道の販売代理店で売り出された人造人間テレサシリーズは、爆発的に売れた。

はじめは金持ちや好事家を買っていたのだが、その卓越した家事能力や人以上の力が評価され、改良型のテレサが介護や育児の現場に投入されると、各国の手も伸び始めた。

もちろんガイノイドではないので性的な能力はない。

それを望む声もあったが、彼女たちのメタルソウルが望まない限りそれだけはない。

彼女たちには魂があり、その上で心を持って育てている。

だから、事実上は販売だが、彼女たちが自分で職場を辞める権利もあるのだ。

ひどい相手には一日でやめてくる場合もあるが、その際もちゃんと購入契約書を書わしているので問題にもならない。

陰でいじめや虐待をしても、彼女たちの記録にはちゃんと残っている。証拠物件として関係部署に提出されるシステムにもなっている。

さすが母だ、と感心したら、母曰く

「あの子たちは、いわば私の弟子、娘よ？　娘のために万全を期するのは当然よ」

だそうだ。

家事万能、力は人以上、人件費は人以下。

さすがに一般事務や他の仕事への転用は禁止にされていたが、家事に関しては無敵の存在として、きわめてこう緒運販売を続けている。

ファンネルの改良もカオスとともに進めているし、正直、GSをやるより儲かってるんじゃないだろうか？



まあ、目的は金儲けじゃないし、な。

もちろん、金はあった方がいいし、回っているうちは他の人も幸せになれるわけだから、どんどん回すけど。

「そろそろ、行くわよ」

「はい、美神さん」

「テレサ、マリア、あとお願いね」

「イエス、ミス美神」「イエス、オーナー」

実証実験の終わった初代テレサは、美神さんのところで働くことになった。

正直に言うと、おキ又ちゃんが仕事をとられたと泣くほど家事が優秀だったりする。

もちろん、霊的な要素が一切ないので、GSの仕事を手伝えることはないのだけれど、それでもおキ又ちゃんにとっては台所も自分の居場所なんだろうと思う。

ちょっと罪悪感がないわけではない。

故に、最近はチーム分けで2班ぐらいに分かれて仕事をしている。

美神さんおキ又ちゃん。

シロ、俺。

時々全員。

キツいときは俺、美神さん。

たまにマリアも手伝ってくれて、かなり有り難い。

その分手当をはずむんだけど、今のカオスにしてみれば大したことのない収入だろう。

カオスも収入がいいのだからアパートから引越せばいいのに、今まで世話になった大家に安定的な収入が必要だからということだ。

あのアパートに住み続けているというのだから相当に義理堅い。

「こういふ義理堅さが過去のパトロンとの良好な関係になったんだらうと思ふ。」

## 第十六話（後書き）

SSでおなじみのカオスブーストでございます。  
で、テレサ量産というチートつきw

てへへ、やりすぎちゃったw

次回アップは2/28予定です

## 第十七話（前書き）

本作「〜再演」の真実の一端が現れます。

・・・とりあえず、酔ったときバージョンW  
不評なら書き改めますが・・・w

## 第十七話

俺の収入とカオスの収入をマリアとテレサに処理してもらったんだけど、美神さんもそれに便乗した。

途端、今まで脱税していた部分の大半が「節税」で補えるとわかり、美神さん狂喜乱舞。

この上脱税すれば、みたいなことをささやいたので、マリアに追徴課税分をささやいてもらい、火を消しておいた。

とはいえ、詰め込んだ仕事が終わった頃、ようやく美神さんは重い腰を上げた。

オカルト研究も仕事も一段落。

そう、やっと行く気になったのだ。

妙神山へ、時間能力の封印に。

事務所全員で行こうとなったとき、テレサに後を任せるつもりだったのだが、テレサも行ってみたいといい始めた。

ちよつと考えた美神さんだったが、それもいいかと考える。

たぶん俺の文珠で解決するつもりなのがありありと解る笑顔で「何とかなさい。事務所の仲間の頼みなんだから」とかなんとか。

まあいいですが、ということ、カオスが追加した文珠共鳴器官に文珠をはめ込み、「軽」の文字を込めると、テレサの重量が20kgほどになった。

これならお姫様だつこでも可能。

そういつて笑つと、なんとなく照れた顔のテレサ。

「テレサ、あとで記憶の共有を要求します」

「姉さん。了解。条件として、過去の共有を要求」

「条件付きで了解」  
「ふふふふふ」

なんだか似たもの姉妹らしい。

俺の箒にテレサを乗せて、あとは全員自分の箒にまたがった。  
何しろ箒で行けば交通費がゼロ。

免許も不要となればコブラより活用しているぐらいだ。  
車両税もモツタイナいから車売ろうかしらとか言っているあたり  
本気だ。

西条さんは血の涙を流して魔鈴さんに箒の量産を依頼しているが、  
真っ向両断で断られ続けているという。

かわいそうだが、この事務所分の箒にはそれなりの取引があった  
のですよ、ええ。

もらった箒の性能も格段で、全力で行けば明神山に日帰りできる  
というのだから恐ろしい。

むろん、文珠などで障壁を張らないと風でスゴいことになるけど。

「お父様、よろしくお願いいたします。」

「テレサ、お父様はやめようよ」

「ですが、ドクターカオスとともに私を作ったのはお父様だと聞いて  
います。」

事實は事実だけど、人件費を軽くするために手伝ったにすぎない。  
最終的には「忠夫様」で勘弁してもらったんだけど、それでも美  
神さんやおキ又ちゃんの視線が痛い。

鬼門の前に立ったシロは、鼻息も荒く挑み打ち勝った。

タマモも軽くないなして勝ち、とりあえず俺も勝っておいた。

この時間でまだ勝ってなかったし、自分の実力も見ておきたかったから。

で、極めつけはおキ又ちゃん。  
ネクロマンサーの笛で強制的に眠らせて勝ち。

というわけで、美神事務所全員が妙神山に入る資格が出来たわけだ。

もちろん大興奮の小竜姫様。

美神さんを除き、靈的に成長期の人間（ぼいの）が四人も着たのだ。嬉しくないはずもない。

「修行ですね、修行ですよ、修行ですよ〜」

きゃっほ〜、と喜ぶ小竜姫様を後目に、にっこり微笑む美神さん。

「いいえ、私の能力封印の相談よ」

「え？ 修行、じゃ、ないんで、すか？」

「相談よ。」

「……………」

滂沱の涙を流す小竜姫様に、手軽な交通手段が出来ましたのでちよくちよく修行にきますよ、と囁くと、元気いっばいに復活した。

この人、というか柱も随分前の時と変わってしまったな！。

『（面白いからよろう？）』

「（まーな。）」

とかなんとかやってる内に、美神さんの時間移動能力に封印がかかった。

どうやら早々に封印を行って、楽しい人間指導をしたかったらしい。

「さあ、みなさん。修行しましょう!!」

金を払ってでも修行したいと言われる妙神山で、ここまで勧めてくれるのだからということ、みんなで一泊して修行することになった。

ただし、この一泊がこれから先の流れを大きく変えることになった。

修行を終え、風呂から上がり、夕食という頃になって、ふらりとその人物は現れた。

「ほお、今日は客人が多いな」

その人物こそ、

「だれ、この猿」

「み、美神さん、失礼ですよ!」

「よいよい、おじょうちゃん。ワシはただの猿の神様じゃよ」

「・・・ハ又マン?」

「そつとも言うな」

瞬間、背筋を伸ばして礼をとる美神さん。

もちろん、俺もそれにならない、おキ又ちゃん、シロもそれに続いた。

当たり前だが、タマモはそれを無視。

彼女の大本の霊格を考えれば、仕方ないだろう。



「よいぞ、客人。気にするな。たんなるじじいじゃよ」

「・・・なんだ。じゃ、きにしない」

「よろしくつす、老師」

とりあえずリラックスした俺たちを、にやにや笑って受け入れる  
老師。

「ところで小僧。なんでワシを老師と呼ぶ？」

しまった・・・完全にミスった。

表情を隠せず、ダラダラと冷や汗が流れる俺を、不振そうに事務  
所仲間も小竜姫様も見つめていた。

「小僧、飯の前に話を聞かせる。」

首根っこを捕まれて、俺は老師の部屋に引き込まれてしまった。

とりあえず、老師にも逆行記憶があった。

神族と魔族の高級職一定にもあるそうだ。

つまり小竜姫様は雑魚扱い。

ちよつと泣ける。

「で、とりあえず、どの辺が前と違うんじゃ？」

「えーつとですね・・・。」

そついいながら、懐のメモ帳を出す。

このまえ心眼と一緒にまとめたリストを出すと、一度眼鏡をかけ

なおして溜息の老師。

「おまえ、自重しとらんな」

「・・・アイツを救うと決めましたんで」

「それにしたって、ヌルを使うか？ 普通。」

「たぶん魔界のどこかで、おもしろおかしく実験してると思うんすけど？」

「お前たちから逃げて以降行方不明じゃよ」

「・・・さすがに甘かったか。」

「そうでもないぞ？ 一応追跡調査で時々浮かんできおるが、これと行って犯罪はしておらんらしいの」

「へえ・・・。」

犯罪はしていない、魔界にも帰っていない。

なにしてるんだ、アイツ。

305

「まあよい。・・・ところで、そろそろ「ウルトラスペシャルデンジャラス&ハードコース」をせぬのか？」

「・・・う。」

地力は上げたいんだよなあ・・・。

でもあれをやって、なにに進化する？

正直に言つと、この先に「なつて」「しまつのが怖い気もする。」

「小僧の進化の先は、あの二文字の文珠ではないぞ。たぶん同期連係文字数の増加と威力の拡大じゃろう」

あー、それはほしいかも。

連係文字数が多くなれば多いほど精度と威力が上がるし、奇跡へのアプローチも可能になる。

そう、イメージの拡大が容易になるのだ。  
少なくとも、四つ連係できれば、芦田さんに負けない手段がとれるし。

「そりゃなんじゃ？」

「んー、上司に秘密に出来るなら教えますけど？」

「無理じゃな。」

「じゃ、企業秘密ということだ。」

「明日の朝にはヒヤクメがくるぞ」

「それでもものぞけない記憶封印の彼方においてありますので。」

つつか俺用の記憶層は、ヒヤクメだって覗けないし。

「ほお、記憶や考えを外の機械に置く、か。面白いのお」

「こうすると、並列演算が自分だけで出来て面白いっすよ」

「人間もやるのお。」

「カオスなんか、世界中に売り出したテレサの演算の一部をリソースに使えるから、本気で化け物並の演算速度を使えるっすよ。」

「そりゃ一度見てみたいのお。」

そんなことをいいながら、俺たちは格闘ゲームをしていた。

もちろん、周辺で覗こうとしている人たちへのアリバイ作りであった。

「で、やっつくか？」

「やりましようか・・・。」

この選択は、基本的に順当だ。

しかし、この選択が、すべてを狂わせた。

さすがに自分の完全な未来を知ることなど誰にも出来ないのだと

思い知らされた。

横島君が、翌朝八又マンの修行を受けると聞いた。

強烈な靈力を八又マンから受け、潜在能力を開花させるといふバカみたいな修行で、一瞬で終わってもおかしくない時間加速空間での修行を、もう10分はしている。

小竜姫様の話では、すでに加速空間で20年は過ごしているだろうという話だ。

精神的にも靈力的にも成長期な横島君には、非常に有用で有効な修行なのだろうけど、私はひどく焦っていた。

まるで置いて行かれてしまうような気がして。

そんな風にやきもきしていると、不意に横島君の目が開く。

「・・・あ、美神さん。久しぶりっす」

「私には一時間も経ってないんだけど？」

「そうすっすか・・・いやー、長かったっす。」

苦笑いでふらりと立ち上がり、そして構えた。

「さて、忠夫。お主は今、人を遙かに越えた所に立っており。解るな？」

「あー、すでに行き着く先と結果も見えるっす。」

「ならばその結果、ひきだしてみせい！」

「つつす!!」

魔猿となり、嵐のような攻撃を始めたハヌマン。  
避難した私たちを守るように、それでいて一瞬たりとも攻撃を受  
けずに逃げる横島君。

彼の周囲には、まるでファンネルのように文珠が三つ、四つと取  
り巻き始めた。

不意に気づく。

彼の周囲に浮かぶ文珠の数がスゴい勢いで増えていることを。  
まるで、そうまるで、一枚の壁のように文珠が密集していた。

「ほお、同期連係拡大は間違いないようじゃな」

「いやー、不味いことにその先があつたつす」

「なるほど、みせてみよ!!」

「後悔するつすよ?」

そついいながら、文珠が輝く。

「・・・つ、そうか! そついう効果があつたか!!」

「まだ先があるつすけど、見せられないつすよ?」

「いや、引き出す!!」

まさに局地災害のような猛攻の中、横島君は冷や汗一つで受け流  
していた。

いや、今のところけがをしていないだけだ。

一撃でも受ければ塵も残らない。

そんな攻撃だった。

「老師! それでは横島さんが!!」

「だまれい! まだ、まだ先があるのじゃ!!」

瞬間、横島君のつきだした手の中で光が生まれる。  
文珠ではない何かの光に、八又マンの攻撃は止まった。

「・・・なるほど、後悔したぞ、忠夫」  
「でしょ？」

光輝くそれを体内に隠した横島君は、苦笑いでしりもちをつく。

「参りましたよ、老師。もう俺、人外っすよ」  
「ではその力封印するか？」  
「それもモツタイナいっすね」  
「便利に使い。そして持て余したらここにくれればよい」  
「へーい。」  
「・・・ただな、死ぬなよ。」  
「うっす。」

そんな会話のあと、私たちは詰め寄る。  
一番熱心だったのは小竜姫様だった。

「とりあえず、今まで作ってた文珠、人が作れるから人文珠てことにしますけど、量産できるっす」

そういつてつきだした両手の中に、山のような文珠が瞬間的に現れた。

絶句する私たちの目の前で、その文珠は数を減らして色を変える。  
金色の文珠に。

「で、これが、太宰府の藤原道真公が作れる文珠、神文珠っすね。」

溢れるばかりの神々しさ、そして力。信じられないものを作り出してしまった。が、小竜姫様の猛攻は続く。

「・・・横島さん、前座はいいです。最後のあれは何ですか!？」

神の文珠が前座? どういうこと!?

そんな強い視線を向けると、ひどく困惑した顔で横島君はハヌマンをみていた。

「教えるしかないじゃろ?」

「じゃあ、まあ教えますが・・・。」

記憶していることに耐えられなくなった言ってください。文珠で記憶を消しますから。

そんな一言とともに彼の手の中に生まれたものは、透明な珠だった。

大きさはソフトボールほど。

ただ、その靈気はおそろしいものだった。

「こ、これは・・・。」

のどを掠らせて呟く小竜姫様に、横島君は軽く答えた。

「龍珠つす。」

瞬間膝から落ちる小竜姫様。

龍珠、といえば、成人した龍が自分の靈力を込めて生成する宝具であり権能の核ともいえるものだ。

未だ年若い小竜姫様が持っていないのは仕方ないが、龍神でもな

い横島君が至ったというのは・・・。

「まあ、俺の霊脳を開花させたのは龍神の小竜姫様つすから、ありうべき未来だったかもしれないっすね」

そういいながら、その権能を説明されたんだけど、それが無茶苦茶デタラメであった。

まず、雲を呼び、雨を呼び、雷を呼ぶ。

これを霊能消費なしで行えるというのだからでたらめだ。さらに、その龍珠に文字を込めると、その龍の権能が使えるというのだ。

「氷」ブリザードドラゴン  
「火」ファイヤードラゴン  
「水」ウォータードラゴン  
「風」ウインドウドラゴン  
「黒」ブラックドラゴン

こんなことを魔鈴に知られれば、明日から実験動物生活だろう。で、気づいた。

入れられるのは文字。

色もはいるだろう、と。

「実はここからが本番つす。」

現在龍神の主流を占めているのは「青」龍。

しかし「赤」龍も「緑」龍も「白」龍もいるのだ。

で、そのすべての権能を使えると聞いて、小竜姫様は泡を吹いたが、瞬間的に復帰する。

「『黄』は、はいりますか？」



その意味の重さに。

で、横島君は、戸惑いながらもうなずいた。

「……今までの、すべての非礼に対してお詫び申し上げます。」  
黄「龍様。」

「……だあ……、だから言いたくなかったのに。」

黄龍はすべての龍を束ねる種族でありながら、この世界から姿を消してしまった龍。

その龍が再び舞い戻るまで、「青」龍が龍神をまとめているだけというのが伝承なのだそうだ。

何とか説得して、どうにかこうにか龍神界には伝えないでもらったものの、絶対下界に帰しないと息巻く小竜姫様。

「一応ですね、俺は人間で学生で!!!」

「ですが、あなた様はいずれ「黄」龍に至る方！ 龍のすべてを捧げたいお方!!!」

「だったら、小竜姫様が下界に降りるっすか!?!」

「いいんですかあ!?!」

「……ばかもの」

老師の肉体的説得により、一度は引いた小竜姫様だったけど、いつの間にかうちの部屋にゲートをつないでいた。

「忠夫様のお世話が出来るように、老師にお願いしました!!!」

てなわけで、龍神の一柱が、ちよくちよく家にくるようになってしまった。

湯水のように溢れる文珠を有効に使おうということで、カオスとともに開発したのが精霊石の代わりに霊具に仕込もうというものだった。

神通棍との相性はばっちりで、シロの剣にも相性がよかったが、ファンネルには強力すぎた。

フレームが追従しないため、コストを考えずに改良しないと耐えられそうになかった。

逆説的に文珠を消耗品ととらえられるほど頑丈なファンネルはファンネルじゃないので、別開発だという結論に至る。

現在は美神さん、シロ、おキヌちゃんの霊具増幅用に使っているが、実に気持ちいいほど意味がない。

彼女たちはただでさえ協力なので、普通の仕事にはオーバースペックなのだ。

故に、文珠式霊具はお蔵入りしている。

はあ、なんか使えればなあ・・・。

「マリアは、文珠に感謝です」

マリアとテレサの動力源として、文珠も使えるようにしたら、性能が格段に上がったそうだ。

そりゃいいことだ、ということだ、常時三つほど持たせているの

だけれども、消費量は少ない。

やはりそれだけ日常では使うことがないのだろう。  
そうになると、自動車やバイクの動力に転用するか？

「意味がない。筈があるじゃろ？」

「そりゃそうだ。」

まったく意味のない成長をってしまったと思った俺だった。

速攻で終わってしまった仕事の帰り、タイガーにもピートにも教えていない店で飲んでいたら、タマモが姿を変えて現れた。

「なんだタマモ、中学生の来るところじゃないぞ」

「いいじゃん、お兄ちゃん」

「うっわー、かわいい！」「先生、しょうかいしてよー！」

俺をGSだと知っているいろいろとホステスが相談しに来ているうちに「先生」とか呼ばれるようになってしまった。

まあいいけど。

で、そんな店でゆっくりしていると、いつのまにかタマモが現れて女の子に説教してゆくようになり、いつのまにかタマモが増殖している状態になって居心地が悪くなるのだ。

ここも潮時か、ということ、あきらめざる得ない。

「・・・あのね、あんたたち。そんな態度で男が気持ちよくなると

思うの？」

「だって、先生みたいないいおとこならいいけど・・・」

「ばかね、バカな男にも惚れて見せるのが商売女でしょ？」

「でも・・・」

「じゃあ聞くけど、お金を払えば近畿剛一が食事してくれるって話があつたらどうする？」

「い、い、い、いくら!？」

「二十万まで出す! 即金!」

囁々と燃えるホステスたち。

銀ちゃん人気もんやんあ。

「おしゃれとかするし、落とす気満々でいくでしょ？」

「「「もちろん!」「」」

「でも向こうは、ぜんぜんこっちをみるきなかったら？」

「・・・」

彼女たちの心の内には、金を払ったんだから相手するのは当たり前だろうという気持ちと、近畿君に相手にしてもらえるほどの魅力はないし、という気持ちが渦巻いてる。

「なにもね、ベタぼれになる気はなくていいの。ただ、近畿君に向けるであろう気合いの一部でも見せるべきでしょってはない。あんな等に金払ってるんだから」

「「「勉強になります!」「」」

こうしてサービス満点のタマモ系列が出来てゆくんだよなあ。

「おにいちゃんも、こういう有望な店を見つけるの上手いわよね？」

「あーもー、営業だよ営業。」



「あのお、芦田さん。もしかして、逆行知識あり？」

「なにを言っているんだね。私はこれでも上層部だよ？ 知らん分けないだろ」

「あははは、そうっすねえ」

くそ、さっちゃん、きーやん、今度泣かす！

「ん？もしかして君は勘違いしてないかな？」

「なにがっすか？」

「私が計画のじやまになる君を消しにきたとか。」

「え？」

「私は感謝しているのだよ。確実に私を魂の牢獄から救ってくれた人間が現れたのだからね。」

「・・・？」

救ってくれた？

「もしかして、芦田さん、すでに？」

「ああ、私は立場的に魔王だが、すでに固定化された柱ではないのだよ。」

「じゃあ、戦争は仕掛けない？」

「それは歴史的に決まっているのでな。茶番だが仕掛けるよ」

「・・・出来レース？」

「そうならんように戦力を増強しているのだが・・・。」

曰く、オカルト兵器が売れなくて収入が厳しい、曰く、バカな金持ちをだましてオカルトを売りたいのに上手くいかない、曰く・・・。

囁々と続くグチの数々に目を白黒差せていた俺とタマモ。

「こまつてるんだよ、実際。君とカオスのせいで資金不足でねえ。  
・このままでは「娘」も作れない。」  
「ぶふうー！ー！！」

思わず吹きましたわよ、再び！！

つうかもしかして・・・。

「金を貸せ、と?」

「いやいや、娘を二人ともたぶらかされた可哀想な男に見舞金でも、  
と」

「金をよこせ、と?」

「いやいや、催促なしの利子なし担保はあるよ? なにしろかわいい娘だ」

「てめえ、無茶言いやがるなあ。」

「ああ、そうそう、侍女に「テレサ」もほしいかなあ?」

「芦田さん芦田さん?」

「いや、あの「テレサ」はいいね。可愛いし素直だし。うん、じつにいい」

足元見やがって。

「テンコマンド抜き。寿命切り替え簡易化。」

「よからう。」

「で、いくらだよ?」

「二千万ほどで窮地を脱するのだが・・・。」

上目使いの魔王ってどんなんだよ?

その目の奥で語ってるし。

「わかったよ、二億ほど口座に放り込むからな」

「・・・！ いやあ、催促したようで悪いなあ。」

「してたじゃん、目で「億」よこせっていつてたじゃん！」

歡喜の芦田さんにはタマモの眩きは聞こえていなかった。

「借金を迫る魔王、この写メ、いくらになるんだろう」

しかし芦田さんの不幸は止まらない。

つつか、わりと安易に助けられそうな予感。

「いやーさすが龍珠を生み出す人間だな」

「「ぶぶーー！」」

三度吹きました！

「な、な、な、なんぞ！」

「・・・バカか君は。妙神山なんて隙だらけの場所で権能を見せれば、ばれ放題に決まっているだろう？ 神界も魔界も、あののぞき魔が言い触らしておるぞ。」

「だ、駄女神め・・・。」

「うん、いい命名だ。広めておこう」

が、まずすぎる。

文珠でさえ不味いのに、龍珠つてのがまずい。

少なくとも龍神総出で殺しにくるか拉致にくるか・・・。

「いい着眼だが、事実はまだ少し斜め上だ。」

「といつと？」



「いま、龍神は各部族総出でビューティーコンテストをしてる」

「は？」

「美人で悩殺しようと言う話になってな、一番の美人を決めるそう  
だ」

わっかんねー！！！！

でも、時間が稼げそうだ、うん。

「魔界でも同じ流れで美人コンテスト中だ。」

おい、魔界。・・・大丈夫か？

「もちろん、娘たちの枠はあけてあるから期待してほしい。ち  
ゃんとトップに入って君にお披露目するからな」

そういつて、伝票をちゃっかりこっちに押しつけて「におくにお  
く」とスキップで帰る魔神。

稼いでいてよかった、なんだけど、結構複雑な思いの俺であった。

## 第十七話（後書き）

実に駄目親父になってしまった芦田さんw

でも結構気に入ってます。

やっぱりほら、魂の牢獄が彼を引き上げていたんですよ、能力とかいろいろ！

そういうことにしました！！

で、再演、つまり、既知者にとっての過去の再演という意味でもあると言う話です。これも過去SSでは手垢が付いたねたですねw

次回 3/7 アップ予定・・・？

## 第十八話（前書き）

高校生のよこっちですが、内面による加齢効果で、飲み屋でも疑われません。

GSですしW

## 第十八話

とりあえず、早々に老師の所へ報告に行くと、老師も膝をついて倒れた。

あまりの芦田さんの変わりように呆然だ。

この分だと、芦田さん陣営でまじめなのって数えるほどしかないな  
さそうだなあ。

つつか、又ル無惨。

研究してたら謝らないといかんかもしれん。

「忠夫様、今晩はお泊まりになられますか？」

結構機嫌のいい小竜姫様。

あまりこの方には関係ないらしい。

「……ところで、芦田さんの娘さんとはどのような関係で？」

怖い怖いよ、なんか怖いよ小竜姫様！

「いえいえ、尊き龍となるお方に女の陰が多いのはいいのですが、  
その女の質も見極めませんと、ね」

ろ、老師助けて！　っていねーし！！

「夜はととてもとても長いのです。ゆっくりお話ししましょうねっ。」

いやー、たすけてー！！！！

誰も助けてくれず、とりあえず前の時間のことなんかをいろいろと話したところ、ガンガン泣かれてしまいました。悲恋だ何だというのでチョップをかます。

悲恋とかいうな、と。

俺たちはさすがに短すぎる時間だったけど、心から愛し合えたんだし、結果はつらかったけどお互いを守りあえたんだ。

そのことを悲恋だとか陳腐な言葉で締めてほしくない。

そういうと、ひどく落ち込む小竜姫様。

そういえば、事件の後の小竜姫様もこんな感じだったっけ。

だから思わず撫でると、真っ赤になっつてうっむく。

ちよつと可愛い。

「彼女たちとの関わりは、今のところありませんし、前の時と同じにはなりそうもありません。でも助けたいと思う気持ちも嘘じゃないんすよ」

「・・・私は、前の時の私は役立たずだったんですね」

「小竜姫様。役に立つとかたたないとか、家族や仲間には関係ない言葉なんですよ？」

「・・・はい」

そんなこんなでまぶしい朝日を浴びつつ、俺はアパートに戻った。

・・・が。

「横島!!! おまえ、最上級の修行をしたって本当かあ!?!」

「んあ? 雪之丞?」

「俺にも紹介してくれえ!!!!」

そんなこんなで、後日、魔装術の極みに達した雪之丞であった。

お父さんとお母さんに電話して「芦田」グループへの攻撃を控えてもらうことにした。

「なんでだい？ あれって魔族の出張機関だろ？」

「んーっとね、あそこの利益が落ちると、お兄ちゃんの未来の嫁候補が生まれなくなるのよ。」

「・・・そりゃあ、大問題だね」

「でね、この前魔神が直接「かねくれ」って言いに来たときに、娘を作りたいからじゃまは控えろって脅しもかけられちゃったの。」

「ちよつと虐めすぎたかしら？」

「うん。 たった二千万で会社が建て直せるなんて言ってくるぐらいなもの」

「そっか、あと一息だったのね。」

「そういうわけで、お母さんごめんね」

「いいのよ、子供の心を守るのも親の役目なんだから」

というわけで、経営バランスさえよければ、失敗はなくなったわけだけど、芦田さん、典型的な事業失敗タイプなのよねえ。大丈夫かしら？

先日とは違う飲み屋で飲んでいたのに、なぜか現れる芦田さん。

「いやー、この前はたすかったよ、うん。」

まさかあの資金全部兵鬼にまわしてないよな？

「……マ、マサカア〜？」

だめだ、このおっさん、全然ダメダメだ。

まるでダメなオッサンだ。

というわけで、ガンガン説教タイムの開始だ。

少なくとも、三姉妹を何の落ち度もなくうまれさせてほしいんだよ、おれはね!?

小一時間ほど説教した後で、とりあえず乾杯したらすっかり元の調子に戻った。

まあいいけど。

で、芦田さん、なにがそんなに嬉しいのかと言えば、逆転号の制作に成功したそうだ。

あと、コスモプロセスにも目処が立ったとか。

……あのですね、芦田さん。とりあえず俺、敵っすよね？

「いやいや、ここまで内情を知っていて、さらには娘の婿候補だろ？ 身内も同然だよ!」

芦田、自重しろ!!

……ん？

「身内だからって、支援しろ?」

「・・・あははははは。」

「真つ当な商売しろや、な?」

「しかしだねえ、君のところの両親が、結構怖いのだよ」

「その辺は話つけつから、な。」

「・・・ふむ、では正々堂々と、裏社会を牛耳ろうじゃないか!」

いやー、芦田さん。むちゃくちゃ判りやすい性格だなあ。ベスパも苦勞するぞ、うん。

なんか女の子侍らせて顔をゆるませて、本当にただのオッサンになつたなあ。

やっぱあれか、魂の牢獄、あれがなくなったのがはっちゃけの原因か?

「うん、それはあるね。一度だけの人生だけど、それなりに謳歌できる人生、たまらんよ。」

だから臆病にもなるしスカも引く。

これだから楽しい、と大笑い。

まあ、楽しんでくれるならそれでも良いけどな。

「追加資金はアテにするなよ」

「・・・そこを何とかだなあ・・・。」

だめだ、本当にダメダメだ。

小童姫様が通い妻状態なのを知った美神さんは、なぜかうちの部屋に日参するようになった。



はじめはアルバイトの帰りに送ってくれるようになったんだけど、最近ではちょっとあがってお茶を飲んで、しまいにや銀ちゃんと酒盛りして泊まっていく流れだ。

いやね、前の時もこういうのりがあったよ？

シロがイイ年になってきたとき、俺のアパートにお泊りしたがるもんだから、何回か泊めたら美神さんまでついてくるようになったという事件を思い出す。

と、まあ、そういうことだって期待していいんだろっか？

ちよつとドキドキしてしまう。

ま、一人暮らししてわけじゃないし、何が出来るかって話なんだけどね。

とまあ、そんなわけで、週末遊びに来る愛子や、事務所にいるはずのおキ又ちゃんやらシロやらテレサまで集まるのは狭いので、引っ越ししちやるかと計画中。

事務所に近いところとか、ビルの高いところとかに引っ越せば、通勤も出来るし。

学校からは通勤学禁止を言い渡されてちょっと凹んでいる俺であった。

学校で、愛子と一緒に住宅情報誌をのぞき込んでいると、まるで学生同棲カップルみたいだとか考えるのは不謹慎だろうか？

一応、愛子が遊びに来れる範囲で住みたいので、学校周辺に引っ越そうかと思っただけだけでも、そうなると六道から遠くなくなってしまふ。

結構今の家って、いいバランスにあるんだって事に気づいた。

何なら隣の部屋と今の部屋を買い取って、壁を取るのもいいかな？

お風呂は男女に分ければいいし。

トイレも同じくだな。

あれ、結構いいアイデアじゃないか。

居間を共通のスペースで大きくしてしまえばいいし。  
愛子だって常駐できる部屋も作れるし。  
うん、結構いい感じ。

「・・・ねえ、私が本当に住み着いても平気なの？」

「ん？ なんかまずいか？ いや、女子高生が同棲つつうのは評判に関わるかもしれないが。」

「そうじゃなくて、私はチャキチャキの妖怪で、写し身が女だってだけののよ？」

「・・・おまえ、まだそんなこといつてるのか？ おまえはいい女だよ。まちがいねーよ。」

何度言っても判ってくれない。

頑固だよな、ほんと。

「横島君のほうが頑固だと思っけど？」

「そっか？」

「そうよ」

まあ、そうかもしれない、ということにした。

そんなわけで、不動産屋に相談すると、あのアパートというマンション自体が不動産屋の持ち物件で、逆に全部買いませんかと  
言い始めた。

曰く、物件としてはいいんだが、少々値段帯が高めなので入居率が低いそうだ。

そういえば両脇空き部屋だし、結構別の階も空いてるって言うってたな。

うん、全部買う。

そういうと、不動産屋も結構嬉しそうだった。

俺にしても、これからかかわり合つてあるう物の怪三達の後ろ盾になれるかもしれないのだ。

これは良い機会だと思つう。

「てなわけで、マンション買いました。」

これが元時給250円の男の台詞だろうか？

まるでお気に入りマンガでも買ったときのような笑顔で言つものだから思わず聞き流しそうになつたけど、数遅レベルの出費だつたはずだ。

とはいえ、マリア曰く「よい税金対策です」とのことなので、色々あるのだろうけど。

「しつつかし、あのマンションって資産価値あまり高くないわよ？」

「でも、これからのことを考えると、あの位置にマンションを持つてるのって結構便利っすよ？」

「まあ、確かに事務所にも六女にもいきやすいけどね？」

「俺の学校も遠くないんで、愛子もこれなら通学できそうっすよ。」

「って、愛子ちゃんまで困うの!？」

「いやいやいや、困うんじゃないやなくて、共同生活っすよ。あいつって夜学校に一人じゃないっすか？ もちろんオカルト生徒会があるっすけど、休みの日とか長期休暇とか、結構寂しいんすよ。だから・・・。」

「はいはい、優しいクラスメイトの横島君登場ね？」

「・・・哀れんできかそういうんじゃないやなくて、その・・・。」

「判つてるわよ。わかつてるわ。」

苦笑いの横島君は、たぶん、友達として何とかしたかったに違い

ない。

何度か横島君の部屋に泊まりにきている愛子ちゃんをみて、通学させてやりたいと、心から感じていたんだらう。

横島君は、そういう男の子だから。

でも、それに数億って、ちよつと気前がいいんじゃないの？

「あー、ほら、妖怪とか物の怪で行き先がない無害な奴らをバツクアップできるかなーとか。」

でた、人外博愛主義。

最近の横島君は、人間以外に優しすぎる。

この前聞いた話だと、世間に隠れて会社経営している物の怪に無担保融資をしたらしい。

実にいい加減な送金の仕方だったのでテレサに感づかれてしまっている。

私も私で調べたけれど、その経営自体はギリギリアウトで、融資した資金も右から左で消えていっていた。

バカは仕方ない、と思うけど、バカに利用されるのは面白くない。もうちよつと探りを入れようかしら？

美神さんに丸投げされた仕事を見ているうちに、一つの書類に目が止まる。

ゴルフ場建設現場に現れる怪異の除霊依頼。

「（心眼、こりゃあ・・・。）」

『（猫又親子、だろうな）』

物件を確認しこの物件に行こうとしたところで、美神さんからお

キ又ちゃんを連れていくように話があった。

とりあえず、文珠は腐るほどあるので身の安全は問題ないし、新型ファンネルの実験にもなるので了解した。

各、箒で現地に飛ぶと、植林もされていない自然豊かな山々で、正直にいえばこの土地にゴルフ場なんて作ってほしくないとは思ってたが、その辺も含めて「依頼」なので飲むことにした。ただし、一つだけ引き受け条件を入れた。

対象の処理方法については、当方で一切の権限を持つ

これだ。

依頼主も工事妨害さえなくなればいいと言うことなので、条件が合致し、即座に調査を開始した俺とおキ又ちゃんであった。

また、人間がやってきた。

大きな音を立てる機械にも乗っていないけど、男女の二人組でやってきた。

いやな道具は持っていないけど、たぶん、退魔師に違いない。

こんな奥地までやってくるとは、もうこの地もおしまいなのだろうか？

いまだ子供のケイは小さい。

こんな状態では人里に隠れ住むなんて無理に決まっているし、働くことだって難しい。

もう、私たちは、いや、私は追いつめられていた。  
ぐつと力を込めて爪を伸ばしたところで、男の方がその場で礼を取った。

「俺の名前は、横島忠夫。この地に住む怪異「猫又」に申し上げる！ この地を去っていただけならば、都市部での生活拠点と仕事を世話することができる！ 聞き届けてもらえる気持ちがあるなら、目の前に現れてくれ！」

思わず力が抜ける。

住む場所と仕事を世話するから、この場所から立ち退いてくれ、と言っているのだ。

流石に正面から信用する気にならないはずなのに、なぜか興味が沸き立ってしまった。

だから、ふらりと彼らの前に現れてしまったのは仕方ないだろう。

「.....」

「現れてくれたという事は、興味を持ってくれて事だと思う。だから、この契約書を見てくれ」

そういつて差し出されたのは、契約の精霊込みの契約書で、私たちの部屋を確保する代わりに建物の保守点検を行う業務を行うことがうたわれていた。

そして、その業務にたいする対価も記載されていて、内容は十分以上だった。

「これにサインしてくれれば、必ず俺があなたたちを守る。だから、一緒に来てくれないか？」

その真剣な表情に、全くにっていないはずなのに昔のご主人様を思  
いだした。

「・・・まるで、結婚の申し込みみたいですね？」

「あ、いや、その、いやいやいや、ごかいだから、ごかいだから誤  
解だから！ おキ又ちゃん！！」

「しりません！！」

まあ、なんとというか、信用できる、そう感じた。  
だから子供共々、彼のお世話になることにした。

依頼主に元凶を紹介したところ、

「けっこんしてくれー！」

と、飛びかかってきたので撃墜しておいた。

なんだか昔の俺みたいな人間であふれてるよな、この世界。

まあ、そのへんはさておき、おキ又ちゃんと猫又のミイさん、俺  
と子猫又のケイで箒に乗って、事務所に向かうことにした。

「すっげー！ 空飛ぶ箒だあ〜！」

「おお、結構乗り心地良いだろ？」

「うん！ にーちゃんすげえなあ！」

「これは、霊力があれば誰にでも乗れるんだぜ。」

「・・・俺も乗れる？」

「練習すれば、な」

「にーちゃん、にーちゃん。おれにも箒教えてくれよ！」

「おっし、家に案内して、部屋掃除できたら教えてやるな？」

「うん、約束だよ！！」

思わずなでると、ケイは気持ちよさそうにしている。

なんか弟ができた気がする。

妹に続いて弟か、と思うと、とてもうれしく思う。

最初は警戒していたミイさんだったが、1Fの管理人室に住居を構えて一月もする頃には地元でも有名な優しい美人奥さんとして名が通っていた。

商店街でも人気者で、おキ又ちゃんと人気を二分するんじゃないかとすら思える。

ケイにも友達ができ、そろそろ地元小学校と交渉を始めようと考えていた。

ミイさんはそこまで世話になれないというけれど、どちらかと言えば、人里寄りの妖怪が人間社会で堂々と生活できるかどうかという試みでもあるので協力してほしいと頼み込んで、どうにか願ってもらっている。

とはいえ、ケイ自身が人に化けることが苦じゃないからこそ出来ることなので、誰にでも出来る話じゃないんだけど。

「にーちゃんーん！」

友達と別れを告げて走ってきたケイを抱き上げると、ケイの友達も走ってきた。

「なんや、ケイのにいちゃんって、横島のおんちゃんかいな！」  
「ええなあ、わいも横島のおんちゃんの弟になりたいわ」「なにいう



てんねん！ 横島のおんちゃんはおいらのおんちゃんでもあるんや！」「せやったら、ケイは二重三重でおいらの仲間やな！」「せやせや！！」

見知った近所の子供達は、結構俺のことを慕ってくれていて、ケイが俺の身内だと知ってさらに仲間意識を覚えたようだった。

「ケイ！ これからのよろしゅうな！」「うん！！」

俺の腕の中で元気よく腕を振るケイ。

「あ、横島君！ 買い物つきあつてよ！」

「おお、愛子。いいぜ。ケイもいいだろ？」

「うん、愛子ねえちゃん、僕もいく！」

「いいわよ、でも、ミイさんに電話するときなさいね？」

「はい！」

同じ妖怪仲間というわけではないが、愛子やタマモには母親に向けるほどの親愛の情を見せるケイ。

やはり、あのマンションを買い取つてよかったと思われた。

その後もうちのマンションへの入居希望者妖怪があり、結構なペースで埋まり始めていた。

とりわけ、同業者、美神さんやらエミさん関係からの紹介があり、それなりに評判になりつつある。

美神さんなど、もう一件ぐらいマンションを買い足さないか、とか言い始めているのは、退治せずに済ませることで格安で仕事を終えられることに味を占めてのことだろう。

妖怪や怪異を退治するのって、結構お金がかかるのだ。

しかし、うちのマンションで生活となると、生活維持費は妖怪が自分で稼ぐし、自分は誘導するだけでいい。

お札も道具もなにも使わないですむというわけだ。  
もちろん、無限のスペースがあるわけではないので、自ずと限界はあるけど。

かく言うシロなんかもううちのマンションに部屋がほしいとゴネたが、美神さんの強力な反対で立ち消えている。

そんなわけで、急速に妖怪長屋となりつつあるうちのマンションだったが、その穏和な性格と評判の良さから地域にきわめて急速にとけ込んでいった。

美神さんの事務所にうちのマンションのことで問い合わせが入るようになった。

さすがに仲介料を横瀬とは言われなければならないけれど、人間に追われ続けた妖怪達の最後のより所という形でみられているせいか、仕事の依頼が人間寄りではなく妖怪寄りになっている。

もちろん、かなりの報酬があるので、ほくほくしている美神さんだけど、不良GSだのモグリGSだのを相手にして駆り立てる事が多くなっていた。

そうなると対人戦闘が有能な人間を引っ張ってくるわけで。

「うをりゃーーーー！！！！」

「ひーーーーー！！」

「逃げるなあ！！！！」

「おたすけえ…………！！」

「おまえ等外道に慈悲などない！！」

とまあ、キャラにあわない台詞を連発する新生伊達雪之丞を解き放つと、大概の仕事が終わることになる。

冥子ちゃんからも好評で、

「ゆつきーのストレス発散にいい感じなのよ、どんどん呼んでね」

ということだった。

魔装術の極みに達し、さらには遠隔攻撃防御のファンネルまで装備している時点で、あいつを倒せるのは中級神魔以上だけだろう。

さらに気合いが入れば中級神魔だって倒す可能性すら秘めているんだから、化け物という形容がここまで似合う男は居ない。

「ところで、横島。おまえ、さつきから指弾で何を飛ばしてるんだ？」

「消」って入れた文珠。」

「・・・さつきからアホGSたちがマツパなのはそのせいかな？」

「おう。」

「・・・とりあえず、股間がぶらぶらしているのをみるとやる気がなくなるから、下半身は消すなや」

「えー？」

「何で嫌そうなんだよ！ おまえだってあんな下半身みたくねえだろ！？」

「でもさあ、あのバカども、この里の娘っこに何しようとしたか忘れたか？」

そう、いま防衛している山神の里の娘たちを手込めにしようとする良GSが散発的に現れていたのだ。

俺たちが駆けつけたときなど、間一髪と言ったところに出会い、おそおうとしていた男たちを、半死半生まで叩き込んでしまった。

さすがに過剰攻撃だったので文珠で治療したけど、意識を失わせるとオカルトGメンに文珠で転送しておいた。

罪状や犯行内容のメモ付きで。

で、どうやら組織ぐるみだったらしく、二十人体制で襲撃にきた

ので、当たり前のように迎撃をしていたのであった。  
襲ってくる、雪之丞がボコる、俺がマツパにする。  
襲ってくる、俺がマツパにする、雪之丞がボコる。  
そんなペースで集めたバカを穴に放り込み、そしてヒトカタマリ  
になったところでオカルトGメンへ文珠転送するという流れで送り  
出さきつたところで、懐の携帯が鳴った。

発信は西条さん。

『・・・あ、横島君？ ご苦労』

「ういっす。バカは届きましたか？」

『ああ、大漁だな。まさに爆釣というやつだな。』

「とりあえず、身分証明するものは一切持っていませんでしたけど、  
呪符とか呪具は押さえましたんで、そっちに帰るとき持ち込みます。」

『・・・本当に助かるよ、横島君。なあ、横島君。卒業したらうち  
にこないか？ きみなら即戦力なんだが・・・』

「美神さんを説得してください」

『・・・この話をする、令子ちゃん不機嫌になるしなあ・・・。』

そんな愚痴を聞きつつ、撤収準備をしていると、山神の長が何度  
も何度も礼を言ってきた。

もちろん報酬を値切るとか言う話もなく、どうぞ持って行ってく  
れと金銀財宝を示す。

というが多すぎだし。

そんなわけで、必要経費と契約分だけもらおうとしたが、長がど  
うしても持って行ってくれと言っているので、では、と少しだけ多くもら  
ってゆくことにした。

ちよっときれいな簪や、古式ゆかしい帯留めなんかを見繕って、  
タマモや愛子、そしてミイさんのお土産にしようかなどと考えてい  
たのだが、見慣れぬものを見つけた。

それは、なんつうか、見慣れぬ、ではなく、逆に見慣れたもの。しかし、時間経過で劣化したものとしては見慣れないもの。そう、以前自分で作ったシルバーアクセサリ（文珠抜き）であった。

形からすると美神さんにあげたものはず。

「おお、これは『戦乙女の盾』と呼ばれていた宝具ですな。我が里に流れ着いたときにはすでにその力は失われておりましたが、絶対防御を二度ほど発揮すると言われておりました。」

まちがいねえ。

「（主、つまり・・・）」

「（平安トリップは規定事項つうわけだ。）」

「（それなりに仕込んでおいた方がいいかもしれんな、主）」

「（くああ、つれえ・・・。）」

とりあえず、シルバーアクセサリも込めて追加報酬でもらい、俺と雪之丞は里を後にした。

## 第十八話（後書き）

あまりまくってる「珠」は、信じられない勢いで無駄使いしています。

逆に、無駄遣いしすぎているので、そんなに凄い霊具だと人界の誰にも気付かれていません。

わりとありがちな話ですよ？w

## 第十九話（前書き）

おまたせしました！！

ちょっとぬるい内容ですが、お楽しみください

## 第十九話

「おまたせなのね〜〜〜」

馱女神の登場。

「ひどいのね〜！ 変な噂のせいで、天界で酷い目に遭ってるのねえ〜」

自業自得だろ？

「すべては、上司の指示なのね〜！！」

といういわけをヒヤクメの背後にいる小竜姫様にしてみ？

「は！？」

「ヒヤクメ〜？」

なのね〜とかいいつつすっ飛ば姿を見て、結構余裕じゃねえかと笑う俺。

とかなんとかまあいいとして、本日の妙神山来訪は、老師の呼び出しによるもの。

俺の方でも相談があったので丁度よかったんだけど。

「・・・というわけで、過去にタイムスリップが既定事項みたいっ



す

「・・・本当に自重しておらんのお」

「いやいや、俺もさすがに驚いたっすよ?」

まさか自分が作ったアクセサリーが宝具扱いになってるとはおもわなかったし。

「じゃあ、私が美神さんの所に行って、調査するって言う流れなのねー?」

「まあ、そういうことなんで、頼むよ、駄女神。」

「せめて「ヒヤクメ」って呼んでほしいのねー!」

「いやいや、思っていないことで嘘ついてても、おまえには読まれるし」

「表も裏もなく本気で「駄女神」って呼んでるのが悔しいのねえ!」

「まあまあ、そういうこともあるだろ? ねえ、小竜姫さま」

「そうですね、駄女神<sup>ヒヤクメ</sup>」

「うわーーーーん、小竜姫までひどいのねーーーー!!」

本気泣きのヒヤクメを慰めつつ、俺は老師に向き直った。

「で、老師の用向きは?」

「ふむ・・・、ちと厄介ごとじゃ」

そろそろ何かくるだろうなあ、と思っていたところで、魔族の  
界侵攻に関わる情報が老師のところに入った。

というか、魔界の一軍からのリークだった。

その名を「アズガルド軍」。

ジークやらワルキューレの関係らしい。

で、その情報というのが、どうやらやる気のない芦田さんなんか無視して自分たちが人界侵攻をしまおうと言う中級以下の魔族行動のものらしい。

霊的チャンネル閉鎖計画をみて、絶対につまきくと確信しているという。

「・・・あんなことやられては、こっちがフォローできん。さすがに非常回線ぐらいは確保しておるぞ？」

「そつつすよねえ・・・。」

老師曰く、人界が完全に孤立すると、スケジュール通りの勝敗が決まらない可能性があるので、隠密性の高い非常回線を神魔共に開通させているそうだ。

108ある霊場のうち三分の一に接続されているとか。

もちろん妙神山もその一つ。

とはいえ、妙神山は神魔世界共に有名なので、真つ先に落とされるだろうと嘆息の老師。

「え、いいんすか？」

「まあ構わん。妙神山の非常回線は、いわば「生け贄」じゃからな」

ああ、なるほど。

有名だけに徹底的に攻撃されるし、そのときに非常回線が見つかれば、かなり盛り上がり大騒ぎというわけか。

「で、老師。俺らはどうすればいいつすか？」

「まあ、その辺は芦田と中級以下の魔族の出方次第なんじゃがな」

「ぎゃあ、出たところ勝負かよ」

「そついうもんじゃよ、神魔なんぞ」

まあ、生きてるスパンは長いし、判断もそんなもんだらうけど。  
そんなわけで、俺は駄女神ヒヤクメと共に、俺のマンション経由で美神事  
務所に向かった。

「……と思ったら、なぜかうちの部屋で寛ぐ美神さんとおキヌち  
ゃん。」

「……あら、横島君。新しい女、かしら？」  
「……結構きれいな方ですね……。」

ゴロゴロゴゴとか影を燃やさんでください！  
ミイさんもなぜ燃えてる！  
つつか、ケイ、ここは幼児パワーで……、っていねーし……！

「ふふふ、嫉妬は正面からしないと、私が貰っちゃっわよ？」  
きゅっと首根っこに抱きつくヒヤクメ。  
おめー、たのしんでんな！

「うふふ、意地悪された仕返しなのね？」  
だー、その根性、根こそぎにしてやるっ……！！

ま、冗談はさておき、横島君が妙神山に呼ばれた用件というのが、彼女を私に会わせるのが目的なのだという。

彼女の名前は「ヒヤクメ」。

「見る」事に特化した神族だという。

「つまり、私の周り、というか横島君込みで何かあるはずだって事で、調べにきた、と？」

「そうなのね、その理解で間違っていないのね」

私と横島君、たぶん縁がある、と感じてる。

これは靈感に関わる部分だから間違いないと思う。

どんな人生だったのかしら？

どんな関わりだったのかしら？

興味は尽きないけど、まあ、冷やかし程度なら面白いかもしれない。

「じゃ、小竜姫から一時開封の許可も得てるので、いくのね！」

「えっ？」

ヒヤクメの鞆から取り出された何かを頭に取り付けられた瞬間、周囲の光景が変わった。

久しぶりに美神さんと箒でタンデムだ。

飛ばされる瞬間に箒を召喚したのだけど、どうにか間に合ったらしい。

空中に出た美神さんを抱きしめて箒に乗ると、きゅっと締められ

ていた腕が緩んだ。

「ふう、助かったわ、横島君」

「現在進行形で俺の理性がピンチです」

「あら？ それって私にとってチャンスかしら？」

「・・・勘弁してください」

「やーねー、冗談よ？」

するすると俺の背後に回って背中から俺を抱きしめる美神さん。  
やべえ、理性が悲鳴を上げてるぞ。

この頃の美神さんは、やっぱり張りが合ってすげえなあ・・・。  
って、この思考はまずい、なにしろヒヤクメが・・・

「って、ナニ見てんだ、ヒヤクメ」

「・・・凄いものを見つけたのねえ・・・。」

ヒヤクメが指差す先を見て、俺たちも絶句した。  
なぜならば・・・、

「はい、あーん」

「あーん・・・、おいしいぞ、この〜」

「いや〜ん」

バカップル状態の陰陽師と露出度の高い格好の魔族。

「あれが、美神さんと横島さんの前世なのね・・・。」

真っ青の顔でよろめくヒヤクメ。

俺だって恐いわい！！

あんな空気を読まずにラブラブ空間を展開だと!?

凄すぎて声も出んわい、つうか、前の時間と変りすぎだろおい!!  
というか、芦田!! その建物の影でハンカチ片手に涙を押さ  
える仕草で笑ってんじゃねえ!!

てめえ、自分の娘のラブラブを喜んでんのか、喜んでんだな!?

「な、なんてことなの……。」

美神さんの声は震えていた。

そりゃそうだ。

自分の前世が魔族だなんていわれて正気でいられるはずが無い。

「……つまり、横島君とは前世の恋人、そうなのね!!」

「「え?」」

「誰よりも早く唾を付けていた、そういうことな訳ね!？」

「「おいおいおい」」

「さあ、横島君。私たちも負けないように……。」

「待つからねー!!」

すぱーんと何処からとも無く取り出したハリセンで美神さんを叩  
くヒャクメ。

どうやら正気にかえったらしい。

「……あ、その、御免なさい。ちよつと錯乱しちゃった」

「いいえ、美神さん。前世が魔族でしたって言うのが本当に見せら  
れたら普通だれでも混乱しますよ」

俺のその一言にきゅっと抱きしめる力を強める美神さん。

人の心音は安心感を演出するとも言っし、じっと聞いていて欲し  
いものだ。

「……焦らなくてもいいわね。困い込む外堀がひとつ埋まったんですもの。うふふふふ」

……やべえ、なんか凄くやべえ。

一応そのまま帰っても良かったんだけど、当時のオカルト技術って言うものにも興味があったので、色々と忍び込んでみることにした。

というか、当時の霊具の一つでもあれば、絶対高く売れるだろうから。

で、色々と見て回ったんだけど、期待はずれもいいところだった。これなら横島君の書いたお札の方が良いじゃない、と。

そういえば、横島君の作る霊具って、平安時代の知識がベースになってるって言ってたっけ。

だったら無理する必要はないわね。

そんな想いと共に、京の町を散策していたら、凄い衝撃が目の前で留まる。

剣を構えた人狼が、私に切りかかったんだけど、寸前で文珠が作動したのだ。

「守」を込められた横島君の文珠。

なんだか暖かく感じる。

「この、京を騒がす悪魔め!!!」

「だーれーが、悪魔よ!!!」

神通棍で切り上げて、人狼を吹き飛ばすと、相手はヒラリと姿勢を正した。

「悪魔ごときが我らに敵うと思つてか！」

「つつか、人狼ごときがあたしに勝てるわけ無いでしょー!!」

というか、あと二個の守護文珠がある時点で、負ける気がしない。神通棍も調子いいし、相手は格下。

ここは一つ派手に・・・はまずいわね。

検非違使に捕まるのもつまらないし。

「美神さん、ここは引くつす」

「犬相手よ？ 逃げられるの?!」

「これがあるつす」

取り出したのは「ジャーキー」。

ああ、シロ用ね。

苦労かけてるわ、ほんと。

ジャーキーと近接爆発式シールストレミングを仕掛けた所、背後から絶叫が聞こえた。

流石に狼、鼻大打撃だ。

「容赦ないわね、横島君」

「まあ、妖怪や神魔にもきくつすからね、結構保管してるつすよ」

「どこに、とは聴かないでおくわ」

「感謝つす」



缶詰を投げて爆発するだけで、相手の気力も体力も根こそぎにできる。

これって一種の霊具だね、と冥子ちゃんに言ってみたら、必死になって逃げ回っていた。

むー、ありゃ、あけたことがあるなーてな感じで。

そつえば、雪乃丞も逃げたって事は、そういうことか？

むー、魔族に聞くなあ。

芦田さんのところに送つたるか？

「結局検非違使総出で鎮圧に向かって巻き込まれてるのねー」

ヒヤクメ曰く、人狼はそのまま連行されたとか。

鼻を押さえて悶絶したまま。

術者も総出らしいが、全く解決できないらしい。

まあ、術じゃなくて、純粹に「菌」だしなあ。

「ここはひとつ、変装して解決して恩を売るつてのは・・・」  
「見事よ、横島君！ それでいきましようー！！」

見事、美神さんの瞳はゼニの色になっていたのだった。

## 第十九話（後書き）

本格的に狙い始めた美神！！

横島は生き残れるのか！？w

次回更新未定

## 第二十話（前書き）

おまたせしました、再演です。

がんがん原作を飛びぬけていますw

## 第二十話

マッチポンプは大成功。

あの人狼も気絶したまま証言できない状態だったため、ちゃつちやと物理的に処理して見せたところ、陰陽寮がでばつてきてオカルトが使われていないかをチェックしはじめた。

まあ、ファブリズとビニール袋なので、オカルトは関わっていないのは間違いなく、シロということになった。

で、この事態収集をしたということことで報奨金までいただいて、意気揚々とその場を去ろうとしたところで、横島君が私を横抱きで飛び上がった。

幾重にも地面に突き刺さる矢。

まるで狩人のように弓を構える武士。

幾重にも弓を鳴らす術者達。

さすがにこれは……。

「だいじょうぶつすよ、美神さん」

気づけば横島君は市で買った呪符を額に張っていた。

効能は「厄避け」。

簡易結界に自分の例力を継ぎ足しているのだろう、実に完全な結界が張られている。

これならば退魔の呪法もきかないだろう。

というか、私たち人間には意味のない包囲だけど、さすがに矢はめんどくさいし。

「そこまでだ、高島！ 魔の者と睦あう所行、陰陽寮の一員として見逃せぬ！」

声の先にいたのは「西条さん」にそっくりな人。  
たぶん、こつちの時代でも横島君に縁があったんだろうと思う。  
というか、こつちの時代でも横島君びいきなのかしら？

「目を覚ませ、高島！ おまえには囑望された将来が、確固たる地位が待っているじゃないか！！」

あー、敵だわ。

うん、こつちの西条さんも敵だった。

なんというか、気色悪い声色だし。

「高島！ 私とともに天下を・・・」

「やかましいわ！！ 人んちの上で騒ぐなや！！！！」

盛大な爆発によって、西条さんモドキは吹っ飛んだ。

「ほれほれ、許可無く陣をくんじゃねーぞ」

「ですが、高島様」

「西郷には俺が言っとくから、寮にもどっとけ」

男が指示すると、周囲の武士達はキビキビとさってゆく。

「わりーな。どうも俺に似てたらしいだけで追われてたみたいだな  
？」

にこやかな笑みで現れた、その男は・・・

「ふふふ、こちらが未来の婿殿、横島忠夫殿だ」

「で、こっちが来世のわたし？ 良い女になったみたいね」

なぜか芦田の紹介で、前世と来世がお見合いなんかしている。

ヒヤクメはおもいつきり他人の面で料理を楽しんでいるのがムカつく。

「いやいや、さすが来世の俺、ちゃんとメフィストと出会ってるんだな」

「そりゃそうよ、あなたと私は未来永劫の縁よ」

未来永劫って、それって呪いじゃねえ？

「あ、あの、メフィストさん、いろいろとお話をお聞きしたいんですけど……」

「え、なになに、我が妻との愛の日々？」

「それに至るまでの……」

「……ああ、そういうはなし？」

なぜか盛り上がる美神さんとメフィストさん。

「いやいや、実はだね、一目惚れなんだよ」

「聞いてねえって」

「向こう婿殿も、一目見て飛びかかったらしいではないか？」

「お、やるな、若いなあ……」

こっちはこっちで絡まれる。

だいたい……

「この会合の目的は何だよ？」

「ん？ ああ、デタント推進派の襲撃があると聞いてね、関係者を集めて囲みましょう」と

「まきこむなや！！」

「いやいや、結構感謝されても良いと思っているのだがね」

まあ、確かに、この時代に一掃できれば後が楽になるだろうし、前の芦田みたい時間に時間稼ぎも可能だし。

「……感謝は別にして、有効かもしれないねえがな」

問題はそこじゃねえ。

「押せばいいわけじゃないと思うの」

「うんうん」

「どんなに心の中で想っていても伝えなきゃだめ」

「うんうん」

「態度で示してもわかる人間は勘違い野郎と自意識過剰野郎だけ」

「勉強にあるわあ」

「あれをなんとかしろや、な？」

「実におもしろい状況だろう？」

「向こうのメフィストもかわいいなあ……」

だめだ、孤立無援じゃねーか。

くそー、こんな状態を破ってくれるなら……

そんな想いに答えてか、いきなり天井が吹っ飛んだ。

「魔神アシクタロス！ 人界争乱の罪で捕縛します！！」

現れたのは龍神、何だと思っただけど、その、なんとなく、知っているあの「龍神」とはちがう。

髪型とは雰囲気とかはにってるんだけど、こっ、なんつうか、見た目が、こっ、そう、胸が……。

「……これはこれは、妙神山の管理人殿が、こんな所まで何用ですかな？」

「白々しいまねはよせ、魔神よ！ そなたが人界に対して行っている干渉は、無用な行為です。人界には人界の動きがあります。無用な干渉は厳禁となっていたはずですよ！！」

「それは私クラスには適用されないのだがね。それが気に入らないというのは、単に神族の傲慢ではないかな？」

「問答無用！！」

振りかざした神剣を、きれいな動きで振りおろしつつ距離を詰める龍神。

なめらかな動きで避けきる魔神。

武の極地ともいえる攻防は、実に勉強になるなあ、と見学中の俺の肩をたたく誰か。

ちよつと視線を向けると、そこには小さな女の子。

「……あなたは、悪ですか？」



「人間ですよ、お嬢さん」

「・・・悪なす人間ですか？」

「善も行い悪も飲み込む。それが人間ですよ、お嬢さん」

むー、と悩む姿はかわいい。

というか、これ、小竜姫様じゃないの？

「小竜姫、人を守りなさい。悪なす人であろうとも、それは魔に誘われてのこと。神が導くのです！！」

「はい、おねえさま！！」

ずいぶんと傲慢なお話だ。

ちよつと腹が立ってきたかな？

「・・・龍神が一柱に尋ねる。悪とはなにか！？」

「・・・悪とは、悪しき行いを行うもの！！」

「なれば、魔とはなにか！？」

「神族の敵なり！！」

「つまりは、自分たちに敵対するものは全部悪、魔つうことか。なんて傲慢な話だな！！」

剣劇を繰りだし続ける龍神の正面に立ち、そしてソーサーで受け止める。

この剣勢、小竜姫様に劣る。

「・・・なっ！！ 人の身でありながら、この力・・・何者ですか！！」

一度離れて剣を構えた龍神を見つめる。

この堅さは、なんとというか、出会った当初の小竜姫様っぽいな。というか、この人がいたからこそ、小竜姫様かな？

「神々に無い可能性の固まり、それが人つてもものでしょ？」

目の前の少年、靈気の盾を無数に操る少年は、まさに自称するよ  
うに可能性の固まりだった。

術もなく呪もなく神剣を避け続け、そしてある時には防ぎ跳ね返  
す。

魔に見入られたものの瞳ではなく、洗脳されたわけでもないのが  
ありありと解る。

意志ある瞳、透明な意志の高い瞳。

「あなたほどの、あなたほどの高みにある人が、なぜ、魔族ととも  
にあるのですか・・・！」

「高みも、低みも、ないんじゃないか？」

さすがに会話しながらの戦闘は厳しいらしいですが、それでも人  
の領域を遙かに越える存在です。

「対話を、望むなら、剣を、引け」

私はこの人を知りたい。

私はこの人が何者なのかを知りたい。

だから私は剣を引いた。  
神族にあつてはならない行動だったかもしれない。  
でも、私はこの想いに従いたかった。

さすが婿殿。

神魔問わず人外にモテモテだな。  
妙神山の管理人「大竜姫」をいなしてしまった。

現在のデタント反対派の急先鋒である龍神をいなすのだから、この実力は折り紙付きだろう。

とはいえ、この事実は多分封印されるだろう。

関係者、といってもその妹君だけになるだろうが、記憶封印処理されることだろう。

何しろ、武神とあがめられる自分の姉が人間に勝て無かった記憶なのだから。

姉自身は認めて精進するだろうが、妹自身に記憶されていることは神界にとって都合が悪いに違いない。

記憶は封印され、そして正義が刷り込まれるに違いあるまい。

何ともやるせない話じゃないか。

立場に縛られ、自分の陣営に嫌悪していた私だが、魂の牢獄から解き放たれた立場からみれば、神族の立場の不自由さは目に余る。

何とか出来ないかとすら思ってしまうほどだった。

とはいえこれは、魔族としての傲慢だろう。

自由な立場から縛られたものに見せる余裕、実に魔族らしい傲慢  
かもしれない。

ふむ、七つの大罪的にみれば有りなのだが。

「所で君は何をしているのかな？」

「え？」

小さな竜族の少女から何かを受け取っている駄女神をにらむと愛  
想笑いで何かを私に見せた。

それは「記」と文字を入れられた文珠。

「小竜姫からの依頼なのねえ〜」

なるほど、この時期の記憶が曖昧だが、封印処理のことを言い出  
せない。だからこの時代の自分から直接、というわけか。

「ずいぶん柔軟になったじゃないか、神族も」  
そっち

「小竜姫の変化の大本は、そこにいるのねえ〜」

同時に視線を向けた先にいるのは、なんとも言い難い視線で婿殿  
を見つめる大竜姫と居心地悪そうな婿殿。

どうやら本気にさせているらしい。

「どうもそろそろまずそうだから、帰ってはどうかね？」

「潮時みたいなのね〜」

そんな苦笑いとともに、婿殿と来世の娘たちが帰っていった。  
引き留めたそうであった大竜姫に、未来に起きるであろう一部を

教えて、私はこの地を去った。

あとは、今生の婿殿と娘にすべてを任せようと思いつつ、孫が出来たら連絡をもらえるように手段を残して。

くおまけそのいち

「小竜姫く、やっぱり貴女の初恋は横島さんだったのねく」

「・・・やはり、この記憶封印の彼方に見えたあの陰は、横島さんだったんですね」

くおまけそのに

「横島君、どうしよう!?!」

「どうしたんすか、美神さん」

「・・・横島君からもらったペンダント、あの時代に・・・」

「これっすか？」

「・・・」

## 第二十話（後書き）

がちり美神のハートをキャッチしてしまった横島。

そして、まったく想定外に落ちていた小竜姫。

さらには、やばそうなフラグが立っている先代管理人！

どうなる、横島、君の明日はどっちだ！？

筆者も知らないw

## 第二十一話（前書き）

結構、時間が空いてしまっているんで、他のSSみたいに止まってしまつのではと危機感満載の再演ですが、這いずるがごとくの速度であつても進み続けます。  
お時間くださいw

## 第二十一話

お兄ちゃんの周囲が超加熱中。

過去の調査から戻ってきた美神は、お兄ちゃんにメロメロになって帰ってきた

それを目にしたおキ又ちゃんやシロねえもそれに対抗している。  
で、ミイさんもなんだか積極的になってるし愛子ちゃんもかなり本気が入ってる。

こんな状況で小竜姫が指をくわえているわけが無く、全力全開でお世話モードだ。

とはいえ、嫉妬しあつて空気を悪くするとお兄ちゃんは逃げ出して新しい女を見つけてくるので、できる限り困い込んでいるんだけど、男振りが急上昇してるお兄ちゃんに唾を付けようとする女は多い。

たとえば、魔鈴とかエミ姉さんとか冥子姉さんとか……。

というかエミ姉さん、ピートはいいの？

まあ、おにいちゃんを確保しとく程度の話なんだろうけど。

逆に本格的なのは魔鈴さんと冥子姉さん。

魔鈴さんは本格的なご近所つきあいをするためにマンションに部屋を確保することまで視野に入れてる感じだし、冥子姉さんは冥那



おばさまの後押しもあつて、全力でアタックを考えてるみたい。

まあ、「ハーレム上等」とか言ってる人なんで陰ながら応援はするけどね。

だって、私もその中に入れるかもしれないし……。  
ふふふふ。

久しぶりに学校にきた気がする。

おおよそ毎日通っているけど、修行だの仕事だの過去だのに行ったり来たりしているので、実際は毎日はこちらでないけど出席率は良い筈なんだけどなあ。

生活的に濃い方に意識がいくもんなんだろうなあ、とか思う。

「横島君、お弁と忘れてたわよ?」

「お、愛子サンキュ!」

そんな光景を見て、なぜか歯ぎしりの男子クラスメイト。  
なんで?

「おめえ、クラスメイトの手作り弁当を受け取っというて、その態度は……」

「あー、ちゃうちゃう。これはミイさんが……」

「……ああ?」「」「」「」

先日保護した妖怪親子の母親が、恩義に感じてお弁当を作ってく

れていることを話すと、女子は「いいはなし」と感動していた。  
が。

「で、美人なんだろ、ミイさんってひとは」

「ええ、「すごい」美人よ」

あ、愛子おおおお!!!

「そうですね、妖艶な魅力を持つ未亡人です」

いつ現れた、ピート!!!

「横島さんはいつの間にかハーレムを作っていたんじゃ」

タイガアア!!!

「.....」

気づけば周囲を取り囲む男子クラスメイト。

『われらの生徒会長を妾扱いかあ!』

『怪異の純情をもてあそびおつてえ!』

.....?

よく見てみると、二宮の銅像とか人体模型とかメゾピアノなんか  
が血の涙を流してるし。

「おいおい、おめーら、夜の妖怪学校はもう終わってるぞ?」

『やかましいい！ 愛子会長の出席率が悪い主要原因が、うたってんじゃねー！』

思わず隣の愛子を見ると、なぜか頬を染めて赤くなってるし。

「あー、詳しいことはいいとして・・・」

そろそろ授業始まるぞ？

授業もそこそこに、俺は幕に乗っていた。

一時間目の途中で美神さんから呼び出しがあったからだ。

緊急で、さらには重大な事件が発生しているので出勤して欲しいというものだった。

「（どう思う？ 心眼）」

『（襲撃、ではないか？）』

そう、襲撃。

正確に言えば魔族の襲撃。

本来ならおキ又ちゃん不在時期に発生した魔族の襲撃が今回は期間短縮の影響か時期がずれたせいが発生していない。

しかし、魔族にとって美神さんは目の上のたんこぶ、というかいろいろと面倒なことの中心にいる人物なので、排除したい筈だ。

「（つうか、襲撃前の護衛入りだろ？）」  
『（そうになると・・・）』

「横島君！ 私の代わりにガンガン稼いでね」

ワルキューレに護衛された美神さんは、非常に嬉しそうな笑顔で  
依頼の束を俺に渡す。

「えー、美神さん。おれ、ちゃんと卒業したいんですけど」  
「大丈夫大丈夫！ 中退でも私がちゃんと養ってあげるから！！」  
「・・・忠夫様。妙神山はいつでもあなたを待っていますよ？」

いつの間にかいた小竜姫様。  
あなた、最近妙神山にいる時間よりも東京にいる時間の方が長くないっすか？

「初めまして、わたしは魔界第二軍特殊部隊のワルキューレ大尉だ」  
きゅつと俺の手を握るワルキューレ。  
なんだかはじめから好感度が高い。

「・・・ちなみに、本戦に出場している」

何の本戦かは聞かないことにした俺だった。

思わず苦笑いで美神さんに視線を向けると、ちよつとだけ怒つてる感じ。

「えーつと、じゃあ助つ人もありつすか？」

「いいわよ？　ただし、横島君の取り分から計算しなさいね？」

これは守銭奴的な立場からいつているわけじゃない。

金銭の収支バランスを厳しい面から訓練しているだけなのだ。

実際に赤字になつても、美神さんの取り分から補填してくれるのも俺はわかっている。

何とも優しくも厳しい上司だというわけだ。

「で、なんで神魔が護衛なんすか、美神さん」

もちろん帰つてきたのは予想通りの話。

くう、やっぱり襲撃かぁ・・・。

デミアンあたりが会場つてくるのかな？

そついえばメドーサつてどうなつたんだろう？

「実際、風水盤以降影も形もないしなあ」

「ん？　何の話だ？」

思わず口に出ていたのを聞いたワルキューレに聞いてみることにした。

「ああ、一時期、うちと結構バッティングしてたメドーサつて魔族はどうしたかなあ、と」

んー、と小首を傾げるワルキューレ。

・・・、あれ、なんか険しい顔つきの小竜姫様？

「えーっと、どうしました？ 小竜姫様」

「・・・メドーサは、その、転化しました」

「「「転化？」「」」

思わず声を合わせてしまった俺たちに、本当に不本意な顔の小竜姫様。

「何らかの衝撃的な要因があったのでしよう。魔族から神族に墮天し、今、龍神界で事情聴取を受けています」

あまりの衝撃に声のない俺たち。

つつか、なにがあった、メドーサ！！

魔族のまま捕縛されていれば抹殺必至だったのだけれども、神族に転化してしまった後では「罪を償った」ものとされてしまうそう  
だ。

もちろん、いろいろと贖罪はしなければならぬそうだけど、それでも即時抹殺はないという。

何度も剣を交えた小竜姫様には複雑な思いらしい。

とりあえず一度学校に戻った俺は、ピートとタイガーに協力を求めることにした。

雪之丞でもいいんだけど、壊し屋仕事以外では使い勝手が悪い男なのだ。

もちろん美神さんの仕事なので半端ではないけど、対人スキルに特化した雪之丞では厳しい面がある。

むろん、引き受けた引き受けた依頼の中には雪之丞向きのものであるので、そっちはそっちで回すつもりだけど。

「横島さんの仕事は大変じゃが実入りがいいのじゃあ」

「はい。修行にも収入にもなって助かってます」

まあ、愛子も手伝ってくれるし、どうにかなるだろ。

## 第二十一話（後書き）

うちのよこっちは、けっこう人に頼ることをわかっています。というか、一人で出来ることの限界を理解しているのです。で、出来ないことを切り捨てる美神と違い、みんなで協力して全部片付けるよこっち、とまあそういう感じですかね。



## 第二十二話（前書き）

学校勢と協力とか言っていました、よくよく考えてみれば、もっと向いてる助っ人がいましたw

今回はそんな話。

## 第二十二話

『ぼく、どざえもーん！』

『モテモテなんかキライだ、ギャー！』

笹倉さんと湯上さんと久しぶりの仕事、となるはずだったんだけど、魔鈴さんも一緒に行くという話になって、けっこう、こう、なんとというか、目の毒な感じになってしまった。

某有名ホテルの室内プールに単食う悪霊の排除がメインの仕事なんだけど、プールだけに水着で除霊という話になってしまった。

笹倉さんも湯上さんもかわいい系のお姉さんで、魔鈴さんはきれい系のお姉さん。

正直に言えば、本気でヤバイ気分になってしまっ。

そんな「お姉さんズ」によるファンネルで、二大バカ除霊を済ませることができたので、早々に次の現場に行こうと思ったのだけれども、まずいモノに気づいてしまった。

「「じーーーーー」」

なぜかタマモとシロが建物の陰でこちらを見てる。

・・・六道の校内水着で。

いろいろとモノ言いたげな視線の中身は・・・

「拙者のほうが役立つでござる」「おにいちゃん、私たちなら無料なのに……」

だろっなあ……。

目ざとく二人を見つけた笹倉さんと湯上さんが引つ張ってきて大盛り上がり。

シロもタマモも二人が六道の先輩と聞いて不機嫌が吹っ飛んだ。

「おにいちゃん！先輩たちと事務所作るの!?」「先生！拙者たちも雇ってほしいでござる!!」

どうにもこうにも、妙な盛り上がりだよ、ほんと。

「おめーら、俺はまだ高校生活をエンジョイしてたいんだよ」

「そっいいながら、登校せずに仕事ばかりじゃない。」

「愛子殿が寂しがってるでござるよ?」

口がへらねえ……。

「あらあら、愛子ちゃんって、あの学校霊の生徒会長の?」

「同棲してるって噂、本当?」

いらねーはなしがはじまった!

「お兄ちゃんは、いろんなところからアヤカシや怪異の美女を集めて困ってるんだ」

「先生、拙者も困ってくださいね!!」

「おめーら、たいがいにしるよ!!」

「「きちゃ〜」」

「学校さぼってつけてきたの、お袋と美神さんにいいつけっからな」  
「「ぎゃーーーーーー！」」

ま、でも、妹たちに嫉妬される兄の立場って言うのも気恥ずかしい  
というか何というか。

「いい、お兄ちゃんですね？」

「いやはや、お恥ずかしい」

魔鈴さんの笑顔にも対応しきれないほど照れくさかった。

その後続いたカップル嫉妬型悪霊を、カップルを装って退治した  
んだけど、なぜか女性陣がじゃんけんを始めるのがおもしろすぎる。

『（主、それは本気か？）』

『（え、なんか変か？）』

『（女性が報われんなあ）』

最近、心眼の言うことがわかりません。

まるで、新しい事務所のような活動の中で、事件は起きた。

そう、魔族の襲撃だ。

ジークとワルキューレは負傷したそうだけど、美神さんとおキヌ  
ちゃんの筈で妙神山に脱出したそうだった。

というか、文珠で霊気を攪乱して、俺の部屋からゲート経由で妙

神山に逃げ込んだそうだ。

美神事務所をのぞいてみると、すでにされもいなかった。

で、うちのマンションは、店子の怪異たちとマリアたちが敷設した霊的防御機構によって魔族を返り討ちにしていて、俺が帰った頃には歓声がわいた。

「ご主人様、ご無事でお戻りになったことをうれしく思います」

「テレサ、名前で呼んでくれ」

「今は侍女としての業務中です」

湯上さんと笹岡さんも巻き込んでしまって申し訳ないけど、一応、関係者としてかくまうことにした。

「うっわー、これが有名な妖怪マンション」

笹岡さんのせりふに、思いの外、「水木しげる」っぽいなまえです。ね、なんて苦笑い。ちょっと見え方が変わって見えるし。

「横島さん、お疲れさまです」

猫又のミイさんがみんなの分のおしぼりを持ってきてくれた。

この辺の気配りがうれしい。

「大家殿、この魔族は、何者じゃ？」

縛り上げられた魔族を蹴る、近所の社を根城にしていた蛇姫。

「一応、追ってる目標も目的も知ってますが・・・」

「ふむ、デタント関係か？」

「そのはずです」

「ならば、主流派に与するなら、打ち返してもよいのだな？」

「ええ、死なない程度に」

「」「」「ふわはははは、ならば家賃は戦働きで！」「」「」「」

「おめーら、少しは現金でよこせよー！」

「」「」「もちろん、ある時払い、ということぞー！」「」「」「」

「まあ、そういう契約だけどさっ！」

「明るく笑う怪異たち。」

「うれしそうに微笑む妖怪たち。」

「魔に落とされながらも天の位を持つ神霊たち。」

「いつの間にか大所帯になつてゐるなあ。」

「あのお、私たちも戦働きで家賃つてことには・・・」

「人間には厳しいマンションですよ？」

「まあ、部屋数はあるし、いいんですが。」

「笹倉さんと湯上さんがマンション入居を決めた瞬間だった。」

## 第二十二話（後書き）

なんだか、このまま横島マンションは「横島事務所寮」になりそう  
な勢いですw

第二十三話（前書き）

できましたw



## 第二十三話

魔族は多面作戦にでたようだ。

大勢力は妙神山へ、そして小勢力は妖怪マンションへ。あとはいろいろ。

「妖怪マンション……」

その魔族の情報に、思わず泣けてきた。

「で、俺らも見ててええんか？」

銀ちゃんと踊るGSの撮影隊が、これは美味しいということ撮影にきていた。

とはいえ、いろいろと検閲が入ることになるけど、ソースとしてみれるだけでも芸の肥やしになると言うことで役者さんたちも集まってきた。

中にはプロデューサーが「いや、美しい方ばかりだ。ぜひともうち」に出演しませんか!？」とすがりついていたのは印象的で。

タマモを一目見た瞬間、是非とも出演を！ と土下座までしゃがんだ。

「で、土下座神としての評価は？」

いやな振りをしやがるなあ、妹よ。

「んー、15点減点やな」

「なんで？」

「し慣れてるのが見え見えや」

「おう、必殺技の多用は命取りやろうな」

なるほど、と感心する周囲だったが、頭を上げるタイミングを失ったプロデューサーは脂汗をかいていたのであった。

しばらくして視界に入ってきたのは、微妙に小さい逆天号っぽいなにか。

「ちと迫力に欠けておらんか？」

急遽現れた猿神に、驚きの声を上げる住民たちだったが、ケイが「サルじい！」と喜色あふれるタツクルをきめたところで、張りつめた空気がゆるんだ。

「あー、たぶん、適当に真似して作ったんだろ？」

俺のせりふにタマモだけが苦笑いだった。

「家主殿！ あれを落としていいのなあ！..！」

古式ゆかしい鎌倉刀を肩に背負った巫女姿の少女だったが、その気配はシロの「散歩いくでござるか!？」と何ら変わらない。

「落としたら、ご近所さんに迷惑ですよ」

「だ、だ、だったら、木っ端みじんに...！」

「できる方法をみんなで検討するならOK」

「うひょー！家主様のご許可をいただいたぞお！ 木っ端みじ

んにするぞお！！！！」

「「「「「オウさ！」「「「「」

ヤマトレメ  
耶麻和姫を筆頭にした関東鬼連合が、喧々囂々と手法を検討している間も、モドキは沈黙、というかジリジリと近づいてきているだけだった。

「えーっと、横島さん、どういう状況ですか？」

湯上さんへ、美神事務所自体が魔族につけねらわれた事実とその防御に神族と魔界軍の一部が派遣されたことを説明すると・・・

「はあ、さすがに超一流は違いますねえ」

とかピントのずれたことを言っている。

多少有った緊迫感を失ったご近所のみなさんは、それぞれの家に戻り、これから仕事にいくという怪異達もその場をなはれた。

それでもジリジリ進んできているモドキ。

「よっし、じゃあ、そろそろいくか！」

「「「「「オウさ！！」「「「「」

とびだそうとした関東鬼連合をちよつととめる。

「せめて、向こうの宣戦布告きいてやらんか？」

「・・・家主、とつととおとさんと、ご近所様に迷惑だぞ」

まあ、たしかに。

「じゃ、内部制圧した後で、やりたいほうだいっついで」  
「「「「「オウさー!」「」「」

ビュンビュンと空を駆ける鬼達が襲撃してゆく。

「ほんじゃ、われらはスイープじゃな」

「家主殿、食ってええかのお?」

「被害防御優先ならええよ」

おおおおお! ときらきら光る瞳で飛び出してゆく怪異のみなさん。

さーて、こっちは簡単に済みそうだから、向こうに顔出すか。

「テレサ、妙神山からの連絡は?」

「順調に迎撃中と、姉さんからの連絡が入っています、ご主人様」

んー、と首をひねった後で思い出した。

「芦田さんとは?」

「・・・現在防戦中との情報です」

「苦戦してるのか?」

「・・・はい。我が写し身も機能低下してます」

そうか、と俺はため息をついて、そして箒を呼び出した。

「老師、ちょっと助っ人にいつてきます」

「おいおい、向こうさんを助けていいのか?」

「しかたないっしょ? 芦田さんにゃあ、あいつを育ててもらわん

「とならんですよ」

苦笑いの俺は筭にまたがった。

「お兄ちゃん、あたしもいくよ」

「拙者もいくでござる!」

またがっているのはなぜかニケツの青い稻妻。

「また遊びにきやがったか、まったく」

ま、戦力は大いほうがいいし、ということ、俺は飛び立った。

「こっちは任せておくがいい、馬鹿弟子」

初めて培養槽から出されたのが退避とは、アシユさまはふぬけるでちゅ。

無限の力を持ちながら、有限に縛られる魔神なんて不合理でちゅが、それがいい、とベスパちゃんはメロメロでちゅ。

パピはもつと格好いいヒーローが好みでちゅが、親を選ぶことなんかできないのでちゅ。

生まれの不幸なのかもしれないでちゅね。

雨嵐のように霊波弾が降り注ぐ外を見つつ、メイドロボのテレサが動きにくいであろう腕でパピを守ってくれているでちゅ。

「・・・パピはどうで生まれて少しか経っていないからいいでちゅが、テレサにはもっと長生きしてほしいでちゅよ・・・。」

「ご安心ください、パピリオ様。今、テレサネットワークから救援受諾信号がきました」

「・・・誰か助けにきてくれるんでちゅか？」

「はい、パピリオ様」

「でも、パピ達は魔族で・・・」

「そんなことを気にしない、偉大な方もいらっしやいます」

「・・・テレサは、そのことを知っているのでちゅか？」

「はい、パピリオ様。私のメインフレームになっているにしえの記憶の一つでございます」

きゅっとパピを抱きしめる力を強めたテレサだけど、ソレは気持ちいい類だったでちゅ。

「テレサ、そいつは、そいつはパピも、ベスパちゃんも、ルシオラちゃんも守ってくれるでちゅか？」

「はい、パピリオ様。なぜならば・・・。」

「なぜならば？」

「・・・あの方は、美女美少女の味方ですから」

なぜか、脱力するような台詞が、すごく格好いい台詞に思えたのでちゅ。

## 第二十三話（後書き）

いかがでしょうか、23話です。

じつはパピの一人称って好きなんですよねえ。

・・・ろりじゃねえっすよ？ 書きやすいつて事でw

11/7/23 パピ>パピ

## 第二十四話（前書き）

出来た分をざくざくアップフェアー  
W



## 第二十四話

絵的には迫力有る画像なんやろうけど、つかえんことは間違いない。

よこっちの好意で最前線でかぶりつきやけど、どうみてもフルボッコや。

集団リンチともいえるかいな？

よこっちのマンションに住む怪異の方々が、妙に強力で、色々と聞いてみたら、結構有名どころばかりやった。

なんで、そんな方々が？ と聞いてみると、理由は色々。

せやけど、やっぱ、人間による無配慮な開発が原因の根本やというこことやった。

この話は他の先輩俳優でも浸透したようで、今後の脚本でも生かしたいなあ、ちゅうはなしになった。

現場にきてた脚本さんも目をきらきらさせとるし。

「近畿君は、家主殿と幼なじみだって？」

「ああ、よこっちとは結構長いで」

おお、と歓声がわく。

周辺の怪異の方々は、戦闘向きではないそうで、マンション周辺の民家に結界を張っているそうだ。

こっこの騒ぎの時に起きがちな火事場泥棒や状況に気を取られた事故なんかを防いでいるという。

至れりつくさりやな。

「まあ、小僧も苦勞してるからの」

携帯ゲーム片手にやついているのはサルの神様、という紹介やっただけ、絶対もつと違う存在や。なけなしの霊力が驚いてるしな。

「ふむ、その感性を磨けば、一流に届くやもしれんぞ?」

ちよっとうれしい爺さんやな。

クワガタ型の母艦が三鬼ほど、妙神山を包囲していますが、結果を破るほどの砲撃はありませんでした。

忠夫さんに聞いた「断末魔砲」は開発できていないようで、魔族の補給基地としての役目以外は無いようです。

いわゆる力押し、頭の悪い戦略です。

魔族側の人材が不足していることを理解できる内容ですが、人海戦術で108ある霊的拠点がいくつか落とされてるそうです。

一応、老師もいくつかの拠点防衛に飛んだそうですが、逆に相手を油断させるための策略にも通じると言うことで、撤退支援で終わらせたとか。

今など忠夫さんのマンションに遊びに行っているぐらいですから、どれだけ戦況を安心しているかがしれます。

最初はパニック状態だった美神さんも、今や結界の外の砲撃を無視して修行するほどの余裕で、修行結果を調べるために雑魚魔族を

倒すというルーチンワークまで組み込み始めました。

実にタフな人です。

マンションもすでに敵勢力を追い払ったそうで、そろそろ老師もかえって来るという話でした。

「で、横島君は？」

「単発攻撃にでている雑魚を迎撃に回っているそうです」

「うっわー、うちの仕事優先でやってくれるのよね？」

「美神さん、一応、世界危機の一端ですよ？」

「それはそれ、これはこれ、よ」

本当にタフだわ。

「横島さんから「安い仕事中心に協力者がこなしていますので」安心してください、だそうですよ？」

「うんうん、私の指導が生きてるわぁ」

上機嫌で神通棍を振り回す美神さん。

生きてるのは指導じゃないと思いますけどね。

「じゃ、小竜姫様、続きおねがいね」

「はいはい」

この熱心な姿勢が、もっと純粹だったらうれしいんですけどね。

それは突然だったでちゅ。

一度はやんだ襲撃が、霊波弾から突入に切り替わって、そして再び霊波弾に切り替わったんでちゅ。

まるで味方も犠牲にするような、そんな酷い手段に、パピはムカムカきたでちゅが、テレサを守りたいので我慢したでちゅ。

「パピリオ様、私を置いて撤退してください」

「だめでちゅ。テレサはパピの大切なメイドでちゅ。大切な家族でちゅ」

きゅっと抱きしめると、テレサの瞳が揺れたでちゅ。

そう、テレサはただのロボットじゃないのでちゅ。

魂がある、生きている存在なのでちゅ。

だから、パピは失いたくない。

だからパピはテレサを守るのでちゅ。

出会って一日も経っていないパピを身を挺して守ってくれたテレサを、今度はパピが守るんでちゅ！

「その心意気や、よし！」

目の前に降り注いできた霊波弾が一瞬にして消えたでちゅ。

そして代わりに現れたのは、昆虫っぽい仮面と黒マントの「かっこいい」存在でちた！！

「……だ、だれでちゅか？」

「乙女の願いと危機を知り、悪を打ち砕くべく現れたヒーロー!!」

か、かつこいいでちゅ……。

「その名は!?!」

テレサもノリノリでちゅ!!

さすがパピのメイドでちゅ

「その名は、改造超人ヨコシマン!!」

びしーっときまったでちゅ、きまったでちゅ!!

「さあ、友よ。君も戦うんだ!」

何かを投げてよこしたヨコシマン。

なぜかアシュ様もにこやかな笑みで受け取ったでちゅ。

「……娘たちを守るため、あえて私もその姿を得よう!!」

発光とともに現れたのは、白銀のヨコシマン。

「友誼ある友の願いと愛する娘たちのために、今私はこう名乗ろう。」

我が名は「ヨコシマン・フラッシュ」!!」

……アシュ様が、アシュ様が、アシュ様じゃないみたいに格好いいでちゅ!!

あれ、ベスパちゃんが固まってるでちゅね?

でもルシオラちゃんは「ヨコシマン」を熱い瞳で見つめてるでちゅ。

さすが、わかってるでちゅね！！

えー、アシユ様の変身をみて、ベスパが絶望的な表情でつぶやいてる。

「また、アシユ様の悲しいところを見つけちゃった・・・」

それでも嫌いになれないと言うのだから、恋って恐ろしいと思う。逆にパピリオは食い入るように見つめつつ、二人の「怪人」の活躍に声援を送ってる。

まあ、あれよ、うん、アシユ様、あれは典型的な子供大人。成長するときに色々なものを置き忘れてきたタイプね。

で、逆に「ヨコシマン」の方は、確信犯だ。私やベスパの不信よりも、幼い感覚を多く残しているパピリオの不安払拭にメインをおいての道化だろう。

いちいち大げさな話をしているが、パピリオ好みの展開すぎるから。

あれね、ほら、テレサ。

アシユ様がテレサをせしめてきた関係の協力者なんだと思うわ。

とはいえ、お金やオカルト技術で協力者なんて集まらないでしょうし、どんなバーターで協力を引き出したのやら。

「・・・ねえさん、あの黒い方、けっこうやるわね？」

「ベスパ、アシユ様から趣旨換え？」

「ち、ちがうわよ。ただ、アシユ様と異常に気が合ってる感じで、ちよっと心配というかなんというか……」

「ふふふ、嫉妬？」

「……そうかも」

結構正直に認めたわね、我が妹。

「姉さんだって、なにげに黒い方が気になってるんでしょ？」

「まーねー」

パピリオみたいじゃないけど、細やかに私たちに被害がでないように気を使ってくれているのがわかるだけに嬉しい。

あー、やだやだ、人造魔族ってホレっぽいのがいやよねえ。

ま、いいか。

命も短いんだし、そんな命を救ってくれたんだし、惚れるのも仕方ないわよね。

「「ダブルヨコシマンバーニングファイヤー……！」」

「ほんとに気が合うわね」

「普段から練習してたんじゃないの？」

「「……やってそう」「」

こっちにきたら、アシユ様と一緒に尋問ね。

## 第二十四話（後書き）

芦田の面目が、一部方面で急高騰 W

一部で下落してます W

いやー、芦田周辺書くのが楽しいわ W



## 第二十五話（前書き）

本格的に三人登場！

すでにパピはメロメロw

## 第二十五話

やりすぎだわ、お兄ちゃん。

変身ヒーロー、それもダークヒーローっぽい格好になったお兄ちゃんは、中級魔族も関係なしでなぎ倒していた。  
私もシロ姉も雑魚を倒していたけど、やっぱりあそこに「あの人がいるせいか、無茶苦茶張り切ってるし。」

「さすが先生ですな、魅せ方を解ってる!」

「それって、アクシヨンヒーローってこと?」

「いやいや、魅せる格闘ってことでござるよ」

それって、見せかけてこと?

「実際の威力以上の見た目で、精神を折るのでござる。精神が基本の神魔には有効でござるよ?」

「・・・マジな意見だったんだ」

ちよっと驚きの私。

なら・・・

「・・・と、こんな感じでいいかな?」

「うむ、拙者は何色でござるか?」

「シロねえは「ブルー」で、私は「レッド」

「うむ、イメージカラーでござるな?」

「そうそう」

シロねえとともに乗っていた青き稻妻から降りて、丁度やってきた「炎の狐」に乗り換えた。

「行くわよ、炎の狐」

「いくでござるよ、青き稻妻！」

「ヨコシマン、ひき逃げアタック！」

うーん、私たちも十分やりすぎかも。

ヨコシマンヘルメットを脱ぐと、三人娘が近づいてきた。

パピリオは、無茶苦茶に目を輝かせている。

ベスパは、疲れた瞳で芦田をみている。

そしてルシオラは、

「……………」

なぜか俺と見つめあっていた。

「初めまして、横島忠夫です」

「……………はじめまして、ルシオラ、よ」

なぜか彼女の視線が切れなかったのだが、ドカンと飛びついてきたパピリオのおかげで視線が離れてくれた。

「ぱ、ぱ、パピはパピリオでちゅ!!」

「ああ、よろしくな」

軽くなでると、嬉しそうにほほえむ。

その表情に胸の内が熱くなった。

「あたしは、横島タマモ。お兄ちゃんの妹」

「拙者は犬飼シロ。先生の弟子でござる」

すつと現れた二人はおいておいて、ベスパを従えた芦田が変身を解いて握手を求めてきた。

「よく来てくれた、忠夫殿」

「ま、敵の敵はつてやつだよ」

ぎゅつと握手すると、視界の端でルシオラの視線が少し熱く感じる。

「・・・おい、芦田。娘達の思考をいじってねえだろうなあ?」

「バカを言うなよ、婿殿。窮地を救われたなんて体験を成長槽から出たばかりで体験してみろ、速攻で落ちるに決まっているだろう?」

握手のまま顔を近づけて囁きあう俺たちを、長女と次女が引き離した。

「で、アシユ様。その変身は何なんですか?」

「・・・横島さん、でいいかしら? アシユ様と息のあったアクシヨンの理由を聞きたいんだけど?」

結構、美神さん系のオーラを発しているせいか、芦田が無茶苦茶焦ってる。

まあ、心当たりねえもんなあ。

ここで「じゃ」とか言って逃げるのもおもしろいけど、これからのこともあるので仕掛けをばらすことにした。

「ああ、それはこれのせいだな」

バックル型の装置を見た瞬間、ルシオラの目の色が変わる。

そう、桃色からギラつく肉食獣のそれに。

「これは「劇場空間発生装置」ってやつでな。内部に設定されたあの程度のパターンのシナリオに沿った形で、自分に都合のいいように現実を操作できるって言う反則アイテムだ」

もちろん、この開発には芦田も噛んでる。

つつか、芦田なしでは開発すら出来なかっただろう。

「……!」

どうやらルシオラはその根本原理を思い至ったようだ。

「……ヨコシマ、それは限定的な「コスモプロセッサ」なのね?」

機密だろ! ってベスパは怒ってたけど、この装置の原理を考えれば、機密もくそもないことがわかったんだろう。

だから俺も答えることにした。

「万能にやあほど遠いし、燃料消費も激しすぎるから、そんなに長

く使えねえけどな」

やっぱり、と目を輝かせたルシオラ。

「で、その燃料って？」

「これこれ」

そういつて見せたのは文珠。

見た瞬間にルシオラの目の色が再び変わった。純粹な驚きに。みればベスパとパピリオも驚いてる。

「そうだ、彼こそが、人界で唯一の文珠使いにして「黄龍に至る者」だ」

ぱーっと明るい表情になったパピリオとルシオラ。顔をゆがめるのはベスパ。

こんな芦田でもお前は好きなんだな、と内心苦笑いだった。

「ぱ、ぱ、ぱ、パピは、パピは、ヨコシマンのお嫁さんになってあげるのでちゅー!!」

「まちなさい、パピ！ 背格好からして私の方が似合ってるわよ！」

わきやわきやと俺の両脇で争う姉妹。

なんだか前の時間の一瞬を思い出してしまった。

こんなシーンはなかった。

でも、三姉妹が仲良くしているところをみて、なんだか胸の内が熱くなる。

「お兄ちゃんもモテモテねえ？」

「先生は大人気でござるなあ」

まあ、なんだ・・・いつか。

あれが、「黄龍に至る者」。

武神の試しを受けて開花した霊能で至ったという力は「龍珠」。  
それもあらゆる龍（竜）族の権能を体現できるという物であつた。

それは、いま、存在すらしていない「黄龍」の権能を再現できるということであつた。

太極に存在する龍、始祖龍、すべてを従える龍などと言われているが、三界の共通の認識としては、神魔の最高責任者と同等の力を持つというもの。

つまり、彼を取り込めば第三勢力の旗揚げすら可能だということだ。

むろん、野心の面で彼を獲得しようとする勢力もあるが、実際は別の意味での確保をねらっているのはありありとわかる。

アシユ様なんかは、本格的に彼の取り込みをねらっている。

権力とかそういう意味ではなく、娘の婿として、だ。

聞けば、前ロツトの姉である「メフィスト」は、彼の前世に沿い遂げたとか。

魔族であつたか体を捨てて、人に転化してまで。

今生は彼の方が人間をやめてしまったので関係ないが、少なくとも彼が人間のままであつたら、姉さんもパピも追っかけ人間になる

かもしねないとすら思える勢いだっただ。

「パピもヨロシマンになるでちゅー！」

・・・人間じゃなくて改造人間になりたいらしいけど。

「そんなになりたいなら、私が改造するわよ？」

「・・・ルシオラちゃんは怖いからいいでちゅー」



## 第二十五話（後書き）

新兵器だしましたw

その名も劇場空間発生装置。

劣化版コスモプロセスサー、って何でもありだねw

実際、美神空間や横島時空へ強制的に引っ張り込むためのアイテム  
なんです、無理やりでしたかね？（^^）；

## 第二十六話（前書き）

魔族襲撃編、そろそろおしまいですw

## 第二十六話

手に入れたのは「設計図」。

計画詳細から兵鬼に至るまでの詳細なものであった。

それは「魔王アシュタロス」による三界征服計画の根幹でもあった。

はつきり言おう、これがあれば魔王でなくてもハルマゲドンを起こせるだろう。

すでにアシュタロス軍の資金をちよるまかす事で十分な資金を得、外部研究者の手を借りて兵鬼も開発できている。

名も知らぬ魔族であったが、研究ができれば何もいらないうのだから使い勝手がいいだろう。

我ら真魔神軍には未だ名はない。

人界を掌握し、魔界を制し、そして我々こそが真の魔族であることが証明されてからでなければ名乗ることなどできない。

この侵攻による恐怖を畏怖を糧にして、我々は正しき魔族に、真なる魔族になるのだから。

「司令、各方面軍準備できました」

「よかるう、全部隊に指示せよ・・・」  
「蹂躪せよ」  
「！！」

デタントなどという甘い夢を終わらせるための真なる戦いが今始まるのだ！！

作戦開始とともに、冥界拠点が連続で三カ所落ちた。  
重点目標としていた地点だけに士気が上がる。

作戦司令室に飛び込む朗報に歓声上がり、早くも乾杯を始める者達もいた。

「妙神山はどうだ？」

「未だ、微々たる抗戦と結界に阻まれております」

ふむ、やはりスーパー逆天号級二機では難しいか……。

「ブタペストから一機回せ。三機体制で妙神山を落とし、一気にたたみかける！！」

「了解！！」

ふっふっふ、魔神に等しいとまでいわれるスーパー逆天号が三機……これで勝ったな。

逆天号級で制圧をかけていた東京地区で、猛烈は反抗があり、一部隊が全滅したとの報告が入った途端、司令室が動揺する。  
なにせ相手が相手だ。

「黄龍に至るもの」

人の身でありながら龍への道を開いた数少ない存在でありながら、

黄龍へと至ることが出来る才を持っているという。

この存在を押さえることを龍界は宣言しており、かの者の存在すべてを守ることをも宣誓していた。

つまり、かの存在を攻撃したとなれば、龍界全体を敵に回したといっても過言ではない。

現竜王及びその累計すべてが、真魔神軍に対する宣戦布告を突きつけてきたのだ。

一応、現地部隊の暴走という手札を切ったが、全く通じることはないだろう。

すでに人界も冥界回路の大半を押さえたとはいえ、その影響力は計り知れない。

なんとか挽回する機会を得なければ、真魔神軍に未来はない。

すべて押さえたと報告されていた拠点は、敵方の欺瞞情報であったことが判明した。

正確には最初の三カ所以外落ちておらず、スーパー逆天号級の殆どが落とされていた。

「も、もうおしまいだ・・・」

誰かがつぶやいた瞬間、恐慌状態に陥った者達が逃げ出し始めた。気持ちは分かる。

しかし、逃げ場などどこにもないことが解らないのだろうか？

ここまで周到に囲い込まれたという事は、すでにこの場所すら押さえられているだろう。

いかに墮落したとはいえ神魔。

手練手管に長けている事実は間違いないのだ。

「…………ぎゃー……！」

大人数が出口に殺到した瞬間、ドアがこちらに吹っ飛び数人がはね飛ばされた。

「な、な、なにがおきたあ……！」

舞い上がる塵が収まると、そこには一人の人物がいた。

「おめーらつえーな？ おらあ、わくわくしてきたぞ？」

めがねとキセルの老人は、朱色の棍を担いで一歩踏み出す。

「……おらか？ おらあ、ソンㇿゴクウつうだ」

「…………ゴクウ違いだろうがあ！？」「……」

「はっはっは、どっちでもいいじゃろ？」

そこに現れた旋風に、すべてが刈り取られた。

「老師、はっちゃけてるなあ……」

「結構、ストレッチためてましたから」  
「うわぁ・・・結構グロいのねえ」

ヒヤクメの千里眼を通して見ていたんだけど、あまりの残酷画像に美神さんですら視線を逸らした。

もちろんおキ又ちゃんは最初から見えていないけど、流れる音だけで真っ青になってる。

もちろん、「おら・・・」のあたりは周囲爆笑だったけど。

芦田のところから帰る途中で、妙神山によると、老師が出陣するのと入れ違いになった。

聞けば、敵魔族の本拠地を有志で強襲するとか。

参加条件は「死して屍拾うものなし」でOKなやつら。  
当然雪之丞は喜々として参加したって。

「で、横島君。君はどこに行っていたのかなあ？」

美神さんは無茶苦茶怖い笑顔。

「えーっと・・・」

「あれ？ 横島君が無担保融資してる怪異の会社？」

ぶばっ！

思わず吹いてしまった。

「な、な、な、何で知ってるんっすか？」

「あのね、平安にいつてれば、あの神魔と通じてるのぐらい予想できるとわよ」

ああ、そうか、正面から芦田につっこんでたっけ。

失敗した……。

「ま、横島君のことだからバカなことはしてないと思うけど、融資はちゃんと考えてね？」

……ああ、美神さん、いい女やなあ……。

「わたしの資金でもあるんだから」

……ああ、美神さん、怖い女やなあ……。

すごいわ、この変身システム。

アッシュ様に渡された「フラッシュ」装備は、アッシュ様の魔力に調整された「劇場空間発生装置」が組み込まれていて、おそろしいまでの範囲を自分のテリトリーにできていた。

にこやかな笑みで変身しつつ敵を討つ姿はパピのハートを鷲掴みにして、いつか自分用の装備をヨコシマンから貰うんだと、目をキララさせてる。

逆にベスパは真っ黒だ。

本当に可哀想な妹だと思う。



ここまで好感度を落としていても嫌いになれないのだから一種の呪いね。

一応、パピの波長にあわせた劇場空間発生装置を作ってみたんだけど、私自身のセンスがあわないのか、パピの望むシナリオストックが出来ないでいた。

本当にヨコシマン、ヨコシマに相談しようかしら？  
メールアドレスも交換したし。

「え、ルシオラちゃん、ヨコシマンのアドレス知ってるでちゅか！？」

「え、ええ、技術的な相談がしたくて・・・」

「パピにも教えてほしいでちゅ！！」

あー、先にお詫びしないといけないわね。

子供メールが山ほど来るから勘弁してね、って。

「ふわーーーーー！！　ヨコシマンからの返信でちゅー！！」

あら、さすがにマメね。

私も送信しちゃう。

## 第二十六話（後書き）

3 姉妹で最も不幸な次女。

あまりの不幸っぷりに泣ける。

幸せになりたかったら「小鳩」に学ぶしか・・・TTT

第二十七話（前書き）

G S 美神、最近除霊してません W

## 第二十七話

神魔からの正式発表が各国政府やICPO、そして各国の協会へ入った。

今回の霊場同時襲撃事件は、下級の神魔による反乱であり、それを押さえられなかった責は神魔上層部にある、と。

宗教的なバツクボーンもあるため、神族を攻めることは出来ず、同様に魔族も攻められることはなかった。

なんしろ、同時添付された「自称ソニックゴクウ」による適地襲撃壊滅の映像まで見せられては、自分達の問題は自分達でつけているという査証になるとしかいえなかった。

「あれは、そう、なんていうか、神話ね」

ヒヤクメ経由とはいえ直接見ていた美神令子の感想がそのままICPOの報告書に載ったほどのだから、その凄まじさはしれるというものだろう。

一種の最終兵器、という話もあったが、神魔を所有するなどあり得ないという事もあり、話題はそれだ。

そう、所有されてしまっているオカルト勢力の方に。

「つまり、うちのマンションが問題だと？」

「そういうこと、ね」

事務所所長、美神令子は横島の言葉に応えた。

GS協会の規定する保護妖怪制度に数量制限はない。

維持できる量が自ずと解るだけに、わざわざ指定する必要がないと思われていたからだった。

が、横島忠夫。

その常識は斜め上であつた。

現在彼が保護している「妖怪・幽霊」の総数は153。

実際に入居している人数はもう少し少ないが、彼を大家・家主と慕っている存在はそれを上回る。

道祖神や橋姫、石神までも彼の元を慕って通っているのだから周辺二流三流GSの評判は悪い。

小遣い稼ぎで交渉する相手や敵対する相手の殆どが「横島忠夫GS」の懇意だというのだから。

下手に手を出せば「リアル悟空」が出てくるとなればビビるのが当たり前だろう。

そうになると、「あれ反則やん、ずるいやん！」と協会に訴えるほかないのだが、非常に上手く運用されている上に、同業者以外からのトラブルがないという、実に世間的に聞こえのいいシステムになっているため、協会としても注意するつもりはなかった。

が、思わぬ方向からのトラブルが舞い込む。

「・・・アメリカつか・・・」

「そう、合衆国なのよ」

「めんどくさいっすね」

「ほんと」

アメリカ合衆国、それも鷹派と呼ばれる政治家たちが騒ぎだしたのだ。

極右勢力であるGSに、現状兵器が効かない武力が集中する、この事実を容認できない。武力の分散もしくはシベリアンコントロー

ルが必要だ、と。

「で、管理は国連、つうかアメリカがする、と?」

「ま、通るとは思っていないだろうけど、言うだけは言っとくって話ね」

所詮、自分の国がかわいいのはどこの国も一緒。

噛みつく相手が格下なら、容赦しないと云うのが白人社会の習わしだ。

いや、世界規格ともいえるだろう。

で、横島忠夫は苦笑い。

「うちのマンション、そんなこわいんすかね?」

「まあ、霊場防衛で向かわせた一個師団が全滅してるんですもの。

アメリカもなりふり構っていられないわよ」

「はあ、そりゃまあ……。でも、対霊装備ぐらいは準備してたんすよね?」

「一応、程度だつて話ね」

「うわぁ……。自分たちの評価ばかり高くて、何も考えてないのが丸解りじゃないっすか」

あはははは、と笑う二人であったが、聞いていたおキヌがあわてて声を上げる。

「ちょ、ちょ、ちょっとまってください! コメリカの動きにどうするって話はしないんですか!?」

えー、といやそんな顔の美神と横島。

「基本さ、うちのマンションの住民って、日本固有の「神霊」なん

だよ。それを国外の人間がいじる？　GS協会もオカルトGメンも賛成するわけないし」

「まあ、悪魔払いを許可できないバチカンが本家の御宗教さまから警告がいくでしょ？」

ともなれば、国外からの操作はない。

ではなにが問題なのかと言えば・・・

「油臭い議員だの官僚がしゃしゃり出てきそうだ、と」

「そういうことよ、横島君」

「めんどくさそうっすねえ・・・」

うんざりのふたり。

もちろん手がないわけではないし、簡単な手段も存在する。

しかし、その手段にはリスクが大きい、というか是非ともリスクを考えて避けたい。

そう考える二人はすでに、かなり似通った思考を持っているようだった。

「GS協会は神父に任せておけばいいっすよね？」

「ま、そうね」

「政府や官僚は・・・」

「頼りたくないけど、六道か・・・」

「ザンスっすかね？」

「うん、そっちは任せていい？」

「了解っす。つうか、個人GS事務所の会話じゃないっすね」

「ふふふ、ま、頼りにしてるわよ」

「頼りにされるっす」

びしっと敬礼の横島と美神は、実に黒々とした笑顔を浮かべてい

たのであった。

「ひい、こ、こわいかもしれない」

政府系交渉は実に順調にすんだ。

というか、六道のおばさまに「お願い」するだけなので、済んだとかそういう次元ではない。

が、冥子の仕事の手伝いをしなければならなくなり、シロを貸し出さざる得なくなったのは少し厳しい。

もちろん、横島君の「ファンネル」と「文珠」があるので、少々問題はクリアできるんだけど、横島君の不在も少し痛かった。

横島君に任せたザンス経由の政経工作は、きわめて恐ろしいほど明確に形になり、アメリカ鷹派議員の数名が辞職、残りが意見を翻した。

活動資金の大半が白紙になる目になれば、資本主義の議員の主義主張など存在しないといってもいい。

電撃的な情勢の変化を読みとった日本国内の官僚は、逆にウチの



事務所に興味を持ち、それぞれのファインプレーで接触を求めた。

まあ、見合いとか嫁にこないかとか、そんなバカな話。

現実的な話では、内閣府やら検察庁、さらには外務省やら国防相なんかが入り乱れて連絡してきているのがウザいんだけど、本格的活動はないだろう。

そう、彼らが狙っている相手が、このほどザンス国王から召喚を受けて、出国しているからだ。

名目は色々あるけれど、今回の召喚がどのようなものかは私ですら知らされていない、ことになっている。

実際は予想できる話があった。

「ファンネル」であった。

この霊具、当初予想を超えて、爆発的なヒット作になっており、在野の霊具市場を圧迫し始めているのだ。

それは精霊石の輸出で生計を立てているザンスにおいて非常に重大な国難であり、一級排除懸案でもある。

つまり、ファンネルによる被害を何とかしたいが、原料生産地であるザンスにおいて何とか出来る問題ではない。

ではどうするか、ともめているところで連絡があった相手こそ横島忠夫。

「ファンネル」の開発者であった。

個人的な友誼もある国王は、この国難にあってブレず、彼に取引を持ちかけた。

「・・・用件は解った。力を貸そう。だから忠夫も力を貸してくれ」

裏も表もない取引に、横島君は了解を伝え、案件が消えたところで力オスを伴いザンスに渡ったのだった。

「どんな霊具を作ってくるのやら・・・」  
「でも、早く帰ってきてくれるといいですね」

おキ又ちゃんも苦笑い。

寂しい気持ちが大きいのだろうけど、これも影響力の大きい人間の宿命みたいなものだし。

「そういえば、おキ又ちゃん」

「なんですか、美神さん」

「横島君がこの前開発したっている「ヨコシマンスーツ」ってあるじゃない?」

「ああ、あの近所の子供が格好いいと評判の?」

「あれ、精霊石共振素子でも作れるらしいわよ?」

「・・・ということは・・・」

「ま、そういうことなんじゃないかしら?」

性能は劣るらしいけど、下級魔族の攻撃程度なら平気だっていったし、パワーアシスト機能と飛行機能をオミットすれば、世界販売しても安全かもしれないわね。

つつか、普通の霊能者じゃ、オミットしないと着た瞬間に干からびるわね、うん。

第二十七話（後書き）

すっかりGSしてないGSSSになってしまいましたw

次話10時更新予定

## 第二十八話（前書き）

えー、ヨコシマンは正当な「ライダーシステム」っポイ何かですw

## 第二十八話

基本構想はあったんだ。

マリアやテレサに導入した文珠機関を、逆に使えないかって。

カオスと相談しているうちに、武装の転送やら霊具の召喚やらを試していて、最後にや武装を納めた強化服ごと転送するという話に落ち着いた。

で、武装は、となった瞬間に、諸々のイメージが消え去った。なにしろ、俺やカオスには武装が必要ないから。つかえねー、と嘆いたところで、マンションに一室に一柱光臨。

「話を聞かせて貰ったぞ、婿殿！」

そこから始まった大演説の中で思いついたのが「劇場空間発生装置」こと「劣化コスモプロセッサ」だった。

いくら文珠をエネルギー源にしているからとは言え無茶な世界変革は宇宙意志にはじかれる。

そんなわけで、宇宙意志に引つかからない程度の「ご都合主義」のパターンを記憶槽に入力して、セレクトできるようにしたところ、おもしろいほどに上手くいった。

芦田の分も作ったところ、ノリノリだったのは、まあ、いいことだろう。

あの魔族襲撃後、三姉妹の成長も順調だと聞き、浮かれ気分で開発をしていたところで呼び出された俺が向かったのはザンス。

まあ、色々とは話があったけど、結局は精霊石の品質で性能が劇的

に変わる何かを開発せよ、という話だったので、劇場空間発生装置を組み込む前の強化服をベースに、対霊突入装備を作ることにした。

一応、個人の霊力でも十分な性能を発揮するけど、質の高い精霊石へコアを換装することで性能は数倍にまで跳ね上がり、下級魔族の攻撃も耐える作りになっている。

加えて、カオスが開発した精霊石連動システムを加えると、強化服と連動した霊具のパワーも上がり、50程度の霊能者でもマイト換算でも120を越える。

こんなものを一週間ほどで作るのだから、カオスはすげえ。

「忠夫、じぶんはすごくないつもりか？」

「横島さん、自分を正しく、評価してください」

なぜかカオスとマリアから非難されている俺でした。

ザンスから発表された新製品に世界は震撼した。

精霊石式強化服「G」シリーズ。

対霊・対物理・対呪術の防御機構を持ちつつも、対応霊具と連動させることにより数倍もの力を発揮すると言うものであった。

「G1」装備や「G2」装備という内容にも注目は行ったが、「

G3」装備といわれる最高級品は一線を画していた。

精製精霊石供給方式で増幅エネルギーが供給される限り、高レベルの防御結界が張られ、下級ながら魔族の攻撃をも無効化できるほどの力を示した。

加えて、供給維持中の連動システムも性能向上しており、単独での下級魔族撃破が可能なスペックであったのだから、それを聞いた関係者は耳を疑ったことだろう。

が、疑ったが、その実力を示されては黙ってはいられない。

まずは「世界の警察」を自負するアメリカが視察に訪れた後、雪崩をうつように先進国と呼ばれる各国がザンスを訪問していった。

帰りにはスペックノートと簡易概念図、そしてかなりの数の購入契約書が握られていたのだが、彼らは今のところ気づいていなかった。

さて、帰国したろ、という所で、外務省の事務次官なんつうやつらが現れた。

カオスは「ワシには関係ないぞ？」とかいって逃げやがったけど、マリアを置いていってくれたのは助かる、マジで。

マリアが入れてくれたコーヒーをすすった後、事務次官、土下座。

「私を、いや、日本を助けると思って、このままアメリカに行ってくれ！」

.....

「現在、日本が抱えているアメリカ国債は.....」

「.....」

「このままでは、アメリカ国内問題を、日本のGS、横島君、君に押しつけることになるだろう！」

「.....」

「日本国内世論は既に纏められつつある。君を生け贄にすることで、国会は.....」

「.....」

土下座のまま熱く語る事務次官殿。

で、俺とマリアは携帯で動画録画中。

「.....世界の危機を救うと思って、アメリカへ行ってもらえないだろうか!？」

で、はい、送信。　　ぷろりん

「.....今の音は何かね？」

「メールの送信音です」

「ま、ま、ま、まさか!？」

「GS協会とICOP、あとアメリカのケーブルテレビ局に送ったつす」

真つ青になった後、真つ赤になった事務次官殿は、俺につかみかかるが、マリアが取り押さえた。

俺は事務次官殿の懐にあった航空券から情報を読みだし、再びメール。

「ま、これでこのチケットを手配した奴らと迎えに来ようとしてい



た奴らが解るつすね」

「きさま!!! 今貴様がなにをしたのが解るのかあ! この瞬間、日本は、日本は、アメリカによって潰されることが決まったんだぞ!!!」

確かに、アメリカ合衆国が本気になれば潰れるかもしれないけど、本気になれるかと言えば実際は別だ。

今、アメリカを動かしているのは政治家でも企業でもない。有権者なのだから。

大統領戦が近い今、国民から、いや、出資企業の攻撃材料はいくらあってもいいのだ。

ネガティブキャンペーンの為の材料になるのなら、どんな怪しいものでも食いつくし、どんな嘘くさいものでも「本物」っぽくしてしまうことが決まっている。

そんな政治の荒波をちゃんと理解しているのだろうか？

「ま、今はアメリカよりも、あなた自身の進退を気にした方がいいつすよ?」

「事務次官殿、現在、官邸に、本国からの連絡が、三件ほどきています」

さすがマリア、万能だなあ。

「な、な、なぜだ、なぜだ! 私は国益を鑑みて、最善を・・・」

泡を吹きながら倒れる事務次官殿を官邸へ送り届け、俺は帰国の途についた。

横島君へメールを送り、到着を一本早めさせた。

何しろ、外務省事務次官スキャンダルの当事者だもの。

どんなに規制してもテレビ屋どもが気にしないわけがなく、集中砲撃状態で待ちかまえているだろうから。

加えて入国審査を抜けたところで、文珠を使って姿を変えさせたところ、どうにかこうにかスルーできたようだった。

ここで私が合流しては意味がないので、成田エキスプレスホームで合流し、そのまま都心部へ異動。

最寄り駅まで移動できたところで筈による移動に切り替えて、事務所までとなった。

本当ははじめから筈で移動すればいいんだらうけど、ウザいヘリも多いので、致し方無い処置といえた。

「・・・ひどい目にあっかつす」

「いい迷惑よ」

ま、そうは言ってもベターな対処だったとは思う。

あとはもみ消せる範囲ならお金にものを言わせることもできたけど、相手は「コメリカ」という「国」だ。

こうなると、できるだけ「正義」がないと「コメリカ国民」に思わせなければならぬ。

そういう意味では「ベスト」であったといえるけど、メンドクさいことには変わらない。

「しばらく、横島君はウチの近所の仕事、休まないといけないわね」

「迷惑をおかけします」

「ま、横島GSの所属事務所ってことで、宣伝させてもらっけどね」「少なくとも時の人だ。」

「あ、営業はしばらく禁止よ」「ういっす」

あ、そうそう。

「学校から、そろそろ登校してきなさいって電話があったわよ?」「……TTT」

泣きたい気持ち、わからなくもないわ。

心底忙しいものね、横島君。

でも、愛子ちゃんが一緒に登校したいんですって泣き入ってるらしいから、撤回はないと思うわよ?」

## 第二十八話（後書き）

精霊石式強化服「G」は、某「G3マイルド」とかそのへんですw

次話15時更新予定

## 第二十九話（前書き）

一つの事件の流れは、様々な支流を生みます。

## 第二十九話

本当に久しぶりに横島君が帰ってきた。

既に「みんなの横島君」だけど、私にとっては掛け替えのない友達。

だから明日からしばらく一緒に登校できると聞いて、本当にうれしかった。

「すまんなあ、愛子」

「いいのよ、忙しいのは知ってたし」

うそ。

しってたけど、しってたけど、イヤだった。

「あ、そうそう、これ土産な」

渡してくれたのはネックレス。

精霊石かしら？

「これはな、カオスと一緒に作ったもんでな・・・」

そういつて私にかけてくれる横島君。

瞬間、私が小脇に抱えていた机が消えた。

「・・・え？」

ニッコリほほえむ横島君曰く、このネックレスの空間へ机を移したそうだ。

私の本体なのに、なぜかこの写し身のほうが本体に感じるのも、  
ネックレスの効果だそうだ。

「・・・やだ、ほんとうに、もう」

はじけるような喜びとともに登校すると、クラスは大きく盛り上がった。

横島君はもみくちやにされ、私も女子仲間にもみくちやにされた。  
いままで、机一個分の隙間があった私たちの間が、机一個分縮まった気がした。

エミちゃんから指示された内容じゃったが、横島さんは内緒だぞ  
って色々教えてくれたんじゃ。

売り出された強化服の仕様とその弱点。

もちろん、精霊石を使えばいくらでも強化を延長できるそうじゃ  
が・・・

「燃費悪いんだよ」

強化時間は最大6時間。

精霊石一個（2億円相当）で2時間延長という燃費の悪さ。

「個人じゃあつかえんのお」

「ああ、まじめに修行した方がまだな」

「そんなもの売り物になるんですか？」

「できる奴もできない奴も均一に力を付けないと行けない集団があるだろ？」

「軍隊ですかのお？」

「あたりだ、タイガー」

つまり……。

「アメリカの財政赤字を増加させるというわけですか？」

「ピート、黒いなあ」

「黒いでのお」

「なっ、なんでそういう結論に！」

ピートさんの結論は、アメリカ自身もわかっていることと、横島さん。

けど、オカルトの神秘部分で先鋭化できないのならば、装備で底上げせざる得ないと言うのが西洋社会の一般常識とか。

「ふーん、じゃあ、ピート君とかオカルトGメンって異端なの？」

「ピートは異端だろうなあ」

「吸血鬼ですから」

「……忘れてたわ」

愛子さんのこの一言が、世間でどれだけ異常かわからないのじゃろうか？

少なくとも、わしはこの学校に来るまで異常であることを指摘され続ける人生じゃった。

「ま、世間世界はいろいろだよ」

肩をすくめる横島さん。



わっしは、横島さんに感謝してるんじや。

じゃから、エミしゃんに頼まれても、親友の横島さんの望まんとは……

「あ、そうそう、この情報はエミさんに流せよ？」

「よ、よ、横島しゃん……」

「裏の方に情報流してくれねえと、バカが精霊石を乱用してくれねえからさ」

黒い、黒過ぎじや、横島さん。

ヨコシマのアイデアをもらって、シナリオじゃなくてシュチュエーションを組み込むことにした。

簡単に言えば、必殺技。

そう、あたかもショーマンプロレスのように、大業を敵味方が協力して決めるみたいな、そんな感じに。

一応、空中からエフェクト付きで跳び蹴りを決めるものと、分身するほどの高速でボコボコにする技を組み込んだところ、パピに大好評だった。

「やっとルシオラちゃんも解ってきたでちゅ！」

いやはや、私たちにこんな技なんかいらないだろうに……。いや、これは「おもしろい」という思いなのかもしれない。そうになると、私も少しアイデアがあるので提案すると、パピはノリノリになった。

「ルシオラちゃん、天才でちゅ！」

……

あはははは、やっぱいい？

そうね、そうだったわね！

あははははは！……！

変身から、そう変身から凝りましょう！

「ああ、やっとルシオラちゃんっぽくなってきたでちゅ。期待して  
るでちゅよ、ルシオラちゃん博士」

ふふふ、任せなさい。

こんな事もあるつかと、こんな事もあるつかと！

うふふふふふ

タイガーに探らせた強化服「G」シリーズの情報は、横島から提供されたそうだ。

つまり、この、小笠原エミに対する挑戦なワケ？

「違うんですじゃ。横島さんは、装備してる人間に長期待機させて精霊石の消費を増やさせるつもりですじゃ」

・・・ザンス、ザンスの流通量増加政策の一環というワケ？

「横島さん、腹の中真っ黒なんじゃ」

つつことは、ウチでその片棒を担げば・・・

「担がせるき満々じゃあ。裏社会に蔓延させてほしいみたいに言っていたんじゃ」

さすが令子の弟子。

やることなすこと真っ黒ね。

でも、この仕様・・・。

「タイガー、この強化服を貫通する威力の呪い、ファンネルは抜ける？」

「難しいとおもうですじゃ。ファンネルはエミしゃんも監修している呪い対抗版があるけん、それが入っていると難しいとおもうですじゃ」

正解よ、タイガー。

実践の中で強化服使用組も気づくでしょうけど、六道とはつきあいを深くしたくないから強化服に走った勢力が、ファンネルを買う

気になるかは別の話。

というか、露骨に嫌がるでしょう。

「といっても、どっちも横島が噛んでると解ったら、どつするかしらね?」

「誘拐してアメリカ人に仕立てると思っんですじゃ」

「・・・タイガー、あんたも黒くなったわね」

「みなさんの教育のたまものですじゃ」

うーん。

横島の影響かしら?

まあ、女の前で硬直していた前を思えば成長と言っことにもできるし。

前進ね、前進。

事務所の社長から「よこっちマンション」出入り中止願いが来た。よこっちが政経的に不安定な立場になっているらしい。そのへんに関わると、俺自身がよこっちの弱点になりかねんそっや。

まいったなあ、猫またのケイとゲームデータの交換の約束をしてるんやけどなあ。

とはいえ、よこっちの立場を悪くしてまでせならんことでもな

いやろ、ということとでケイに電話すると、残念だけど我慢する、との返事が返ってきた。

なんつうか、いい子供や。

昨今、あんな純粋な子供はおらん。

できれば、できれば、あのまま純粋に育ってほしいもんや。

「あ、近畿君。おはよー」

「おはようさんです〜」

本日の現場、踊るGSの撮影現場でスタッフのみなさんと話していると、どうしても先日のロケハン、つうか、GSと怪異の共同戦線の話になってまう。

あれをみた後やと、どうしても今までのシナリオが薄っぺらに感じてまう。

そのへんを脚本さんが連日徹夜で修正しておって、やっと現場初日に間に合ったそうや。

「で、どうですかあ？」

「自信はある。GS協会も後押ししてくれると思う」

脚本さんの書き下ろしをみんなで読んでいるうちに、うんうんうなずいたり、おおと声を上げたりしてしまった。

・・・いい脚本や。

ただ・・・。

「九尾の狐の抹殺命令は、ないやろ？」

GS協会で聞いた話やけど、過去の大妖怪の多くは人間の政治のゆがみに飲まれた存在だそうで、九尾の狐なんてその最たるものだ

とか。

「・・・GS協会に頼らず、それを政府がごり押し。で、本編のGSたちが救いつつ・・・」

「政府にハウスの報告でごまかす」

「もちろん、政府側にも養護者がいて・・・」

「GS協会もフォロー、うん、いいじゃない」

「ごろつきGSの横やりはほしいね」

「・・・アンダーグラウンドのGSでよくないかい？」

「いやいや、最近はそれリアルじゃないっすよ？」

できあがったシナリオに役者たちが意見を交わす。

「おおよそよかったら、GS協会に校正に回しますんで！」

「「「「「了解！」「」「」「」」

というわけで、次回以降の脚本が決まり、今回の話もそれに併せて小修正が加わる。

あの大根女も親の失墜でうるさくなくなったし、良いことばかりや。

あ、一応、話通しとかならんかな、あの御狐様に。

## 第二十九話（後書き）

飛んだりはねたりしている彼らの動きが、不自然でないことを祈ります

### 第三十話（前書き）

えー、意識しているわけではありませんが、マスメディアに対する表現が酷いのは、この世界のマスメディアが酷いというだけで、実際の存在自体を貶める意図はありませんので、そのへんよろしく



## 第三十話

銀にいのばかりかぁ……

銀にいの「踊るGS」が路線変更した。  
というか、別番組っぽいりともいえる。

以前の踊るGSは「勸善懲悪」というか「人外悪」という路線だったんだけど、最近はその正義「路線で、主人公」側も見ようよって迷惑な行為だと言っているのが見える方向で描かれている。

そのせいか、アイドル人気一本やりだった内容が社会派な内容に流れてきている。

その契機となったのが「九尾の狐」の回。

あれにやあ、もう、やられた。

狐も子役もみんな私を意識しているとしか思えない出来じゃない！！  
で、私が先祖が入りした存在だって事になっていることは有名で、さらに銀にいと懇意だと言っ話も有名だから、この騒ぎ。

「……あの方がタマモさん？」

「横島GSの妹で、近畿さまとも懇意だそうよ？」

「うわあ、いいなあ……」

「あれでしょ？ 横島GSと近畿くんってドツキ漫才するほどながいいって」

こんな噂話が一月中付いて回るんだもの。

たすけてえ……。つて、これはまずいんだっけ。

「タマモ、ちょっと念波がでたでござるよ」

「うづうづ、シロねえ、ごめん」

そう、あの事件で味をしめた「青い稲妻」と「赤き狐」が、私たちからの助けを呼ぶ願いを感じると、全力飛行でやってくるのだ。

ひき逃げが、とーっても気持ちよかつたらしい。

イタリア政府から「うちの子に悪い遊びを教えないでください！」なんてモンスターペアレンツみたいな事を言われたりもした。

まあ、悪い遊びを教えてしまったのは事実だけに平謝りをしたけど。

そんなわけで、友の助けという大義名分を得るために、アンテナをビンビンに立ててこちらを伺っているそうだ。

だから妙な念を発しないでほしいという要望が大使館経由できていたりするのが重すぎる。

「まあ、しばしの我慢でござるよ」

苦笑いのシロねえだけど、結構我慢してるのは解る。  
なにしろ尻尾が……。

「シロちゃん、タマモちゃん、お昼しましょー？」

ああ、おキヌちゃん、空気読んでほしいかも。

ほらほら、おキヌちゃんだって注目されてるんだから!!

「横島ー、犬飼ー？ どうしたー」

一文字さんも一緒か、もうだめね。

「さあ、いくでござるよ、タマモ」

ノリノリのシロねえに引っ張られて、私は食堂へ向かったのでした。

ああ、唯一の救いは、お兄ちゃんのお弁当。

これしか救いが無いのが泣けるわ。

氷室さんの気遣いで、シロさんとタマモさんを食事に連れ出している。

現状、注目度の高い二人を放置しているといろいろと弊害があるので、噂が飽きられるまで高等部の私たちが保護しようと言うのだ。基本、上位学年の人間が直接保護しているのが知れ渡れば、下位学年に対する嫌がらせや興味本位の噂話は消える。

というか、正確に言えば「聞こえなくなる」。

地下に潜るといいう言い方も正しいが、表面上聞こえなくなるなら無いのも同じだ。

元がやつかみに関わる感情の評判だけに、面倒なことになる前に鎮火せざる得ない。

女子校とは実に面倒な世界だと思う。

「わざわざ申し分けないでござる」

犬飼さんはその辺の機微を理解してなさっているみたいで、恐縮しているけど、横島さんは苦笑이었다。

まあ、こういう世界は理解しがたいのでしょうか。

仲良し兄妹で生きてきた横島さんたち二人には、逆により影響がないかも知れません。

でも、私たちは知り合い、そして親交を深めることができたのです。

ならば、少しでも力になってあげたいと思うのは当然ではないでしょうか？

「かおり先輩っていいひとね」

どういう意味かしら？

「で、なにを取材に？」

・・・ばれてるのね。

まあ、いろいろと言いつけはあるけれど、無作為な噂を立てられるぐらいなら、直接取材をしよう、そう、知り合いならいろいろ聞けるし、というのが総意らしい。

そんなわけで・・・

「いろいろと聞かせてくださる？」

主に、近畿くんとか近畿君とか近畿君とか！

「弓、がつつきすね」  
「・・・反省しますわ」

犬飼や横島の話をもとめて、新聞部に渡したところで今回の騒動を収める約束が締結された。

あいつ等には悪かったけど、良家の子女が集まっている学院で家庭方面からの情報操作ができるのはプラスのはずだ。

加えて、聞きたいことが聞けた生徒たちも鎮静化するので、生活の上では問題がなくなるはずなのだけど・・・。

「うっわー、くそメディア・・・」

入国の時に、横島GSから逃げられたテレビ屋たちが、意地になって関係者を追い回しているらしい。

六道女学院にすらカメラを向けているのだから末期だろう。

そろそろ本気で逃げ出さないと、スポンサーから逃げられるという事が解らないのだろうか？

「銀に何も仕事以外じゃ面倒ごとばかりだって嘆いてたし」

「そうなんですか？」

「はい。お兄ちゃんとダチだっていうので、結構面倒が多いらしいです」

最近の踊るGSの路線変更にも関わっているそうだ。

「あれはあれで、リアルになりましたわよね？」

「そうだよな。うん、なんというか、関係者からみたリアルがあるよな」

「そうですねえ、事務所から見た風景と結構かさなりますねえ」

さすが現役で一流GS事務所に出入りしていると現場の空気が解るらしい。

霊能者っただけでもリアルに感じる私たちだけど、GS事務所から見てモリアルだっけ言うのだから本格的だ。

「・・・あの、指定等級と現場が食い違っているとところとか、その後の協会との金銭交渉とかってリアルですよ・・・」

・・・言葉もねえ。

「そうでござるなあ、あの事務職員役の女優さんは、誰かを思わせる迫力を感じるでござるなあ」

犬飼がイメージしてるのって、誰なんだろうなあ・・・、聞きたくねえけど。

「あー、警察が来た」

「うっわー、やりあってますわよ」

「叫んでる叫んでる」

「みてみて、投石してますわ」

マスコミがじゃまで下校できない生徒たちが、わいわいと校門を見物していた。

『はいみなさん、きこえてますかあ〜？』

校内放送で理事長の音が響いた。

『現在、賤の出来てない犬をケチらしています。』

い、いぬ・・・

『あと十分後に下校してもらいますが〜』

よけいなことを言うな、か？

『知ってることはペラペラしゃべっても良いわよ〜』

え？

『でも、正確にしゃべらなくてもいいわよ〜？』

うわぁ、悪辣う。

思わず顔をしかめる私と弓だったが、おキ又ちゃんは理解していないようだった。

とりあえず、私と弓が感じた話をする、逆に真顔で言い返された。

「情報はそういうものですよ？」

さすが現役GS事務所所属は違うなあ。

### 第三十話（後書き）

政治家の心の中には、自分達の都合の良い意見を叫ぶ国民がいるように、マスメディアの胸の中には、下種な欲望を叫ぶ視聴者がいるのではないかと勘ぐってしまいます。

スキヤンダルや噂話なんて見たくもないのに延々と流されると、本当にテレビって必要なんだろうかって疑問を感じます。

・・・地デジ、いらなかったかもw

本日の連続更新はここまで〜



**第三十一話（前書き）**

本日も連続アップします  
本話もあわせて3本です

一本目、どうぞ

## 第三十一話

啞然としたよ、うん。

「G3」装備のコメリカ海兵隊が、ウチのマンションに降下作戦仕掛けて来やがった。

とりあえず、うちのマンションのみなさんには「通」の文珠を持たせて攻撃を仕掛けてもらってるので、がんがん攻撃が通じてるけど。

『シット、隊長、ブースト許可を!!!』

誰かが無線に向かって叫んでいる。

ブーストつつつと……

「家主、急に敵の力が上がったぞ」

「んじゃ、こっちは……」

あらかじめ四方に仕掛けてある「神」文珠に意識を向かわせる。入れる文字は決めた。

『全・国・放・映』

今この瞬間にも、「G3」装備の詳細リアルデータと隊員の所属部隊の戦歴、そして何の目的で作戦指示がでたのか、誰が出したのか、なんてことがテレビのテロップで流れているだろう。

そのへんは遊びに来てるヒヤクメが嬉しそうにのぞいているから落ちはないな。

「・・・というわけで、店子のみなさんは、余裕で打ち返せる人のみ交戦してください。あとは俺の部屋経由で避難、つうことで」  
「「「「「おおおお！また食っていいかあ！？」」「」「」「」  
「き、きようはだめー！ー！」  
「「「「「ええええええ？」」「」「」「」

かなり不満そうな店子さんたち。

「せ、せやったら別の意味ならええか？ 性的に・・・」

「レイプもあかん。同性でもだめや」

「大家殿、かたいのお」

「おいしそうな男なのに・・・」

あかんあかん、ウチのマンションをハッテンバにさせたらあかん。

「それにな、今のところウチは被害者なんやから。その立場を守るようにしてな」

「「「「「はい」「」「」「」

ところで・・・。

「湯上さんと笹倉さん、なんで迎撃側に？」

「ああ、これがあるし」

「結構壁役になるわよ？」

二人が浮かべているのはファンネルB。

防御強化の結界タイプだ。

これはEミさんでも抜くのに苦労するといっていたもの。

防御重視の「G3」に霊符マシンガン装備じゃ抜けないのは道理。それに、G3の防御能力は個人の基礎能力頼りだし、攻撃力不足

はザンスのせいではない。

「……んじゃ、向こうの兵隊さんが（性的に）喰われないように監視をお願いします」「了解」「」

コメリカ海兵隊、開闢以来もつとも残酷で残念な結果、といわれた戦闘の幕が下りた。

G3 装備には、一切の損傷はない。

が、直接本体の攻撃や恐怖を直接操作されたため前線は崩壊。さらには突入部隊の情報を日本国内で丸裸にされてしまい、隠密降下および横島忠夫の確保もしくは殺害を目的とした作戦案すべてが公開されてしまった。作戦案を作った部署、許可をした人間、作戦実行した部隊、そしてその参加兵のすべてが。

あまりの公開密度に「もう勘弁してください」とコメリカ大使館から泣きが入ったほど綿密に公開されていた。

たとえば、降下兵ジョーンズさん。

三歳の頃、隣のメアリーちゃんに告白したが断られショックで大きい方を漏らした後、女性恐怖症になったこととか、エレメンタリーのテストはすべて成績優秀者のテスト内容を奪ったものだったとか……。

記憶に残る黒歴史が、綿々と公開されていったのだ。

これを知った兵たちは、クリスチャンでありながらも自殺を希望したというのだからその絶望たるや……。

個人のメールポストには、過去にさかのぼった個人訴訟や妻からの絶縁状が山のように集まっており、軍部もめまいを感じたという。とりあえず、日本からアメリカ国民個人へのハッキングがされていると訴えたアメリカ政府だが、日本側からは、「某」神族がマンションへ遊びに来たところを所属不明の軍が攻撃してきたのだから、この程度の反撃は当たり前、と言いつつ切った。

もちろん、正義も何もない単なる財界からのプッシュだけで行われた秘密作戦であることは、世界中が知っている。

そう、アメリカ国民も。

この事実を前にして、「正義」を訴えることは出来ない。

ならば「利益」を訴えるしかないと切り替える政府は、現在のアメリカ不景気の根元はオカルトによる不利益で、その根元には「横島忠夫」がいる、と言いつつ切った。

それも政府報道で。

そこで、記者は聞いた。

「つまり我々アメリカ経済は、一人のGSに勝てない、そうおっしゃるのですか？」

もちろん「Yes」とはいわない。

しかし、責任を押しつけるためにはYesといった方が楽だろう。

記者はさらにつっこむ。

「少なくとも、敵対しなければ良いところを、なぜ政府は敵対姿勢をとるのですか？」

「共存は出来ない。それは彼が異教徒だからだ」

そう、問題の本質をさらけ出させることに成功した記者はニヤリと笑った。

「コメリカ国民の何パーセントがその異教徒か考えたことはありますか?!」

「異教徒だからこそ共存できないということは、多くの同盟国と共存できないという結論になると思われますが、回答を！」

「「「「「回答を!!」「」「」「」

喧々囂々のうちに記者会見が終了した。

もちろん、記者会見にたっていた補佐官は罷免、更迭、さらには裁判にも掛けられることになった。

罪状はいろいろあるらしいが詳しくは知らん。

一応、コメリカとの安保条約の撤回はしないつもりだと政府発表があつたけど、どこに落とし所を持ってくるつもりかは、全くわからない。

「とうか、アメリカの敵扱いよ、横島君」  
「中東諸国からの受けは良さそうですね」  
「あとイギリスとかフランスからも受けがよさそうよ」  
「ロシア、も歓迎してくれますねえ」  
「あははははは」

まさか個人名を出して攻撃してくるとは思わなかったなあ、うん。  
前の「時」じゃあ世界の敵扱いだったのを考えれば、まだいいけど。

でもなあ、また政治的取引の材料にされかねんのがメンドクさいなあ。

「ま、本当に面倒だと思えば、市場から投資資金全部を引き上げればいいのよ」

「え、そんだけでいいんすか？」

「もちろん、ご両親と一緒にね」

「あ、あああ、なるほど」

納得した横島だったが、美神の怪しいほほえみを見て確信した。

「・・・美神さん、そういうのはインサイダー取引つうんすよ？」  
「あらやだ、横島君のことを敵視してる国から資金を引き上げるだけじゃない」

「うっわー、面目上は通りそんな理由だなあ。」

「とはいえ、自分を襲うように指示した奴らに資金提供なんかするつもりはないので、早々に引き上げだな、うん。」

「ザンスとおやじにも一報入れとかないと。」

謎の資金団体と呼ばれていた「YYY」という資金団体のコメリ力撤退によるコメリ力経済混乱は、多くの出資者に打撃を与えたが、その出資団体が「だれ」なのかは語られることはなかった。

だが、横島忠夫への敵対発言と同時に起きた経済混乱から、彼による経済テロであると断定して調査が行われる。

そして、理解した。  
理解せざる得なかった。

理由なき資金撤退の行き先を。  
戻った先を。

そう、横島忠夫だったのだ。

一様に怒りを感じた調査官であったが、よくよく考えれば「彼」を敵としなければ、資金回収は行われなかったのだ。

つまり、ちよつと調べればわかるほど資金浸透していた「横島資金」をコメリ力国内から撤退させたのは、間違いなく政府であり、その発言を左右させる「財界」の上っ面だけの思惑であったのだ。

そう「異民族」という思惑。

調査官たちは自らの職務正義を捨てて、社会正義を行うことを決めた。

そう、調査結果の公開だ。



彼らはこれにより永久にも近い禁固刑を受けるだろう。  
しかし、彼らは今を救うために、愛する正しいアメリカを救うために、自らを犠牲にすることを決めたのだった。

アメリカのケーブルテレビから取材がきた。

何でも、今回の騒動の背後についてドキュメント番組を作るので協力してほしいというのだ。

基本的に俺は関係ないよ、と切って捨てたかったんだけど、実際のところ国一つ所か世界不況の誘因になっているといわれれば情報を開示せざる得ない。

そんなわけで、今回の騒動の発端、そう、オカルトパテントに対してちよっかいをかけてきたアメリカ財界の話から始めることにした。

まあ、全部翻訳されて正しく伝わるか不安だったので、文珠を使って「翻・訳」して話したところ、レポーターの男性が目を丸くした。

「どうしましたか？」

「・・・いえ、まるでネイティブの英会話をなさっているので、少し驚きました」

「ああ、少し前にUKに派遣されたときに少し学ぶ機会があったん

ですよ」

もちろん、うそっぱち。

文珠様様だな、うん。

と、まあ、そんなこんなで、こっちが察知した動きとそれに対する対応、そしてザンスでのGシリーズの開発にまで話が進むと、レポーターは真っ青な顔で言葉を止めた。

「・・・ミスタ横島。もしかしますと、あの霊的強化服の開発は、あなたが？」

「はい。ドクターカオスと共同開発ですが」

がつくりと肩を落としたレポーター。

「つまり、ステイツは、あなたの手の上で踊らされていたということですか？」

「まさか。ここまで短絡的な行動にできるとは思いませんでしたから、Gシリーズ用の罠なんかマンションに仕掛けられませんでしたもの」

にっこりほほえむ俺だったが、レポーターは力無い笑顔で答えた。

「この番組が濃くない放映したときの反応が楽しみです」

「ははは、というか、銭勘定ばかりが得意な人間がトップになるとこうなるって事例みたいなものじゃないですか？」

「実に明確な見解をいただいたところでレポートを終了したいと思います」

そう、これ以上俺から聞くことはない、と彼は判断したのだ。

逆説的に彼の判断によってコメリカ国内感情を良いものにしてく

れると約束してくれたようなものだ。

「・・・ところで、ミスタ横島。G3出会っても弱点がある。では、その弱点を補強するにはどうすればいいですか？」

「簡単ですよ。既存の霊具を組み合わせればいいんです」

「たとえば？」

「たとえば、ファンネル、とかね？」

「!?!」

そう、G3は初めからファンネルの装備を意識している。

そのことを認めるだけでいいのに、かたくなにファンネルを意識からはずし、国内霊具メーカーと癒着なんかしてるからヒドい目に遭う。

「・・・まあ、最強になれないだけなんで、問題はないんだけど、ただ、ウチのマンションや一流GSなんかに絡むには力が足りないだけなのだ。」

あれえ？ なにげにウチのマンション一流GSでも二の足を踏む戦力やん。

コメリカが問題視するのも、仕方ないのか？

「では、ミスタ横島。これで失礼します」

「ああ、ミスタプレジデントにもよろしくね」

「・・・かないませんね」

そんなホテルの一室の会話だった。

### 第三十一話（後書き）

一本目でした。

これも一種の俺Tueeeなのは解っていますが、まあ、そういう流れですのでw

次回13時更新予定。

## 第三十二話 大修正版（前書き）

二本目です

内容と前後の接続で失敗したので、大修正しました。  
内容も十分な量になったと思います。

## 第三十二話 大修正版

「『アメリカの敵』の真実

そう題されたドキュメントが放映されたのは、横島への直接取材があつてから一月後だった。

実はその頃には日本とアメリカ間で冷戦状態になつていて、旅客機の本数すら減つていたほどだった。

もちろん、輸出入業者にとつてはいい迷惑だったが、アメリカの無理難題に辟易としていたこともあり他の国への輸出入に切り替える業者も少なくなかった。

そんな折りで放映されたアメリカ経済界の闇を追求した放送は、アメリカ国内どころか海外メディアでも大きく取り上げられ、そして大国アメリカを翻弄した一人のGS（大々的に実名報道されているが未成年であるということからドキュメントでは名前を伏せられている）の、インタビューでの一部会話を取り上げられることになった。

「・・・家族は守ります。仲間を守ります。それがどんなに卑劣な手でも。仲間の命がこの手からこぼれてゆくのに比べれば、罵声なんか怖くありません」

少年の、年齢に似合わぬ語り口に誰もが心引かれたのだった。

各国メディアは彼自身への取材をする傍ら、周辺人物への取材も怠らなかつた。

たとえば、「G」シリーズの共同開発者にしてテレサシリーズの共同開発者である「ヨーロッパの魔王」ドクターカオスはこう語る。

「ふむ、小僧は、忠夫は良いパトロンであり良い開発者じゃな。研究者じゃないところがミソじゃよ」

実に良い笑顔で語る氏に、巷で噂の「ボケ」疑惑について質問すると、爆笑のうちに噂を肯定した。

が、彼の開発した記憶の外部化技術によりその「ボケ」は心配なくなつたとか。

ゆえに、実際の肉体的な「ボケ」は存在するが、記憶と知識、そして判断におけるボケは存在しないと明言している。

この「記憶の外部化技術」についてのオカルトパテントはすでに取得しており、技術的な可能性については誰もが閲覧できるそうだが、基本原理部分での難解さが壁となり、転用や盗用研究は進んでいないという噂だ。

加え、彼をよく知るといふ六道家現当主は彼をこつ表現した。

「彼？ 忠夫君？ ああ、そうね、すてきな男の子、かしら。うちの婿にほしいぐらいですわ」

六道と言えば、現在の世界オカルトシェアの40%にまで駆け登つた「極東の奇跡」とも言われる存在だが、その原動力である「フアンネル」の基礎開発にも彼の名前が連なつていた。

つまり、今の六道の飛躍の陰には「彼」がいたことになる。

さらに加えて「ザンス」。

ご存じ、センサーシヨナルな発表をされた「G」シリーズだったが、実の所、ザンス研究所開発となっている内訳は「横島忠夫」と「ドクターカオス」であつたことは、今では有名だ。

基本的にザンスに借りがあつた彼が、基礎研究を進めていた靈的強化服を精靈石式にただけとの情報だったが、それだけではなかつた。

ドクターカオスとともに進めた精靈石同期システムは恐ろしいまでに効果が高いもので、同じ産出国の精靈石で武装すれば、極めて高い結果が得られるはずだつた。

が、先の恥ずかしい降下作戦においては、秘匿も去ることながら秘密作戦自体をデモンストレーションの場とするために、各社それぞれの装備を投入したため、同期システムが正常に運用されることなく、さんざんな結果となつてしまつた。

その問題点と判断力のなさは、各国の報道特別番組で大きくあげつらわれることとなつた。

では、コメリカ国内は、となると、いささか問題が大きすぎた。

跳ね上がる失業率、上昇する政府不満、国内総生産は下落、そして毎日のように発生するデモ。

政府批判、宗教差別批判と様々なものながら一様に先日の「敵」発言の撤回と、謝罪を政府で行うように要求している。

政府見解では「メディアの取材は一方的であり、コメリカの利益に反する内容であつた。残念だ」という、全く現実をみないものであつたため、デモは暴動に発展する寸前であつた。



小さな町でも大きな都市部でも同じように発生する大規模デモに、州軍が出動を始めたところで事件が起きた。

始まりは投石。

応戦する放水車。

火炎ビンが投げられたところで、誰かが発砲した。

それが始まりだった。

官民間わず発砲する都市部の風景を、まるで内戦中の産油国のようだと誰もが思った。

が、そこに恐怖の対象が現れた。

G3+ファンネルを装備した国軍であった。

実体弾をいっさい寄せ付けず、アメリカGSの呪いでさえも弾くその姿を見て、アメリカオカルト企業は、即座に手に入れて分解することを決意した。

しかし、現地の国民はそうじゃなかった。

憎しみを込めた瞳で「それ」を見つめた。

ひとまずの盾を得た州軍及び国軍だったが、この手の騒ぎにありがちな暴動と強奪が発生していないことに気づく。

そう、国民は狂乱していないが、軍に対して引かないぐらいに怒っているのだ。

いや、怒り狂い一つも理性的な民衆。

これほど恐ろしいものがあるだろうか？

彼らを拘留できる法律は数多く存在しているが、彼ら全員を同じ

理由で逮捕できるどの人員は存在していない。

拳には拳を、銃には銃を、そして、ファンネルにはファンネルを。群衆の中でファンネルを装備したGSが前に進み出る。対するはG3+ファンネル。

全面的な攻防が始まれば、間違いなく負けるのは群衆であっただろう。

しかし、群衆と軍の最前線で行われた兵士とGSの会話により、二手の緊張は失われた。

そして、一つのウネリとなった。

↓政府幹部および汚職官僚の退陣及び刷新

これが群衆に合流した軍幹部の願いであった。すでにアメリカの国内は、内戦状態を越えた革命状態のようだった。

大統領、副大統領の辞任によって、クラウンナンバー3である下院議員議長が、大統領職を代行することになった。

本来であれば回ってくるはずのない職分、本来であれば決断するはずのない職種。

明らかに自分の手に余る要求と国難が差し迫っていたが、彼、下院議員議長であるシエイマス・アンダーソンJrは、企業献金も企業融資も受けていないクリーンな立場であったため、大鉈をふるうことができた。

汚職官僚の罷免、敏腕弁護士でも付かない限り有罪決定な議員の罷免、黒い議員に関わって汚職満載の企業告発。

本来であれば絶対にできないことを大統領権限で押し流してみると、上院の1/3、下院の1/7の議員が罷免か辞職することになった。

後生、彼のことを首切り男などと揶揄した歴史が多かったが、この大処分を実際にみたからこそ民衆が収まったともいえる。

**第三十二話 大修正版（後書き）**

ガッツリ修正加筆しました

次回18時更新予定

第三十三話（前書き）

三本目です

### 第三十三話

まさか、こんな騒ぎになるとは思わなかった。

うん、まさかまさかだったなあ……。

いろいろと軋轢はあったけど、俺本人を必要としているという行動から、まさかの敵宣言とは、思いもしなかった。

とはいえ、敵呼ばわりされてヘラヘラしているのもばからしいので、ファンネルやらGシリーズで入ってくる金を運用していた投資グループへ「コメリ力関連から資金すべてを引き上げる」旨の伝達をすると、担当マネージャーが声を潜めて聞いてきた。

「本気、ですか？」

「……だって、敵扱いですよ？」

「それは理解してます。しかし、それとこれとは……」

「一緒ですよ。ムカつく奴らに金を渡すなんていやっすもの」

「えー、一応、担当社からの情報を集めないと断定できませんが、かなり損をしますよ？」

「関係ないって。損得で運用してるつもりはないっすから」

「……!! わかりました。さすが村枝の鬼百合の息子ってところですね」

と、よくわからない評価をもらった。

で、引き上げたらコメリ力経済の混乱。

あれー？ と引き上げた資金総額をみて内心失神しそうになった。

だってさ、あれだぜ!? 日本の借金のかんりの割合を返せるレベルなんだぜ!?

とりあえず、投資グループは色々分散してリスクを減らしているらしいけど、それでもすごい金額が動いたわけ。

・・・こりゃあ、まあ、やばい、な。

世界経済って奴は連鎖してる。

アメリカって国がやばくなれば、連鎖的に各国に波及するってものだ。

もちろん、すべての資金が現金化されたわけではなく、別のマーケットに流れただけなので、資金運用の圧力比率が変わっただけなのだが、一カ所に居座った貧乏神の影響がでかいのだ。

・・・あれ、いま比喻で貧乏神って表現したけど、もしかして本当に行つてないか？

まあ、それはそれとして、個人的な感情で指示した資金引き上げが、世界同時株安に近い状態を引き起こしたのだから怖すぎる。

これに前後して、企業株の大半を金に変えた美神さんの動きは早かった。

加えて、現在進行形で金の価格が高騰している市場をみて、どのタイミングでどんな通貨に変えるかを妄想している姿は、じつに輝いている。

先日放送されたアメリカの番組のせいで、電話取材が多いのなんのって。

まったくメンドクさい話になってきたので、電話事務所でも開いちやるか、と考えたところで思い出す。

そう、成人女性二人が表の職業をそろそろ辞めるつもりだという話をしていたのだった。

てなわけで、湯上さんと笹倉さんに電話対応をしてもらうことにした。

つつか、秘書業務を委託する高校生って、どんなもんよ？とおもったけど、実は二人がかなり優秀だったもので、美神さんが狙い始めたのは落ちになるかどうかといったところ。

そろそろ金に関わる騒動は他人に任せたいものだ、という思いがしないわけではない。

けして飽きたからとかそういう話じゃないんだからねっ。

最近経済誌を賑わす騒動で、なぜか横島君の顔をがよく出るようになった。

そのくせマンションにアメリカが攻めてきたり、テレビで「アメリカの敵」とか言われたりと恐ろしいことになっていたけど、本人は気軽すぎた。

一応、マンションの店子のみなさんが陰日向にガードしてるんだけど、バカが多くて困ると「嬉」そうだった。

「ほれ、昨日のチンピラ、うまかったのお」

「うんうん、濁った魂と濁った血。たまらんのお」

えー、食べちゃだめだって話でしたよね？

「おうおう、そりゃ大丈夫じゃよ」

「くっくらんぞ、肉食的に」



・・・だめだわ、詳しく聞いちゃいけないことだってことだけは理解できたわ。

「愛子ちゃん、わらわも家主殿についていきたいぞ」

「ヤスヒトメ 耶麻和姫さんはだめですって！」

うちの学校霊生徒がおびえます！

関東八州一円の鬼族を纏める姫様なんつう存在がうろつろしない  
でくださいってば！

「愛子ちゃんもうるさいのお。娑婆鬼シャパンニだって自由に遊んでるじゃない  
ーい」

格が違いますって。

あっちは、いわば会社社長一族。

姫様は天皇陛下。

まったく別物です。

「ううう、忠夫の所にくれば、もうちと遊べると思っただんじゃがの  
お」

十分遊んでるでしょうに。

まったく鬼は遊び好きだなあ・・・。

「ところで、愛子ちゃん」

「何ですか、姫」

「この、忠夫がいつぱい載ってる写真集はなんじゃ？」

「ああ、これはですね・・・」

一応、今までの世界情勢を簡単に説明すると、大いに感心する耶麻和姫。  
麻和姫。

「さすが忠夫殿。うーむ、これなら父上も安心して我を嫁に出せるな」

「姫、姫、それはだめですよ?」

「なぜじゃ、愛子ちゃん」

「・・・虎視眈々とそれを狙うものたちは、三界を通じて五万とおりますし、無視して抜け駆けをすると、神魔連合軍に押しつぶされますよ?」

「まじか?」

「まじです」

がつくり肩を落とす耶麻和姫。

まあ、ね、横島君の自由意志は別らしいから、そのへんにアプローチしましょう、お互い。

「うむ、愛子ちゃんは頼りになるのお。どうじゃ、我と共同戦線を張らぬか?」

「と、なりますと、ミイさんとも組むことになりますよ?」

「なんと、さすが未亡人、早いのお」

うんうん、とうなずく耶麻和姫様でした。

母親として、息子の立ち回りのうまさを大いにほめる電話をしたところ、結構かわいい声の女の子が電話に出た。

なんでも、GS事務所を設立する前に秘書部署を立ち上げたというのだから笑うしかない。

もちろん、専門部署を作らないとメンドクさいほど学業を圧迫しているのだろう。

学業の時間を買うというわけではないのだろうけど、それでも学生という時間を大切に思っていてくれるのが親としてうれしい。

電話口の笹倉さんは、日独英、あとはフランス語とロシア語を少々という才女で、少し鍛えれば一流企業の秘書でもやっていけるほどの女性だった。

そのことで「忠夫がいやになれば、その道を紹介できるわよ？」と言ったところ、にこやかに今の職場を気に入っているので、誘いはうれしいが断る、と返答してきた。

如才無い言い回しで、本当にもったいないと思ってしまう。

まあ、若いウチに「イケイケ」でいくと、こういう人材が集まるって言うのが「うち」「らしいので、いいんだけど。

笹倉さんが電話を転送したのだろう、数十秒の後、忠夫につながった。

音の反響からすると、まだ学校にいたようだった。

「悪かったわね、学校の時間に」

「いいやって、お袋藻なんか用があったんやろ？」

「んー？ ああ、今回の立ち回りが見事だったんで、誉めてつかわすって電話よ」

私の言葉に息子は軽く笑った。

「なんやそれ。でもありがとな、お袋。心配してくれてんやろ？」  
「そりゃそうよ。かわいい息子のことだもの」

うん、ありがと。

息子との会話もずいぶん穏やかになったものだ。

本人は知られていないと思っっているであろう苦しみを背負ってから、息子は急激に大きくなったものだ。

とはいえ……

「ちゃんとタマモの面倒はみてる？」

「あー、最近イージーかもしれん。せやけど粗末に扱ってる気はないで？」

「……この前、電話口で沈んでたから、ちゃんと話し聞いてやるんやで？」

「うん、かーちゃん、あんがとな」

たとえ巨万の富を得ようとも、たとえ世界の敵になろうとも、我が息子は自慢の息子だ。

今この瞬間、そう自信を持っていえる事実を噛みしめるわたしだった。

### 第三十三話（後書き）

三本目でした。

本日の連続アップは以上です

・・・おまげがあるかもw

第三十四話 コメリカ事件決着（前書き）

連続アップが三本といていながら四本目がある不思議 W

### 第三十四話 コメリカ事件決着

湯上さんからの電話。

コメリカ駐日大使から今回の騒動の釈明と謝意の面会がしたいという話があったそうだ。

一個人へという形だと格好が付かないので、GS協会とオカルトGメンがその窓口になるそうだけど、実際は個人面談だそうだ。

で、謝罪はいいし、釈明もいい。

そんな話はいいんだけど、実際の所・・・

「まだ敵なんですかねえ？」

「さあ？」

笑いを含んだやりとりの俺と湯上さん。

一応話として受ける方向で進めることにして、俺は俺で枯らす神父に渡りを付けてみると、乾いた笑いで受け止められた。

なんと、手持ちの運用資金が高騰しすぎてインサイダー取引を疑われたそうだ。

・・・正直すんません。

「・・・まあいいよ、横島君。で、この電話の用件は、あれだろ？」

「ええ、まあ」

「実はね、横島君個人宛で駐日大使以外の線からも面会を求められているんだよ」

「だれっすか？」

「この前のコメリカ内乱で軍と国民群衆双方のトップになったシュタイナー中佐とハインデルGSだ」

不意に、あのG3とGSの正面对局を思い出す。  
あの二人がなにを語り合ったかは、実の所伝わっていない。  
現場にいた人間の多くも全く教えてくれないそうだ。

かなり気になるなあ。

「じゃ、GS協会の応接間を借りていいですか？」

「いいが、うちの広報が絡むと思うよ？」

それはめんどくさいな・・・

じゃあ、美神さんに事務所の応接間を借りよう。

ま、あそこなら盗聴も盗撮もできないし。

「つつわけで、美神さんの事務所で、ということでもいいですか？」

「わかった、その方向で調整しておこう」

そんなわけで、美神さんには事後承諾だが、今回の裏側にも触れられるという事で納得してもらった。

「まったく、うちの従業員は勝手に大事を持つてくるわね」

「まあまあ、この騒ぎで資産を何倍にできたかはしりませんが、歴史の裏側つてのも嫌いじゃないでしょ？」

「・・・まあ、そのことには感謝してるわよ？ ふふふふ」

あ、何倍じゃねえな。

何十倍だ？

こえー・・・。

「で、おにいちゃん、私たちも聞いていいの？」

「せ、拙者も歴史の生き証人になりたいでござる」



「・・・えーっと、私もいいですよえ？」

タマシロに加えておキヌちゃんまで少し弱気。  
仕方ないけどな。

「もちろん、いいつすよね？」

「ええ。ただ、また襲撃とかあったらイヤだから、結界は万全にね」

「「「はい、了解」「」」

そんなわけで、正式な会合にはGS協会とオカルトGメンが伴った形で行われ、正式な記者会見では駐日大使と唐巢神父によって発表が行われた。

で、そのバックボーンで美神事務所へ二人のコメリカ人がやってきていた。

方々、コメリカのトップGS。

方々、コメリカ軍の精鋭兵。

そんな二人が、

うつくしい土下座をしていた。

「「ぜひとも、ぜひとも、我々をジエダ にしてください!!!」」

曰く、二人は病的なスターウーズのファンであり、自動攻撃衛星が日本から発売されたと聞いて、あらゆるコネを使って自分で買ったそうだ。

加えて「Gシリーズ」は、絶対に帝国兵バージョンが出るに違いないと妄想したそうで、出なければ自分でカスタマイズするしかないとまで自らを追いつめていたそうだ。

そんな最中、この夢のスターウーズセットを開発したGSが、自らの霊力でライセイバーを使っている事実を突き止めた二人。

絶対に、絶対に弟子入りしてジェダになつてみせるとまで思った次の瞬間、国から「コメリカの敵」と表明されてしまったのだ。

呆然とする二人の目の前で展開する最悪のシナリオ。

明らかに自らの夢を飲み込もうとする世界に絶望しつつ、周りに流されるままにいた二人が出会った。

達人は達人を知るといふ。

二人もまた、趣味の分野での達人であるとお互いを認めあった。

そして二人の意志は固まる。

「この手にライセイバーを手に入れるため、現行政府を打ち倒す！」と。

つまり、この二人の土下座は、今までの生きざまの中で趣旨一貫している行動なのだが、明らかに周囲からは浮いていた。

「ま、まあ、とにかく。まずは座ってください」

「いえ、いえ！ うんと言っていたくまでは！」「」

本気で困った横島は、そばにいたシロをみてニヤリと笑う。

「俺の霊能は特殊なので教えることはできませんが、種族でその力を高められている怪異がいます。それなら紹介できますよ？」

がばりと身を起こす二人。

「「そ、その種族は!？」」

「人狼。フェンリルの末裔です」

「「・・・!!」」

その名に聞き覚えがあつてか、二人は身を固めた。

「闇を背負い、そして世界をかみ砕くほどの力を持ちながらも光にいきる彼らを見れば、暗黒面とは無縁でいられるでしょう」

「「おおおおお」」

涙で俺の両手をとる二人へ、人狼の里への地図と大量のドッグフードを土産に持たせ、送り出したのだが、あんまりな会見内容にため息しか出てこなかった。

「事实は小説より奇なりつていうけど、本気で呆れたわね」

「さすがにウチの里を紹介するつていうのはどうかと思うのでござるよ?」

「いやー、シロねえ。多分絶妙な妙手だと思うわ」

「どういうこと、タマモちゃん?」

「だって、クリスチャンの二人が趣味のために人狼に頭を下げにいったのよ? わりと事件になりそうでそのまま通ればコメリカ社会の柔軟性があがるんじゃない?」

「そんなこと考えたらんかったけどなあ」

まあ、一応、美神さんも妙手という見解に賛成だそうだ。

俺的には、向こうのGSにも怪異と仲良くなって欲しいかなあと  
いう気持ちだったただけなだけどね。

数ヶ月後、人狼の里から帰ってきた二人のコメリカ人は、見るも無惨な「インチキ日本人（江戸版）」になって帰ってきていた。

霊波刀を完全に使えるようになっていたが、スターウーズマニアの見る影もなく、自称「真の武士」になってしまっていた。

正直すまんかった。

帰化申請をしたと言って言うなら、こつちで事務手続きしておくからな。

「なんと、さすが横島殿。実にありがたい」

「さすが武士の中の武士たる横島殿だ」

どつという評判なんだよ、俺。

### 第三十四話 コメリカ事件決着（後書き）

シロを連れ出している関係で、人狼の里へ経済救済をしている横島。実際は、シロの里帰りのときにお土産を持たせているだけだが、実はこれがかかなり感謝されている、てな裏がある話でした。

というわけで、連続アップは本当にこれでおしまいw

### 第三十五話 コメリカ事件の裏側と・・・（前書き）

感想でご指摘がありました、会談の内容ですが、こんな感じで謝罪があつたという方向です。

あからさまっすねw

### 第三十五話 コメリカ事件の裏側と・・・

話は、コメリカ人を人狼の里に送り出したあたりまで戻ります。

）コメリカ事件決着の裏

今回の謝罪は次の内容で行われる。

1．「コメリカの敵」宣言に行われた横島忠夫GSに対する敵の認定を撤回し、国家が個人に対して行った行為としては常識外の行為であったことを公式に認め謝罪を世界に対して表明する。あわせ、謝罪の意味を込め、XXXUSDルの支払いを行う。

2．コメリカは横島忠夫GSに対して最大の謝意を示すため、以下の提案を行う。

- 1) コメリカ国内への企業設立を無償化
- 2) コメリカ国内への輸出入を無関税化
- 3) コメリカ国内口座開設の際、ペイオフ非対象化
- 4) コメリカ国内株式取引の際の手数料無料化
- 5) コメリカ国内及び関連同盟国での、横島忠夫名義のオカルトパテントの完全保護

以上の完遂をコメリカの名において完遂する。

3．以上の謝意をもって、当国の過ちの謝罪とさせていただきますようお願いする。

）

つつ内容やったんや。

と、大ざっぱにピートに説明すると、顎がはずれるほど開いてた。

「事実上、アメリカ経済をどうにでもできるってことじゃないですか」

「逆に、ごめんなさいするから、経済混乱を助けてくださいつうことだ」

「あ……」

なるほど、と顎をさするピート。

まあ、この条件が来ている時点で、こっちは何もしなくてもいいんだけど、日本国内のいろんな企業が「合同会社を作りましょう！」と鼻息が荒い。

合意内容なんか漏らしちゃいねえんだけど。

やっぱ、国内官僚の掃除がまだ足りないっぽい気がする。

とはいえ、俺がどうこうする問題じゃねえけど。

まあ、お袋たちには迷惑かけてるから、なんか会社を設立するのは良いけど、やっぱ武器とかはイヤだよなあ。

「しっかし、横島さん。本気でGSですか？」

「GS助手だけど？」

「……」

胡散臭い者を見る目のピート。

しゃあないやん、俺だって、こんな騒ぎになるとは思ってたかったし、ここまでアメリカがあらゆるさまな事を仕掛けて来るとは思ってたかったんやから。



でも、まあ、あめちゃんの一部は使わせてもらっけどな。

「一部って何ですか？」

「ん？ 企業設立」

「・・・で、何を売るんですか？」

「何も売らん。赤字しかでない会社を作る」

「は？」

敢えて言うなら「イメージを売る」会社。

ま、ピートならわかると思う会社。

その名も「唐巢GSサービス」。

もちろん、神父を社長に据える訳じゃなくて、唐巢神父の活動をそのまま会社にしてしまおうというもの。

給料安くて危険がある職場。

で、料金が激安。

「そんなの、コメリカで受け入れられると思うんですか？」

「受け入れられると思うけどな」

なにせ、会社の標準装備は外見改造型「G3」と「ファンネル」だもん。

これに今開発中の改造神通棍を追加すれば、アホみたいに社員が集まるぞ？

あと、劣化精霊石製の精霊力マシンガン。

「まさか・・・」

「そ、帝国軍とかドロイドとか、そんな外見」

「うわぁ・・・」

顔を手で覆うピート。

でも、「うわ、確かに成功しそう」という顔になってる。

採算が合うように運営することも可能なんだけど、実際のところGSの行為自体を社会貢献として受け入れさせるのが目的なので、俺の持ち出しでも問題ないと考えてる。

つつか、あっちつて、土着の神の力とか支配が弱いから、単純な悪霊でも結構力があるんだよなあ。

で、翌日、このことを唐巢神父に相談したところ、「是非とも私にも協力させてくれたまえ！」と鼻息荒く、アメリカのGS協会やオカルトGメンに掛け合ってくれることになった。

神父が各方面に確認のための事情のやりとりをしたところ、向こうでも「宗教的壁」が厚く、活動に難渋しているそうで、逆に「いつから活動するのか」とか「何年計画か」とか「おれもベイダーになりたい」とか問い合わせが殺到しているとか。  
んー、さすがアメリカ。

そんなわけで、謝意における条約締結後、会社を早々に設立することにした。

で、いろいろとある問い合わせの中で、実は中東各国やイスラム社会からの熱いラブコールが多いのが辛い。

何しろ向こうさんは世界相手にエネルギーを左右している国で、

最大消費国であるアメリカをかなり嫌っている。

そんな産油国が、アメリカの敵となってさらに打ち勝ったと見られる個人を放置するかというと、まあ、なんだ、恐ろしい。

あまり無体に断っていると逆にキレられるかもしれないというのが政府関係者の泣きで、一度は訪問してくれないだろうかと外務省関係者が菓子折り付きでやって来たぐらいだった。

「精霊石の産出国に石油産出国。横島君のコネはどんな広がりになるのかしらねえ？」

「美神さん、助けてください」

「むり、というか、もう少しかき混ぜて。結構そついう動きがあるだけで、世界経済って回るのよ？」

先の世界瞬間同時不況の責任をとれという話らしい。

「なんなら、第一夫人候補で同行してあげてもいいわよ？」

「くくくぶつ！」

思わず俺どころかシロタマキ又で吹き出してしまった。

「美神さん、からかわないでください」

「あら？ 結構本気なのに」

「・・・かなわねえなあ、もう」

「ふふふ」

面白そうに笑う美神さんだったが、実のところ使えるネタかもしれないと思っていた俺だった。

「（つうかよ、心眼。これで評判が逆転したら、アメリカカうれいだろうなあ・・・）」

「（今度は世界の敵宣言だろうなあ）」

「（じゃ、条件追加だな。再発した際は……ってな条項をいれと  
じっせ）」

「（うむ、いい判断だな）」

で、誰を妻として連れていくの？

「タマモ、なんでそれで行くと決め手るんや？」

だって、お兄ちゃん、いい案だって思ったでしょ？

そんな私の問いに、苦笑いのお兄ちゃん。最近私はふたりっき  
りの時でも「お兄ちゃん」と呼んでいる。

まあ、ボロが出ないように、ということに納得してもらってる。

「まあ、権力持ちでコネいっぱいな女の人に行きしてもらおうかと  
は思っとなるけどな」

権力、コネ、……美神じゃないわね。

あのひとはアングラだし。

同じ意味でエミさんもダメ。

違う意味で冥子姉さんもだめ。

誰連れてくのかしら？

「六道冥那当主とうちの両親とタマモ」



第三十五話 コメリカ事件の裏側と・・・（後書き）

ついていける怪異って結構少ないんじゃないかと思います。

行き先に自分の大元になる存在がある場合なんかは別でしょうけど。

### 第三十六話（前書き）

偽者様の感想ご指摘を組み込みました。

直接的な返信は今中止していますが、作品で細々と反映させていた  
だきたいと思います。

## 第三十六話

「おとーさん、おかーさん」

「タマモー！」

中東某国の国際空港で、片や日本便、片やロンドン便の乗客が合流した。

どうやら両親は、早く移動したくて何故かロンドン経由できたとか。

詳細不明。

まるでアメリカのホームドラマのようにタマモを抱き上げてくる回る親父とその隣でほほえむお袋。

やべえ、絶対にイメージ戦略決め手やがる。

つつわけで、俺も参加。

「お袋、お久しぶり」

「息子、久しぶりね」

にこやかな笑みで俺とお袋が握手すると、何故かすごい勢いでフラッシュが焚かれた。

なんじゃらほい、と周囲をみると、髭面の男性がにこやかな笑みで握手を求めてきた。

どこかで見ただことある感じのコメリカ人。  
だれだったかな？

「タダオ・ヨコシマ！ 今度僕の映画のスポンサーになってくれる



そうじゃないか！ 任せてくれたまえ、最高のリメイクにしてみせるよー！！」

だ、だれやー！

「ははは、ジョージ。息子が困ってる。君は有名女優でも有名歌手でもないんだ。名前と顔ぐらい売っておいておいた方がいいんじゃないかな？」

タマモをおろした親父が、コメリカ人男性の肩をたたく。

・・・ん？ ジョージってまさか・・・

「ああ、すまんすまん、初めまして、タダオ。僕はジョージ・カス。君のお父さんの紹介で、是非とも着手したかった映画のリメイクを手がけられることになったんだ！！」

・・・まさか、星間戦争のあれっすか？

「そうそう、あれだよ！ そこでお願いがあるんだがね。あの、君のG3だっけ？使わせてもらえないかなあ？」

・・・おふくろ。

「ん？ ああ、おまえの起業計画の情報があってね、ジョージに話したら、じゃあ初仕事はウチに派遣してもらおうって話だよ？」

・・・

「ああ、肖像権？ 著作権？ 任せてくれ、契約書に盛り込んでみせるから」

なんだろう、俺の周りには優秀な人ばかりで軽々しい冗談が言えません。

「ところで、君の妹さん、女優業に興味ないかな？」

「ガーーーーー！ ショービジネスなんていう世界にかわいい妹を流せるかあー！」

コメリ力嫌いな方々も、映画は別らしくて監督は歓迎されていた。加えて「今度の新作は、彼がスポンサーだ！」と声を高らかに発表しやがったもんだから、地元記者が盛り上がりまくりやがった。

何とも迷惑な話だ。

とはいえ、密かに「あ、やべ、著作権交渉どうすつかない」と考えていた外見改造型G3の件は一気に解決してしまい、逆に監督からアクションシーンへのオファーが来てしまったぐらいだった。

そんな目くらましが効いてか、対コメリ力経済戦争勝利者のなクローズアップはされておらず、超助かった。

が、国王・王族関係者のみのレセプションとなると話が変わる。

向こうさんはすでに話したい内容が決まっているし、要求する内容も差し出す内容も決まっている。

まあ、外交なんてそんなものだ。

で、要求の一端はたぶん合弁会社の設立だろうな。

未だ混乱するコメリ力経済を裏から牛耳ればウハウハというのが王権族の考えそうなこと。

どこまでも封建社会。

そんな風に思っている俺がいました。  
が、現実はまだ少し斜め上だった。

「はあ？ 嫁？」

「そうです、あなたの嫁もしくは側室に我が妹を差し出したい。かわりにあなたの妹を私の息子の第一夫人にほしい」

瞬間、真っ赤になった忠夫だったが、どうにか自制した。

「見ず知らずの存在と婚姻した上に、最愛の妹をとられる。私にとつて呑みかねる話だ」

そういい放つて席を立つた忠夫に、数十本の剣が向けられた。もちろん、そんなものに怯む息子じゃない。

「やめぬか！！」

一括されて剣を向けていた男たちは武器を納める。

「・・・今度は中東が俺を敵宣言するんすか？」

「い、いや！！ そんなことはない。ただ、もう少し冷静に考えてほしい。我々と縁を結ぶことは・・・」

「損得で妹を売りに出せ？ 輸出品目に妹の欄はないですよ？」

「現在の家長であるソナタが言えば、妹君も従うだろう」

「前提条件が違いますよ。あなたは妹交換がしたい。俺はしたくない。基本合意がないのに何故進める？ 俺をバカにしているのか？」

徐々に顔がこわばってくる忠夫に向かって、視線を向けていたムッセーラ王子が、助けを求めるようにこちらを見始めた。

が、そんな話は全く受けてないので、速攻却下。

「・・・もしかすると、私の勘違いでなければ、あなたは私たちの味方になってくれないのですか？」

実に婉曲な表現だが、これにイエスといえ、自ら敵宣言をしたようなものだ。

「何かの要請があれば、条件次第で手を貸すこともあります。しかし、親戚だからだとか娘婿だからだとか、そんな血族の力で首輪をかけようとしている老人たちの計略には興味ありません」

ぱちっ、と言い切った忠夫を、王子は眩しいものを見るように目を細めた。

「タダオ・ヨコシマGS。私はあなたに大変失礼な申し入れをしていたのですな」

「それに気づいていただいたなら、まずは握手から始めましょう」

二人の握手。

それは意図された関係ではないが、それ以上の関係が結ばれた瞬間であったと関係者は語る。

「・・・とまあ、堅い話は別にして、本当に妹さんを第一夫人に、  
というわけにはいきませんか？」

「あんななあ」

「いやいや、そうではなくてですな、年の頃といい、麗しい見た目  
といい、王族にふさわしい方ですからなあ・・・」

・・・そりゃ、傾国傾城だからねえ。

ところで、バカ旦那。

そばにいた娘っこのケツ撫でてたのは見えてたからね、覚悟「死」  
な。

まったく、横島君はむちゃくちゃだわ。

学校をさぼらせて中東までつれてきて、挙げ句の果てには王族の  
方々の相手しろ？

私はただの妖怪、机妖怪、九十九神、なんの力もないのに！！

そんな風に思っけていても、横島君が「頼む」とか言つと聞いてし  
まう。

はあ、なんだかうまく扱われてる気がするなあ。

「愛子ちゃん、すねないでね」

六道夫人が王族夫人たちといろいろと話を進めている間、私は王族の子供たちを自分の中の校舎に案内したり、校舎内の視聴覚室で勉強させたりしていました。

はじめは驚いていた子供たちも、駆け回ったり笑いあったりして楽しんでいきます。

「ミス愛子。きみはすばらしい能力者だね」

一人の少年が、にこやかな笑みで話しかけてきました。  
少女たちも口々にほめてくれますが、悪い気はしませんでした。

「どうだろう、僕と婚約しないか？」

「ずるい、僕こそふさわしい！」

なんだかモテ期が来たみたいですが、相手は子供、スルーしないと国際問題ですもの。

やばいやばい。

「あのね、私の本性は、古い机。子供も産めないの。ごめんね」

私のせりふに泣いっぱいの女の子たちが集まってきました。

「兄様たちは最低です！！」「女性にこんな事を言わせるなんて！

！」「女性を娶る資格ありません！！」

ふるぽっこ。

いやあ、なんというか、台詞間違えたかしら？

このあと、王族の女子部がみんな集まって私を守るようにしてくれたのが更に嬉しかった。

少年たちよ、女子を怒らせちゃダメだよ？

とりあえず、表向きの交流はうまくいった。

何しろ愛子、王族の子供に大人気で、是非とも姉になってくださ  
いとか縫りつかれてる。

その扱いもなれたものらしく、にこやかに対応していた。

クラスみんなにもお土産を買ったみたいだけど、愛子空間に放  
り込んで免税つうのはどうかと思うぞ？

「ふふふ、特技よ特技」

まあいいけど。

そういえばアメリカ国内の起業許可も速攻できたらしいし、向こ  
うのトップになる人間を選定するかな？

### 第三十六話（後書き）

というわけで、同行怪異は「愛子」でした。

全く意外性はないですが、逆にありがちなあ、とか思います。

愛子空間税関ですが、じつは持ち込み荷物の重量軽減に協力したという事で、王族からの免除許可が出ています。

だから違法ではないのですが、横島君は知りませんw



## 第三十七話（前書き）

momonoki様の感想からアイデアを頂きました。

### 第三十七話

二度と帰ることはないだろうと思っていた母国に帰ってきた二人は拳を打ち合わせた。

「いくでござるよ?」「負けないでござるよ?」

二人はにこやかに微笑んで目的地に向かった。

一人は東、一人は西。

各の最初の本拠地おのこのへ向かうために。

彼らの背中には「GSクロウサービス」と書かれていて、さらには違う書体でこう追記されていた。

西にゆく男の背中には「コメリカン」

東にゆく男の背中には「合衆国」

どんな差があるかはわからなかったが、物々しさは伝わった。

西海岸のGSに大きな衝撃が広がった。

かの有名GSが新しい会社を興したというのだ。

その名も「GSクロウサービス」

非常に手広く、非常に素早く。

その反応の早さはピザデリバリーピザのようだという。

加えて徹底的なダンピング価格。

あきらかに業界暗黙の了解を大きく破る内容だったため、幾人もGSが抗議にやってきたが、帰りは夢見心地で帰っていった。

そして数日のうちにその会社に参加する書類を持ち込んで、企業

が持つ研修センターにスキップで向かった。  
彼らをそこまで引きつけるものは何か？  
それは主要装備にあったらう。

攻撃自動衛生「ファンネル」  
改良型神通棍「ライ セイバー」  
そして防護呪術衣。

それは明らかに「ジエダ」であった。

コメリカ男子だった彼らにとつての憧れの装備であった。  
誰もが映画館に通いつめ、だれもがその格好を試したといつて過  
言ではない。「それ」を現実の実際の装備として扱う仕事。

給料が安い？ 仕事がつつい？  
当たり前なのだ、なにしろ「ジエ イ」なんだから！！

そんな格好で活躍する彼らを見て、心から共感した元少年たちも、  
雪崩をうって参加を表明する。

そう、純粹な正義の味方。  
胸を張ってそういえる存在に、自分はなれるんだ、と。

実は衝撃が走ったのは西海岸ばかりじゃなかった。

東側、NYでも衝撃があった。

こちらでも開設されたGSクロウサービスであったが、こっちは  
こっちで主要装備がやばかった。

攻撃自動衛生「ファンネル」

劣化精霊石マシンガン「ビームガン」

そして精霊石式強化服「G3」

準備された強化服はいくつかの種類があり、指揮官は黒、通常職員は白になっていた。

外見も通常の「G3」ではなく、明らかに改造が加わっている。それも、ある種の人間に好ましい形で。

そんな騒ぎのNYを、指揮官モデルが闊歩する。

で、そんな指揮官モデルを目をきらきらさせて追ってくる「元少年」たち。

ずいぶんと濁ったハメルンの笛吹男であった。

指揮官モデルが歩いていった先にあつたビルには綺麗な看板があつた。

「GSクロウサービス・合衆国」

絶対に「帝国」だと頑なに信じる男たち。

「さて諸君、この国のオカルトの扱いに不満はないかね？」

指揮官モデルの言うことに同調したのは何人か。

「私は大いに不満だね。しかし、人の意識というものは早々に変わらない。そこで我々「GSクロウサービス・帝国、いや合衆国」は・・・」

絶対にわざとだ、わざと間違えたんだ。  
誰もが確信していた。

「・・・以上からオカルトの地位向上と霊的な防衛を目指し、地域制圧、ではなく地域安全をめざしている」

やばい、制圧の方が似合う格好だ。  
誰もが魂を引かれていた。

「そんなGSクロウサービスに参加してくれる勇者を求めている。  
我らとともに戦ってくれるものたちを」

熱に浮かされた男たちは、雪崩をうって参加していった。  
指揮官モデルの部下になれる、ヒヤッホーと。

東西に分かれて開かれた「GSクロウサービス支店」は、コメリ  
カ中央部に向けて猛烈な勢いで出店ラッシュを始めた。

町の警察施設よりも多いという勢いで。  
もちろん、出店前には地域住民との会合が開かれるが、反対意見  
はほとんどなかった。

何しろ、アメリカの新たなSF神話ともいえる「映画」が元ネタ  
の格好だし、更に言えば、企業資本が映画監督と組んでリメイク版  
の制作までしているという。

巨大なお遊びの中にあるような感じさえ覚えるが、実際のところ、  
急落した経済へのカンフルになると言うことで、どの町でも受け入

れられていった。

受け入れられる要因の一つとして、GSクラウドサービスが事務所  
出店する際は、必ず地元建設業者に依頼する形でビルを新設する  
からだという話がある。

通常の事務装備やクリーニングサービス、そして衣食に関しても  
地元からの供給に依存する形が基本になっている。

もちろん、供給量が村の総量を下回る地域には支店が逆に供給販  
売元請けとして機能し、地元商店に品物を卸すことすらしている。

地域にあつた地域活性化を行う、アメリカの正義を体現したかの  
ような企業姿勢は、大いに評価されていたが、アナリストは酷く批  
判的だった。

なにいる「GSクラウドサービス」、どう計算しても全く利益がで  
ない料金体系なのだ。

精密な計算をしても、楽観的な計算をしても、どうしても年間利  
益が二千万ドルほど赤字になる計算なのだ。

そんな企業が運営してゆけるはずがない、と唾を飛ばして拳を握  
りしめた。

企業追求番組でも大批判であつたが、東西の支社長たちはにこや  
かに笑つていった。

「我々が行っているのは企業活動の形態をしているだけで、実施に  
は違つていける」

「利益がないからといってサービス低下がないのはご存じの通りで  
いける」

「ならば、なにをもって駆り立てられているのか？」

「簡単でござるよ。情熱を燃料に、純粹さを個性に、童心を柱に、  
でいける」

そんな二人にキャスターは意地悪そうな顔で聞く。

「SWごっこで遊んでいる大人を、こどもはどうみているでしょうね？」と。

が、二人は笑顔のままであった。

「ペーパームーンも、手に取らなければ本物でござるよ？」

「格好と心、そして実際の行いまでが全部本物のなのに、ごっここと笑うのでござるか？」

笑顔であつたにも関わらず、キャスターはその場で失神したといふ。

本来であれば、激昂する二人からいろいろと意地悪な内容を引き出すはずであつたキャスターであつたが、失神という失態で番組から降板されることになった。

そして二人の支社長は、胸くその悪い司会者へ一撃を加えたということで、同じような目に遭わされた新進気鋭の企業オーナーたちからの称賛を受けることになったのであつた。

そんな報告を、俺は芦田ん家で聞いていた。

笹倉さんからの転送電話で、アメリカで偽侍が大暴れしているとの話だつた。

赤字もガンガン増えている代わりに、オカルト業への不審もガンガン落ちていくそうさ。

ま、いい感じで頑張ってくれればいいさ。

「ヨコシマ、忙しいのにごめんね？」

「ええって、ルシオラ。こういうのって電話だとうまく説明できねーし」

パピリオ用のヨコシマンスーツの研究開発が行き詰まったという話だったので、遊びに来たついでに相談に乗っていた。

最近、でっかい話が多すぎて、こういう心休まる話が少ないのが困る。

「・・・ふうーん、カードスラッシュ、ね」

「実際は自分のやりたいことを意図的にカードを引くときに情報転写するんだけど、あたかも自分の意志でカードフォルダーから任意のカードが引けたように見えるつつ感じで・・・」

「あ、それ面白いわね。相手にも結構な絶望感が味あわされるだろうし」

「そうそう、でな・・・」

ルシオラと、こんな安らかな時間を過ごせるといつ時点で、俺は幸せなんだろうと思う。

たとえば、俺の胸の内にいる彼女とは違う存在だとしても、どこかでつながっている、そんな気がしていた。

「あ、じゃあ、こんな感じはどうかしら？」

携帯電話を模した変身システム。

番号入力で展開される必殺技。

オプションパーツの追加。

そして支援システム。

やべ、格好いい！



「いいな、いいなこれ！」  
「でしょでしょ！…！」

思わず盛り上がる俺らの後ろで、パピリオは胸を張る。

「もちろん、一号機にはパピが乗るでちゅ」  
「え？」

一号機？ 乗る？ 着るんじゃない？

「だってこれ、絶対全高14mぐらいあるでちゅよ？」  
「……あ」

いつのまにか、ライーがガンダ になっていた。  
おかしいなあ？  
でも作れそうなのが恐ろしい。

「ヨコシマ、ちょっと作ってみない？」  
「……興味あるなあ……」

ガン ムは無理でも、レイバ は行けそうだもんなあ……。

「でもこれ、GSの仕事ちゃうよな？」  
「テレサシリーズ売ってる時点で、GSじゃないでしょ？」  
「そうやなあ、そうかもしれんなあ……」

なんとなくだけど、近いうちに作ってしまう気がする俺だった。  
大阪の下町あたりで起業するかなあ？

### 第三十七話（後書き）

GSクラウドサービス⇨GSカラスサービス>GS唐巢サービス、と  
こななかんじです。

勿論、「GS苦勞サービス」なんて言霊も仕込まれていますw

東京生活の長い横島ですが、魂の属性は関西人です。

大阪を盛り上げるといふ気持ちに嘘はありません。

・・・夏子フラグか？w



### 第三十八話

すでに、美神除霊事務所が休憩所替わりになりつつある。

俺にとってもそうなんだけど、美神さんも副業が恐ろしいまでに膨らんで、それを管理する会社まで作らざる得なくなったほどだった。

いたしかたなく、利殖は俺と同じ投資グループに預けていて、かなり好調らしい。

で、思い出したかのように除霊に行くんだけど、10件中6件で自主成仏が起きてしまう。

出費がなくていいことなんだけど、結構美神さんも欲求不満気味だったりする。

「テレサー、今日の予定は？」

「本日は依頼が入っておりません」

「ぶう……」

「ですので、除霊以外のお仕事を入れてみては？」

「取材なんてもう懲り懲りよ」

「わかりました」

てな感じだった。

「横島くん、なんか面白いネタ無いの？」

「そうっすね、最近除霊ゴッコが子供に蔓延してて、近所の幽霊さんたちが迷惑してるとか……」

「あ、私も結構聞きますよ、それ」

おキ又ちゃんの幽霊ネットワークは未だ健在らしい。

「踊るGSに横島GS、ね。ちょっと啓蒙活動した方がいいんじゃない？」

「それって、俺のせいっすか？」

「さすがに直接は来ないだろうけど、それなりに問題になると思うわ」

「そつつすねえ・・・」

生兵法はけがの元、で済めばいい。

しかしGSという仕事は直接的な生死が絡んでいる。

遊び、とはいわないけど、生半可な覚悟で関わっていい問題じゃない。

もちろん、我が身を振り返ってみるけど、それはそれ、これはこれ、だ。

「でも、結構オカルト融和型の活動してるんですけどねえ」

「やっぱりほら、派生してるオカルトドラマが勧善懲悪じゃない？」

「あー、まあ、そつつすね」

踊るGSの成功に当て込んだ他局の番組が、当初の踊るGS風の出来だったりするのがよくないらしい。

派手な技と霊能を特殊効果やCGで更に派手にしている演出で、GS協会からは推奨を得られない出来だった。

だからって、美神事務所に金積んで協賛を依頼にくるなつつうの。

先日も某元演歌歌手であるという芸能界の大御所が現れて、自分の娘が出演しているドラマの協賛をしろとか学校に乗り込んできて命令しやがった。

あまりのことに思考停止してる俺の前で、下品な笑い声をあげていた男に向かって取り合えず聞いてみた。

「おっさん、だれ？」

瞬間、周囲は真っ白になったが、男は真っ赤になった。

「き、き、きさま、ワシを知らんというのかぁ！」

「誰でもいいけどさ、学校って一種の治外法権だけど、不法侵入者があれば警察って結構簡単に入ってくるんだぜ？」

「なにをいう、ワシが不審者だと！？　ワシがどれだけ財界に繋がっているかも知らん小僧が、思い上がるな！！！」

で、十数人の制服警官がきたところで、

「この無礼な小僧を逮捕してくれ、罪状は侮辱罪だ、告訴はすぐするから送検しろ！！！」

胸を張り、尊大に言い放つ男であったが、警官たちが取り押さえたのは尊大な男の方だった。

「な、なにをする！！　私を誰だと思っているんだぁ！！！！」

しらんがな。

とつぶやいた俺の言葉が聞こえたかどうかは知らん。

後で聞いた話では、その元大物演歌歌手は契約会社から契約が切られ、娘からも絶縁を言い渡されたとか。

なにがしたかったのか、全く不明だった。

それはさておき。

「やっぱ勘違いはどうかしないとまずいっすね」

「そうね、主に自分たちの平和のために」

「もう、美神さんも横島さんも、すぐに悪ぶるんですから」

おキ又ちゃん、善意で行動するほど悪辣な人間ではないのですよ、俺たちは。

間に合ったと思いたい。

それは悲痛な関係者の声だったかもしれない。

オカルトGメンと共同で地域巡回し、GS行為の物真似がいかに危険かとか、PTAなどからの押さえ込みがどうにか浸透してきたときにそれは起きた。

雑霊の暴走とそれに巻き込まれた少年の大げが。

世論は一気に反オカルトに流れそうになっていたところで、ある雑誌社がある記事を発表した。

それは日本オカルトGメンの活動であり、それに協賛する民間GSが行っていた啓蒙活動であった。

危険であることが解っているから、命に関わることであることが解っているからこそその活動が地味に行われていたことを紹介した記事であった。

が、この記事を無視するがごとくに人権屋たちは、オカルト関係者を討論番組で糾弾したが、番組に引き出されたGS協会会長はに

こやかに質問した。

「・・・そこまで危険性を理解していて、さらには対策まで発案できるほどの知識をお持ちのあなた方は、今まで何をなさっていたのですか？ 事件が起きるまで、自分が注目されるまで、虎視眈々と機会を伺っていたのではないですか？」

あまりに鋭角な意見に言葉を失った人権屋であったが、事件を防止できなかったことをあげつらい言葉を連ねた。

が、余りに醜い、あまりに聞くに値しない暴言の数々に、TV局の電話回線は抗議の電話で溢れ、放映を中止せざる得なくなった。

局としては、自局のドラマへの協賛をしなかったGS協会への意趣返しを行うはずだったが、この番組を放映した責任により局のトップが入れ替わらざる得なくなったことは皮肉な話だろう。

当初から素人GSの恐ろしさや危険性を公言していた「踊るGS」は、対照的に高い評価を得ることになった。

もとより細かな現場取材や考証に拘った作りだっただけに当たり前なのだが、GS協会ばかりか全国のPTAからも資料照会や事例照会があり、推奨の名を受けている。

それもこれも、当初から協力していただいている美神事務所のおかげです、という事で、プロデシューサーが菓子折を持ってやって



きた。

半眼の美神さん。

冷たい視線のおキヌちゃん。

無視状態のシロタマ。

そして針のムシロの銀ちゃん。

まあ、わかるぜ？

銀ちゃんの泣きは昨晚のうちに聞いてたし、プロデューサーに無理を言われているって知ってるし。

でもなあ、なんでこのプロデューサーは断られるって事を、髪の毛一筋すら疑っていないんだ？

「・・・というわけでして、我々としても、怪異と人間との橋渡しをとるという理念の元にですね、新たな映画をと・・・」

「で、金よこせ、と？」

「いやいやいや、そういう野暮な話ではなく手ですね、制作においてお知恵とお力をお借りしたく・・・」

「で、金よこせ、と」

「・・・あははははは」

真つ青になりつつも愛想笑いを絶やさなかったプロデューサーは、隣の銀ちゃんに視線を送る。

けど、銀ちゃんは逆に睨み返した。

「俺は、一言もはなさん、そうゆうたやる？」

「あ、あのだね近畿君・・・」

なんとか言い聞かせようとしたプロデューサーを強い視線で射ぬく銀ちゃん。

「あんな、所長さんやよこつちが、なぜ真剣に、なんで安い値段で協力してくれるところが協力者まで募ってくれるか考えたことあるか？」

「……」

「それはな、俺たちがGSの仕事を誤解無く真剣に取材してドラマ化してるからや」

「だ、だったら……」

「最後まで聞けや！」

一括した銀ちゃんは、俺たちに深々と頭を下げた。

「所長さん、よこつち、タマモ、シロちゃん、おキ又ちゃん、俺らのために時間を作ってくれてありがとな。でも、もう少しだけ使わせてくれや」

そういった銀ちゃんはプロデューサーに向き直った。

「所長さんたちがな命がけで経験した積み重ねを、弟子にだって経験させなくちゃ教えないような修行を何で俺らに見せたんや？ 金には換えられん貴重な情報つう宝物を何で見せてくれたんや？ それはな、テレビを通して一般の人たちを、俺たちを通して普通の人たちを守るためや。いうなればテレビを通してGS活動をしてくれていたんや。そんな善意に何も感じんで、その上金を出せなんてよく言えたもんや！ ここまで社会貢献してるGSに『文化貢献という社会貢献ができますよ？』なんてどの面下げていえたんや！」

すでにプロデューサーから笑みは消えていた。

残ったのは蒼白な顔だけ。

「これ以上、所長さんやよこつちに迷惑かけるなら、俺は「踊るG」  
S」降りるで」

「き、近畿君……」

「さ、聞いてほしいことは聞いてもらったし、これで失礼させてもらいます、所長さん」

「ん、了解よ、近畿君。いえ、堂本君かしら？ 事務所をクビになったら声をかけて。こっちで何とかするから」

「うっわ、めちゃくちゃ頼りにしてます！」

にこやかな笑みでプロデューサーの首根っこをつかんだ銀ちゃんが事務所からでていった。

「銀ちゃん、やるなあ」

「格好よかったですねえ」

「銀にい、結構頑張ったわね」

「それは、あとで直接銀ちゃんに言ったらね」

かくして、映画化は延期になったけど、このときの啖呵が漏れ伝わって、若手アイドルでは珍しく任侠映画から声がかかったのかなんだとか。

### 第三十八話（後書き）

なんだか、今回は説教回になってしまいました。  
つまらなくて御免なさい。

ただ、世の中の人の中の行動に意図とか意思というものがこめられているんだよ、ということを経験し作品内で表現しようと思っていたんですが、どうも稚拙になってしまいました。

### 第三十九話（前書き）

トレッカーにもフォローというご意見を頂きました、妄想してしまいましたw

とはいえ、トレッカーは艦隊戦ですので、GSとは相容れませんか？

### 第三十九話

湯上さん曰く、すごい量のエアメールが来てるそうだ。

出してる人間は違うし、DMではないんだけど、中身は同じらしい。

なんじゃろべ、と見てみると・・・

『トレッカーにも愛の手を』

てな内容。

俺は空想科学夢企業じゃねえ。

と、思わず学校で昼飯時にピートに聞いてしまった。

「トレッカーって何？」

「あー、SWよりも根強いSFファンですね」

「・・・あー、あれ？」

「そう、アレです」

ピートも結構好きらしい。

とはいえあれって・・・

「艦隊戦だろ？ GSちやうちゃん」

「今更ですね」

「そうですね、聞いた話じゃ、隠れてMS作ってるって噂ですし  
のお」

いやいや、個人戦闘がメインのGSっすからね？

移動基地はいいけど、戦闘鑑はまずいでしょ？

「つづか、どこから聞いた、タイガー。」

「アメリカの内需拡大になるって言えば、向こうさんは歓迎してくれると思いますよ?」

「動力が原子力じゃなくなるだけで、世界中で歓迎ですよ。」

「パナマも、スエズもおらねえって。」

「・・・あ? ああ、浮かないんですか?」

「横島さんのことじゃから、この前の魔族襲撃の時の空中戦艦みたいなのを作ると思っておったんじゃが・・・。」

「さすがに無理だ。」

「あれって、魔族が人力(?)で空中に支えていたみたいな構造だし。」

「検証はしてたんですね。」

「あたりめーだ。」

「しっかし、それじゃあ、格好が付かないですよ。」

「そうですね、あの形で半分水中に潜っているとみると、見栄えが悪いですね。」

「そっか? 確かに港にいるときは格好悪いけど、浮上式の水中船体を追加すれば、浮いて見えるだろうし、速度が出せれば遠回りも辞さんだろうし・・・。」

「それですよ! いやーさすが横島さん!」

って、ピートはSWよりトレックか？  
つつか、トレッカーか。

「・・・あははは、あちらは異種族融合の物語ですので・・・」  
「なるほどですじゃ」

納得の話だった。

逆に神父はSWだった。

世代的に直撃しているそうで、低予算でGシリーズがほしいみたいな話をされている。

改造は自分でするから、と。

・・・さすが本格的だ。直撃世代は違う。

G1でもあげたるか？

とはいえ、さすがに、ちよつとなあ？

「でも、横島さん。サイズに拘る必要ないんじゃないですか？ 個人所有可能な大きさのクルーザーを水中船体付きで開発すれば・・・」

「個人的には買いたい、と？」

「あはははは」

まあ、あの唐巢神父ですら「アレ」だし。

弟子のピートが「ソレ」なのも納得できるかな？

そんなこんなで、湯上さんにはテンプレの返事を書いてもらうことにした。

「実物大や戦時実用可能大での開発はしませんが、個人所有可能な



船体の開発計画はあります。ご賛同者を集めていただき、十分な利益になると解りましたら市場に情報を解放したいと思えます、くといふもの。

予想はしてたけど、この手紙の情報は世界規模で流出して、開発要望が恐ろしい勢いで集まることになった。

まあ、作るのは楽しいし、いいんだけどね。

小僧のおかげで実に楽しい毎日を送っている。

共に開発した霊具はもとより、実用品まで開発させてもらって、さらには無理難題まで注文されて、まったく開発者冥利に尽きる。

今回は、コメリカ映画に出てきた宇宙船の再現っぽい船の制作だそうだが、その技術がおもしろかった。

普段は大半が水中にあるのだが、高速移動を開始すると船体の大半が水面にでる。

それは本体よりも大きな浮力を支える水中船体があるからで、さらに高速移動をすると水中船体以外がすべて水面を越える。

試作船で撮影されたその様は、水中から飛び立つ様であり、高速移動する様は、まるで水面を走る宇宙船のようで、映像が世界に流れた瞬間、値段は何でもいいから売ってくれと言う注文が殺到した。

テレサ経由でも恐ろしい数がきていて、重複していない注文だけでもかなりの数になるだろう。

ここからは開発ではなく、製品化の分野なので、ワシ等の手からはなす事になるのだが、売り出される際のレセプションには呼ばれるそうさ。

面倒ごとは嫌いなのだが、な。

まあ、これも優秀なパトロンを持てた代価みたいなものじゃし、我慢するほかないかのぉ？

はじめに手紙を送ってきた集団が、権利者団体や諸問題を解決してくれたらしい。

そんなわけで、彼らには割引&第一ロットの引き渡しをしたところ、感謝の手紙が恐ろしい量キタ。

家族で楽しんでいます、とか、自主制作で2次映画をみんなで作っていますとか、所有者の会を作りましたとか。

まあ、楽しんでくれや、ということさ、テンプレ手紙制作を、再び。

と、そんな生活をしているところで、なぜか六道屋敷に美神さんと一緒に呼び出された。

なんじゃろべ？

芦田の正体がばれました。

神父、六道婦人兩名が腕を組んでいます。

ばれるの早かったなあー、と置いていたら、何となく美神さんが拳動不審。

まさか……

「あははは、ほら、横島君の使途不明金、結構な額だから調査しちゃって……」

美神さあーん。

まあ、美神さんもマサカ芦田がいるとは思わなかったんだろうけどね。

「で、横島君、説明してくれるかね？」

「資料だと、G3に相当する装備が、向こうにわたってるのよね？」

とはいえないなあ、何というか、問題ないんだけどなあ。

「どこがだね！ G3は既にオカルト装備における防御標準だぞ。

いわば、人界の宝具だ！ その情報が流れて、何の問題がないんだね！？」

いやだって、防御の弱いたつが装備するとどうなります？

「つよい防御力を全面に押しして、高い魔力で攻撃してくるに決まっ

てるじゃないか！」

じゃあ、攻撃力が弱い奴が着たら？

「高い防御力と高い攻撃力で……」

両方強い奴ははじめから着ない。

さて、ここで問題です。

みんなが防御も攻撃も強くなりました。

欲望に忠実な魔族はどんな攻撃をしてくるでしょう？

「つまり、はじめからイケイケな魔族が、なおさら脳筋になって扱  
いやすい、と……そういうことかい？」

頷く俺を見て、深々とため息をつく唐巢神父。

「横島君も、もう少しこちらを信用して、情報を流してほしいわ  
あ……」

よしっ、とっさに思いついたにや良い言い訳だ！

あとは、そのことに感づいてる美神さんと話をするだけだな、う  
ん。

### 第三十九話（後書き）

新進気鋭のGS、魔族と内通、マジスキャンダルなので、完全情報閉鎖がされています。

で、横島の言い訳が、漏れた先に浸透することになっています。

・・・やばい、言い訳のレベル超えてるw

次回20時予定

第四十話（前書き）

四姉妹会議 W

元ネタは本好きの3姉妹会議 W

## 第四十話

「とりあえず、納得しておいてあげる」

久々にボコボコにされました。

美神事務所に帰ってきて、何の詰問もなく神通棍でボコボコ。  
その上での台詞。

美神さん、いい女や。

「で、アシユ様とは長いの?」

「え、ええ、まあ……?」

というか、ソレよりも聞きたいのは、芦田をアシユ様と呼ぶって  
事は……

「ええ、結構記憶が戻ってるわ。まあ、高島殿と、前世の横島君と  
沿い遂げさせてくれた上に今生でも縁をつないでくれた恩人ですも  
の。さすがに責め立てるつもりはないわ」

うわぁ……。これからどうなるんだ。心眼えもーん!

『（それなりに情報開示しつつコントロールするほか無いだろう？）』

「（それしかねえかなあ？）」

一応、芦田との親交があることと、資金提供をしていること、あと霊具の開発で協力しあっていることなんかを説明した。

「突飛なものばかり作っていると思ったら、そんな所と繋がったのね」

「えーっと、基本的には俺とカオスだけで作ってるっすけど、ブレイクスルーには一役かってもらってるっすね」

ふーんと興味なさげに呟いた美神さんだったが、しばらくの沈黙の後、すつと視線を絡める。

「ね、今のアシユ様に会わせてもらってわけには、いかない？」

「とりあえず、今の娘の話を聞いてから判断するべきかと」

「娘？」

「ええ。メフィストタイプの娘が三体いるんですよ。で、次女が、この、そう、芦田に惚れてるんですけど、毎日「新しいアシユ様のだめなところを見つけた」って泣いてるんですよ」

「……」

沈痛な面もちの美神さん。

一応、これを言っていないと問題になる気がしたので言っておいた。

だって、メフィストの頃って、俺と、高島とそういう関係になる前って、アシユ様命のベスパみたいだったし。

「……心の整理がいたら教えるから、向こうと会わせてもらえ



るかしたら？」  
「わかりました」

芦田に連絡を取ると、超舞い上がった。

何せ、世代まで越えて離れていた長女の里帰りだ、嬉しくないわけがない。

平安の頃は、もう、ストーカーじゃねえ？ってぐらい遊びに来ては、孫を抱き上げたり曾孫を可愛がったりして、人に転化した娘の死に水までとつた程溺愛していたのだから嬉しいくない訳がない。  
もちろん、そんな芦田の姿を快く思っていないものもいる。

言うまでもなく、ベスパだ。

目に見えて浮かれている芦田を見て、こちらはあからさまに不機嫌だった。

「・・・アシユ様、格好悪い」

柱の陰でこんな事を言っているのが可愛いと思う俺は、歪んでるだろうか？

「そんなことないでちゅよ？ ベスパちゃんってば、嫉妬に身を焦がして可愛いでちゅ」

「・・・でも、ヨコシマ、いいの？」

ルシオラの懸念ももつとも。

でも、まあ、日本のオカルトトップにも、俺たちの付き合いは知られちゃったから、気にしないで良いよ、と笑ってみせる。

「え、？」

「ほら、芦田に出資してるじゃん、俺？ そのルートから芦田の正体が割れちゃってさ。」

「だ、大丈夫なの？」

「うん。一応、言い訳が通ったから」

とりあえず、強化服が中級以下の魔族に出回ることのメリットが今回の接触の根幹であるという説明をしたら、ルシオラは頭を抱えた。

「どしたの？」

「・・・ヨコシマ、その言い訳そのままの状態になりつつあるわよ？」

「うっわー、まじで脳筋だな」

「でも、パピには渡りに船でちゅー！」

つまり、謎のダークヒーローとして、魔族の強化服を倒してゆく、と？

「さすがヨコシマンでちゅー！ 判ってるのが嬉しいでちゅよー！」

ひゃっほーと浮かれるパピは、娘の帰還に浮かれる芦田と重なった。

「親子だな」

「親子ね」

「パピ、みつともない」

ついにベスパの暗い視線の矛先がパピにも！！  
まあ、浮かれすぎて両方が気にしてなんだけど。

「つうことは、スーツの調整を仕上げとかないといけない？」

「うん、手伝ってくれる？ ヨコシマ」

「おう、まかせとき」

なんだろう、ベスパの槍の様な視線がルシオラも見てるし。

んー、これと言って記憶にないんだが、すごく親近感のわく視線  
だよなあ。

なんやる？

文珠の「転・移」でやってきたそこは、暖かな空気に満たされた  
空間だった。

小さな八二ワたちがチラチラとこちらを見ているのは良いんだけど、それ以上に気になるのは、スーツの偉丈夫がハラハラ涙を流しながら両腕を広げている姿だろう。

・・・判ってる、判ってるわ、横島君。

あれが、「あれ」なのね。

信じたくなかったけど、信じざる得なかった。

だって、こんなにも魂が叫んでるんだもの。  
だから、私は拳を握りしめた。

つかつかと近寄ると、アシユ様はさらに涙を流した。

「おおお、帰ってきてくれたんだねえ……」

ふふふふ、そりゃ、戻ってくるわよ、戻ってこざるえないわよ。

「嫁に出して幾年月だっただろう、それでも娘は帰ってくる。父親としてこれ以上の感動は……」

だって……

「死に水つてのはそういう意味じゃないわー！」「ぶげらあー！」

このくそおやじ、どこから聞いたかしらないけど、死に水とかしたいとか言つて、息を引き取る間際の老体で……老体を……！！身動き一つできない老衰した体になんて事しやがったあ……！！

やべ、美神さん、乱舞だ。

詳細は魂の姉妹であるルシオラ達にしか明かされていないが、芦田の奴、結構洒落にならないことをしてたらしい。

あのベスパですらしばらく口もききたくないとか、別居が必要だとか言い始めたぐらいだから。

娘達に反抗期がキタと、泣きながらも、その実、成長を喜ぶマゾ魔族は置いておいて、美神さんに向き直った。

「もしかして、今回の用件終了つすか？」

「まさか、本題は緊急4姉妹会議よ」

ルシオラもうんうん頷いているんでアリかなあ、とおもったけど、しばらくして始まった美神さんとルシオラの取っ組み合いの喧嘩をみて、姉妹喧嘩は可愛いねえ、とか語ってる芦田の神経が判らん。

取り合えず、満足する結果、というか意見交換が終わったらしく、共に子供に見せられない手形で挨拶を交わした美神さんとルシオラだったけど、転移前にしきりと体をすり寄せてくるのは勘弁してほしかった。

辛抱たまらん一歩手前じゃい。

「ところで、美神さん。芦田にどんな死に水とられたんすか？」

「聞きたいの？ 死にたいの？」

美神さんの目が病んでる。



## 第四十話（後書き）

死に水つてのは、元々、息を引き取る前に看取る人がちよつとづつ口を湿らせて水を飲ませる行為だったと記憶します。

今では、死後でもあり、つて話だった気がします。

・・・前世の彼女が、どんな「死に水」をとられたのかは、私も命が惜しいので内緒です。

次回22時予定

## 第四十一話（前書き）

うちのGS世界は、かなりマニアに嬉しい世界になっています。

サイファイファン SFファン、というところでw



## 第四十一話

ニユースをみると、アメリカは最近サイファイファンの楽園だな、と思います。

町ではSWファンのGSが町の子悪党や悪霊を駆り立てているし、水辺ではトレッカーが「ほぼそれ」というボートで競技なんかしています。

GSは、まあ、それですが、ボート競技が恐ろしい。

「トレック」と呼ばれる撮影アングルや編集まで含んだもので、「コンパス」と呼ばれる原作オープニングそっくりな映像をリアリティーのなかでどれだけ再現できるか、とか、いかにも本物の宇宙船が水面近くを飛んでいるかのように見せるか、とか、マニアックすぎる競技内容ばかりで、早さを競うとかいう初期に行われていた競技など直ぐに消え去ってしまった。

逆にいかに低速状態で完全浮上させるかなんて言うカテゴリーがあり、様々な手法が発表されているぐらいです。

横島さんも各地の競技に招待されているそうですが、さすがにマニアックすぎてついていけないと笑っていました。

「そうですか、あれだけのものを作っているのに、トレックの良さをご存じでは無いですか・・・」

「おい、ピート、おまえ・・・」

「いやいや、在日のトレッカーにそうだんされてまして、是非とも全アメリカ大会には招待できないかと・・・」

「勘弁しろや」

まあ忙しいのは知ってますし、ほかの技術開発の追加依頼も受けているそうなので、無理にとは言えませんが。

「そういえば、横島さん、ご存じですか？」

最近起きているオカルト事件でホットなのは、妖怪や魔族の武装化だろう。

シールドや鎧を着たものが増え、各地で結構苦戦しているという。勿論、一流である美神令子除霊事務所では失敗件数は増えていないそうだけど、GS協会全体としては達成率低下が問題になっている。

が、ファンネルとの相性が悪いらしく、僕の聖魔増幅型や、エミさんの多重結界型なんかは攻撃が通らない。

逆に、タイガー君の精神干渉型も十分な効果があるらしく、マイナーチェンジして一般販売も検討されているそうだ。

それはさておき、己の力や能力を人間よりも遙か上だと盲信している彼らがなぜ武装など、と思うだろうが、実際その辺は判らない。上層部の方針によるものだろうとしか考えられないのだが、それでも下級妖怪程度でも十分な驚異になっていることを考えれば、再び拠点侵攻なんかも起きかねないともいえる訳ですが。

「ま、大丈夫だろう？」

そういつて横島さんが僕に見せたのは雑誌記事。

「おお、ワシもみたですじゃ。ヨコシマン『スパーク』！」

そう、最近巷で有名な変身ヒーロー「ヨコシマン『スパーク』」。あんまりな名前に横島さんの関与が疑われましたが、固有霊波やアリバイから別人と証明されている存在で、蹴りの一撃で中級魔族を粉碎する「(ファイ)ナルキック」は子供にも大人気になって

いるとか。

劣勢のGSやオカルトGメンの加戦に現れる姿は、まさに変身ヒーローであると、大きなお友達にも人気です。

というか、その変身ヒーローの動きが少女っぽことから大きなお友達の人気になっているらしいのですが。

で、雑誌記事のメインはそっちではなく、国会の予算委員会での発言でした。

「「「日本は狙われている!」「」」

雑誌記事には「(笑)」が付いているのが可哀想すぎますね。

「変身ヒーローにSFアクション。これで怪獣でも上陸してくりゃ国防費があげやすいだろうな」

「・・・原子熱線砲は開発できますかのお?」

食いついた、タイガーさん食いつきました!

「あー、やばいだろ、それ」

「・・・さすがに世相があわないですかのお?」

「世相つつか、なあ? ピート」

「そ、そうですね・・・」

いつの間にか仲間外れにされていました。

湯上さんも笹倉さんも、横島さんの事務所に参加するなら一緒に  
って誓い合っていたのに、いつの間にか事務員で、というか秘書で  
すよ秘書！！

裏切りものお・・・

「あー、魔鈴さん。ほら、いろいろとタイミングが・・・」

横島さん、私ってそんなに魅力ないですかあ？

「いやいやいや、お姉さん系の癒し系、スタイル抜群で・・・、あ  
かんあかん、本音ただ漏れや！！」

柱に向かって頭を打ちつける横島さんを見て、少しだけ溜飲が下  
がりました。

まあ、事情は判ってますし、横島さんを所長とした場合、二人は  
事務＋現場で、私が店＋現場になると思っていましたし。

現実、私がこのお店を維持したいという気持ちがある限り、ほい  
ほいについては行けないんですけどね。

でも、ちよつとムカついたのは事実です。

「で、今日の用向きは？」

「食事にきました」「えー、つと同じく」「はい、ご飯です」

横島さん、湯上さん、笹倉さんでした。

これに加えてタマモちゃんとシロちゃんも来ているのだから、「  
横島事務所立ち上げ会議」とか言われても信じてしまうかもしれま

せん。

前のような一品ではなくコースで注文することが多くなった横島さん達ですが、今回は何らかの意図がある注文のようでした。

「こつ、なんとというか、量と肉中心？」

「あ、あと、スイーツ・・・なしら？」

「で、バラエティーも求められている感じですね。」

「何でしょう？」

「というわけで、ここしかないでしょ？」

「そうですね、ネームバリューもありますし」

「うーん、食べられないものも避けられますね」

「おいしいでござるなー、タマモ」

「シロねえ、全然参考になってないと思うわよ？」

・・・もしかして

「もしかして、貸し切りのご用命ですか？」

「あ、さすが魔鈴さん、鋭いなあ」

「にっこりほほえむ横島さんに、内心ドキリとしてますが、一応隠しますよ？ なにしる年上の「お姉さん」ですから。」

「実はですね、いろいろと世話になった人たちが来週あたりに東京に大集合するんで、それに合わせて食事をしましょう、という話にんったんすよ」

「なるほど、最近の横島さんの人脈を考えれば国際的になるのですよっねえ。」

「では、参加者の宗教、というか国名を教えてくださいませんか？  
あと参加人数も・・・」

あー、と横島さんが首を傾げた後、湯上さんが指折り数え始めました。

「アメリカ、イングランド、フランス、ドイツ、セウジアラビア、  
ミャンマー、ザンス・・・」

ちよ、ちよっとまってください！

「は？」

「それはどこの国際会議ですかあ！？」

「・・・ああ、そういう見え方もあるかも」

そついえば、来週サミットがありましたね？

まさか・・・

「いやいや、そういう堅苦しいんじゃない、もつとネクタイのい  
らない、気軽な・・・」

「じゃあ、参加者の身元を並べてください！！」

えっと、とナプキンに名前を書かれて、本気で倒れるかと思いま  
した。

「横島さん、この参加者で「気軽」にいられるほど肝の太い料理人  
じゃないんですよ、私」

えー、と不満そうな顔ですけどね、横島さん。このメンバーが集  
まってるところでテロでも起きれば、72時間後には全世界戦争で

すよ!?

「だいじょうぶやる? 最近、そういうことに聡い正義の味方もおるし」

「うわー、そんな不確定要素に丸投げですか!?

さすが美神事務所、信じられません。」

「・・・魔鈴さん、できることはみんなのでやります。でも、もっとうまくできる人がいたら頼みます。仕事ってそういうもんじゃねえっすか」

「・・・その笑顔は卑怯です、横島さん。」

## 第四十一話（後書き）

広げている風呂敷を畳もうとすると、いつの間にか広がっている不思議w

つつか、狙われてるのはコメリカだよね、主に横島にw

ヨコシマン スパークは、色々と改良を経て、「555」ポイ活動をメインにしています。ただし、正体が正体なので、変身シーンからは始まりません。  
変身で悦に入っているのはパピと芦田だけです。

本日中更新は以上です。次回不明



## 第四十二話（前書き）

原作と全く方向性が違うのは、まあ、二次創作の本懐ですのでw

## 第四十二話

魔法料理魔鈴での関係者懇談会は、すごく好評のうちに終わった。形式ばってなくて、それでいて気軽に美味しいということ、以後のお忍びでもお邪魔させてほしいと各国の人々に賞賛されていた。まあ、当然だよなあ、と俺は思うんだけど、魔鈴さんからは色々文句を言われてしまった。

で、懇談会の中でアメリカ中心で広げていたGSクラウドサービスやトレッカーっぽい船なんかの開発を、別方面でしてみないかという話が結構な割合ででていた。

なんつうか、国家の偉いところまで上りあがる人って、色々な「専門家」ばかりなんだなあと関心。

というか、みんな自分の欲望を満たしたいだけだよな？

「当然ではないか。何しろ夢のメイドロボを作り上げた男達だ、期待してもおかしくあるまい？」

某、イタリ 首相の台詞に、多くのおっさんが頷く。

確かに、うちのおやじも「男の夢をありがとう」って言ってたっけ。

でもなあ、あれは「メタルソウル」による人工ではあるけど個性ある存在だからなあ……。

逆にG3だの改造神通棍なんかは、既存の技術の延長線だし。

そういう意味では、「船」は心底現代技術の集大成みたいなもんやな。

が、今考えてる「箒」は、科学や常識を真つ向からたたき伏せるものだ。

なんつうか、たぶん、受け入れられるところには受け入れられるけど、拒絶されるところからは無茶苦茶嫌われる自信がある。

実のところ、試作品はできている。

が、扱い難さと人を選ぶ機能で売れないだろうと見切りをつけているのだが、今回の懇談会に潜り込んだ一人が是非とも自分のところで使わせてほしいと懇願してきた。

カオスとの相談の上で返事をするとは言ったけど、内心では小躍りしていた。

実証試験対象の一つだったから。

だからこそ、あの懇談会に入れたんだけどな。

「で、忠夫。商品名はどうするんじゃ？」

「海を渡る、と書いて『海渡』<sup>カイト</sup> つうのはどうやる？」

「うむ、韻もふんどるようじゃな」

「まあ、売れた先では別名の方が有名になるのは決定してるけどな」

「仕方あるまい？」

私がああ情報を手に入れたのは、すでに数ヶ月前だった。

はじめは現代の魔女「魔鈴めぐみ」による現代魔法術の再現計画の最中で聞いた噂だった。

「あの横島忠夫が、また何かを作っている」

それ以上の情報は一切入ってこなかったが、それでも情報は徐々に変化し始めた。

「……あれ」を試験運用できる場所を探しているらしい」

SWファンを取り込み、トレッカーを巻き込んだ日本人。

彼が、彼が「あれ」を再現するというのならば、是非とも日本で、と心から叫んだ。

その叫びが届いてか、我が敬愛する上司も共感した上での活動が効果をえてか、この度試験運用機「海渡<sup>カイト</sup>」が、海上自衛隊実験鑑「こんごう」に搬入されたのだ。

当鑑所属のヘリ「ウミドリ」で搬入されたのは、「海渡<sup>カイト</sup>」ばかりではなく、運用実験人員である「横島忠夫」「ドクターカオス」も同行していたが、もう一人が魂をふるわせた。

そのもの、あおき衣をまといて……

ヘリから降り立ったのは確かに「魔鈴めぐみ」であったはずだ。しかし、私は、思わずつぶやいてしまった。

「……姫様」

失言だと思った。

しかし、周囲はもう世界観に飲まれていた。

「姫様!!!」「姫姉様!!!」「姫様がおりましたあ!!!」

「こんごう」の甲板はもう、日本領海内ではなかった。すでに「風の谷」になっていた。

「あら、なんだか人気者ですね」

うふふ、と笑う彼女をみて、どうにか理性を立て直した我々だったが、「海渡<sup>カイト</sup>」の飛行で再び燃え上がった。

「メーべだ・・・」

「本物のメーべだ!!」

「うおおおお、リアルメーべだ!!」

大歓声の中、ジェット飛行と風乗りで旋回させられた姿は、もう、アニメそのままの映像といえた。

誰もがあこがれた。

誰もが夢見た。

海と風の狭間の、波間と空の狭間の光景を!!

青き衣の姫さまが、メーベにぶら下がりて甲板に降り立つと、瞬時に人が集まり、万歳三唱と胴上げが始まった。

「ドクターカオスばんざーい!!」

「横島忠夫ばんざーい!!」

「ひめねえ様ばんざーい!!」

こりゃ、もう、まるつきり「宮崎」な世界じゃないか。隣にいる副官が、宮崎顔に見えてきた。

「・・・はは、こりゃ、たまりませんな」

同感だよ副官。

「搭乗者は女子限定ですか？」

「適正者のみ、になるが、デブはむずかしかるう」

「これは、海上での肥満率が格段に減りそうですね」

「違うない」

改造型カオスフライヤーのプランで始まった「海渡<sup>カイト</sup>」は、色々と協力者を得て改造型現代魔法術になり、最後にや翼だけの凧になった。

これが飛んでる映像は、ニュースでも取り上げられ、世界規模で発注騒ぎになったんだけど、こればかりは売れない。

なにしろ「オカルト」アイテムなんだから。

それもネクロマンサーの笛には負けるけど、適正がかなり厳しい。現在の魔女こと魔鈴さんは開発者のひとりなので適性が高いけど、一般人となると、200人に一人という狭い適正値になってしまう。もちろん、戦闘機などの適正に比べれば格段に安易なのだけれど、夢見る人間には高いハードルといえる。

これに際して適性検査を行う機関を海上自衛隊は設立し、「姫鳥学園」という「海渡<sup>カイト</sup>」操縦者学校を開設した。

現役海上自衛官や自衛官希望者も殺到し、他所属の隊員たちも流入していると言うことからその人気の高さはしれる。

航空・陸上の各自衛隊は、海上ばかりへの実験納入は不公平であるとの抗議を、わざわざGS協会につっこんだらしいけど、会長である唐巢神父は「しらんがな」と突っぱねたとか。

では直接俺に文句がくるかというところ、そういうわけではなく、ネチネチと周辺抗議を続けているという始末。

あまりの迷惑ぶりに美神さんも切れ、

「そういう精神構造には、あの海渡は向かないわよ!?!」

と一発がましたらしい。

からつとした性格を押し出せる美神さんは、結構 海渡向き。  
シロタマ、共に向いている。

ただ、おキ又ちゃんがあんまり向いていない。

逆に冥子ちゃんが向いている。

夢見がちでも外を向いているか、中を向いているかで差がでている。

実は、お袋が海渡を欲しいと言ってきたので渡したところ「ナルニアの空を翔る姫鳥」とかいうニュースになったらしく、自慢げに電話してきた。

あれ自体、機密とか秘密とか言う技術はないんで、真似されてもいいんだけど、盗まれるなよと忠告した翌日に盗まれたらしい。

厳密な捜査網がひかれたせいか、盗んだ犯人は速攻で分かった。

なんと神族陣営だった。

鳥でも神でもない人が、優雅に宙を舞うなど生意気な、と云うことらしい。

なんというか、海渡で飛んでるところを取り押さえられておいて、

まさかこんな言い訳が出てくるとは思わなかったと、小竜姫様の話

「神をも誘惑に耐えられぬ、って売り文句もいいかもかもしれませんね」  
「忠夫さん、勘弁してください」

というか、「姫鳥学園」の入学資格に「犯罪を犯していない人・神・魔」というのが加わったというのは笑い事だろう。

こっそり身分を偽って入学している神魔がいるとかいないとか。

久しぶりの除霊仕事。

で、どんな未練があるのやら、と美神さんが聞いてみると・・・

『こんな希望にあふれた未来になるなら、俺は自殺なんてしなかった・・・』

実は、こういう自縛霊が世界的に増えているそうさ。

で、そういう自縛霊にかぎって、脂ぎったデブとかが多いというのが悲しい。

逆に、今年のコンプレックス発生例が減っているのは、その辺も関係しているんじゃないかという報告書もあがっているとか。

「なーなー、今昇天すりゃあ、運良くよりよい転生に巡り会うかもしれんぞ?」



『転生チートきたー！ー！ー！』

「いやいや、それはねえって」

『美形で万能で……』

「聞いてねえなあ……」

『ひゃっほー！ー！』

「あ、昇天しやがった」

という自己昇天型も多いんだけど。

「ま、消耗なしで進むんだから、良いんじゃない？」

久しぶりに現場が一緒の美神さんは苦笑い。

「じゃ、次の現場いきましょうか？」

「うっす」

二人とも事務所簿を呼び出してまたがる。

「次の現場は、もしかすると終わってるかもね」

「……もしかして、魔族っすか？」

「オカルトGメンからの応援要請」

「すると、ヨコシマンが？」

「最近、三人組らしいわよ？」

内情を知ってる俺たちは、思わず本物の笑顔になってしまった。

「お手当でも回さないとまずそうっすね」

「そうしてくれると、私も気が楽よ？」

そんなバカ話をしているうちに現場に到着したんだけど、すでに

現場はクライマックスだった。

『ファイナル、ヨコシマンズ、アターーク！』

三人のヨコシマンによる攻撃で、中級魔族レベルの神魔が爆発した。

「うっわー、えげつない攻撃ね」

「周辺に影響無なのがエコーすね」

これが、今現在のクラスA以上の現場の実体だったりする。

「じゃ、ちゃちゃっと報告書書いて終わりにしますか？」

「そうね、とつとと帰りましょ」

ありがとう、ヨコシマンズとかいう歓声を背に俺たちは事務所を目指した。

「つつか、美神さん」

「なに？」

「最近、俺ら、GSしてませんよね？」

「・・・気にしちゃだめよ」

「つっす」

## 第四十二話（後書き）

基本、美神さんも色々と魔改造状態なので、言動がそれっぽくありません。

けっして、キャラを捕らえ間違えてるとかそういうことじゃなくて・

へへw

10/05 修正ザンす

## 第四十三話（前書き）

珍しく、あの人登場・・・ですが・・・  
本当に珍しく、原作乖離型GSっぽい話ですw

## 第四十三話

最近、GSしてねえ、という話を最近美神さんとしたんだけど、実は協会に依頼される件数自体は減ってない。

で、詳しく調べてみると、Cクラス以下の仕事の消化率が高くなっているせいで、美神さんクラスの仕事になることが少なくなっただけというのが真実らしい。

つまり、

「横島君のせいなのね？」

「ごかいやーーーーー!!!」

ファンネルは確かに大きな要因だった。

何しろ、安い＋高性能＋扱いやすいと、オカルトアイテムの中でもダントツの性能で、道具使いの貧乏GSが挙って使っているくらいだった。

そういう意味ではオカルトアイテム業界から撤退した芦田の先見の明は高かった。

さすが、未来と過去を見通すもの、といえるかもしれない。

しかし、魔族が脳筋化したこともオカルト事件の発生レベル低下を招いているともいえた。

以前は能力に足りない魔族が、通常のオカルト事件を利用して大きくし、そして神族の力を殺いでいたらしいのだが、力押し一辺倒になったおかげで、面倒な事件や事例が減ったという結果も呼び込んでいる。

この研究結果は今のところGS協会と六道の上層部にしか知らされていないが、怪我の功名的な、いや、表向き計算され尽くされたオカルト平和に感嘆の息が漏れる状態だという。

もちろん、偶然の産物だけ。

「……つまり、真剣に分析してみると、やっぱり横島君のせい？」

「……誤解やないかしれん」

「まあまあ、逆に不労収入が増えてるんですから……」

おキ又ちゃんのいうとおり、例のコメリカシヨックを乗り切った美神さん、無茶苦茶な資産家になった。

某金成家をダース単位で買えるレベルになっている。

が、某常春の小国王並に小さなお金儲け大好きな美神さんは、GSという採算性のよい仕事が好きで、命がけのばくち仕事が好きで、今の仕事を辞めるつもりはないらしい。

もう、仕事じゃなくて趣味で良いやん。

と思っただけど、お金を取ること自体が美神さんの誠意でもあるので、それは言わない。

「(で、主。この会議は何なんだ?)」

場所、GS協会会議室。

参加メンバー、唐巢神父・六道婦人・小笠原事務所・ドクターカオス・六道事務所・美神事務所……。

現在、即召集可能な一流ばかりであった。

「この度の召集は、他ではありません」

その声とともに現れたのは、長身の妊婦。

「……って、ママ!?!」

「はい、令子。げんきい？」

旦那とともに身を隠していた筈の美神美智恵その人であった。

「死んだんじゃないの？」

「ふふふ、神魔の目を欺くために死んだ振りしてたのよ。」

「っこりほえむ美智恵さん。」

「真っ赤になって、真っ青になってパニックになる美神さん。」

「つつか、なんで死んだふりしてたのに出てきたんすか？」

「うんうんと頷く周囲。」

「一番の理由はあ、引きこもってるよりも、出てきた方が状況をコントロールしやすいからかしら？」

「で、二番目の理由は？」

「私もテレサがほしいなーとか・・・」

「娘にタカる気？ ママ」

「そんなわけ無いじゃない。ただ、妹の出産祝いって言うのをせびつても良いかなーって思っただけよ？」

「つよい、そして手強い。」

「それが周辺の感想だった。」

さらに相手が妊婦なので、強いこともできない。

「今だからこそ出てきたという感じだった。」

「まあ、テレサは表ルートでいいっすけど、旦那さんはどうしたんですか？」

「それがね、久しぶりに東京に帰ってきたものだから、うれしそう

に神田に向かったわ」

「マ、ママ。あいつって、人混みは・・・」

「それなら大丈夫よ。前に横島君がくれたファンネルがあるから」

やべ、と思った瞬間にはネックハンギングブリーカー。

「よーこーしーまーーーーーー」

「ロープ、ロープ！」

「とりあえず、後で隠してることを全部教えなさいよお！？」

「イエス、ママ！」

やっべえ、あのおばさん、矛先を俺に向けるために手段選ばねえでやんの。

こんな事して俺が離反するとか考えねえのかね？

いや、考えねえか。

そっという人間だと思ってねえみただし。

「・・・百歩譲ってママが偽装していたのは良いわ。流す。でも、何で今？」

「単純に、今このタイミングでなら一流GSをまとめられると思っただからよ」

「何の目的で？」

「・・・対神魔侵攻組織連合の立ち上げよ」

すつと息をのむ周囲。

本当に化け物嫌いだな、この人は。

「とりあえず、全面的に対抗しようってわけじゃないわ。ただ、人界で大きな面するな、ってしたいだけよ」



とはいえ、一応釘をささねえとな。

「それには、その敵には、妖怪や怪異も含まれるんすか？」

目立たないように、きゅっと手を握りかえる美神美智恵。  
つつか、その癖は直さないと、読まれるんすよ？ 隊長。

「人界に仇なす存在すべてが敵よ」

そうですかそうですか、そりゃ予想通りだ。

「それは神であつても？」

「ええ」

「それは魔であつても？」

「ええ」

「それは妖怪・怪異であつても？」

「ええ」

「それは人間であつても？」

絶句の美神美智恵。

そうそう、その表情が必要だったんだ。

つまり、そんな組織を、いまの隊長のバックボーンが認めるわけがない。

今この瞬間だけでも利用しようなんて都合がいいことなんか許せるわけねーだろ？

「人界に仇なす存在ならば、それが神魔妖人であろうとも隔てることなく対抗するって言うなら、賛成なんすけどね」

冷たい瞳の美智恵さんつてば、ちよつと切れてる。

「・・・横島君。君がどんな組織と繋がっているかを公表されてもいいのかしら？」

「ああ、それなら、すでに協会も六道も知ってますよ？」

「・・・な!!」

思わず六道婦人をみると、唐巢神父と一緒に苦笑いでうなずいている。

「か、か、彼は、魔族・・・」

「でも、そのおかげで、オカルト犯罪の傾向が絞れて、さらには一流GSの確保がしやすくなったわよ？」

「はじめに聞いたときは気が触れたのかと思つたがね。実際の結果をみると、素晴らしい状況操作だつたと思つてるよ？」

「・・・くつ」

これで日本国内の民間GS関係者と袂を分かつたともいえる。

「つつか、横島。おめえ、魔族の女もこましてんのかよ？」

「なんで女決め打ちやねん！」

「じゃあ男かよ？」

「・・・」

「・・・・」(笑)「」

どつと笑いが渦巻く空間を、美神美智恵さんは異様なモノをみるかのように見つめている。

「ママ。今まで一人で戦い抜いてきたママには判らないだろうけど、

これが仲間のいる光景よ」

今度は美神さんをみる美智恵さんだったけど、視線は変わっていた。

どうやっても変わらなかった娘が、全く別人のようになっていることを驚いているのだろう。

タカビーでわがままで、金の亡者な美神さんはこの世界にいない。いや、お金は好きだけど亡者じゃない程度かもしれないけど。

「みんな、横島君がかえてくれたわ」

きゅっと俺の腕を抱く美神さん。

「はーん、柔らかくて張りがあってエロエロな何かがある……」

「ふふふ、どうしても良いけど、責任はとってね？」

「畏や、これは畏なんやああ……!!」

「甘美な畏によっこそお？」

「耳に息を吹きかけたらあかーん!!」

思わずパニック状態の俺に向かって、美智恵さんは疲れきった笑顔でつぶやいた。

「……わたし、いらぬ子かしら？」

「さあ？」

## 第四十三話（後書き）

こんな感じの世界です。

私としては、神族よりも魔族のほうが嫌いなやつが少ない、と横っちは感じていると思います。

で、美神母は、神魔が嫌いですw

## 第四十四話

日本では失敗している対人外組織だったが、世界的にみると一部に成立している。

本来であればアメリカなどは成立しやすい土壌なのだが、GSKロウサービスなどの成立の影響で進出できていないとか。

ではどこで成立しているかというと、ロシアなどの北ユーラシアの一部と南アフリカの一部だけが。

自然環境や社会背景的に神魔との隔絶があり、排他的になっていたところに組織設立運動があったが、全世界的にみれば不成立といえるだろう。

世界が思いの外人外に寛容だったと言うよりも、アメリカシヨツクを演出した人物が人外との架け橋を自称しているがゆえに流れた現状といえた。

簡単に言えば、流通資本の一部でも引き上げてほしくない、というわけだ。

そういう意味では美神美智恵の社会認識は時流から外れており、まさに近視的な視点でのみ動いた結果の失敗と言えた。

本来彼女が行うべき一手は「オカルトGメンの強化」であったはずだ。

が、現状のオカルトGメンに人外と決別できる土壌はなしと判断した美神美智恵は、オカルトGメンすら切り捨てて新組織にかけたわけだが、失敗してみれば当然の結果と世界に受け止められていたのが痛すぎた。

以後、世界規模での活動は、彼女の名前で行うことができないこ

とが決まったようなものだ。  
それだけ大きな錯誤だった。

ゆえに、がっくりとうなだれる彼女は、所属しているはずのオカ  
ルトGメンに休職届けを出し、そのまま都内のマンションに引ッ込  
んでしまった。

「いやー、もしかして、いろいろと折っちゃったかしら？」

にこやかに笑う美神さん。

さすがに偽装死は腹に据えかねたらしい。

まあ、妹でも生まれれば、少しは関係改善するんだろうけど。

「ボツキボキに折れてると思うっすよ？」

「横島君だつて共犯よ？」

「まー、ムカつきましたから」

あの人間以外全部悪って姿勢を聞いたら、切れるでしょ、ふつう。  
日本において言うなら、地霊や神霊、怪異や妖怪なんつうものは、  
伝承や伝説っていう日本の想いが固まった存在だ。  
それを不要と切り捨てるのは、過去や伝承を焚書にするようなも  
の。

愚かとかそういう次元のはなしじゃない。

「ま、ママの神魔嫌いは筋金入ってるから」

「それってあれっすか？ 自分が追いつめられてるのに神魔が助け

てくれなかったって言う逆恨み」

「逆恨みは言い過ぎでしょ？」

「いえいえ、神魔だって自由に動けりゃ人界と共に生きてるでしょ。でも、協定や条約がじゃまで動けない。それが解っていないながら恨み言を呟いてるのって・・・」

「ママは昔悪魔にとりつかれていて・・・」

「多様性のある不幸な話つすけど、それを聞いても判断は変えないつすよ？ 魔族にだって良い奴もいれば悪い奴もいる。神族も同じ怪異も同じ、人間も同じつす」

何度も交わしたことのある会話。

今度だって結論がでるわけではないけど一応は交わしておかなければならない会話だった。

もちろん、自分の身内が殺されでもされれば話は変わるだろうけど、今の俺を説得できる内容ではない。

「ま、そうね。私の前世だって「あれ」ですもん。知らればママになにを言われるやら」

「ま、前世は前世、関係ないつすよ？」

「私は少しでも関係したいんだけどなあ・・・？」

やば、そういう話のながれつすか？

「あー、美神さん。うれしいんですけど、ねえ？」

「ま、焦っちゃいないわよ？」

こんな会話が日常的にできるあたり、なんだかこの辺が一番前の時と違うかもと思う俺だった。

パピの妄想につきあう形で武装化したけど、結構おもしろいと思っ  
てしまう自分がいた。  
アシュ様が喜んでくれるというのもあるので乗ってるだけかもし  
れないけど。

魔族武装の中でも、人間では太刀打ちできない種類の者だけを相  
手にしていただけなんだけど、それでも人間たちから感謝されると  
いうのは奇妙な気分だ。

「いくでちゅよ！」

「おう！」

姉さんと一緒にエンチャントキックをたたき込むと、目標が爆発  
した。

波長の違う魔力を同時に流し込んで、相乗爆発させるという攻撃  
は、事実上人間でも出来、結果的には中級魔族までの破壊を可能と  
する。

そんな技であることをアピールしてるんだけど、人間は気づかな  
いかな？

姉さん経由で人間にリークさせるか？

「（そんな高等な波長調節なんて技、普通の人間にはできないわよ）」

え？ 横島できるじゃない？



「(すでにヨコシマはこっち側よ。人間の器用さなんて超えてるわ)」  
「  
うっわー、確かに理解できるかも。

思わず念話で気軽な会話ができるほど余裕ができてしまった。

「(というか、そういう変調装置を横島と作ったらいいんじゃないの、姉さん)」

「(ああ、ベスパ、あんたってなんていい子!)」

姉さんは、なんとというか、こう、「女」なんだなーと感心してしまっ  
まう。

逆に私は、こう、なんとというか、娘なんだなーと落ち込んでしま  
う。

「(ああ、愛しき娘たちよ。そろそろ帰投した前)」

こんな酔っぱらいレベルに盛り上がってるアシユ様の声を聞いて  
もうれしいと思ってしまう自分が嫌だった。

ああ、我が身がにくい。

「ありがとー、三姉妹!」

宙に舞う私たちに手を振る人間たち。

なんだろう、古代の神々はこんな気持ちだったのかもしれない、  
と思った。

信仰って、やばいぐらいに甘い蜜なんだ、と自覚しつつ。

久しぶりに横島さんと現場にできました。

美神さんも横島さんも、あと三百年ぐらい寝て暮らしても大丈夫なぐらいのお金を稼いでいるそうですが、それでもGSの仕事を辞めないのは素晴らしいことだと思います。

横島さん「美神さんはGSって仕事が好きなんだろう」って言うてたっけ。

私もそうだと思います。

「きょうはおキ又ちゃんがファンネル前衛ね？」

「はい！」

横島さんが作った「ファンネル・オリジナル」は、攻撃的な能力のない私みたいな霊能者に最適な霊具です。

守ってよし、牽制にもよし、そして儀式結界にも向いているという言っこと無しの霊具です。

今回も自動迎撃で牽制して、その間にネクロマンサーの笛で抜ってしまうというパターンは、私が一人立ちした後でも使えるものです。

美神さんも横島さんも、私を守り育ててくれているんだと自覚できてしまいます。

「おキ又ちゃん、ファンネル起動」

「はい！」

私の周りで宙に舞う霊具。

「さ、気楽にいこう」

「はい」

心を落ち着けて、そして見据える。

万感の思いを込めて、私は笛を手にした。

## 第四十五話（前書き）

原作とは違い、まるーくなっている「うちの」美神ですが、こんなアマアマ美神でもイイという人だけ受け入れていただければ幸いです（^^）；

## 第四十五話

「どう、横島君？」

前の現場が終わったんだろう、美神さんがこっちの現場まで来た。俺は背後に居る美神さんにわかるように、簡単なブロックサイン。

「（カみすぎ）」

「やっぱり」

苦笑いの美神さんが俺の隣まで来た。

「あれ、全力全開ってやつ？」

「ええ。やっぱ、美神さんを身近で見てるせいか、どうも基本的な出力で押えるつてのが解ってないっばいっすよ？」

「・・・あははは、ほら、ねえ？」

思わず誤魔化しにかかりましたね？

まあ、なんだ、力押しの手相手ならそれでいいんだけど、今回は長時間じつくりという仕事なので、力半分でマラソンのような出力というのが必要だったりする。

そのへん、妙神山で修行してなかったっけ？

うむ、まあ、そのへんは要注意ということだ。

「つつか、シロは？」

「車でオネムよ。なんといってもまだまだ子供ですもの」

というわけで、そろそろフォローに入ります。

「そうね、そろそろ燃料切れかしら？」

ファンネルとネクロマンサーの笛という二大霊具を未永く使う修行は始まったばかり。

がんばれやー、オキ又ちゃん。

「きゅ〜」

「あ、燃料切れね」

ファンネルオリジナルは、結構「重い」。

あの伊達君が霊力アップの道具に使っていたぐらいの負荷になっている。

つまり、今のおキ又ちゃんには、かなりの負担になっている。

でも、あのファンネルとネクロマンサーの笛が自在に使えるようになれば、単独で事務所を開くだけの霊力を得られるようになったといえるだろう。

もちろん、死霊使いとしての霊能から、単独で事務所なんて開かせてくれないだろうけど。

未だ十代のネクロマンサー、その価値は計り知れない。

「まあ、まだまだっすけどね」

「まーね」

六女の在校生としては破格の実力のおキ又ちゃんだけど、そのレ

ベルに周囲があわせてくれるわけではない。

年々強力になるオカルト事件、日々力を付ける悪霊たち。

追いつけ追い越せのパワーゲームに途中参加するためには、ずいぶんと無茶な努力が必要なのだ。

その点で言えばファンネルによる地力上げは安全で効果的といえる。

「さー、イモリの黒焼きだよー」

「いもりいやぁ……」

半泣きでイモリを食べるおキ又ちゃん。

まあ、半人前の登竜門よ、それ。

「よこしまさーん、やっぱりーか八かでいきましょうよー（はむはむ）」

「美神さんにそまりすぎや」

あら、失礼ね。

私の場合は、事務所を維持しながら必要だから短期決戦だったんだから。

「うー、やっぱり楽な道はありませんねえ……」

「おキ又ちゃん、おキ又ちゃんって結構近道してると思うけど？」

「そうですか？」

ま、そのとおりね。

おキ又ちゃんの同級生が聞いたら腸捻転起こして血反吐吐くほど悔しがるわよ？

「そ、そうなんですか？」

「まあ、試しに一文字さんあたりに言ってみたら絶交されると思うな」

「ええええええええ！？」

そついうものよ、自己認識なんてものは。

氷室さんの天然ぶりには目眩を覚えますわ。

横島GSや美神お姉さまに、「一文字さんになったら絶交される」と聞いたから、私に聞いてみたですつて。

わたしだつて、血反吐吐くかと思いましたがわよ！！

あの、横島GSのバックアップでカリキュラムが組まれた霊能実習ですつて！？

諸手をあげて参加したいですわよ！

というか次回参加させないと絶交ですわよ！

「え、ええええええええ？」

「えー、じゃありません！」

ふつう、そんな豪華絢爛な研修をGS免許を取る前に経験できませんわよ！

だから、この話を一文字さんにもして仲間に入れないと、ほんきで怒られますわよ。



「・・・そ、そうなんですか？」

「どれだけ恵まれた環境か、本気で説教しないといけないようですわね!？」

こんこんと説き伏せた私は、どうにか一文字さんとともに美神事務所の研修に参加できるような手管を得ることができましたわ。

ふふふ、氷室さんの天然さんぶりに少しだけ感謝いたしますわ。

つつわけで、女子高生三人の監督をすることになった俺です。  
くそお・・・、いずれ劣らぬ美少女ばかり、俺にどんな試練が・・・。

592

「横島君、なにかあったら、殺すからね？」

出かけに聞いた美神さんの本気を思い出してしまった。あの本気を聞けば、俺だってびびるわい。

唯一の助けは、三人三様の霊衣をきていることだろうか？

そうじゃなけりゃ、やばかった。

だって、こう、かわいいお尻がフリフリしてるんだよ、おい！

「うっ」

「くっ」

とかうめいてるし！

「どっ？」

あ、やばいやばい、ステイステイ。

「さすがにおキ又ちゃんはこの前より余裕ですね」

「ま、ファンネルの数減らしてるしね」

この前は、ファンネルABを全部で三つ浮かせていたけど、今回はABで二つ。

負荷は少ないはずだ。

逆にABを同時使用なんかしたことがないはずの弓さんと一文字さんはキツそうで、他の術なんか使用できないレベルで集中している。

こうみると、タイガーやピートは、二三段上のレベルなんだと確信できる。

そしておキ又ちゃんへの訓練方針は間違っていなかったこともわかった気がする。

「それにしても美神さんの方は早上がりっすね」

「そりゃそうよ。シロとタマモちゃんまで借りてるのよ？早く終わるに決まってるわ」

まあ、加えて美神さんが指揮官なんだから、あたりまえ、と。

一応、イケイケの除霊が週に1〜2件出始めたので美神さん中心の攻性チームを作って叩き回り、Cクラス以下の除霊を訓練代わりに俺がおキ又ちゃんと回ることにしていただけ、弓さんと一文字さんもそれに加わるようになってしまった。

もちろん、実力伯仲の仲間がいることは良いことなので、美神さんともども受け入れを許可したんだけど、バイト代を聞いて内心泣

いた。

時給5000円の待機時。

時給15000円の除霊時。

危険手当とか諸々入れるとスゴい価格に。

まあ、なんつつか、俺も人を手配することがあるんで、わかっていたけど、こつ現実を見せられると泣ける。

いやいや、わかってるんだぜ？

これは美神さんが俺に対して、これが普通の価格帯なのよ、って教えてくれているって。

でも、過去の250円を思い出すと、ねえ？

「横島君、そろそろ終わりそうよ」

「うっす」

さすがにおキ又ちゃんたち三人でかかれば、霊力切れより除霊完了の方が早い。

「じゃ、これから全力解放！」

「「「はい！！」「」」

ばあつと高まる霊力。

やはり、頭一つ弓さんが強い。

そしてそれを見て、おキ又ちゃんと一文字さんが限界を超えて強まろうと背伸びする。

で、弓さんはそれを感じて背伸びをする。

まるで、子供同士が背比べをしているときに「背伸び」をしあっているかのようなほほえましさ。

美神さんも苦笑い。

「無理は必要ない。でも全部出し切るつもりで！」  
「はい……」

なんか、こう、女子バレーの監督になった気がするな、うん。  
コーチとか呼ばせたら、背德的だろうか？

横島君がおキ又ちゃんのレベルアップを、と言いだしたとき、なにを考えているんだろう、と思っただけど、いざふたを開けてみると確かに必要だった。

補助的な役目の多いおキ又ちゃんを、集団除霊限定などにははもつたいなかったというのが実感できた現実だった。

加えて、弓さんと一文字さんの研修を受け入れてからは、おキ又ちゃんにも気合いが入って良い影響を受けている。

おキ又ちゃん自身、自分の実力が劣っているのは仕方ないと感じていた感がある。

たしかに、私や横島君レベルの人間しか周囲にいないのだ、実力は劣るだろう。

しかし一緒に勉強をしている人間と比べられるとなると話は別らしい。

霊力の高まりや集中力、スタートダッシュや持続力。

細かなところで張り合ったり賭をしたりして競いあっていた。

無論狭い範囲での競争だ、一番だったりビリだったりすることに意味はない。

端的に言えば井の中の蛙を作っているようなものだとも言える。

しかし、この競い合いには大きな意味がある。

身の丈にあつた目標という大きな意味が。

絶望的で隔絶された目標を見せられ続けるよりも、遙かに分かりやすい目標と言えるだろう。

短期的にみて良い話だし、長期的に見ればさらに良い話だった。

伸び悩んでいたおキ又ちゃん、今やぐんぐん延びている。

弓さんや一文字さんも手応えを感じているよう。

うーん、これは、あれかしら？

「なんすか？」

事務所待機中だった横島君が、ソファーからこつちを除き見る。

「学習塾」

その一言で通じたらしく、声を殺して笑い始めた。

タマモちゃんも解つたらしく一緒に笑っており、シロだけがキョトンとしている。

「横島さん、準備できました！」

「お待たせしたっす」

「遅くなりましたわ！」

三人娘の準備が終わつたということ、そろそろ本日の業務開始。

「弓さんと一文字さんは横島君と組んで。おキ又ちゃんは私とシロとタマモちゃんチーム」

「…………はい!」「…………」

「今日の除霊はかなり気合いを入れないと死ぬわ。だから、絶対に生き残ること」

「…………はい!」「…………」

なんか、このまま事務所運営したい気がする一体感よね。

所長私で副長横島君。

各現場責任者におキ又ちゃん・弓さん・一文字さん。

シロ・タマモちゃんは緊急強襲。

あー、なんかいい感じ。

横島君さえ説得できたら、現実になる話ね、うん。

前の時戦力外状態だったおキ又ちゃんを戦力化するには今しかないと思っていた。

それに加えて弓さんや一文字さんが加わってきたのはうれしい誤算。

三人とも少なくとも前の時のタイガー並になっていると思う。

つまりGS試験の合格レベルということだ。

加えているいろと修行しているので、個人レベルの技は別として最大霊力は非常に高まっている。

もう六道女子では抜きんでているだろう。

「ま、私の在学中と比べても頭一つ上ね」

美神さんの台詞を聞いて、三人ともに鼻息が荒い。

なんというか、美神さん、鞭の入れどころが絶妙だよなあ、うん。  
なんつうか、霊力の質も上がってるし。

「じゃ、横島君は『Gメン支援』ね」  
「うっす」

これって、西条への売り込みっすよね？

「ま、そうね」

にやにや笑いの美神さん。

まあ、いまの人手不足の中で見ればおいしい餌に見えるんだろう  
なあ。

加えて餌だと解っていても食いつかざる得ない。

あー、解る解る、わかるぞお、西条。

みすみす罠と解っていても食いつかざる得ない餌。  
その状況と心境。

ああ、悲しいほど解る。

そういえば、小嶋ちゃん、元気に貧乏してるかなあ？

カスタムG1、霊子力甲冑の支給はオカルトGメンの戦力を上げ

だが、戦術の幅を狭めたとも言える。

より強引に、より豪快に。

その意味では民間GSの強力は不可欠になりつつある。

そう、見本としての強力が。

今のオカルトGメンにとって、力を振り回さない、力に振り回されない除霊やオカルト対処は必須であり、身につけるべき事例だった。

だけどね、横島君、そりゃないんじゃないかね？

「弓さん、一文字さん、ファンネル展開！」

「はい！！！」

実に美しい、実に力強い霊力の流れに乗って、横島君の代名詞とも言える霊具「ファンネル」が少女たちの周囲を巡る。

うちの人間では絶対に無理だと言える制御技術だった。

「西条さん、要人警護はお任せください」

「・・・うん、頼んだよ」

にこやかな笑みの横島くんを、これほど恨めしいと思ったことはない。

これほど実力が隔絶しては、見本もくそもないじゃないか・・・。

その上、警護に目麗しい少女がついていては、うちの活躍なんか目に入らないだろうに。

ああ、恨めしい、恨めしいよ。

「どうです、うちの新人二人は？」



「喉から手がでるほどほしいね」

正直に言ってしまったよ、うん。

「おキヌちゃんの六女のクラスメイトなんですよ」

「……………」

そうか、六女、そうか……。

彼女たちレベルの人間が何人もいるとは思っていないけど、それでも研修や修行次第ではないだろうか？

ああ、そういえば、シロ君やタマモ君も六女だった。

うん、うん、検討に値するな。

「……………美神さん、その辺をねらってますよ？」

「……………令子ちゃん……………」

きみはそんなに僕が嫌いなのかい？

オカルトテロリズム、という、本当に信じられない現場に連れられてきた。

業界トップの美神事務所で研修させてもらえると言うだけでスゴく幸運なのに、その上若手最強、オカルト業界の牽引者でもあるという横島GSの指導を受けられている幸運は、明らかに運の使いすぎといえる。

おキヌちゃんの友達になっただけで転がり込んだという幸運、絶

対切れねえ。

で、様々な仕事をしてきた私らだけど、今回の仕事はさすがに研修レベルじゃない。

国外呪術者による要人オカルトテロからの防衛と呪詛返し。

世が世ならば陰陽寮の仕事であり、今でいうならオカルトGメンやGS協会のトップレベルの仕事とだと思っ。

でも、この仕事に美神所長は私たちを当てた。

そう、私らを。

弓なんかあまりの感激に気絶しそうになってたぐらいだ。  
まあ、アタシも感激で痺れたけど。

でも、実のところこれは実力によるものじゃない。  
新霊具「ファンネル」による効果だと思ってる。

でも、横島GS曰く、

「ファンネルの能力は、自分の霊力が支えてるんだ。君の力の一つだよ」

そうは言ってもなあ、と私がごねると、どこからか一本の日本刀を引っ張り出した。

「ねえ、一文字さん。俺はこの刀で岩を切れるけど、素手じゃ無理だ。これって刀の力に依存してるのかな？」

すつと目の前の何かを取り払われた気になった。

そっだ、アタシも木刀を使ってる、と。

弓は水晶、おキ又ちゃんは笛。  
そう、そういうことなんだ。

「横島さん、ありがとうございます！」「

ちょっと照れくさそうに笑う横島GS。  
結構かわいいところあるよな。

「一文字さん、集中」

「はい！」

やべーやべー、妄想に集中しちゃった。

「……ん、わかったわ。じゃ、二人を送った後、事務所で細かい報告は聞くわ」

横島君から仕事完了の電話がかかってきた。  
いろいろとあったらしいけど、正直に言えば100店満点の仕事  
だったと思う。

政府要人に対して六道の力を示し、美神事務所の間口の広さを示  
し、横島君の指揮力を示し、そしてオカルトGメンの視線を六女に  
向けることに成功した。

これに加えて、こっちのおキ又ちゃんとシロやタマモちゃんの連  
携も別方面でアピールできている。

本当にこの一晩でどれだけ成果があったのか、計算しなくても解るほどだ。

すでに関係省庁どころか政府非営利団体からの問い合わせも始まっている。

もちろん、横島君とのつながりを求めるものだろうけど、それ以外の話も少くない。

ま、今後のオカルト業界を考えれば、大きく世界に対して恩が売れたと言えるだろう。

本当に、横島君はとんでもなくなったものね。

心底おもしろく思っちゃう。

「あのー美神さん。横島さん、事務所に戻ってきますか？」

「ええ。タマモちゃんも回収したいだろうから、一度来るって言うてたわ」

「じゃ、夜食にしませんか？」

「いいわよ」

「狐うどん、狐うどん！！」

「肉うどん、肉うどんでごゆるー！」

・・・ふふふ、なにかしらね。

この空気、とつても暖かくてうれしい空気。

ぎゅってだきしめて離したくない、そんな甘い匂いがするわね。

この空気の中に、もうすぐ横島君が帰ってくる。

本当にそれだけなのに嬉しくなっちゃう。

なんだか私も甘くなったものだわ。

嫌じゃないけど。

## 第四十五話（後書き）

他のSSでも、原作時期の空気を美神が思い返すというシーンをよく見かけます。

それは後悔とかそういうものではなく、あのときこそが最高だった、そんな風に。

ただ、ただ、私の作品ではそんな美神になって欲しくないという思いがあります。

これはアンチに通じるエゴであり、別種の原作破壊であることは理解しています。

できるだけいろんな物を取り入れた「再演」でありたいとは思っておりませんが、主成分が筆者の独断であることをご理解いただきたく思います。

## 第四十六話（前書き）

感想であつたネタをぱくりましたw

YVHさま、cyakさま、こんなかんじにしてみました。

## 第四十六話

突然の電話。

取った途端後悔した。

『鼻肩はよくないわ〜』

確かに、おキ又ちゃんと弓さん、一文字さんはアルバイト扱いなので、六道には書類がいつてるけど。

「な、何のことかわかりませんわ、おばさま」

『鼻肩はよくないわ〜』

く、腰が強い。

「こ、これは、いわばおキ又ちゃんとその親友の友情、お友達であることの現れです」

そう、お友達連携。

六道が大好きな話だ。

『鼻肩はよくないわ〜』

くそ、引ききれない！

「さすがに、これ以上の受け入れは難しいですよ？」  
『だったら〜、週ニコマでどうかしら〜？』

なるほど、現場ではなく、か。

横島君自身人気があるし、その人気GSを引っ張ってこれるとい  
うネームバリユーも六道が得られる。

で、私は横島君に全部押しつけられる、と。

「横島君だけ、でしたら」

『もちろんよ。令子ちゃんには、いつもどおりで一年に三回で  
いいわ』

よし！ あとは……

「いくら出します？」

『結果次第かしら？』

「それは困りますね、おばさま。その結果指定をしていただかない  
と、算定基準が……」

さあ、横島君、ぼろもつけするわよ！！

「おーーーーーほほほほほほー！」

あ、あれ？ そういう趣旨だったかしら？  
まあいいか。



ヘリコプターの着陸スペースに筭で降り立つと、すでに到着していた六道除例事務所のメンバーが迎えてくれた。

「おつす、久しぶりだな、雪之丞」

「横島、また強くなったんじゃないか!?」

「久美さん、お元気そうで」

「ふふふ、横島君も元気そうね」

「もー、横島君、冥子を無視しちゃだめ」

アジラで攻撃しつつ、冥子さんが俺の胸をたたいた。

「お久しぶりつす、冥子ちゃん」

「うん、元気だった?」

「ええ」

につこりほほえんで、視界の中央にたっている女性に目を向けた。

「で、とりあえず来るように言われたんすけど、なにすればいいすか?」

まあ、詳細は聞いてないけど、想定範囲だったりする。

「簡単に手ほどきをお願いできないかしら?」

「術ですか? 力ですか? 知識ですか?」

「あー、横島。正直、知識はやばいぞ」

そついいながら、教科書を渡す雪之丞。

ばらばらとめくつてみて、ちょっと驚いた。

怪異や脅威の算定基準が古すぎるのだ。

思わずジトトと女性、冥那さんをみると、彼女も冷や汗をかいていた。

「この辺にメスを入れた方がいいと思うんですけど？」

「そうね、それは未来的にはお願いしたいんだけど、今回は、力の方をお願いしたいのよ」

思わず雪之丞をみてから、首を傾げた。

力の強化なら、こいつで十分じゃないか、と。

「ゆつきーは、加減ができないのよ」

「ほんと、スポコンなんだから」

あー、理解理解。

「わ、わるかったな。師匠なしでやってきたから、自分以外の限界がわかんねえんだよ！」

まあ、こいつは天才タイプだからなあ。

努力とか根性ですべてまなかえるってな感じで。

「とはいえ、久美さんあたりでもいいんじゃないっすか？」

「私も、自己流なのよ」

「・・・あー、わかったっす」

とりあえず、俺は小竜姫様の指導がついてるしなあ・・・うん。

となると、努力下積み型がもう一人ほしいな。

なにげにおキヌちゃんとか弓さんとか一文字さんって「ひらめき」

型だから。

横島GSが週ニコマ授業を持つという話を聞いて、六道の底力を感じた。

つつか、弓やら一文字が、個別研修に入っていたのが恨めしい。

氷室はいいよ？ あそこの事務所の所員だから。

でも、そのお友達枠ってなによ！

そんな不満を解消するために、理事長が学院に横島GSを呼び込んでくれたのは有り難かった。

というか、うちの理事長、どんなコネしてるのかしら、というのが感想。

とはいえ、週ニコマを全クラス二というわけじゃなく、成績優秀者のみという制限はある。

その制限は仕方ないだろう。

ただ、入れ替わり制度もあるそうだから、かなり努力すれば私も潜り込めるかもしれない。

そんな期待にあふれた抽選会で、見事私はあたりを引き当てた。

よし！

横島GSといえば、新霊具「ファンネル」が有名だ。

特殊装備の心霊兵器を圧倒した威力は報道されて久しい。

これに霊子力甲冑間で加わると、すでに除霊とかそういう話ではなくなるレベルに達する。

私たちレベルでもファンネルがあれば、一流半の仕事ができるとまで言われるファンネルが、いま、私の周囲に浮いている。

かなりぎこちなく。

横島GSや体の大きい男性GSなんかは三つも四つも浮かべて余裕そうだけど、私たちは一つだけでも辛かった。

これが現役GSと私たちの差か、と落ち込みそうになっていたところで、体の大きいGSが苦笑いで話しかけてきた。

「それじゃあ、力みすぎじゃア」

曰く、全身で霊力を発するんじゃなく、左右の両手ではない霊力の手で掴むようにするんだ、との話。

周囲の生徒もそれを聞いて一度手の中に戻し、そして再び浮かせると、負担は一気に減った。

「す、すごいです!」「うわあ、わりと簡単!」「へえ、こんな使い方なんだ・・・」

思わず感心したところで、目つきの悪い人が不機嫌そうに言う。

「おめーら、それじゃ修行にならねーぞ」

曰く、全力で靈力を発生させつつ浮かせていけば、靈力の底上げになるとか。

「雪之丞しゃん、今の浮かせ方でも修行になるのじゃ」

「んなわけあるか！」

「いやいや、雪之丞。これを24時間維持できるようになれば、かなりの実力だろ？」

体の大きなGSと目付きの悪いGSの間を取り持った横島GS、恐ろしいこと言い始めた！

「よ、横島しゃん、それは無茶なのじゃ」

「え？ 美神さんなら寝てるときでも浮かせてるぞ？」

「そりゃ、美神の旦那ならそうだろうさ・・・」

苦笑いの男性二人をよそに、横島GSはにっこりほほえみながら私たちを見回します。

「見上げる空が青いほど、目指すべき頂が高いほど頑張れる、っておもっただけど、どう？」

は、ははは、ここで逃げを打てるはずもない。

だから私たちは声を合わせた。

「……………はい！」「……………」

よろしい！ とにこやかな笑みの横島GSをみて、なんとなく胸の内の暖かくなった。

おまけ：控え室の絶叫

「やべーやねー、ブルマだよブルマー!!」

「横島ちゃん、感謝じゃ、感謝なのじゃー!!!!!!!!」

「くそ、この程度で平常心を乱されるっつうのは修行が足りねーぜ  
!!!!」

「女子高生ー!!!!!!!!!!」

## 第四十六話（後書き）

雪乃丈やタイガーって何気に優秀です。

そんな力量差を見せられれば、接点できますよね？　ね？

で、やっぱりこの三人だから、この程度はうるたえていて欲しいかな  
ーとw

## 第四十七話（前書き）

閑話ポイ内容です。



## 第四十七話

あー、なんだ、なんつうか、こっ、困った。

週二回の六女授業でわかったが、俺の修行は独特すぎるってことだった。

除霊をしたいと意志があっても、その意志が鉄のように固かったり、マグマのように熱かったり、海溝のように深かったり。

そう、形は様々で、方向も様々だったんだ。

最初それに気づかなかった俺は、力が及ばないことを半分なじっていた。

でも、横島がそれに気づかせてくれた。

だから、次の授業でみんなに土下座をして許しを得ることになった。

はじめは静寂。

でも、しばらくしての拍手。

技量があっても教える新米の俺たちは失敗がある。

そのことを心底詫びた俺を彼女たちは受け入れてくれた。

そう、実は彼女たちの中で唯一俺を正論を言っていると擁護してくれていたという弓かおりも正々堂々としていてすばらしいとほめてくれた。

なんだか本当につれしくなってしまう、ありがとう、と言ったはずなのに、感動で涙腺がゆるんで声にならなかった。

「なに照れてんだよ!!」

横島が突っ込みを入れてくれなかったら、そのまま泣いていたかもしれないねえ。

助かったよ、横島。

とかなんとか、そんなのりで授業を進めているうちに、なぜか弓かおりと日曜映画を見に行くことになっていた。

・・・何でだ？

でもまあ、これは、ほら、あれだ。

・・・デート。

生涯初めてのデートだけに、何をしたらいいかわからねえ。何話して良いかわからねえ。

・・・ここはひとつ!

「妙神山で修行だ!!」

「違うわ、ボケエ!!」

「ぐはあ!!」

この鋭い突っ込みは、・・・オカマ!

「ちがうわよ、久美さんでしょうがああああ!!!!」

「ぐはあ!!!!」

殴る蹴るのローテーションを一通り終えた久美がにっこり笑っていやがる。

「忠夫ちゃんから聞いたわ。今度デートなんですって?」

「横島……!!!」

「おだまり!」

鋭い拳で俺を黙らせた久美は、腕組みで異常なオーラを発していた。

なんだこの、寒気すら感じるオーラは!?

世紀末で霸王な何かを感じるぞ!

「初デート。それはそれ以降の二人の関係を決める一大事」

「お、おう、だから……」

「おだまり!!」

「ぐう」

やばい、言葉を挟むと殺される。

本気でそう思う。

虎ですら死を意識して大人しくなると言う。俺ならば当たり前だ。

「私も、ダーリンとの初デートで、彼がテンパってるのに気づかず  
気まずい思いをさせてしまったわ」

鬼道、きさま、とうとう……

もらい泣きで前が見えん。

「でも、雪之丞、あなたはまだ間に合うわ!」

滔々と初デートの理想を述べる久美。

俺はこの地獄から逃れられそうもない。

横島、この恨み、晴らすからな。

あと、鬼道、冥福を祈る。

ヨコシマン活動もタケナワなんだけど、アシユ様から別の指令が下った。

それは、遙か過去に盗難された「魂の結晶」の搜索だった。

どうやら最近反応し始めたということ、現在の10代から20代の人間に転生した魂にくっついていているらしいことが判明したそう  
だ。

この魂の結晶があると無いとでは、今後の戦略が大いに変わると  
言うことなので、急いで探せつてことなのかと思いきや・・・

「まあ、見つけたら回収。専従しなくてもよい」

と、結構なげやり。

いいのかしら、とベスパに聞いてみると、

「・・・いいんじゃない？」

とこちらも少しツヤツヤ気味でほほえむ。

なんか、最近幸せっぽいオーラがでてない？ 妹さん。

「ルシオラちゃん、なんか一部充実してるのでちゅ」

そうね、なんかムカつくわ。

「この思いは、よこちまにたたきつけるのでちゅ  
「賛成」

そんなわけで、本日の活動は、パピと私でGO。

「いつてらっしゅい」

なにかしら、このムカつく感覚は。

なんかこう、ヨコシマに教わった、あれを試したくなるわ。  
やろっかしら？

「へー、弓さんと伊達さんのデートですか・・・」

「へへへ、やったじゃねーか、弓」

真っ赤になってる弓さんなんですけど、かなり困ってる様子です。  
なにかお困りですか？

「だって、わたくし、生まれてこのかた、デートなんてしかことあり  
りませんのよ・・・？」

なんだか弱々しくてかわいい感じです。

「なんだよ、おまえだっていいところのお嬢様だろ？ パーティー  
だのなんだのって」

「こっ見えましても、実家は仏教系の武闘派ですよ？ パーティ

「なんて・・・」

なぜでしょう、すごく同情できます。

「で、その武闘派お嬢様が、俺たちに何のようだ？」

「・・・助けてください」

ニヤリと笑う一文字さんは、ぐっと親指を立てました。

「ま、あたしも経験ないけど、協力ぐらいはできるぜ？」

「わ、わ、私も協力させてください！」

「一文字さん、氷室さん・・・」

「んじゃ、作戦会議はおキ又ちゃんのところにな？」

「え・・・？」

「経験豊富な大人の女に聞いた方がいいだろ？」

「・・・あ！」

そうですね、そういえば美神さんなんか大人の女性ですし、良いアイデアがあるかもしれませぬ！

あ、そうだ・・・

「あとは、横島さんから伊達さんの情報も引き出しましょう」

「氷室さん、なんて頼りがいある・・・」

きゅぴーん。

乙女の同盟ここにあり、ですね！

## 第四十七話（後書き）

と、まあ、どたばたと動いていますが、なぜか話が集約する方向に  
舞台が整いましたw

つうか、オカマ、ひさしぶり！ 鬼道、食われてるっばいな・・・  
・・・すまん。

第四十八話（前書き）

前回のつづきです



## 第四十八話

さて、いまこの場には四つのグループがいる。

一つ、映画をいっしょに見るために待ち合わせをしようとしている弓さんと雪之丞。

一つ、乙女同盟のためにバックアップできるように見守るおキヌちゃん、一文字さん。

一つ、雪之丞からのSOSを受けて、面白おかしく撮影中のオカマ・・・久美、俺、タイガー。

で、最後が不明なのだが、なぜかルシオラとパピリオが俺たちといっしょにいた。

『(主、あれではないか?)』

『(あれ?)』

『(魂の搜索)』

『(ええええええ?)』

いやだってよお、魂の結晶の在処は芦田も知ってるぜ？

それなのに搜索？ ねえだろ。

『(ならば聞いてみるがいい)』

そんなわけで聞いてみたら、ドンぴしゃだった。

とはいえ、前の時みたいないな切迫感はなく、見つければいい、急がなくても良い、というナローな感じらしい。

「ま、搜索って名目でヨコシマに会えるし、結構いい感じよ?」

「ヨコチマ！一緒にデートするでちゅ！」

いやいや、ほら、デート初心者の友人の無事を確かめるのが目的やからなあ。

「そうなんでちゅか？」

「へえ、・・・おもしろそうね」

「そうでしょあ？」

なぜか久美と二人が共鳴してるし。

「一応、私の理想を叩き込んだわ。その成果をみてちょうだい」

「うんうん」

思わず手に汗を握る三人の背後で、俺とタイガーはため息をついた。

「無事にすむと思うか？」

「無理じゃと思うノー」

もちろん、無理でした。

映画館から出てきた二人をインターセプトしたおキヌちゃんと文字さんを見て、こりゃ雪之丞が可愛いそうだな、ということであ、俺たちも合流することにした。

明らかにホツとした感じの雪之丞に、一応、おキ又ちゃんと一文字さんを回収して撤退する旨を伝えると、まるで迷子の子供のような顔になりやがった。

「逃げるな、そこにいるのはおまえを頼ってる女だ」と囁いたとたん、視線に力が籠もった。

そう、前の「時」から一緒。

こいつの本質は「守る」「戦いこそが真骨頂なのだ。

「もう、ひどいですよ横島さん」

「そうっすよ、横島さん」

ちよこっとお怒りのおキ又ちゃんと一文字さん。

「あんなあ、好きな男とふたりつきりがイヤなら、初めからデートせんほうがいいと思う」

「「うっ」

心細いかもしれんし、不安かもしれない。  
でも

「そういう時間が二人の関係を近づけるんやろ？」

「「うっ」

本当に困った顔になった二人を、そのまま喫茶店に引きずり込んで、俺とタイガーのダブルデート状態に持っていった。

あ、久美？ルシオラ？パピ？ あんな怖くて説教できません。

完全に気配を消しての尾行なら許可、ということにしていますよ、ええ。

なんだかよく解らないうちに、横島さんたちとデートになってました。

お説教が終わった後で、食事とウインドウショッピングに誘われて、洋服とかアクセサリーとかみているうちに色々とかってもらってしまつて、かなり嬉しい気分にはせられていてところで最後に厄珍堂で珍しい護符のアクセサリーを買ってもらつて。

ワタシも一文字さんも、本当に浮かれていたんだともう。

で、帰り際に一文字さんに「これってデートじゃね？」といわれ  
て初めて気づきました。

なんだか、いきなり恥ずかしくなつてしまいました。

ちよつと変則的なデートでしたけど、弓さんのおかげでデート初  
体験できちゃいました。

うふふ、女の友情の勝利ですね。

・・・でも、確かに二人っきりの方が嬉しかったかもしれません。  
今度は誘ってくれませんか、横島さん。

勉強になったわ。

人間同士のデートって奴。

解説してくれたのは久美という一応人間。

こっち側に殆ど身を乗り出し出してるけど、最後の一步が人間というぎりぎりな存在。

そういう意味でいえば、ヨコシマはちょっとだけ人間、となるはずだ。

まあ、それはさておき。

淑女の演出、貞淑なじらし、乙女の恥じらい。

実に勉強になったわ。

「ありがとう、久美」

「いいのよ〜ん。恋する乙女のよしみなんだから」

「久美、お友達になるでちゅ」

「あら、ワタシはもうお友達のもりだったわよ？」

私たちは手を重ねた。

「久美、彼氏との仲を詳しく聞きたいでちゅ」

「ワタシも、貴方たちと忠夫ちゃんとの仲を聞きたいわ」  
「喜んで」

そう、私たちの乙女同盟は始まったばかりだから。

「じゃあ、これからお茶しない？」

「いいでちゅね！」

「そうね、いろいろと話し合いたいことがあるのよ」

なんとというか、久美って話しやすいし頼りになるし、同性の頼れるお姉さんって感じね。

その点、あの「長女」はアテにならない。

なんとというか、小娘臭がプンプンするし。

久美とならヨコシマを共有できるかもしれないと思うけど、彼氏持ちじゃしょうがないわよね。

写真を見せてもらったけど、結構、可愛い感じだったし、久美にぴったりかも。

「・・・寒気がする」

「横島さん、大丈夫かノオ？」

なぜか真つ青になって背をふるわせる横島を、心配そうに見つめるタイガー。

現役女子高生とのダブルデート状態に持ち込んでくれた横島を、どこまでも尊敬するタイガーであった。

が、まさかデートに来ていた二人の女子高生が、実はタイガーに殆ど視線を向けていないなど思いもよらなかっただろう。

タイガー、哀れなり。

「ところで横島さん、この前の休みどこに行っていたんです？」

「なんだ、用でもあったのか、ピート？」

「ええ実は、うちの教会に来た依頼の協力をお願いしたかったんです」

苦笑いのピート。

この程度ってことは、済んだか？

「今からでも手伝うか？」

「いえ、事件自体は解決はしたんですが、その際にアパートから退

去を命じられた一家を、できれば横島さんのマンションにお願いしたいと思ひまして」

そういつて差し出された書類をみて、思わず心眼が呻いた。

『（・・・主）』

「（・・・小鳩ちゃん）」

そう、花戸小鳩。

前の時にお隣となった少女。

今回は某オカルトGメンのうっかり兄さんが、ジャスティスで攻撃してしまい、偽装結婚式を行った後で解決している。

その際、小鳩ちゃんがうっかり兄さんに惚れそうなものだが、そうはならなかった。

どうも、女性関係の陰が濃かったせいらしい。

で、そんな騒ぎを起こしたものだからアパートの退去を命じられていて、どうしたものかと困っていたとか。

「マンションはいいけど、貧乏神関係で呼ばれても、なにもできんぞ？」

「え？ そうなんですか？」

「貧乏神と死神関係の情報が多すぎるから、俺が手を出すと反則になるんだよ」

「・・・そうだったんですか」

どうやら貧乏神に関する情報は、最小限に留められたようだ。そうじゃなくちゃ「挑戦する」権利者が激減するしな。



「ま、花戸さん、だっけか？　引き受けるのはいいけど、うち、割と人外率多いけどいいんか？」

「ええ、彼女自身、出自より人柄をみているようなので、大丈夫です」

「こう確信するってことは、自分も受け入れられたつつ自信だろうか。」

「こいつ、普通に美形のくせに、EU圏の出身のせいで、自分がかんでもない化け物だと思っているのが面倒だ。」

そのくせ、その自分の力を過信しているところが更に面倒。

タイガーとその辺を足して二で割ってもらえないだろうか？

「あ、そういえば、西条さん、無事だったのか？」

「・・・偽装結婚式を、女子職員に多数目撃されて、「ロリコン」指揮官として・・・」

西条おおおお。

## 第四十八話（後書き）

えー、西条&タイガー不幸w

11/13 修正しました・・・

## 第四十九話（前書き）

今回、よこっち視点なしですw

## 第四十九話

GS協会からご紹介いただいた転居先は、すばらしいマンションでした。

貧乏のウチには無理だと思ってたんですが、スゴく安くしていただいて恐縮しきりです。

マンションのオーナーさんがGSで、このマンション自体も人ならざる方々に半分以上解放なさっている伝で紹介いただいたみたいでした。

そう、うちの家族には人ならざる存在、元貧乏神の貧ちゃんがいます。

本当は、本当は、オカルトGメンの西条さんの仰るとおりに被っていた方がいいんでしょう。

でも、本当に小さな頃から、お母さんのおなかの中にいる頃から家族を、どうして被えるものでしょうか？

いわば、貧ちゃんは家族。

血のつながりはないけど大切な存在だから。

「あ、それわかる。シロ姉えともお兄ちゃんとも血は繋がってなくても兄弟姉妹だし」

オーナーさんの妹さん、横島タマモちゃんはニコヤカな女の子です。

彼女も本当は怪異なのですが、人間としての戸籍を持っているそうです。

妖怪独特のルーツがあるそうで、さすがに神様である貧ちゃんには無理だそうです。

「あら、貧乏神、ではなく福の神ですね」  
「こりゃー、竜神様やないですか！」

オーナーさんのお知り合いの竜神様にも良くしていただいています。

貧ちゃんも同じ神族ということで、結構気安くさせてもらったり、おかずを分けてもらったり、本当に有り難いことです。

「あ、小嶋ちゃん。この奨学金受けてみない？」

加えて、今まで貧乏神にとりつかれていたので受けさせてもらえなかった企業奨学金まで紹介してもらって、本当にオーナーさんには感謝してもしきれません。

「小嶋、あの兄ちゃん銭の匂いすごいで。落としたりい！」

「もう、貧ちゃん！ 恥ずかしいこといわないで」

そう、オーナーさん、横島忠夫GSは、包容力があって経済力があって実力もあるGSなのに高校生という、なんとというか嘘みたいな人でした。

その上で、女性に人気があるのにふらふらとしていない感じがとてもすてきで……。

「小嶋、やつぱおとせや」

「そういうんじゃないんだってばあ」

もう、貧ちゃんのバカ！

わかってるくせに。

「そうは言ってもな、小嶋。わいは小嶋の幸せだけを考えているん

やで？」

ありがとうね、貧ちゃん。

でもね、私が誰かのお嫁さんになって、その相手のお金で幸せになっても意味がないと思うの。

幸せって、お金があるとか無いとか、そういうことじゃないですよ？

「小鳩おく、ええ子に育つたのお・・・」

まあ、本当にいい子だったみたいで。

お兄ちゃんの先の記憶にあった「花戸小鳩」。

貧乏神にとりつかれて、偽装ながらお兄ちゃんと結婚式を挙げた少女。

これだけで重要注意人物よね。

今はあのアパートにいなかったんで安心してたんだけど、やっぱり事件は起こったみたいで、その上でロンゲってば嫌われたみたいで、こっちにお鉢が回ってきた。

回したのはピートだけど、どうみても運命って奴が関わっている

気がする。

これで性格が悪ければ私が防壁になるつもりだったんだけど、前  
の時以上のお人好しみたいで、どうにもこうにも助けたくなくなっ  
ちやうのが恐ろしい。

お兄ちゃんもそうらしく、企業奨学金なんてものをワザワザ「作  
って」まで世話しているくらいだ。

もちろん、ふつうの奨学金も受けられるんだろうけど、やっぱり  
前歴がものを言う。

元貧乏神付き。

これで尻込みしない企業はいないだろう。

でも、お兄ちゃんは色々とわかっているので尻込みなんかしない。  
だから、そういう奨学金を作っただけで、一枚かませると言っ  
てきたのが六道。

霊症や呪いなどで苦しむ学生の援助のための奨学金として立ち上  
げなおし、アフターフォローの場合でも奨学金支給という形に落ち  
つかせてくれと言つもの。

なるほど、と思わず苦笑い。

つまり、霊症を受けた子供は、おおよそ霊能を得ることになる。  
で、六道を噛ませることで閥の拡大をはかりたい、と。

「そついう裏が読めなけりや、良いおばさんなんやけどなあ」  
「読まなかったら、どこに落とし穴掘られてるか分からないじゃな  
い」

私のその意見に、お兄ちゃんは肩をすくめるだけだった。

奨学金自体には六道どころかGS協会とオカルトGメンもかんできた。

まあ、人材拡大のためとなれば、オカルトGメンが指をくわえて黙っているわけがないと言うわけだ。

そんな報告に来たロンゲを指さす。

「ロリコン公務員！」

「心外だ!!!」

とはいえ、署内はすでにこれで定着していると聞いているし、仕方ないわよね？

休学中とはいえ女子高生と結婚式なんか挙げてるんだから。

「あれは除霊の一環で・・・！」

「ミスして攻撃して大きくなった貧乏神を小さくするために結婚したのよね？」

「う、ぐう・・・」

鯛焼きでも食べたいのかしら？

「まあまあ、タマモ。あんまり西条さんイジメんなや、な？」

「はい」



あの貧乏神の除霊は、実に失敗だらけの内容だった。まず、貧乏神を誤って攻撃してしまったこと。

続いて、高度に隠蔽して拳式をしたのに何故か女子所員に知れ渡っていたこと。

最後には、貧乏神の効果で実家の資産が激減したことだろうか。ノブレス・オブ・などと言ってられないレベルの一步手前だった。

不運の動きを察知した投機グループが資金を細分化して不運を逃れなかったら、銀行本体まで影響がでただろう。

本当に恐ろしい存在だ。

加えて、あの結婚式の影響で、すでに私はバツイチと言うことにされてしまっている。

何でも女子高生と結婚したが、女癖が悪すぎて三行半を叩きつけられた、ということになっているそうだ。

・・・実に屈辱的な話じゃないか。

これはモテない男の嫉妬が起こした虚実だろう。わかる人には理解してもらえる話なので、私としても鷹揚に構えていたのだが、日に日にガールフレンドからの絶縁メールが増えてきている。

どうも暗躍している奴らがいるようだ。

私個人だけの問題ならばいいが、引き合いに出される小鳩ちゃんの情報まで配布し回っているのは常識を疑う。

「これは少し本気で捜査しないとイケないかな？」

とりあえず、暗躍しているのは間違いなく身内か関係者だろう。

すこし頼りになる手勢に声をかけよう。

とりあえず、デート相手に困らないレベルまで回復させてもらわないと、ね。

## 第四十九話（後書き）

てな、そんな挿話っぽい話でした。

追記：色々と書いていますが、ガールフレンドはいても食い物にはしてません>西条w

11/17 修正しました

## 第五十話（前書き）

えー、なんか暴走して書いてしまったバージョンですw

## 第五十話

さて、目の前の男の話をしよう。

名前を「リチャード・王」という。  
自称「テロリスト」。

世界の認識では「死の商人」。

ナイフからICBMまで売り払う、金さえ払えばクレムリンだつて、という合い言葉はパクリすぎた。

「どこのエリアの話だ」「イヤーさすがご存じで」

にっこり笑う、そう、笑う仮面だ。

魔鈴さんの店でタマモとと久しぶりに二人で夕食をしていたら現れた男である。

まあ、おもしろそうだし、クロサキさんの話だと詰めの甘さから各国に追われているそうで、日本でも指名手配を受けているのとのこと。

で、すでに警察が動き出しているという。

そのことを伝えると、一時間だけ時間がほしい、プレゼンさせてくれ、と言ってきた。

で、出してきたのが「ガンダ」。

「つまり、これを作れ、と?」

「萌えませんか?」

「あんなあ、材料工学的にも意味ないで？」

「しかし、オカルトのバックボーンがあれば……」

「基本、生活や除霊に関係あることしか……」

とはいえ、以前ルシオラと検討済みで、「ガンダ」は無理、となっている。

全高14mの戦闘用兵器なんて、GSの作るもんじゃない。

「そう、ですか……」

がつくりと肩を落とした男に、一枚の紙を見せた。

その紙を見た瞬間、男は雷に打たれたように背筋を伸ばす。

「こ、こ、こ、これは？」

「Gシリーズの開発で得られたノウハウを、機械的にバックアップさせた増力装置や」

「いやいやいや、これは、おもいつきり、モバイルスーツ……」

「増力装置、やで？」

タイプAは、今までのGシリーズ。

タイプBは、一回り大きい感じ。

で、タイプCが、全高10mほどのものだった。

見た目では、中に入る「SDガンダ」。Cはガンダ だったけど、一応は増力装置。

Gシリーズ着用在前提だし。

G3の精霊石同期システムも設計に入ってるし。

「……さすが横島GS、男の夢を解っている」

「所詮は立って歩けるクレーンがコンセプトや。完成型までは時間がかかるで」

「では、このプラン、お預けいただけませんか？ 我々が最も効率よく……」

「あかん」

「……やはり、兵器は」

「ちやうちやう、兵器は否定せん」

「では？」

「いや、そろそろ、この店に特殊部隊が突入してくる時間やから」

「おやおや、楽しい時間はずいぶん早くすぎってしまったようですね」

そういつて、男は一礼してからその場を去った。

当然のように警察による包囲網を突破して、逃げていったそうだけだ。

で、そんな事情聴取が済んだ後、タマモが一言。

「で、あんな嘘企画、本気？」

「洒落や、洒落」

「……というか、実は部品単位でカオスと作ってるでしょ？」

「……洒落やで？」

ところがぎつちゅんちゅん。

洒落じゃ済まなかった。

はじめは美神さんの事務所。

国からの、というか防衛省からの問い合わせが来た。

「例のもの、期待してます」

続いて警察から、というか特殊車両課というところからも連絡が来た。

「・・・期待してる」

で、最後にやGSクラウドサービスからメール。

「アナハイムに土地を押さえました」

どうみても外堀を埋められている気がする。

「どうするんじゃ、忠夫」

「どうしよう、カオス」

思わず苦笑いの俺たちだった。

「結局、どこまで作ったのよ、横島君」

さすが、美神さん、お見通し。

「あー、一応、制御モデル用のモックならBタイプが完成してて、Cタイプは二分の一モデルが遠隔稼働モデルで出来てます」

「じゃあ、もう、発表できる段階じゃない」

その台詞に、俺とカオスが眉をしかめる。

「もしかして、量産できないとか？」

「部品単位でならいいんですけど、稼働用の制御ソフトがいまいちなんす」

「なんとというか、わしらはそのへん人工魂で稼働試験しておったからな、人が乗るようにはできておらんのじゃよ」

なー？ と仲良く首を傾げてしまった。



「だったら、その制御OSの代わりに制御人格を人工魂にするか、制御部分をテレサに頼めばいいじゃない」

美神さんの台詞に天恵を得たかのような俺とカオス。

「そ、それじゃ！ それならいけるじゃろ！」

「ああ、タンDEM設計で、テレサと二人乗り設計で・・・」

「Bタイプはどうするんじゃない？」

「それなら、テレサをダウンロードするか、テレサネットワークでフォローするか・・・」

「おお！ いけるじゃないか！！」

一度ブレイクスルーすればその先は早い俺たちだ。

「マリア、A計画の部品発注をするんじゃない！」

「イエス、ドクターカオス」

「テレサ、大阪に連絡しといてくれ。図面全部発注や！」

「はい、ご主人様」

「あー！ はっはっは！ いけるぞー！！」

結局、暴走してしまいました。

東京建材機ショウというイベントが有明メッセで開催されたのだ

が、集まったのは土建屋とは一線を画する存在ばかりであった。防衛庁、警察庁、在日米軍などなど、国内軍事関係者どころか国外関係者まで集まって、ひとつのブースで固まっていた。

汎用人型建設機械。

そうと名付けられてはいるが、誰がどう見ても違うものだった。彼らは小さくつぶやく。

「モビルスーツ」だと。

もちろん、外装はFRPで防弾性など皆無だし、武装もない。しかし、誰もが思った。

魔改造でいいじゃん、と。

多岐にわたるパワーや接地面積あたりの稼働率やら実働データの質問に、にこやかな笑みで答えるテレサを見て、この会社の大本がどこのかがわかった関係者は、次々に電話を開始した。

なんとしてでも軍用実用モデルの独占契約を、ということだ。

しかし、もちろんの事ながら完全にシャットアウト。

今までの開発物を見れば理解もできるが、オカルトの壁は高かったようだ。

一応、建設機械ということになっているけど、飛ぶ・走るなどの普通の人間ができることは一応できる。

ために滑り込みや拳法の型なんかもさせたが、稼働範囲内の正常動作に収まるぐらい自由度が高い。

もちろん、テレサによるバランス出力制御が無ければ無理だけど、

一般材料だけで上手く行くとは思わなかった。  
現代科学万歳だ。

コックピットで太極拳の型を実演操作しているところで、視界の端にルシオラが見えた。

どうやら自分も協力した結果を見に来たようだ。

となりでパピリオが目をキラキラさせている。

あー、自分にも乗らせろって話だろうなあ。

まあ、シミュレーターで合格点が出たら乗せたるか？

もちろん、会場が引けてからだけだな。

大型人型機械など趣味が悪いと思ったが、これは神話じゃな。

忠夫とともに作り上げた人型機械は、全高十m程のもので、本人  
いわく立って歩けるクレーン車だというが、やはり人型というのが  
威圧感がある。

設計上は戦車にすら負けない装甲を装備できるが、あえてマイル  
ドな駆動系にしてFRPに変更している。

どうやっても兵器に転用されるだろうが、一時的な抵抗でその時  
間を遅らせたいとか忠夫は言っていた。

まあ、全力投球で作ってしまったType-0は凶悪じゃったか  
らなあ。

正直、あのまま戦場に放り込んでも、一般兵器と遜色ない戦果を  
あげられるぞ？

とはいえ、戦争の兵器として全高10mの「あれ」は、実際の運用上問題がありすぎるので、多脚戦車などに転用されることになるじやろつ。

基本、人型は無理がありすぎるし、制御に無駄が多いからの。

現行の性能ではRPGの三本もあれば倒せるが、これにオカルト系のシールドやら結界が追加されると話が変わる。

人型が呪術を人間の数倍の規模で行うとなると、これは厄介だ。いわば、伝説の巨人族の復活とも言える話じやろつ。

わしはそちらを気にしているんじやが、どうも目の前の軍人たちは違う目の色をしておる。

シミュレータでも、まるでゲーム機感覚でチャレンジしておるしな。

まあ、こつという軍人が旗を振っているうちは安心かも知れんな、うぬ。

「ドクター、質問が来ています」

「ん？」

コンパニオン役のテレサから技術的な質問がきておるな。

む、あれは、変装こそしておるが、リチャードⅡ王ではないか。マニアックな質問をしおつて。

「制御系は未だ開発中で、現行は技術公開していないと言っておけ」「了解です」

事実、テレサを軍用に使うわけにはいかんからな。

— これからの技術革新を祈るほかあるまい。

## 第五十話（後書き）

なんというか、技術的な説明とか制作上の苦勞とかは書いていてもつまらないので、さくっと流してしまいました。

このバージョンで固まったら、部品発注先の悲喜こもこもを書きたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1971p/>

---

恥ずかしながら戻ってまいりました！～GS横島忠夫の再演

2011年12月15日02時16分発行